明治四十一年四月十五日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇

文壇の花

臨時增刊

四年第六號



文壇一號からの愛讀者ですの皆様の內に小笠原白也氏の嫁ヶ淵御所持の方は御惠み下さい妾の寫眞をへまして御禮いたします男子の方でも決してかまひませんの（大阪市東區內淡路町二丁目三五今井方　津田春子）○私の許に不用の女子文壇、女學世界、婦人世界、ムラサキ、女鑑、文藝倶樂部　新小說、日本之家庭、等澤山有りますの御望の方は御寫眞又は御手製の財布造花等で申込て頂戴すぐ送て上げます（筑前福岡市外醫院出口二一〇番ノ二岡方壽惠子）○なつかしき誌友の諸姉上様の內にて藤村詩集、金色夜叉の歌、女夫波の歌御持ちの方は御送下さいな御禮は乾皮致しますわ（神奈川青木町桐畑五三六番地篠原香子）○皆様の內で國文に關する本をお持の方は御おくり下さい（東京本所區相生町三ノ十三宮內方　宮下植園）○小說御交換を願ひます私の手許にハイカラ令孃及種々のおもしろき小說二三十册ある故皆様のうちにて魔風戀風、伯爵夫人、露子夫人等をお持ちの方はお送り下さい（和歌山市茶屋町十番地　辻若子）○妾の落穗集、天地有情、戀衣の快說、活戀、世界歷史談、釋迦、和田守記悅法懇話、學術自修法、繼經　記上下の九册と乳姉妹全部或は魔風戀風全部の　何れても御交換下さいます御方はありますまいか御望みのお方は下名迄豫め御通知を願ひます（岐阜市上竹町加藤みさを）○誌友の皆様の中で眞人の自白母の紀念、富と愛、黃菊白菊、亂髮、青春等御不用の方は何れても御送り下さい拜見の後は紀念スタンプ附美くしき繪ハガキに郵券を添へて返上致します（橫濱市南太田一七六二番地根岸花子）○皆様のお手許に紅葉全集、有情無情、婦小袖、淵の音、玉取姫、嫁ヶ淵、乳姉妹、思出の記お持の方は私のハイカラ令孃、女學世界、男女美容法、皮膚病法、不如歸、女醫者、文藝倶樂部、實業料理法、露子と交換して下さい先着十名へは美人草花愛兒の繪はがき澤山ありますから書物と添へて送ります（筑後八女郡水田村島田下川正次郎方下川すゑ）○皆さん妾は幽芳の己が罪三册と銀月の男女觀、博文館の呪はれたる女などの書物を持つて居ますが諸孃の御不用の本と御交換して被下い右は何れも損じてゐませぬ（滋賀縣長濱永保町楓木榮）○御許に魔風戀風、孝女白菊、源氏物語、緣不緣、もつれ絲、夫さだめ、化粧かゞみ御持の御方は只今私の許にいろ〳〵と不用の本がありますゝ十人分進呈する程どうぞ御交換を願ひます（名古屋市西角町七番地市江學尾）○姉様方先日は有難うおかげて面白く御交じはりが出來ました、私の處に思出の記、毒草、千代田の宮、金色夜叉全部、青春、夏子、にせ紫、ふた背、濱子、百海、女學世界、ほのほ、小猫、少女界「水彩畫手引」等百二十册程不用書が有ります故皆様の內で破戒、日の出島の內どれても、女夫波、不如歸、己が罪、眞人の自白、爲族翻報、埋れ木、乙女の操等でお申込み下さいませ妾は美しい繪はがきに受取を書してすぐお返し致します（信濃下高井郡往郷村新田青木みゆき）○諸姉様の中で多情多恨、緣子、富美子夫人、新學士、血の涙、天打つ浪、嫁が淵、火の柱、其の他面白い小說雜誌お持ちなら私の手許にある秘密島　未だ見ぬ親、戀のなやみ、妾の罪、鐵のかぶと、食道樂（全部）小天地、文藝倶樂部、女學世界、婦人世界、少女界、少女世界等數多あります　から何卒御交換下さいましお禮はいたします（常陸國筑波郡北條內町　鈴木花子）○私手許に女學世界、婦人世界、文藝、女子本分、理想の良人、家政學講義　料理法、漬物法、喉の養生、裁縫と編物、婦人の要、日用家事要法、妻女の本分、母親の心得、家庭夜話、看護法、人心經濟、不如歸、女夫波、ほのほ、八軒長屋此外數十部あります繪端書は花鳥風景偉人などあります寫眞も上ます皆様不用の書御有なれば送つて下さい必ずそれ以上の御望に從ひます乾度れ（信濃上田在長島太田鶴子）○皆様私の手許に新不如歸、新婚旅行、可憐孃、生死、女忠臣藏、朧月夜、女學世界、婦人世界、女子文壇、新女子文、最新英和辭典、育兒と衞生等不用書があります皆様の內に緣子、青春（秋）百合子、富美子夫人、露子夫人等御持てしたらどうぞ御交換なし下さい又繪葉書も御願ひ（島根縣那賀郡濱田眞光町　和田岩子）○おなさけ深き諸孃方よ古雜誌や地方新聞等の交換して頂戴な妾の許には不如歸、人の運命、ハイカラ令孃、日本の少女、婦人世界、戀か夢か、妻と妾、學生氣質、戀の旅等不用になつて居りますから何卒交換して下さい（茨城縣稻敷郡阿見村大室三十番地　大崎睦子）○皆様圖書の御交換を願ひます家庭に關した小說類のお送りを願ひますお禮として今回　文部省の檢定濟と成りました大和田建樹作歌、田村虎藏作曲の北海道唱歌南の卷北の卷の二册を差上ます（小樽港色內町三八光商會支店方清水初枝）○私手許に朝日櫻、白雲日記、彈片、民間實用救治療法　三體千字文（村田）及唱歌本千鳥之曲春の曲等がございますが編物若しくは不如歸の歌、金色夜叉の歌、緣子、夏子の中　と御交換下さいませ

ぬか（薩摩國川邊村高田申村森代子）〇文學上の雜誌なら何程古くとも又何雜誌でも宜いから妾の不用小説小猫、櫻の御所、筆子、多情多恨、思出の記、不如歸、金色夜叉、夜叉男、二人孤子、七草集等と交換して下さいませんか小説御不用の方には詩集か相當價格で御讓いたします（羽前國玉川局區内南小國小學校内朝尾加江子）〇誌友の皆樣私朝はれ不用ですのそれで姉樣方の内之れに相當する讀物の本とおかへ下さいまし もしおかへ下さる御方樣ははがきにて御通知下さいねお願いたします（大阪北區曾根崎中二丁目一九三藤井方 藤井よね）〇皆さんの中で藤笛集か二十八宿かお持ちの方は私の藤村詩集と交換して下さい、 舊戀衣か靜夜お持ちの方は私の小詩圖と交換して頂戴（茨城縣眞壁郡五所村山崎木村惠與子）〇お姉樣方私の手許に思出の記、密航婦、橘英男、小猫、濡髮、夫さだめ、少華族乳姉妹、夏子全部、青春全部、明治才媛文集、美文自在、學生訓二冊、青年調、濱子、百字文選二冊、いざゝらば女子懸賞文集、玉手箱、歌吉心中、桑の弓、きくの濱松、新小説、文藝倶樂部、等百册ばかり不用に成つて居りますが皆樣の内にて愛火伯爵夫人、緣不緣、後の世、富と愛、紅葉全集、女の面影、櫻戀談、仇と仇、コブシ、心の波、わたり鳥、金色夜叉合本、黑闇、魔無情、海賊の子、等御持の方は送りくださいませんか（羽前最上郡新庄町金澤長南日出子）〇只今私の手許に半生之文章、時代青年文集第貳、社會百面相、戀愛之福音、近松紗文集、美文の資料、青年と詩吟、青年と色情、秀才文壇の古き合本三冊、靈光、偉人の腦力英雄崇拜論、等尚其他にも不用のものありますら皆樣の内で想ひ出の記、順禮紀行、吾輩は猫、である、頑固之記、病間錄、囘光錄、うづら籠、金色夜叉終御持ちの方は御交換して頂戴な、尚は詳しき事は御手紙で願ひます（京都府下龜岡町字柳町清水製材所内清水白菊子）〇妾の許に青輪文辭書、小説、忘れがたみ、花園の露、夏小袖、不如歸、文藝倶樂部等ありますから諸姉樣方に面白い小説お持ちの方は御交換を願ひます〇輪文辭書は乳姉妹か女夫波と交換して頂戴な（靜岡縣榛原郡萩間村東萩間藤野琴月方百枝）〇諸姉樣の中で面白い洋曲譜のお持のお方は左のヴアイオリン譜と交換して下さい、叙事唱歌の須磨の曲、羽衣、離れ小島の曲、露營の夢、廣瀬中佐、附審隊、箏曲の千鳥の曲、越後獅子、老松、櫻狩、住吉、勸進帳、鶴龜の曲、又は樂學の熱心なるお方と御交際を願ひます、（高松市鍛屋町九三田中晨）〇皆樣の中で第一女子懸賞文集、小詩園、幻影、孝女白菊、乙女の操、平家物語、女子消息文範、新撰歌與等御持の方は御讓り下さいまし又私の不用の書籍雜誌が澤山ありますから御交換下さるも宜しう御在ます（上毛多野郡小野村大字立石村七飯島さよ）〇妾の手許に乳姉妹全部、夏子、戀と愛、金色夜叉脚本、戀の一年有半、町醫者、婦人畫報、己が罪の歌、女學世界、婦人世界 等五十册ばかり不用の書ありますから姉上樣方に己が罪全部、女夫波、魔風戀風、少女の操、不如歸の歌等御持ちの方は何卒御交換をして下さいませんか若し御送り下さる時は一寸御通知を願ひます（羽前最上郡新庄町高山節子）〇諸孃の中にて本年一月よりの少女世界御所持の方は何卒御貸し下さいませんか御禮としては日本皇太子殿下韓國御渡航記念繪葉書（スタンプ付）或は戀愛美人風俗葉書かにて御送り申升但し交換の書なき該一冊の上は至急御返送申します（韓國江景細川千里子）〇皆樣の内に一葉全集、まひる野、花守、みだれ髮、舞姬、金色夜叉の歌、女夫波の歌、女子書簡文（文の手ほどき等）御不用でありましたら下記の讀古しものと御交換又は御讓り下さい即ち出鱈目の記、美文大觀、治療救急法、山陽遺稿、月と露、小説文庫、俳句選、古人發句集二冊文士奇談、其他種々あります又御交換下さる御方には俳句集等必らず添へて差上ます（牛込原町一ノ四五宮澤方櫻井美園子）〇妾御本やお歌大好きなのよ皆樣の内にハイネの詩、筆子、濱子、夏子、藤村操の歌、緣が淵、神とつみ、緣不緣、無花果、懺悔、黑潮、四季料理、新社會、婦人の雜誌英語の御本などお持の方はどうぞお送り遊して頂戴な妾おやさしい方なら男子の方にても御交際致します妾の寫眞もお送り申します（茨城縣眞壁郡開本町上丁質屋和いわ子）〇竹柏會發行の心の花及び明星何號にても宜し）中學文壇第七年第一集、秀才文壇第三卷第十七號お讓り下さるお方はありませんか男子のお方でもかまひませんお禮には地方名所エハガキか寫眞又は相當の書籍何でもお好のものを差上ます（千葉縣印旛郡中郷村直田秋山文吉方にて花野馨子）〇妾の手許に金色夜叉合本、新不如歸、緣不緣、孝女白菊の歌、新約全書、十七八、己が罪三冊、少女の戀など種々ありますから皆樣の内で筆子、夏子、青春、 天うつ波や其の外の面白き書物と御交換下さい乾度御返事致します（羽前西置賜郡豐平村字中大谷部てい子）〇皆さんの内に武藏野獨歩集

の不用なのがありますなら妾の青果集と交換して下さるかお讓り下さる事は出來ませんか（筑前左方外町一二二四島よろづ）

寫眞編物交換

○皆樣私の手許にレースひじつき、寫眞掛、栞、袋物類色々花瓶しきなどがあります其外以上御望みの方は上等の美人風景繪葉書で申込下さい（但し未使用封入）必ず御送りします（北海道北見國稚内町聲問小學校内村上まさ）○自縫の給をのぞみます私は編物も和歌も繪は勿論大好きですから皆樣交はつて下さい（日本橋區濱町二丁目十二　中村しん子）○御手製の編物御送り下さいな先着十名限り見憎き妾の寫眞に美麗な繪端書添へて返禮いたします（千葉縣長生郡二宮本郷村眞名三五五蒔田靜子）○皆様何卒妾に編物の御交換を願ひます（大阪西區薩摩堀下の橋南へ入中野琴子）○御惠み深き諸姉上樣よ寫眞の御交換を願ます妾の見苦しき寫眞へ美人或は名所エハガキを添へて差上ますよ（千葉縣長生郡關村關山中谷高山嘉一方北田かれ子）○誌友の諸姉樣肘突又は寫眞掛け惠んで頂戴吃度相當の御禮を致します（神戸市榮町六丁目三十二酒井如月）○其後は少し病氣の爲め大變御無沙汰致しました皆樣住所は元の通りです此後も御見捨て無くあみ物の交換も願ひ升（北海道石狩國夕張郡登川村字夕張炭山九十五號村木富子）○玉つき毛糸レース糸の編物御送り下さいまし相當の品に玉章そへて必ず御禮いたします　新潟縣中蒲原郡茨曽根村根ひさ子）○寫眞編物の交換をお願ひ申ます（山城國相樂郡加茂村船屋楠原ならえ）○皆さん編物栞など換交して一層樂しく交際しましよう（埼玉縣栗橋町區擧寄室田まさ子）○皆さん栞やひじつきを御惠み下さいな御願ひよ御禮には妾の寫眞をそえて御返事致します（京都府船井郡八木縣西河齋藤笑子）○御寫眞を御惠み下さる方は相當の御禮を差上ます決して只取は致しませんかられ私もみにくい寫眞御返事に應じて御笑覽に入るかもしれません（新潟縣南蒲原郡三條上町外山伊津子）○誌友の姉上樣よ妾に肘突刺寫眞掛栞等御送りの方へは吳の枝折吳繪葉書日本海第二回紀念繪葉書等と交換を願ます又上等刺寫眞掛刺か縮緬の肘突御送りの方へは軍艦安藝伊吹進水紀念繪葉書を其内最上等の分（へは吳略圖添へます地圖は非賣品ですからめつたに得られないのです御交換を願ひます（廣島縣吳市二川町西本通二丁目百〇二碓井松枝）○誌友の姉上樣私の手元に不束な寫眞が八枚ありますから寫眞交換を願ひます先着五名には編物か繪葉書をそへて御送します（千葉縣長生郡新治村下吉井齋藤宗司方井の上津代子）○見苦しい私の寫眞二十五枚あります故何卒姉樣方御交換を願ます先着二十名には大巾の上等リボン一筋をそえます（千葉縣長生郡關村小母佐池上信子）○日本全國の誌友樣よどうぞ寫眞の御交換を願ひます御送り下さる方には私の手許にある櫻形縮緬と紋羽二重とて出來てゐて其眞中を肉色リボンで結んである紙入と私の寫眞とを直に御送り致しますからどなたでも早く送つて下さいな（靜岡縣駿東郡沼津町川郷山縣樹園）○諸姉樣の御手許に「忘れな草」の押花をお持ちの方がありますなら是非送って下さいませんか其の他押花なら何でもいいですから（きれいに押したのを）花の名を書いて一つより以上送り下さいましな私の寫眞かけか額しなり又は花びんしきで必ずお返しを致します西洋花を送られた方には他の品も添えて差し上げます（芝區三田四國町二ノ十一　田中淑子）○何卒玉章御寫眞や繪葉書の御交換末長くお願します御返禮には先着五名樣へ妾の寫眞を差上ます（神戸市三の宮私書函第百四十四號中尾うた子）○諸姉樣寫眞やあみ物の交換を願ひます私のも送ります私の處に寫眞器一組ありますのよそれで何とか取かえたくて居るのです（千葉縣印旛郡船穗村松崎鈴木合輔方鈴木錦花子）○私は一人も親友がありませんので誠に寂しくてなりませんが此のおろかな私と姉妹の契りを結んで永遠に御交際のお方と寫眞、繪葉書、玉章、編物の御交換を願ひます私も學校で敎はつた編物を澤山持つて居りますから必ず神に誓つて御返しいますよ（東京市神田區表神保町十番地りノ七三橋内山本八百子）○妾は本誌愛讀者の一人にて高等小學卒業ばかりの不束者なれど此後御寫眞交換いたしたし（大阪松島一丁目濱園丸山まつ方岡村登久子）○諸孃樣何卒編物しなり寫眞掛等御送り下さいな御返禮には女學世界婦人世界其の他相當の者で必ず御送り申します・（和歌山市本町三丁目吉川化粧品店内橋本貞子）○誌友の皆樣どうぞ寫眞編物玉章エハガキなどの御交換をお願ひ申します見ぐるしき妾の寫眞に相當のものを添へて必ず御返禮いたします（秋田縣北秋田郡大館町字片山齋藤登美子）○皆さん寫眞の交換をして下さいな妾も澤山持つて居

りますからキット御返しは致しますから、綴物も來りや寫眞掛等も下手な品ですけど澤山ありますから願つてよ（京都府船井郡八木驛西濱齋藤笑子）○綴物御送り下さいまし繪葉書圖書を以て御禮致します（栗橋在伊坂衍宮光江）○諸姉様方私は大變綴物が好てありますのどうか皆様寫眞掛や栞の御交換をして下さいませそして御玉章も御送り下さい（若狹國大飯郡和田樹屋きく枝）○皆様色々美しい押花下さいまして有がたう御座いましたそして誠に厚がましう御座いますがミツトお持ちの方お送り下さいませんかお禮はきつと致します（大阪西區東靱山町日高數子）○寫眞を御送り下された姉様へは先着者十六名へ左の書籍を直に發送致します文官講義一册乃三册會話辭典世界百傑傳官費貸費入學案内上等繪はがき十組をかたく上げます（遠江小笠郡倉眞村柳澤戸塚しげ子）○皆様寫眞でも繪葉書でも御交換を願ます妾もきつと醜い姿を御目に掛けます（横須賀市梢浦三百二十五番地秋山慶十郎方田口清志）○姉様よ寫眞送りて岩手の山内に山川を共として淋しく日を送りて居りますから何卒エハがきや寫眞送りてなぐさめて下さい妾も見苦いのですけれども粗製の寫眞挾みを添へて御送り必ず致します（岩手縣一關町四ノ一一小野寺登子）○春日影て小說交換を願ひておきましたがたくさん申込んでくださいまして誠にありがとうございましたどうか又寫眞を添へて申しこしください（山城國綴喜郡多賀村木原岩次郎様方村田まさ子）

諸嬢の交際（其二）

○此分は新しく來た原稿です扱て一寸お斷りいたして置きますのは從來の繪葉書交換の欄ですが、獨立させるほどでもないと思ひまして此欄に合併しました、以後繪葉書交換を望まれる諸嬢は此欄て望むことにして下さい（記者）

○誌上の博學なる諸嬢様秋田舍者ては有ますが今回より愛讀者となりましたから末永く御交際下さいなれえほんとうに賴みますわさよなら（福岡縣鞍手郡木屋瀬町牛尾商店内牛尾愛子明治貳拾七年生）○皆さん私しは何にも知らん至つて無學な者てありますがどうかよしみにお交際ひの程を願ひます（紀伊田邊上屋敷町公園丁笠松壽美）○私は片田舍の少女てすが諸嬢様よ御交際を願ひます（遠江榛原郡萩間村東萩間藤野淑子）○諸友の皆々様是からよしなに御交際お願ひ申します御文や美しい繪端書の御交換は妾の切に御願ひ致す所でおります（日向國宮崎郡廣瀬村渡邊みどり子）○皆様妾は不用な雜誌澤山所持して居ります、何卒か肘突や栞と交換して下さいな、御禮には上等繪はがきをそえて致します（上總刑部局區內渡邊汀子）○これからは拙文も願ず投書します。若し當選したら笑はないで見て頂戴な。尙は文通、繪はがき御交換も願ます（本郷區駒込追分町三十一大野節新姿操子）○何卒御寫眞其他諸雜誌の御交換を願ます（静岡縣榛原郡萩間村東萩間水野萬作方秀子）、○諸姉様方私昨年家に不幸が有て廣島の女學校をやめてこんな田舍て淋しく暮して居ますの可愛そうなと思ふて玉章や繪葉書の御交換をして頂戴れ（石見國日原町大谷美枝）○私は何にも申ません何卒繪葉書交換を遊ばして頂戴、上等物に詩歌併を御記し遊ばしたら妾もうれしうこそ思候かしこ（尾張中島郡起町中町二七商店方芳子）○私は未だ一度も都を見た事がない山里に見苦い姿をして居る者ですがこれから賢明な諸姉様と玉章や美人及び名勝繪葉書の交換を願ひたいのです（茨城縣新治郡土浦下高津新田藤原鶴子）○女の身のあられもないと思召すかは存ぜれど妾は本誌愛讀者にて新派和歌の會を設けばやと存じますから御贊成の御方は何卒下名まて御知らせ下さい（遠江國小笠原郡加茂村長池菊笠みつ子）○愛讀者になつた紀念の爲に姉様方の御手に成る美文、和歌、新體詩、作文、繪畫なにでも白紙に書て送て下さいませんか妾は美蓉集と名附て一册誌として大切に保存して居て御嫁に行くにも持て行きますわ皆様私の心を御察し下さつて澤山御惠送下さい（信濃松代寺町松浦熊太郎方松浦白蓮女）○皆様不用の書籍、小說、雜誌あらばお送り下さい共にお禮はたしかに致します又お寫眞をお送り下さい（愛知知多大井山下金十郎方かず子）

剽窃詩文の注意

第四號の分　大坂、辻廣子。實用文三等「故郷の友に」は『女學世界』二卷十五號に同文あり

第二號の分　滋賀縣、觽貨子。滑稽談四等「人込み」は時事新報の『文藝週報』中に同作ありとのことにつき。何れも送賞せず。

今回の注意を與へられたる諸嬢は○一女○一軍子○一女子○東北の愛讀者○瑶顔女。

卓上談話（課題）

文壇餘興

青葉涼しき初夏の木蔭に食卓を圍んで、談話會を催ふすのも女子文壇の餘興として面白からうと思ひます、此度は談話の題を凡そ左の五つに分けませう。

▲わが母　▲夢の話　▲わが見たる男子

▲若き經驗　▲繪葉書談

▲以上五つのうち何れでもよろし、五つとも皆作つて下さつても宜しいが採用するのは其中で最も好いのを一つだけです▲わが母は諸嬢の母君に就いての事なら何でもよろし▲夢の話は乃ち夢の話です▲わが見たる男子は諸嬢の觀察を聞きたいので、諸嬢は何う云ふ風に男子と云ふものを觀察して居られるか、それを言て下さい▲若き經驗は今迄の經驗した事の内で例へば利益になつた事とか失敗したこととか何でもかまひません▲繪葉書談は矢張り繪葉書について面白いお話をして頂きたいのです▲原稿は十六字詰で今回は十五行まで延びてもよろしい▲必ず「卓上談話」として題も別々に書添えることと▲賞品は例號の通り▲しめきり本月二十日

雜報

▲「文壇の花」別項廣告の通り本誌増刊文壇の花は本月十五日に盛裝して出版します　如何に文壇の花の名の通り美しく滑らかな雜誌が出來るかは御覽の上で評判を願ひます。

○女學顧問　はいよく來月の紙上から發表します、なほ健康に就いて御注意の質問をして下さい。

○優等生の寫眞　全國各女學校の試驗に優等になつた諸嬢の寫眞は數んで掲げますから送つて下さい。諸嬢のお知り合ひに優等した方があつたら其寫眞を御送り下さい、本社は其厚意を謝します。

○書き好い原稿紙　神田東松下町四七愛文堂發賣の投書用原稿紙は體裁紙質何れも好く筆でもペンでも書けるので至極調法です。

○女子正則英語學校　神田錦町の全校は還回校務を擴張して新入者を募集し日常必要の英語を授くる由。

○女子高等師範合格者　受驗者文科二百五十四名中廿八名、理科三百廿一名中廿五名、技藝科百二十名中廿六名、合計七百七名の中七十九名の合格者あり、四月六日體格檢査を行ふ筈。

懸賞品

（甲種）

▲壹等　金拾圓　賞金牌品
▲貳等　金參圓　呉服物
▲參等　金八拾錢　小間物
▲四等　金五拾錢　圖書切符
▲五等　金四拾錢　圖書切符

（乙種）

▲壹等　金五圓　絹張洋傘
▲貳等　金壹圓　帶止牛櫛
▲參等　金六拾錢　文房具
▲四等　金三拾錢　圖書切符
▲五等　金貳拾錢　圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）二月、五月、八月、十一月の十五日定期増刊年四回發行）

一冊（大刊百貫下）	前金拾錢	郵税共前金拾壹錢
八冊（半年分共増刊）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除ク）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓貳拾錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六拾錢

振替貯金又は爲替に限る事

輕便の送金法

（注意）女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料何もいらぬ安全の送金法

（此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます◎此方法にて送金の節は登記料二錢貼入を乞ふ）

明治四十一年三月廿九日印刷
明治四十一年四月一日發行

定價金拾錢

不許複製

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約發捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

廣告料

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
		一行四拾錢

部數多く有効に比し無類の割安

〆切　毎號十五日前

特約取扱　○神田　博報堂　○京橋　中外廣告會社　○京橋　日本電報通信社

▲來る十五日臨時増刊「文壇の花」は定價郵税とも例號の倍額（假二十錢郵税二錢）です其お積で至急拂込を願升

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 定價金拾錢 郵稅壹錢

明治四十一年四月十五日發行（毎月一回一日）明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



文壇餘興 卓上談話（課題）

青葉涼しき初夏の木蔭に食卓を圍んで、談話會を催ふすのも女子文壇の餘興として面白からうと思ひます、此度は談話の題を凡そ左の五つに分けませう。

▲わが母　▲夢の話　▲わが見たる男子
▲若き經驗　▲繪葉書談

▲以上五つのうち何れてもよろし、五つとも皆作つて下さつても宜しいが採用するのは其中て最も好いのを一つだけてす▲わが母は諸嬢の母君に就いての事なら何てもよろし▲夢の話は乃ち夢の話てす▲わが見たる男子は諸嬢の觀察を聞きたいのて、諸嬢は何う云ふ風に男子といふものを觀察してゐられるか、それを書て下さい▲若き經驗は今迄の經驗した事の内て例へば利益になつた事とか失敗したことゝか何てもかまひません▲繪葉書談は矢張り繪葉書について面白いお話をして頂きたいのてす▲原稿は十六字詰て今回は十五行まて延びてもよろしい▲必ず「卓上談話」として題も別々に書添えること▲賞品は例號の通り▲しめきり本月二十日

雜報

▲「文壇の花」　別項廣告の通り本誌增刊文壇の花は本月十五日に盛裝して出版します　如何に文壇の花の名の通り美しく淸らかな雜誌が出來るかは御覽の上で評判を願ひます。

○女學顧問　はいよく\/來月の紙上から發表します、なほ館長に就いて讀者の質問をして下さい。

○優等生の寫眞　全國各女學校の試驗に優等になつた諸孃の寫眞は歡んで掲げますから送つて下さい。諸孃のお知り合ひに優等した方があつたら其寫眞を御送り下さい、本社は其厚意を謝します。

○書き好い原稿紙　神田東松下町四七愛文堂發賣の投書用原稿紙は紙質何れも好く筆でもペンでも書けるので至極調法です。

○女子正則英語學校　神田錦町の全校は週回校務を擴張して新入者を募集し日常必要の英語を授くる由。

○女子高等師範合格者　受驗者文科二百五十四名中廿八名、理科三百廿一名中廿五名、技藝科百二十名中廿六名、合計七百七名の中七十九名の合格者あり、四月六日體格檢査を行ふ筈。

明治四十一年三月廿九日印刷
明治四十一年四月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

▲來る十五日臨時增刊「文壇の花」は定價郵税とも例號の倍額（但二十錢郵税二錢）です其お積で至急拂込を願升

(宮本製本)

◎四月一日より人形の服裝を取替へ引續競技會開催仕候

◎均一法賣出しは數種の物品を增加し一層擴張をなし引續き擧行仕候間御遊覽の程奉希候

◎均一法は物品を御擇撰遊され候にも最も御便利に御座候

◎均一法は最も進歩したる廉價の販賣法に御座候

◎均一法は總てが經濟的に出來上り居候

日本橋區通四丁目

松屋呉服店

牛山武兵衛

電話本局 六〇八 七一六



四月一日より

一、第十五回新柄陳列會

一懸賞課題模様圖案陳列

一懸賞當選優等印畫陳列

一新流行歐米雜貨見本陳列

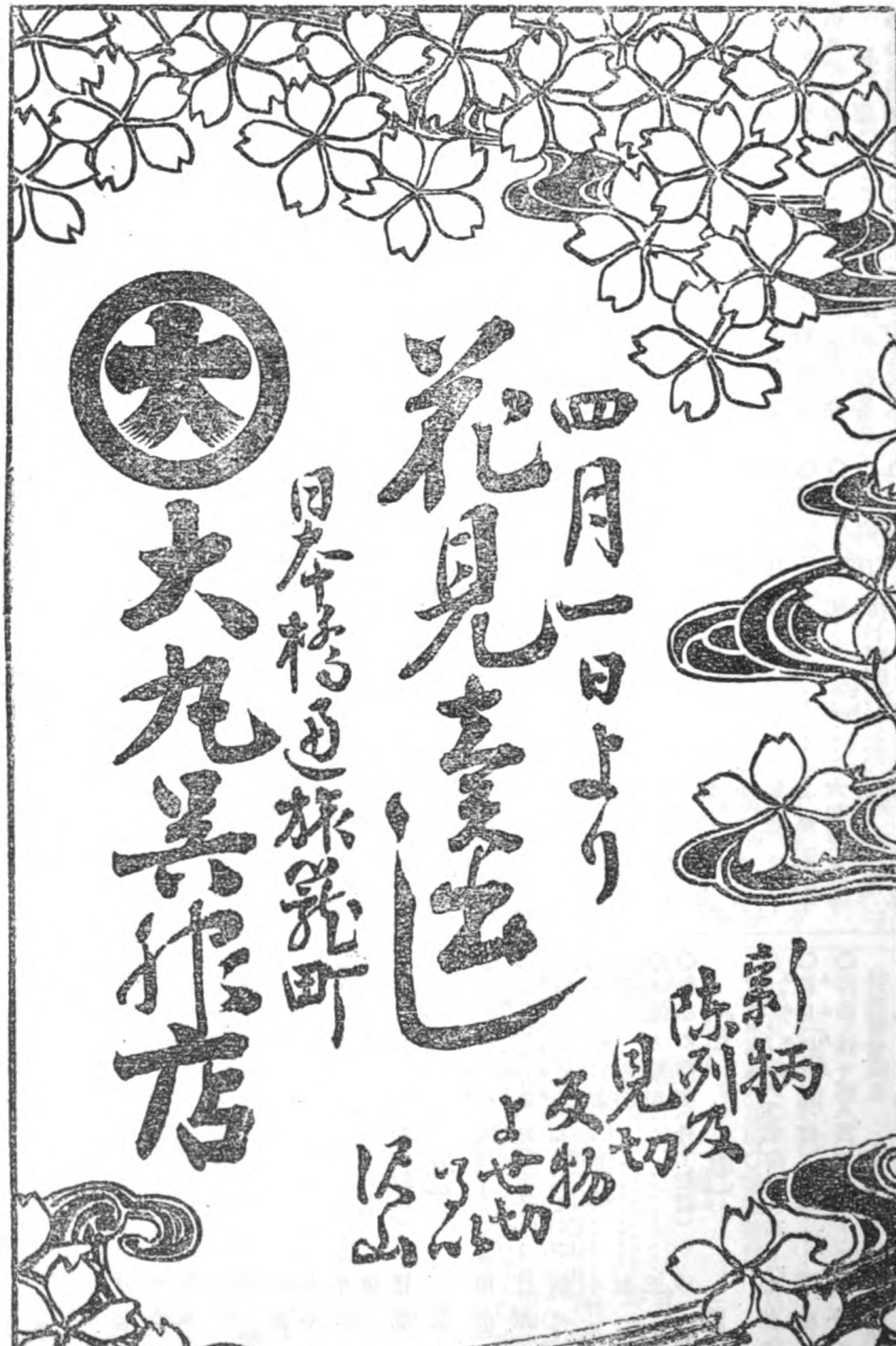
一新古御婚儀用調度品陳列

一、寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右新柄會は我國染織業の改良發達を圖るを目的とし今回全國機業家の贊成を得て是迄に類なく一層盛大に開催致し候ものに有之尚は寄せ裂れ類は假營業場新築紀念の爲め特別澤山に準備致置候間實業奬勵の爲めと思召され新陳列場の御遊覽を兼ね賑々敷御來觀御高評を給はり候樣偏に奉願上候

東京日本橋駿河町

三越呉服店


四月一日より
花見
新柄
日本橋通旅籠町
大丸呉服店

女子文壇臨時増刊

文壇の花

目次

附録

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標 壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成纎微等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ濟々しく天然と色白さに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生せざるは本白粉の特色なり「菫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京橫濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特徴

紙、鑵、紙彩鑵詰ひ 別製鑵詰 大袋二錢
鑵詰八錢 五拾錢 小袋一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗ひに御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を潔白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜るし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標

四洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE

WASHLNG IOWDER

壽美禮あらい粉



製造本舖 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製

取賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

五二會品評會功勞賞牌



THE BEST MADE

SUMIRE

VIOLET PASTE

ヴワイオレット煉製

錫蓋附乳白硝子器入



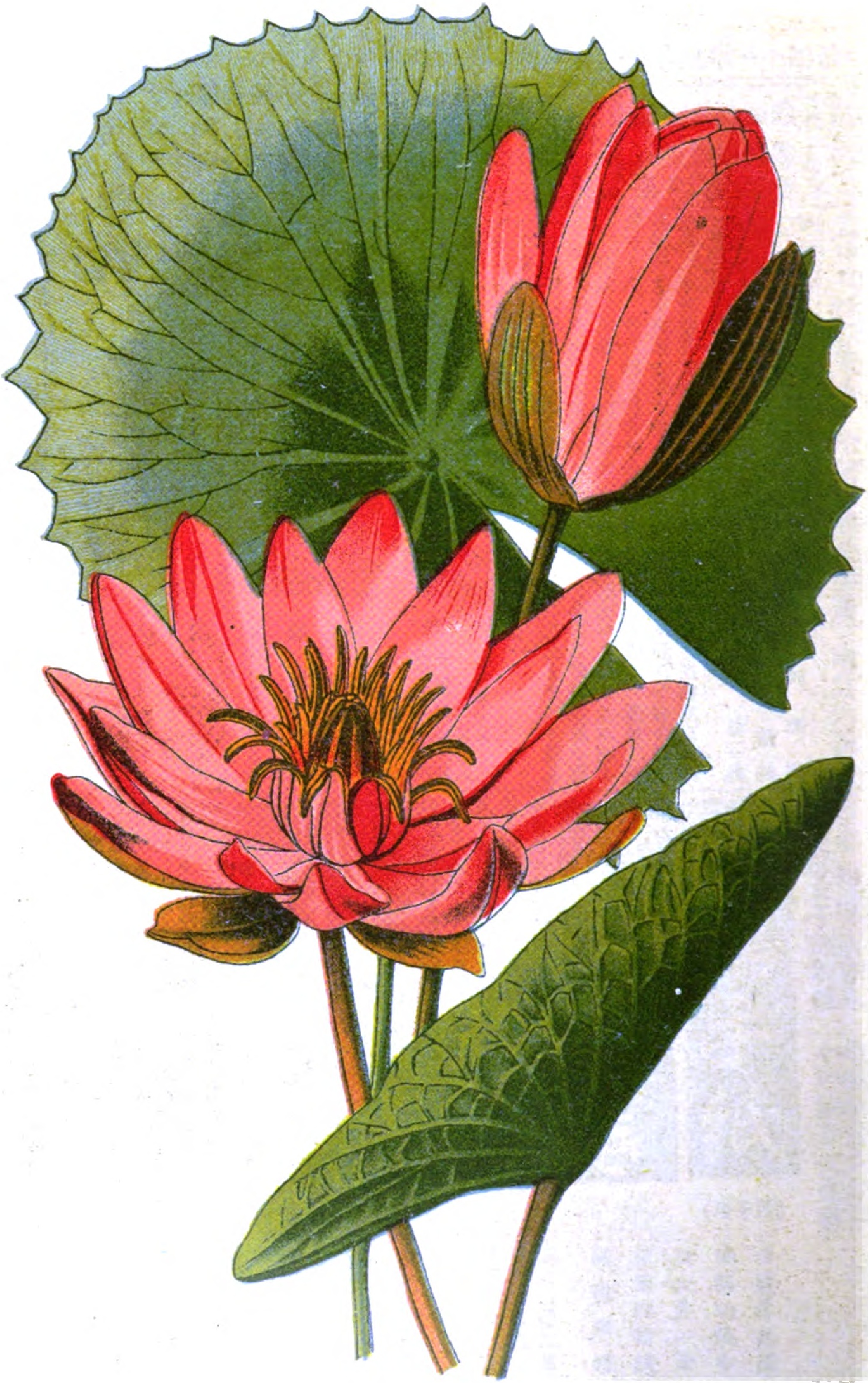
壽美禮れしろい

ヴワイオレット水製

ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入



睡蓮（すいれん）

明治四十一年徴兵適齢者は勿論將來陸軍に出身せんと欲する者の必讀書

陸軍步兵大佐 龜岡泰辰校閲
陸軍步兵中尉 龜岡泰躬校正
軍事普及會編纂

改正 徴兵問答 附入營の準備及諸願届書式

正價廿錢 郵税四錢

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著 増訂六版

文章の錦

菊判和裝 定價六拾錢 郵税拾錢

此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄録せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論説、消息、物語等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作者の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり。

新編書簡文法式

（男子用）

總クロース金字入 定價五拾錢 郵税六錢

女子書簡文法式

洋裝美本 定價六拾錢 郵税六錢

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは古來未だ嘗て有らず蓋し書簡に法式のなからざるは猶人に禮儀なく書簡に法式なからんか其人如何に賢しと雖又如何に富めりと雖一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、中邨秋香先生深くこゝに感ぜられ即ち男女に就て各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の階を分つが如き煩を避け今日の現狀に依り嶄新を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものなり故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生作
學習院女子部教授 小野鵞堂先生書

新編手紙

（男子用）

木版奉紙摺 無類の美本 男女各一冊 定價四拾錢 郵税四錢

女子消息手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）

木版半紙摺 頗甚尙優美 男女各一冊 定價六拾錢 郵税六錢

女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相竢て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元
東京市京橋區中橋廣小路六
振替貯金口座四千百〇九番
前川文榮閣

精力を增し快美を最大ならしむ

This remed is wonde rfully efficacious for imp otence deficiency of semen, weakness of spermato zoid, nocturnal eission, premature emission, non-development. weoknesse of nerve, and non-pre gnancy.

一時生殖器病界に一新曙光を放てる彼のガッセル氏のエレクトール機械療法にせよブロンセカル氏の腦器療法或はボールル氏及びベーベス氏等の神經組織注射療法なれ科學的研究の進歩せる今日に於ては既に**陳腐**の方法に屬し其治効なきは**旭醫學士**にて依く公表せられたる如く現代未だ其良藥なきは最も遺憾とする處にして當製藥所が此にガーデン Garden を發行したるも亦故なきにあらざるなり……ガーデン Garden は當製藥所主が最に大學卒業後專ら生殖病學の研究に任じ帝國先輩**最新學理**殊に博士ゲルハルド氏シは勿論歐米ゲムント氏ツアイヘル氏等の研究に基き或は學理に或は實驗に幾多の研究を積み發見せる新藥にして其絶大なる靈効は**高田醫學士**の報告或は査定 吉原病院副院長**赤倉**大先生の實驗報告其他服用者の禮状殊に歐米に輸出せられ名譽の高評を博しつゝあるに徵し明なるを以て普通賣藥的奇言を臚列せずガーデンの主効は

男女生殖器新藥發見

手淫房事 過度の害より起る **勃起力**減衰 **陰萎** 萎縮 腎虛 **夢精** 遺精

早漏 精液缺乏 精蟲缺乏 精蟲衰弱 **短少者** 神經衰弱 **快美** 減少 不姙 嫉妬 腦勞 理解力 決斷心 缺乏

記憶力 減少 考衰 無力 冷症 身體虛弱等に用ひ輕きは一劑乃至二劑重きも三劑乃至五劑にて根治の目的を達せしむ又本劑は劇烈なる强壯藥なれば虛弱家は勿論無病の者と雖ども平素服すれば精神身體生殖器を强壯となして**淫慾**を著しく**發動**せしめ如何なる場合と雖ども身體精神生殖器を衰弱せしむる事なし又本劑には醫學士の無代で附し服用患者に其病理の如何を告げ

最近 生殖病論

雨江 口述

絶體根治を期せしむ本書は最近學理により著述す○價一劑二圓八十錢二劑五圓五十錢三劑八圓五劑十三圓送料內八錢清韓台灣卅錢外國卅四錢

日本發行所 東京向島小梅町百八十七番地 **松尾製藥所販賣部**

清國發行所 清國寧波府江北岸 **松尾製藥所販賣部**

洋畫講義錄

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す每號美麗なる插畫數多あり、每月一回發行、一年卒業、會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯

三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

[新學期開始!]

東京市麻布飯倉四丁目 **大日本繪畫講習會**

繪畫講習錄

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ每號美麗なる繪畫數葉を挿入す、每月二回發行一年卒業會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯

川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

白色術

どうすれば色白くなるか

色を白くし・にきび・そばかす・顔のあれ・おしろいやけ・しみ・しわ・あぶら・日やけを治し・きめこまかにつやを出す



を二錢封入申込の方に教示す

東京小石川區柳町 森義郎

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壮健全になす靈藥
胃病根治劑

從來世に胃病藥顧る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的姑息式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壮ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壮にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價)壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ふれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證 新發見藥

醫務審藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）


フランス製
ケーバの香水
フランス上流界はケーバ香水の高尚なる香を愛せらる
定價 大瓶壹圓 小瓶廿五錢
東京市日本橋區橘町二丁目九番地
化粧品直輸出入商 竹間商店
電話浪花一六一四番

花苑



大江原色版部製版

世界唯一

痳病消渇の根治新藥

りんめつ
痳滅

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**痳病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵劵代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

色白特効
ペーアス石鹼

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず曾だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白く**し、**粗糙質**を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附著し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

癩病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅し病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は一二劑重症は特別製分以上にて治療の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効の新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**すること確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上貳藥 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

眞正極秘
粹珍書案内

望の人郵劵四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粹士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黒門町廿番地 **東雲堂書店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秀才文壇春季大附錄號

△名家文欄◁

○文壇と人才(評論)……生田長江
○國文學の研究……松原至文
○近世的の神秘夢幻……片上天弦
○傳染……小栗風葉
○秘密結社……吉江孤雁
○燈臺……西村醉夢



△名家文欄◁

○アイヌの戀……眞山青果
○燒場の女……中村星湖
○唐がらし……岡田八千代
○黄日……小川未明
○朝鮮行……原田譲二
○未定……柳川春葉
○風の日……矢部白雨

普く現代青年の文と詩を集めたる新綠は將に出てんとす。野にある若き詩人の光焔宛がら虹の如きを觀よ。名家文欄は當今文壇の大家を悉く網羅して餘さず。此れ陽春文壇の大偉觀なり

紙數 二百五十頁

本號に限り 正價二十錢 郵稅二錢

青年文壇

○短篇小說○美文○寫生文○評論○新體詩○五行文○十行日記○和歌○俳句○スケッチ

美麗口繪數葉挿入

四月二十日發行

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂

賣捌 東京堂○東海堂○北隆館○良明堂 其他雜誌書店


御料
畏き邊りの御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
製造本舗
東京芝
胡蝶園
發賣元
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
ねり製
御園白粉
水製
御園白粉
こな製
御園白粉
洋風化粧クレーム
御園の蕾
高貴化粧水
御園とき水
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
御園香油
御園香水
高貴はみがき
御園歯磨

入賞作家の光彩（其一）



岡田美知代君



服部貞子君



山田邦子君

入賞作家の光彩

（其二）



港秋子君



田中久子君



小川波子君



阿部秀子君

入賞作家の光彩

（其三）



菊池柳子君



鹿間久子君



三木美代子君



江原田鶴子君

入賞作家の光彩（其四）



西野ひさし君



北村光子君



新庄奈津子君



青木高子君

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居って高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によって獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子敎育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ケ年完結とす

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

三大博士

發明 神經衰弱貧血頭痛依ト昆的里（ヒステリー）陰痿等通俗的症候解説療法攝生法根治藥詳說の雜誌をハガキて申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長廿七名の醫家實驗不思議の効果を確認せる全治報告根治療法詳說の雜誌を救濟の爲め無代進呈ハガキて申込め

東京京橋越前堀 樂天堂藥房



●にきび、そばかすきれいに取れます

妾事永らくにきび、そばかすにて人樣の中へ出るのにはずかしい思ひをいたしましたが去る大醫の奥樣に不思議な程きれいに取れる秘法を授けて貰ひ御友達にも知らしてあげましたが皆喜ばれるゆゑ今度皆樣に御知らしますゆゑ郵劵封入で御照會あれ

東京市小石川區小日向町二番地 石原麻子

美術造花

通信教授

二ヶ月卒業▲遠國の自宅で老幼男女誰にても造り花▲和洋花かんざし等美麗に出來る卒業後は就職の便あり▲案内書附製品見本は郵劵十二錢送れば直に呈す

東京四ッ谷區簞笥町廿八番地 美術造花傳習所

どもり

聲惡き人返信郵劵送附あれば余が全治せしハーエル博士の吃音必治療法を教へ升 櫻井

東京礫川指ヶ谷町卅番地

●會計員入用（九七）某大銀行及大會社にて最新式簿記學に通ずる者を會計員として雇入る但し月俸廿五圓以上卅圓希望者至急來談（姓名在社）と是れ夕刊報知新聞職業案内及時事新報よろず案内に掲ぐる所然れども簿記學を知らざる者は之に應ずる能はず

僅少の學費を投じて立身出世を望む者は簿記學を學べ

本院は商法第五章に基く完全なる主簿者を養成する爲め普通式及最新簡便實用のカードルーズリーフ式簿記法を新式講義錄に依り通信教授し自宅にて講習せしむ▲教授科目は商用會社銀行の三科▲小學卒業者は無試驗入學を許す▲規則詳細郵劵二錢を要す

東京芝濱松町二丁目

日本簿記學院

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新奇發明

秘密奇法

（目錄大要）百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●百日眠らず躰衰へざる法●寢入たる者に答へしむる法●寢入たる男女心中を知る法●皺婆を二八の娘に變ずる法●妖怪變化を見顯はす神術●人躰不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法●思ふ女をなびかす藥法●堅き女の氣を狂はす藥法●陰莖を長大にする藥法●女を閨屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染めし女を手に入れる法●待人來たる神術●一生戀中替らぬ秘術●恪氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●避食の仙術●神速に陰精を強る法●即座隱身術●人を眠らす即ち催眠術●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情發せしむる法●記憶力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破術●黑字夜光の奇術●老人經身皺取の奇術●腋臭を治する法●寶丹の藥方●腹痛速治法●疥癬藥の製方●脹満を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●癩病の治法●月經の不順を治す法●痴氣の妙劑●痛齒を治する法●陰門の臭き治法●陰部の虱を去る法●ニキビを去る法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新藥●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新藥●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●腎を能くする新術●肉躰白色の新劑●白毛豫防の新法●くた〳〵の妙法●寢小便を治する秘方●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●酒毒を治する妙法●疣ほくろを取る法●あざを抜く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●感冒治療簡方●梅毒豫防の奇法●想ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇法●男女全躰の色を白くし且つ艷美ならしむる法同じく心得

▲着金即刻送本す

全壹册正價郵税共貳拾貳錢▲郵劵代用は廿七錢封送の事

專賣元 東京市下谷區西黒門町二拾番地 **東雲堂書店**

有効無害 奏効確證

やせる藥

本劑は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ひて害なく身體美容となり程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき奇効を知られよ

壹劑分藥價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 **ヨヒンビン**

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九十錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授スピーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**陽物無力**腎虚神經衰弱**遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虚弱手淫に起因する諸病早老者精液精蟲、缺乏不姙娠冷症**快美**減少及び**短少者**等に用ひ輕症は四五劑重症は八九劑慢性難症は拾參劑にて根治の目的を達せしむるに天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を強健に**勃興**して**淫慾**を著しく**發動**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を臚列する内地製無効實藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

一手輸入 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は**廿日**、**ほくろ、そばかす、なまづ、いぼ**は**拾日**目に必ず美麗に除去すること**保險附**

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**瘢跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝状**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



低廉。無敵。每號大好評

▲發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社（振替口座第壹七貳九番）

▲女子文壇は何處の雜誌店でも賣つて居ます

第四卷第壹號

目次　一月一日發兌　百六十頁　此分に限り定價拾貳錢

口繪　泰西名畫　愛吟　光澤紙原色密刷　寫眞　閑院宮殿下の家庭、誌友肖像外　繪手本

〇新年の辭……………記者

〇名流婦人の處女時代▲三輪田眞佐子▲跡見花蹊▲鳩山春子▲若佐藤靜子▲三宅花圃▲大塚楠緒子▲與謝野晶子▲藤井環子▲羽仁もと子▲榊原蕉園▲鷲山彌生諸女史の談片

〇央文▲新年▲指太郎（其二）……………河井　道子

〇懸賞新作詩文第一回披露……滿紙に溢る

【附錄】

●〇死後までも……小栗　風葉

●〇女裝……德田　秋聲

〇角……岡田八千代

〇非技者……佐野　天聲

〇乘合馬車……窪田　空穗

（各編とも挿畫入）

第四卷第二號

目次　二月壹日發兌　定價金拾錢　送料壹錢

口繪　泰西名畫　花苑　光澤紙原色密刷　寫眞　小笠原女禮式作法其他　誌友肖像外　繪手本數葉

〇自分の價値……………記者

〇名流婦人の處女時代▲平田延子▲嘉悅孝子女史の談片……………

〇遠人……………文學士　横瀨　夜雨

〇冬の旅……………中村　枯林

〇彼如何にせし（小說）……………齋藤　弔花

〇新進作家一口評……………記者

〇英文：▲冬▲金言▲六羽の白鳥……………河井　道子

〇懸賞新作詩文第二回披露……滿紙に溢る

第四卷第三號

春日影　二月十五日定期增刊　定價金拾錢　送料壹錢

『春日影』は發行忽ち本社は賣切れたり

第四卷第四號

目次　三月一日發兌　定價金拾錢　送料壹錢

口繪　パンジー　花束　光澤紙原色密刷　寫眞　光榮ある閨秀歌人と誌友肖像外　繪手本

〇沒書嘆……………記者

〇雪の歸路（小說）……………江見　水蔭

〇書簡文のはなし……………文學士　武島　羽衣

〇名流婦人の處女時代▲棚橋絢子▲瀨沼夏葉▲岡田八千代女史の談片……………

〇愁の曲（詩）……………北原　白秋

〇文學雜誌一口評……………記者

〇英文▲神の園▲六羽の白鳥▲公德……………河井　道子

〇懸賞新作詩文第四回披露……滿紙に溢る

第四卷第五號

目次　四月一日發兌　定價金拾錢　送料壹錢

口繪　八重　櫻　光澤紙原色密刷　寫眞　小笠原女禮式其他　誌友寫眞外　繪手本數葉

〇時候で言へば四月……………記者

〇名流婦人女處の時代▲佐々木雪子▲櫻井ちか子女史の談片……………

〇手の上の水……………與謝野晶子

〇晩餐會……………沼波　瓊音

〇海の水……………文學士　吉田　撫水

〇從妹……………前田　夕暮

〇投稿笑話……………記者

〇英文▲ルシー▲六羽の白鳥▲公共心……………河井　道子

〇懸賞新作詩文第五回披露……滿紙に溢る

▲各號とも本社に取揃あり最寄雜誌店に無くば直接御申越の上愛讀を願ます

坐ながら手數せず安心して買物の出來る法



輕便買物案内

今般本社にては愛讀諸孃の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌、文房具、化粧品、西洋小間物、玩具**其他有らゆる百般の物品を手數料申受けず總て**定價の五分引**にて御用達致しますから遠慮なく多少に拘らず左記の注文心得により御申込を願ます

申込心得

◎注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

◎送金

▲必ず注文と同時に定價の五分引に相當する金額と郵便小包送料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

◎見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

◎送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便、普通運送便にて送り屆けます

◎問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります

▲申込は總て「女子文壇社買物用達部」宛にして下さい

▲右の外諸學校の校友會誌を始め一般の印刷物及木板、寫眞版の製版をも迅速鮮明に御引受け可申上候

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
(郵便振替貯金口座第壹七貳九番)

女子文壇社買物用達部
(電話本局六百七番)

紀念發賣は空前の大安賣

○本社創業滿三年紀念特賣廣告

小森松風著 美文作法

全一冊洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

▲中央新聞評　本書は總論に於て美文の起原名稱種類を說明して抒事文、抒情文、抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文飜譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳說したりいいいいいい美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

小森松風著 言文一致文範

全一冊洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

▲中央新聞評　言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論說、抒事、抒景、日記等數十編を示したり、斯道研究者の歡迎を受くるいいいいいいものならん

中村報知新聞記者著 實地精査 女子遊學便覧

全一冊洋裝校長肖像入並製　正價三拾錢

廉賣金拾五錢　郵稅四錢

▲萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を揭ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を揭げたるものに比すれば、調査は善く行屆けり、尙ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生とその父兄とには頗る便なるべし。

鈴木秋風著 小說美文 朝ばれ

全一冊本綴彩色畵入美裝　正價四拾五錢

廉賣金貳拾五錢　郵稅四錢

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて溫雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小說ながら、著者が所謂寂寞の歷史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小說で何れも未だ浮世の荒波にもまれない靑春の女の幽情を寫したものです。

各書とも殘本僅少なり賣切れると增刷しませんから、早く御愛讀を願ます。

これほど安い本は天下にありません

河井醉茗君著 詩と美文 玉むし　價六十錢

諸大家選評 懸賞文集 第一　價廿五錢

右兩書とも發行元は賣切れに付當分增刷いたさず候

第二懸賞文集の特賣廣告は別項にあり

▲▲發兌元

東京市京橋區大鋸町十、十一

振替貯金口座第一七二九番

女子文壇社

●健全なる精神は健全なる頭腦に宿るとは、萬古不動の明言なり

東洋唯一時事新報を初め報知新聞、毎日電報、國民新聞、都新聞、日本、東亞新報、東京藥事、其他帝都の大新聞を初め各地の新聞は筆を揃へて社會に紹介せり、曰く、近時社會の狀態一變し精神的智識の競爭時代とはなりぬ、而して腦神經衰弱患者の增加せるは著しき事實にして殊に現時學生の大半は輕微ながらも本病患者なり、醫學士常持爲治氏は本病々理の蘊奥を極め山海大氣の利用に依る自然療法の必要を稱へ終にレーベンなる新藥を創製せられ、斯業界の有力家（中南）の手に依りて社會に發表せらる云々と如何にレーベンが社會の各階級に偉大なる信用を博しつゝあるかを知るべし

若し本劑の内容を知らんと欲せば送料二錢送れ、說明書と養生法とを進上

レーベン

レーベンは臭素加里を主劑としたるにあらず故に服用に當りて其量を增減するの要なく且つ心臟を害することなし

レーベンは神經系統に鎮靜作用を呈するが故に神經性諸病に最も適良なものとす

レーベンは鎮痙藥特に婦人の鎮痙藥としてヒステリー症に對し特異の効を奏す

レーベンは神經性不眠症酒客膽忘に催眠藥となり殊に恐るべき男女情慾の興奮を佳良にするに偉大の効を奏し健胃作用を有する等綿密なる注意を拂ひたる藥物なり

要するにレーベンは腦神經衰弱ヒステリー症に對し最も卓絶なる効力を具備せる良藥にして現世に於て殆んど間然するところなき絶好の藥物たるを斷言するに躊躇せざるなり

從五位 勳三等 醫學士 森 友道
海軍軍醫少監 從五位 日向 次作
腦神經系統專門 醫學士 森 識



藥効 腦神經衰弱ヒステリー 腦充血、陰萎、遺精、貧血等の腦病神經衰弱諸症の最良最新發見劑也

藥價	
壹百錠	八十錢
二百錠	一圓五十錢
四百錠	二圓八十錢
八百錠	五圓

東京芝區愛宕町二丁目十四番地
弘濟藥院藥品部
電話新橋三〇八九番
貯金口座七七七七番

●レーベンは醫界空前の成功近世絶好の腦神經衰弱療法

文壇の花

女子文壇 臨時增刊

明治四十一年四月十五日發行

わが文壇の花

櫻も咲く、菫も咲く、文壇の花も咲く、若き生命の香は野に滿ちてゐる、聲ある者はうたへ、血ある者は醉へ、藝術は自由の天地、汝自分の爲の樂園である、汝は汝であつて他の何人でもない。囚はれたる羈絆を脱れしむるも文藝の力、パンの代りに蜜を吸はしむるも文藝の力、誰か文藝を僞れるものと云ふ、世を擧げて虚僞る時にも、單り文藝のみ眞を傳へんとするではないか、少くもわが女子文壇の或る頁を開け、其處には眞の若き血が潮すであらう、要するに稚きものは誠實なり、諸孃は詩神の前に虚僞を捧げない、されば眞なる靈魂の叫びを聞かうと思ふ者は此處に來れ。風暖うして花は自然に開く如く、花開いて一の僞れる色なき如く、經驗に囚はれず、知識に欺かれず、夢みるやうな若き生活を朝鳥のほがら〳〵に歌ふ聲、消ゆる聲、百花繚亂、萬千の胡蝶一時に舞ひ起て落花か、烽火か、幻に浮ぶは抑も何人の姿であらう。

河井醉茗

短篇小説

「天」侮辱

東京　岡田美知代

學校に居るうちは何につけ彼につけ、不平だら〳〵こぼしてばかり居たものも、一度去つてそれ〴〵社會へ出て見ると、流石に母校可懐しさの堪へ切れぬものて、同窓生とし聞けば、つひに一度顔見合した事さへ無い仲でも、最う直ぐ打解けて、他人では無いやうな氣もしますので。

或る夜の事、神樂坂迄買物しての歸途、いろはの前てふと津村さんに行き合ひました。此人は以前私が神戸女學院の豫科に居た頃、もう餘程の上級生で、金縁の眼鏡などして、ことさら袴は着けず、見たところいやに取澄したやうな樣子の人でしたが、其頃私の部屋頭であつた高等科生の山家悦子とは非常に親しいなかて、よく部屋へ出入りしては、自然私にもやさしく、それに以前同志社においての頃、私の從姉と知己であつたとか云つて、種々お世話にもなりました。

『アラ、津村さん！』

行過ぎようとして斯う呼掛ますと、立止つて、度の强い昔乍らの眼鏡越しに、凝然と私の方を透し見て、

『河田さんだよまあ！　本當に久らくです事、御上京の事は「めぐみ」――同窓會誌――で見てましたけれどお訪ねもしませんで……此節は何處に被居います？』

『え、あの辨天町四十二番地、伊澤つて家に居ますの』

『オヤ然うでしたか、それぢや目と鼻の御近所、私は矢來の四番地です、南榎町の教會の直ぐ傍て、山家さんと御一所に家を借りて。弟と三人呑氣に自炊してますの、それに近日神戸から清水さんが出て來て、矢張

り一所に住む筈ですから、何卒時々お遊びにいらつしやいな、是非待てますわ』と云つた調子て、其の夜はその儘別れましたが、何とは知らぬ愉快さに胸も波立つて、道すがら樂しかつた女學院時代を思ひ出し〳〵獨りて莞爾、幾度と無く微笑むのでした。

　清水千香子とは十四の春入學そも〳〵からの同級生てす、お互ひにまだ肩あげも澤山に、小柄なお千香さんは腰あげさへして居て、丹波產れの、わけても言葉の可愛らしい人、無邪氣てそゝつかしやて、何時でしたか、寄宿舍の裏手のパン家から火が出て騷いだ時など、平常から髷のこわれぬ



やうにと、頭に枕をくゝりつけて寢て居た事も忘れ、周章てゝ起きて、其儘大勢の人中へ飛び出し、後て大笑はれした事もありましたてすから一體に上の組の人達から面白い娘だと喜ばれましたが、山家悅子との仲は格別て、其頃學校ては誰云ふと無く、二人の事をチヤレストと呼びまして、果ては何か忌はしい、怪しい關係でもあるかのやうに云ふらす者さへありました。實際血を分けた姉妹でもよもや斯うまてはと思はれる位の親密さ、足袋から襦袢から、洗濯物は皆なお千香さんが一人て引受けて、虛言か本當か、肌に卷くものさへ二人は一所だと聞きま

したが、其位にして居てさへも、不機嫌な旦那と云つた調子て、癇癪持ちの山家さんは隨分と無理難題を並べては、お千香さんを泣かしたり、八當りしたり、とお千香さんとても然う／＼默つてばかりは居ず、時には飛び掛つて胸倉を執るやら、帚て撃ち合ふやら大騷ぎするのです、けれ共その直ぐあとから耳語して、莞爾うなづき合ふと云つた有樣。

山家さんの出京は此春頃、最う半年も其上も前の事てすが、卒業後を母校に止まり、久しく數學植物學を受持つて、リール院長の大お氣に入りてありました。それて月々の費用は、學事視察と云ふ名義の下に學院から仕送る事になつて、病氣保養かた／＼、此處一兩年は東京に被居るのだと聞きました、お千香さんとの別離はそれは哀れなものてあつたとは、其當時神戸の友から嘲り半分、判官都別れの場とでも云ひそうな滑稽な文句て、委しい手紙をよこして居ましたが、可哀相に二人は堪らなくなつて、呼び寄せたのか、後を追ふたのか、今度愈々出て來る事にもなつたのてせう。

其次ぎの日曜日、ことによつたら最う清水さんが來て居るも知れぬと思はれるので、敎へられた敎會の生垣を曲つて、矢來の四番地に來て見ると、尋ねる迄も

無く、柴垣を廻らして、割合に小奇麗の家の、門には津村と表札が出て居ます、格子戸を開けて玄關ておなふと、出て來たのは弟さんてせう、津村さんによく似て背の高い、髮を分けた細顏の、二十四五て一寸と風采の好い人です。

「あの津村さんはいらつしやいますか、私河田と申します。」

「居ますよ。姉さん！」と奥を覗いて「お客樣だよ。」

「オヤ被入い。サア何卒、清水さんも來てますから。」と津村さんが出て來て奥へと導く、導かれて行くと六疊の室の中央に据えられた卓に凭つて、讀書して居るのは山家さん、清水さんはその横て編物をして居ましたが、此方を見るなり、

「あれまあ貴孃、河田さんやないか！」と起上つて、さも／＼可懷し相に手を執り、挨拶しようとすれば、

「そないな事置いときなはれ、此方は書生流が好きやよつて。」と相變らず仇氣ない。

暫らく話して居るうち、勝手口から豆腐屋がのぞくと清水さんが起つて、臺所の戸棚を開けにかゝる。とまた、

「お豆腐屋さん、序に柏子木に切つといて下さいな」

と津村さんの注意。

それから何は無くとも、久々振りて御一所にとすゝめられるまゝ、私も手傳つて揚出しをしますやら、弟さんと合せて五人、一つの卓に御夕食を頂いて歸りましたが、弟さんは早稻田の生徒で、其英文科卒業も來年だとか、敏さんと云ふお名前です。

淸水さんは英學塾に通ふ事となりました。

二十日ばかりして二度目に訪ねた時には、津村さん兄弟は留守でして、山家さんが恐い怒つた顏してひかえて居る前に、淸水さんは眼を眞紅に泣きはらして居るのです、斯うした光景は以前よく見馴れて居ますので、又例のとばかり、何故二人は斯うかと結句可笑しくも思ひましたが、默つて居る譯にも行かず、

「一體まあ如何なすつたの？」と聞きました。

と暫くして投出したやうに淸水さんが、

「私ね、今日から他家へ行きますのや。」

「え、何故？　此處に居たら好いぢやありませんか。」

「然うかて、山家さんが居たら不可んて仰有るもん。」

「何故てせう、可笑しいぢやありませんか。」

「此處に居ると墮落の恐れがあるのやと、敏さんと口利いたりするよつて——」

「何ですか、お千香さん！」

山家さんは白い眼をしてぢろり、以前は此一睨で默つたものですが、

「然うかてあんた、一つ家に居て口利かないやうには出來んし、折角監督して下さる山家さんに氣揉ましても濟んから、それに私かて痛も無い腹さぐられるの嫌やもん、出て行くわ、出て行くけど晩迄、せめて津村さん二人が戻て來る迄待つて欲しいと……」

「まだ左樣な事云つて、何故此頃は斯う惡摺れておいてだらう、私の云ふ事なんぞ些少も聞かなくなつて、本當に困つちまう、折角父樣から賴まれて、萬一の事が有つて御覽なさい、お鄕里へ對して申譯ないぢやありませんか、私の氣にも成つて頂戴、ねえ河田さん、私の心配するのが無理てせうか。」

「ですから最う行くて云つてますがいな」

押入れから袴を取出して、次ぎの室へと起ちました。

「塾へても移るんてすか。」

「いゝえ、番町のね、私の知己へ預ける事にしましたの、つひ最初何の氣も無く此處へ引取つたものですから、詰り私の落度なんですよ。」と次ぎの室を憚つて、小さな聲。

歸らうとしますと、直ぐ歸つて來るから是非留守して居て呉れるやうに、若し又津村さんが歸つて來たなら、一寸と其處まで二人で買物に出掛けたと、然う云つて呉れと山家さんの賴み。而して斷るのも聞かず、ずん〳〵出掛けて行くぢやありませんか、仕方が無いのでとんだ處へ來合したものだと、心配して居りますうち、幸と山家さんが早く歸つて呉れて、虛言だけは吐かないで濟みましたけれど、一足違ひに敏さんが歸つて來て、書齋へ行きましたが、

「山家さん！」

と出て來た時の樣子と云つたら、それは穩かならん面色をして、私は思はずぞつとしました。

「貴孃は何故、何故僕を侮辱するんです」

「侮辱？　私がね？　まあ何を仰有るの、そんな覺えは有りませんよ。」

「覺えが無いつて何です！　僕は知るまいと思つても駄目、お千香さんは置手紙をして行きましたぞ。」

「而してそれが何故侮辱でせう。」と冷かに澄して云つて、口元に妙な微笑を浮べるので、敏さんは一寸と行き詰つた樣子でしたが、

「侮辱でなくつてさ、實に大なる侮辱、侮辱で無いなら、何故殊更僕の留守にしたんだ？」と急き込んで、

「サア、お千香さんは今麹町の何處に居るんです？」

「敢て云ふの必要ありません、私はこれでお千香さんを監督の責任がありますからね。」

「フヽン、監督か、自分の監督も碌ずつぽ出來ない癖に、よく云へた。」

「何ですつて？」

流石に今度は山家さんも氣色ばんだ。

「良心に聞いて見れば好いつて事さ。」

相手にはならんと云つた樣子で、突然帽子を執つて出て行きましたが、其の慵げな下駄音が段々幽かになるにつれて、山家さんの面色は淋しく、眼には異樣の濕をさへ湛えたが、急に又氣を變へて、

「ねえ、河田さん、ゆつくり遊んでつて頂戴な、今晩はお千香さんも居なくなつて淋しいんですもの……ね可いでせう、其代り澤山御馳走しますわ。」

「え。」と答へて、私は俄かに夕暮の薄ら寒さを覺えるのでありました。

此れはくらうとの作として檜舞臺へ出しても耻かしくないもの、隨分複雜したなりゆきをこれまでに纏めた技倆、讀んで笑はせるやうな處のある技倆、對話のいき〳〵して居る技倆、上方言葉を上手にあやなした技倆、暗黒の、苦痛のと批評の大斧を眞向から振翳さなければ始末のつかぬやうなものばかりが好い作とも限らない、批評み

しやうと思つて讀んで居るうちに批評を忘れて了うやうなのが眞の藝術品かも知れない、選者は何の理屈もなく、欣んで此作者に月桂冠を捧ぐ(評)

『地』 死

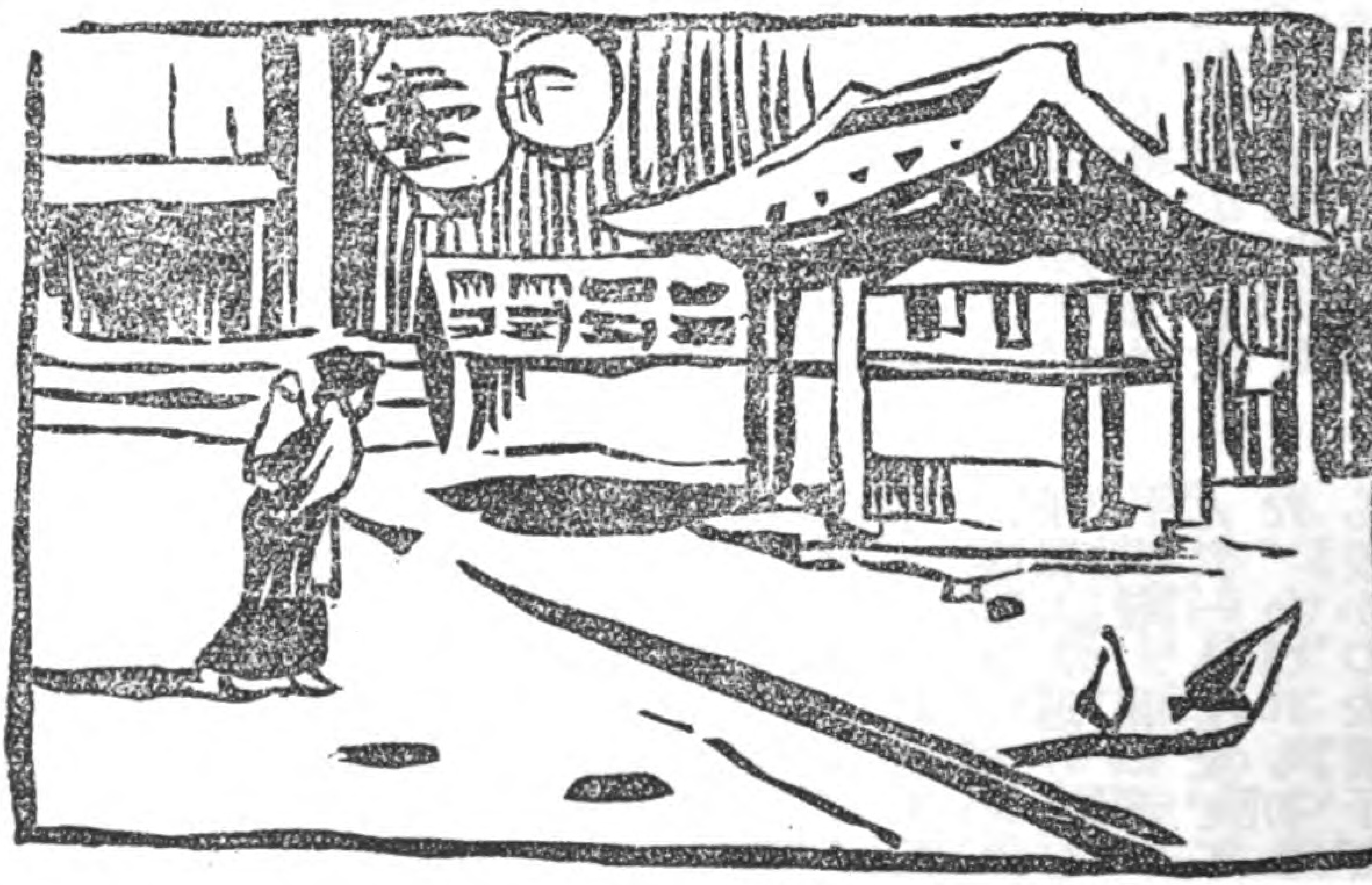
岩代 服部貞子

何家かの一番鷄が、夢のやうな聲を擧げたのにつれて、思ひ出したやうに、後の家の鷄も鳴いた。

一枚だけ繰られてある雨戸の巾だけに、末稍々廣く庭に投げたあかるみに、敷石の下駄は寒むげにうつし出されて居る。一寸ばかり積つた雪に、二の字の跡入り亂れて續く母家には、物音もなく只鍋の影瓶の影臺所にのみ灯が赤い。

枕邊の人々は猶沈默を續けて居る。白メリヤスの襯衣の袖口なく、顏の青い、鈍い目の、何處となく田舍染みた、筒袖の若者は此家の養子で金次郎と云ふ。其斜向ひに、角顏の鐵漿黒く、小さな丸髷に少なからず白髪の見える、てつぷり肥つた縞の羽織の人は、五年程前に死んだ連れ合ひの妹で、今し方六里ばかり在の婚家から、車に搖られて驅けつけたところである。其時入々が、つひ今し方すや／＼と、低語いてから、彼れ此れ一時間近くにもなるのだが、此儘覺めずにしまふのではないかと疑はれるまで、蒲團の中は靜かである。煙草入れを膝に握つて、片手を袖に通した前額の禿げかゝつた本家の當主が、憚つたやうな咳をすると、ぼんやりとした皆の顏が一樣に此方を向く。いたく面窶れのした身重の此家の嫁は、睡眠不足の瞼を腫らして、絕えず肉體の內部から襲ひ來る惰氣に、搖々と搖れては、我と我身を支ふるに苦心して居る。種々な小箱やらの物が

(入賞) 杉浦豐子



乘つてる古びた簞笥の前に、窮窟らしう座つて居るのは、菓子職人に嫁して居るといふ姪と其連れ合ひ。宵からの火氣や人いきれに、無暗にせまい隱居所には、有明の寒氣も襲はず、洋燈の壺の油のみが著しく減つて居る。

人々は猶沈默を續けて居る。今一老婆の死を待ちつつあつて、其死の聲の、如何な幽かなのをも聞き洩らすまいとのやうに、期せずして人々の心は靜寂をつくつた。十の眼は絶えず、注ぐともなしに堆高い蒲團の上に注がれて居る。色は黄ばんで頰骨徒らに高く、目はとぢたれば其底光りも偲ばれぬ、半面暗い其顏の撮る人々の胸には、確かに哀愁の影が宿つた。けれども其死を悲しむのでは無い。といつてまた、老婆が從來の行爲――剛情な、苛酷な、其鋭い利刄に觸れた折々に、早く死ね！と願つて居た、其願が今叶はうとして居ても、それを喜ぶ心は更に起らうとはしなかつた。死んだ其後にてそ、今此枕邊に侍す人々は勿論老婆が過去の行爲を知る人々の多くは、何とはなしに重荷を下したやうな胸のすきを感ずるのであらうけれど。

並木續きの町端れに。馬競買塲の廣地を前に展開二間間口のさゝやかな店を出して棚には、蠟燭、塵紙、早附木の類を綺麗に並べ、柱には行田膏の看板見える瓦葺の低い家は、此地一體の木葉葺茅葺に對して、倉の家と町の人の稱つて居る、見かけによらぬ小金持てある。子のない此家の妻女は、養子の面倒を見れないので有名であつた。素生は會津藩の何とやらで、兎に角嚴然とした立居振舞に、會津訛りの拔けぬ言葉遣ひ切爐の灰に線目をたて〻、灰搔きはいつも横座なる我前に置くもの、隙さへあれば茶簞笥や戸棚の拭き掃除と、それも自分でなくては氣に合はぬ性分。初め連合ひの甥の十歲ばかりになるのを育て〻居たが、其子は年々に瘦せて來て、終には喰物盗んで喰べるやうになつたのを、人の善い夫は多くを言はないて、其儘實家に送り屆けた。今度は困窮つて居た自身の姪を連れて來て、それでも足掛二年、何かにつけて苦い顏を向けて居たが、姪のお豐は出されるまでもなく、隣家の菓子職人と逃げてしまつた。

其後、出る者、出される者、それに池に入水つて死んだ一人を交ぜて、取り替へた養子は七人と數へられた。いづれも初めの三月や半年は、珍らしさに、天から授かつた養子てゞもあるかのやうな待遇をするが、一年と起臥に馴れては、飽きやすい其性質は、顏見る

のも厭といふ程、嫌つてやまないのが常態であつた。しかも一面に潜んで居る苛酷な性質は、それを罵り、苛んで、飽くことを知らなかつた。子を育てあぐる親の苦心、優慮を知らぬ女は、彼れの大切なる財産を賭して、子とは恁んなものと、勝手に胸に鑄た型に、箝まる者を得やうとしたのである。得て其型に箝めやうとして、片手に捧げて居る財産の重みに比較べて、まづ其者のあまりに輕ろきに慊らなく、箝まらなかつた其者を投げ出すに躊躇しないのが、彼女の心の常態であつた。

　かくして老いた女は、世人の憎惡、良心の恐怖に反抗ついて、益々意固地な老婆となつたのである。

　喘息で、連合ひに死別れてから恰度三年目、倉の家のおみな婆は、罰が當つて彼樣になつたと、口さがなく言ひ傳へられた。それは或日俄に卒倒してから此方手足の自由を失つて、舌の廻りも思ふやうでなくなつたからで。其時はそろ〳〵今の養子にも飽いて來て、例の陰嶮な眼光を硎ぎかゝつて居たのであつたが、てれ幸ひと本家の計ひて、遮に無に母家と離れた隱居所に押し込められてしまつたのであつた。月日の立つに從つて、彼女が心外で〳〵堪らなかつた、憎い嫁の世話を逃れて、大小便の始末は自分で出來るやうになつたが、意固地は益々募つて、勝手から運ぶ煮物さへ箸もつけずに突つ返して居た。

　もう雪はあるまいと心をゆるして居た日和續きに、手の裏を返すやうな今日の寒さ、白いものさへ飛んで來た午後、甘酒の鍋さげて隱居所を訪づれた嫁が、雪隱の前に倒れて居た老母を見付け出してかくの騷ぎであるが、醫者の言を俟たず、集まつた人々は、いづれも死の期の近づいたのを見て取つたのであつた。

　夜警の拍子木音冴え渡つた夜半、ふと昏睡から覺めた老婆が、力なく眸を開いた時、人々の顏は一樣に其方に注がれた。膝進ませて養子の金次郎が何やら言ふた。續いて本家の主人も口を動かした。けれども老婆はたゞ、昵と人々の顏を眺めて居る。木札の未だ新らしい藥壜から、薄紅の水を滴らして、其コップを口の邊に嫁が手を運んだ時、老婆が口は堅く結ばれて、つと閉ぢた目尻から、白露ほろりと落ちて枕にしみた。

　我過去の行爲を反省みて、心から我死を哀悼む人の此世に一人もないのを思ひ知つた時、遺恨と、寂寥との思ひが、油然として老婆が胸を襲ふたのである。死の前には誰しも正直である。其涙を惡意に解して

今更に老婆が悪むべき性行を思ひ起す人は一人もなかつた。懺悔――の涙と、恐らく人々はさう思ふて固唾を飲んだのである。

絶え間ない水車の響が、一定の律をなして、哀音を調べて居る。

怨恨なく、憎悪なく、たゞたゞ巨大なる死の威の静寂に打たれて、未だ世のきづな断ち得ぬ犠牲者の前に人々の胸は首低れて居る。

夜は明け放れやうとしてまづ暁の鐘は鳴つた。

我意にはびこるだけ、はびこつて世にも人にも突き放された老婆が死の前に俛首て行く臨終の寂寞、少くも普通のお嬢様には書けない材料である。描寫も新式である、凹みがある、少し説明に傾いたかも知れないけれど、非難するほどでもない。假に此作を中央文壇に出して、名前を隠して置いても、名ある人の作と見られるであらう地方に置くのは惜しい才だ。(評)

『人』

春雨の家

上野　葉山　村子

四月一日

朝から雨は降て居るもの丶仰いで顔に當るか當らぬか解らない位。晝近くなつてから白く糸の様にそぼそぼと降る雨の姿が見え始めた。私は何するともなく平常の癖で、父の机に頬杖ついたまゝ細目に開た障子の隙間からじつと街を眺めて居る。

お彼岸の折おいでにならうと仰有つた伯父様が今日になつて來られた。それと間もなく來た父の友達杉田といふ五十近い男。次の間で三人が何か話て居られ。何の人もあまり饒舌らない方なので話が途切れる。すると鐵瓶の湯のたぎる音さへ聞とれる。雨はしとしと丶縁前の緋桃をたゝいて居るが手飼のカナリヤがひときは囀つたあとは何の音もない。静かな日だ。

這麼日は妙に血液の循環が鈍くなつたように至極平静で殆無意識のようになる。私は何時にない超然とした氣持になつて時計が二時を打たけれど見上て慥めるそれさえ得せぬ無念無想とでも言はうか。眼はたゞ向うの家の黒い板塀を傳ふ雨の線を辿て兎もすれば目先きに揺れる前髪の後毛を掻上げ様ともしなかつた。初てそ次の間の話も聞いたが今はたゞ何か話て居るなとばかり。それさへ何時か知らぬ位。

傘をさして行く者。裾を端折て走る女。しつとりとして婉かしいうちにも穏かな春雨の頃。早咲きの櫻は散り初める、空は曇つて居る。けれど。何處となく緑色

にうるむで居る。私は恍惚と眺めて居ると夢より夢に消えて行くやうな。

私は不圖這麼事を考へた。『私は今誰人かに憧憬て慕ひ迷うて居るのぢやあるまいか』。

昔の人は物の哀れを知る年頃と言た。虚榮心か何かに追ひ詰られて向ふばかり始終見て居た時代の過たのちは――時の力は爭はれない――自分の心に大なる間隙のあるのに氣がつくようになつた。そして折々四邊を見まはしては曠野の中に獨立つような寂寞思ひがするさてこう氣附て見るとその間隙を滿たす何物かを求めずには居られない。男なら名譽や事業によつて求めようけれど女の身の悲さ、諺にもある通り女は蔦のやうなもの、まとひつく者がなければ枯死して了う。私はある人の歸を待のて。

（入賞）玉川しげ



蛇の目傘をさした女が行く。高下駄の下男風の男がいせいよく走る。元祿時代の春雨の町は這麼でしたらう私は果敢ない夢を追ふやうな氣がして妙に哀愁をおぼえて目をあげた。たえまなくうちはえて降る雨にぼんやりして遠方の山の頂や家の屋根や何やかや見るもの皆霞むで居る。不圖表の通が賑やかになつた。それは學校が今退けたのである。一傘を二人でさして女の子がゆくと後から聲をかけた子がある二人は振りかへつて待つて居る。後の子は急で追ひつめた。そして三人の二つの傘はならむで行く私は今日が新入學の日だと思ひ出した。

私が村の尋常を卒業して須川の高等へ新入學の時よ。丁度今日のやうな春雨がしと〳〵と降るので傘をかたげて新芽のふく並木道をゆくに胸には朧氣ながら美しい希望の香を秘めて初て校門をくゞつた時の樂しい懐

ひ出！、歡樂の色とも見やう霧の行方に低う這うて。淡い紅の桃が學校の目標としつぼりぬれた野梅など手折つて一里の道を通ふたのももう十年一と昔、それもせめての思ひ出て。最う老嬢と言はれる身なのだと思ふと妙に哀愁が胸に湧いて胸の血が不平均に動き始める。こう兩手て頰をおさえて見ますると めつきり瘦せた頰の肉が今學校を退けて前を通つた處女の皮膚に似る由もない。容色を生命とする女の身てすもの。どうして悲まれずに居られやう。

あつさりとした四月の景色は眼の前に泣くやうに見える、心がらといひ條、淋しい思ひがします。

折から次の間て。

「良緣てしやう。どうてすなる事なら。」

杉田の聲だ。間もなく父の聲て、

「私にも左樣した異存もないてすが」氣乘のした聲だ

私は妙に胸が踊る。哀愁が胸を突く。妬ましい。

妹の安さんとても最う二十一になる。遠緣の西田といふは村ても豪家といはれる身分。昔ならとも角も今日の我が家とは提灯と釣り鐘なのにも係らず嫁にと申込まれたは幸福と言はうより僥倖だ、姉の身として祝ふ可きてすのに。と思ひかえす。

こう見やると陰雲が低う低う飛んでゆく。陰雲は私の心な

私の胸はその雲のやうに暗くなつた。

のです。

不圖、表が急に騷がしくなつた。私はやをら躰軀を差しのべて障子をふと目に開けて。見ると——卑賤藝人の一と群れなのて。凡四五人の男女が異樣の旅姿で編笠といふいてたちてしつぼりと雨に濕つて門に立つて居る。

これは、人の門每に樂器を鳴らして錢を貰ふのてあるうたひ出した流行唄の戀慕の一曲。その意味は痴漢をよろこばすやうな夢の譫言てそれを放縱な旋律と猥褻な歌詞て進めるのて——而しその卑賤藝人どもの饑餓からの熱心——さすが恥を思へば藝を賣る程の不幸。

そんなこんなが唄の表情に哀れをそえて俗謠の人を捕虜にする力は恐ろしいもので歎きつかれた胸は妙にうたれて現世の歡樂を慕ふ心がむら〳〵と湧く。

あゝ思ひ。わずらう。それが何の不思議てしやう。獨身の苦痛やら憂愁やら不知不識老いゆくと氣がついた時程。今更靑春の衰へを思ふた時程。身にとつて堪がたい事はないてすもの。

噫私ばかりてす。今日まて獨身て居るものは。同じ卒

業の友達でも林さんはお嫁に行かれる、宮野さんは婿を迎へられる、結婚すれば皆音信不通なのよ。
素と私の家は村での素封家で宮崎といへば界隈で知らぬ人はなかつた、祖父樣は顏色の黑い背の低い目の下に大きな皺のある滅多に口をきいたことのない人てあつた。堅いて通つた祖父は名は孫一と云て鍋の蓋へ何年何月何日需之、代價幾何とでも書兼ぬ位の人であつた宮崎家の家はこの祖父の代に至つて滅切富むだ。それは私の十四の頃だつた。月日は用捨なく流れて、一時界隈を驚かした土藏普請も荒打が濟て一ときまり着いた時忽然祖父は卒中で斃れた。
私の父のにはどうしたのか祖父の遺業を仕遂ることは出來なんだのか、藏は荒土のまゝ足場も取れずに二年すぎた。
其から間もなく父は繭商を初めた。年末になつて買込て置いた夥多の繭は下落の悲運におちいつた。逆流に抗するのは益おし流されるばかりてある。私は家庭の境遇から今でも獨身て居る。
『よく〳〵緣があるのですねえ。』
母の聲がして臺所が急に陽氣だつた。約たらしい。
『百(妹の名)さんはまだ歸つて來ないよ。學校は疾うに退けたのに。』
安さんは結婚のことに氣をとめぬのか或はさう裝て居るのか。こんなことを言て居る。伯父の聲で。
『安のにも幸福だし家內の爲にも……。』
幸福あゝ……幸福とはあまりに古い言葉てはあるまいか私はもうこの言の陳套なのに飽た。その幸福が來るなら十年も前に來る筈てすのに。
あゝ世の中はなぜ、這うなんてしよう、何故。獨身は片輪なんてしよう。何故人は獨身の者を輕蔑するのでしよう。
私は乳房を抱えて深い〳〵懊惱の淵におち入た。
私はやをら立つた。桃は花盛てこの室を美しく見せる窓近く咲いた花の息は私の顏に匂ひかゝる。目をほそくして嗅いて見て私はぐつたりした。
獨身の苦痛を忘れたさの熱心から烈しい情の白雨を浴やうとする心。歎つかれた枯草のやうな女の心のやるせなさから男の胸に日光をさがす心に私は或る人の歸りを待つ心がむら〳〵と湧く。けれど。考へて見ると果敢夢を逐ふのです。私の待人は私の心など知つては居ないてしやうもの。
昔の友達は何れも双蝶の睦じさに獨仲間はずれ。いよ

に言はれぬ女の身の悲さから冷たい床に夜の涙をながしたのは幾度でしやう。

あゝ朽ちたくない、いつまでも〳〵活き〳〵して居たい。その心から戀を得たいとあせるものゝ。得られぬ懊惱につかれて氣づいて見ると室はもう暗い夜の領にいらうとして居る。雨はまだ歇まぬ。

自個の告白、現實の苦痛、凡て新代の作家が向つて行く處に向うとする、それで文章がうまいのだから鳥渡欺はされる、仔細に點檢するとまだ〳〵不備の個所はあるが、全體に渉つて新しい香のすることは爭はれない事實である、自意識ある年頃の女が、確つかり立ち場を極めやうとしては、情の波に漂はされる、超然としてゐても現代の歡樂には迷はされる、其邊の心理の苦悶は或る度まで表はれてゐる。（評）

「秀逸」

疑惑

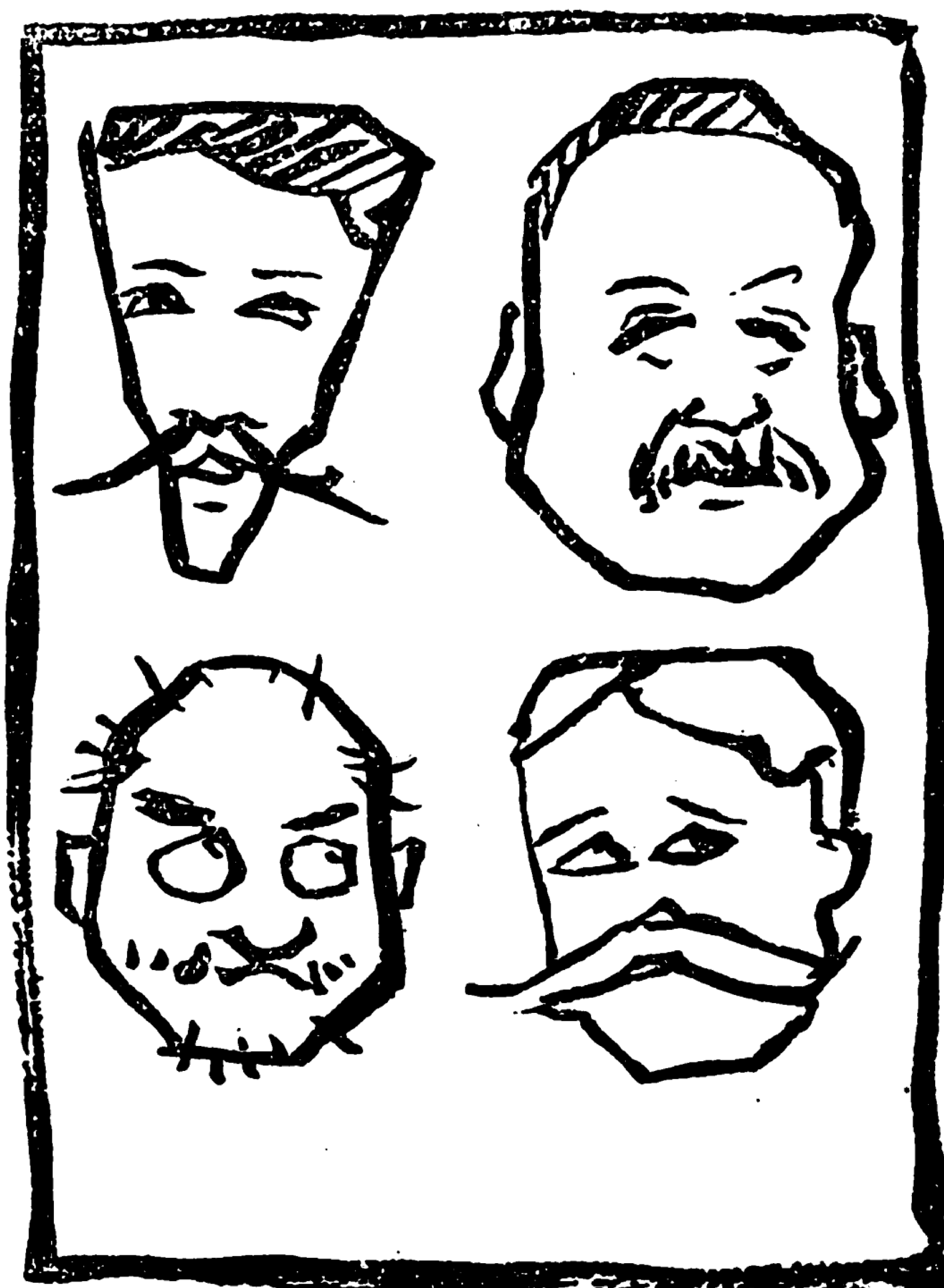
土佐　深瀨ます子

それ履物、それ毛布と一頻騷いで芝居見物に母と伯母と從妹の千代ちやんに女中、夫等が出て行た跡は家の中が俄に靜寂と成た。由美子は寢足りない疲れた身を机に靠せて目を塞ぎ靜な呼吸をして居るといふ許で惘然と時の經つのをも知らなかつた。

由美子には父が無い、兄弟がない、有るは只一人の母で、母が由美子を愛する事に於ては決して薄いといふのでは無いけれど、由美子は母に對してつひぞ打解けた事がない。今でこそ陸軍中佐の未亡人として取り澄ましては居るが母の柳子の元を洗ふと大坂の豆腐屋の娘、松島の女郎屋で何とかと名告つて左褄取つた身それを聞き知つて居る故由美子は母の不潔白な僞の多い然し快活な振舞を何所迄も憎み嫌つて居る。由美子が女學校卒業當時、大勢お友達の遊びに來た時、古い寫眞を持ち出して見せた事が有つたが、多くの寫眞の中に、誰とも名の知れぬ藝者のが一枚有つた。一人の友が夫れを取つて、「由美さんに一寸似て居るわ。」といつた。夫れを聞た由美子は母の素性を知た人の當擦だらうと先に廻りはつと顏を赤くして、「私の母かも知れない。」と心にも無い我と我が胸を刺す言葉を吐いた事さへ有つた。由美子の家は不思議と代々後家が續くので今の伯母も矢張後家、其前お祖母樣の有つた頃は三人後家が揃つて居た。思へば何事も昔である。父が病で死んでから不思議と門の松が枯れはじめた。徐々と色が變つて葉が全然赤くなつた頃、由美子の母は髮を切つて黄八丈の着物に黒縮緬のお被布着る樣になつたが、丁度其頃由美子は女學校を卒業して誰も擢る上京熱に浮かされて居た。只一人の子では有り母は絕對

に不賛成いつて樣々說き諭して引止め結婚問題に取り懸らうとしたが、心此所に有らぬ由美子がどうして服する事が出來やう、自分の願を通す事の出來ないのを知てより何時か鬱々と暗い部屋に引籠り明ても暮ても袖の乾く日が無かつた。愍なると母も遂に思ひ負けて詮方なく積年の宿望を縱し一二年の間上京さすといふ事にした。聞くと由美子は嬉しく取りあへず上京して始は或音樂院に入て居たが、男女混淆の學校の事とて風規が亂れて居るから兎も角轉校するといふ手紙を母に寄せて間もなく小石川の奥の尼寺の樣な女學校へ轉つた。當初は追に樂しく一意學業を勉勵して居るものゝ、いつか精神の向ふ所が變つて日曜の課外口演など休んで熱心に教會へ通ふ身となり、日暮は賑ふ鬼ごつこ椅子取りなどの騷を避けて寄宿舍の裏の人は怖しがつて行かない林の中で一人細い淋しい聲を擧げて讃美歌歌つて居た夫れも暫時の間の事春期試驗の前から甚い神經衰弱に罹つて打ち續く不眠症に苦んだ。校醫が歸鄕して靜養せよと勸めて罷まぬ故止むを得ず學校を出、江の島鎌倉の邊に一年許過して見たが頑固な病に變りは見えず、研學の興味も失ひ根も盡きてしまつて何となく母懷しさに三年振飄然と歸つて來たのはつひ二週間許前の事で有つた。只何事も夢。歸つて見ると先づ思つたよりも家の周圍の荒廢て居るのが目につゐた。従妹の千代子丈は驚く程大人びたが、伯母

とよ子（寛入）



は前歯が一つ二つ缺けた。初めて母を見る時は嘸お年を取られると思つたが二三日見て居ると元の通りになつて相變らず快活に能く笑ひ、能く談つて居る。其中に一つ思ひ懸け無かつた事がある。見る事もない五十許の下男ともつかず、番頭ともつかぬ粗末な風姿の男がさも名染らしくお世辭いつて由美子を迎へたそれてあれは誰ですと母に聞たら福田といつて元は士族てよく媒介などする男であるが、市役所への要を頼んだが元て此頃外廻りの小面倒な要事は皆あれに任せてあるとの事、お前の縁談もあれに頼んで有るが誠に交際の廣い男だから、と附け加へる。其後下女の話によるとあの人は來れば一月も逗留して行くが其都度お總菜の品定などいつて困る。あの衣服の不潔さ、奥へのお世辭のよさ、口て口過ぎするとはあの人の事だらう、厭な男だといふ。

三年目に歸つた由美子は、海岸に居た故か甚く色が蒼黑く成つて頰が憔悴けて居たが、油氣のない束髮て裾短かな着物を片襷下げて着た野暮な姿は昔と少しも變らない、久し振て我が子に會つた母は只うれしくてちやほやと持成たけれど、由美子は却て厭はしげにして三年間の都の消息を何一つ母に漏しもしない。歸つて後病氣といつても格別晝間寢るのではないけれど昔から裁縫など女の手藝は嫌て有たが今も矢張しない。何にしろ活氣のない風で客殿の隅の四疊半に籠つたきり、母の居る母屋へも食事の時の他寄り付かず、伯母の居る新宅の方へも行かない。多量にズルホナールを用ひる故か晝も眠む相て二週間の間物いつた日とては少い程て有た。都に居た三年の間に何か由美子の心を甚く痛めさせた秘密でも有つただらうと母は夫程に推して深くは問はず、兎も角も氣の浮き立つ樣にとさてこそ芝居總見物をいひ出して福田を走らし札を買はせたけれど由美子は厭だといつて行かない。

由美子は皆が出て行た跡半夢心地て兩手を以て蟀谷を抑へ机に腕を憑せたまゝ稍暫時凝然として居たが、何所かてちやら〳〵と細やかな音のするのを聞きつけた。すると、ふと目を開けて廊下へ出た。明けた障子の音に驚いてか横樋の中に遊んで居た雀が二羽ぶうと飛んで庭の梅擬に止つて此方を見て居る。冬の日は縁一杯に當つて暖い。由美子は蒼い額を柱の角にこつこつとうちつけ乍らふと昔の事を思ひ出した。

それは、まだ十七の、丁度この樣な冬の暖い日脊を暖め乍らこの縁て論語の復習をして居て思ひ浮んだ事

てある。自分は藝者の子だ。藝者の子だ。いつそ母への面當に生涯男に合はずに終つたらどうだらうと。夫はほんの十七の子供心に極輕く思つた迄の事で有つたが其思は年と共に根ざしを強く〳〵して遂に今日に至つたのである――あの福田に緣の世話を賴む――誰が藝者の子を貰ふだらう――萬一自分を妻にといふ人があつたにしても夫は碌なものではない――噫孤獨――此の寂寥に悶え死ぬのは自分である。この心の惱みに母は露程の同情がなく、三つ兒を騙す樣な事をいつて芝居見物を勸める。芝居で癒る樣な頭なら深夜聖書を繙いて悶える事はない。噫何故自分は鎌倉の旅宿で母を戀ひて夢になぞ見たらう。あの切髮が氣に叶はぬ。福田は何だ。後家の身で。

由美子は其所迄思ひ至つた時、ふと頭を上げて或物を見むとする樣、俄に四邊を見廻し足音忍ばせ廊下傳ひに母屋の方へ行き母の部屋の前に立つた。婆やは外てお鍋を磨いて居る樣子。怖しく胸躍らせ乍らそつと襖を開けた。クと入ると手簞笥の上に置時計の木兎がさも生きて居る物の樣にくる〳〵と目を動かして居る床には御先祖樣と八幡樣の御軸が掛つて其下へ、もろぶたにお餅や輪注連が上げてある。側を見ると、脱ぎ代へた母の平常着が衣紋竹へ少し曲がめて掛けてある。其下には、くる〳〵卷いた狹帶と足袋とが片寄せてあつて、押入の襖が二寸許開きかゝつて居る。開けて見ると上の棚には更紗の夜具が積まれて下に針箱や鏡臺や藥の瓶や何かしら細い瓶が、ごちや〳〵と並んで居る。鏡臺の引出を開けると艶かしい母の香がぷんと鼻を打つた。前刷毛や紅や少女肌や肉白粉や女の色を作るあらゆるものが藏つて有る。由美子は夫等を見て今更の樣に苦々しく眉を寄せた。

其時玄關の敷石を八つ折の草履下駄穿いて入つて來る人の有る氣勢、由美子ははつと驚き周章てゝ母の部屋を出、客間の方へ來樣とした時廊下の飛渡で邂逅したのは福田であつた。

「へえどうも今日はお暖で御座います。」

兩手を足首迄下げて媚びる樣な、お辭宜をする。

「お孃樣お芝居へはお出懸になりませんでしたか、ああ左樣樣で――お頭が惡けませんで――ちとから御運動にてもお出になりますと又お氣が變りまして善御座いますで御座いませうが、餘り學にお凝りになりますと心の疲れが參りますてへ。」

善加減に聞いて居ると結らぬ事を並べて大學を卒業

前に成て死だ人の事や、昔の友て良縁を得た人の上など謂つて暗に諭す樣な口振、稍々話の尾の切れかゝつたのを見て由美子は自分の部屋へ逃げ歸つたが、又更に厭な男だと思つた。

長い間日當りに立たせられた爲頰が熱り、頭がぐらぐらして堪へられない。少し頭を靜める樣に北口の障子を開けて縁に出、手摺に靠れて川向の街を見た。床屋に並ぶ米屋瀨戸物屋下駄屋駄菓子屋いづれも低い家て穢い。荷車や俥が目まぐるしく通つて堤の上の並松の蔭には飴屋が子供を集めてゐる。川へ下りる石段から續けて水の中へ小い棧橋が出來て逞しい中仕らがヨイショキタ、ヨイショキタと拍子取つて大きく包いた荷物を街へ運び上げて居る。濁水の面に浮ぶ芥が暫時も絕間なく上つたり下つたりする屋形や荷船やボートなどの爲に流れ樣としては漂はされ流れ樣としては漂はされして居る。夫等を見て居たが何を見ても不快て強く興奮した神經は暫時も身を凝然させて置かぬ。

由美子は內へ入て隣の六疊を拔け客間に出た。床に更紗の袋被せた琴が立て掛てある。それを見ると「黑髮のむすぼゝれたる」と毋に手を取られて厭がるものを無理に彈かせられた昔を思ふ。中床には弄具の人形や何か一杯並べて有つて黑い木格を掛けた額、ちよぼ口した御祖母樣の面影と並んで、陸軍中佐の服を召した父の肖像の額が立てかけてある。夫を見ると由美子は悲慘な父の最後を思ひ出さずには居られない。何故這麽悲しい記臆を呼び起すものなど出して置くのだらう。由美子は近寄つて見て居たが、

「私は眞に此の父の子だらうか？」

と新しい疑問を起した。

「何が知れたものか藝者の子だもの。」

現在の母を疑ひ父を疑ふ私は何だらう。何といふのだらう。或はあの福田が自分の眞實の父ではなからうか？

由美子は戰慄した。

夫れてあのやうに出入して家內同樣にするのではなからうか。あゝ之れは屹度硏究しなければならない問題だ。

由美子はそれから夫と新しい疑ひを作つて頭は百の百足の這ひ廻る樣、千斤の鉛て壓せられる樣に覺え部屋部屋をぐる〱廻り身悶えして惱んだ。

夕方芝居見物の一行は千代子の金切聲を先に立てゝ歸り、はた〱と騷いだけれど由美子は出迎へたかつ

た。婆やは柳子に向ひ心配相に、

「お孃樣は、どう遊したてせう、臺所お探しになつて味淋をお茶碗へなみ／＼注いて召し上りました。私驚いてしまひましたそれからお寐つて居らつしやいます甚くお惡いのてはないてせうか。」

といつた。火鉢に火を入れて持ち出して來た福田が側から、

「お臺前廊下てお目に懸つた時は格別お惡い樣にもお見上げしませんてしたがはて。」

といふと柳子は、

「何有、夜寐られない癖だから靜かな間に寐たらう。」

兎も角見て遣りませうといひ乍ら由美子の部屋へ行つた。

「由美どうしたのだえ、氣分が惡いの？」

「…………」

「頭冷してあげやうか、御飯も出來てるんだからねえ。」

加藤つたへ（入賞）



そつと由美子の額を抑へて、

「今日は面白かつたよ、お前も行けば善かつたと思つた。何いつても東京の芝居は違ふよ、千代ちやんは明日も行くといつてるから一緒に行つて御覽。」

「お母さん後生だから靜にして居て下さい。」

「あいよ、けどお前甚く惡かないの、お醫者を呼ばふか。」

「餘計な事です。」

「だつてお前、私も氣に懸るぢやないか。」

「私どうならうと氣に懸けないて宜いんてす。後生だから彼方行つて下さい。」

由美子は厭はしげに寐返りして搔卷引被らうとゆすり上げる。

母は手の付け樣もなく手傳つて蒲團を引上げ惘然と見て居ると、由美子は激した聲て、

「早くゐらつしやいといへば。」

「お前何か氣に障つた事ても有るの？」

猶執念く問からうとすると由美子は突拍子にわつと泣き子供の樣に聲を擧げて喚び入つた。甚く逆上して居るからそつとして置くより他仕樣がないと思ひ母は心殘して部屋を出たが遂に由美子の心を悟る事は出來なかつた。

平素の作に比べて一段と見榮えがする、少しの事を書くにも用意があつて、やりはなしてない、つゝまやかに書いてある、母の素性を知つて、母を嫌ふ反抗心のむら〳〵と起る處が主で、それも女性だけに腹の中で思つてゐても外面へ現はさない苦衷、飽くまで自然である、難を言へば少し筆が伸びすぎるのと、今一段、新空氣に觸れて欲しい事である、要するに四等賞があつたら正しく入賞すべきものであつた。(評)

下駄の音

信濃　平林きよ子

藤江さんの同胞は悉皆て四人、兄が一人に妹が二人、それに兩親を加へて六人家内てある。富者と云ふ程ても無いが、俗に云ふ貧乏風のいゝ方て、相應に樂な生計てある。兄は五年前村立の高等小學校を卒業して現今は父と共に家業を勉めて居る。父は何年にも兒童に苦い顏を見せた事のない程て、兄の方も至つて友情に富んだ人てある、然るに不幸にも母親は女に稀な亂暴者て、殊に藤江さんを虐待することと繼子よりも酷かつた。兄や父が冬春寒い季節だけ補習科へ出して、女子の技藝の一般を覺えさせたいと云ふのも同意せず、勝手の事を爲せるの竹細工を手傳はせるのと、一人て頑張つて居たが、相談の果此頃から村の學校へ通ふ事と成つた。それが爲母は何だ彼だと、益々藤江さんをいぢめ出した。藤江さんは肌を刺すやうな寒風の朝でも雪のちら〳〵降る夕も、日曬の外は乾度表の道を獨で萎々通行る、集め毛絲で編いた手袋の桃色の指先ばかりを袖口から顯して、乳房のあたりへ風呂敷包を抱いて居る、今年正月から着下した、家織り棒縞の羽織を長く破け、色褪せた蝦茶袴は三年も穿いたやうであるが短かくもない、袂口は前へ向いたり後へ向いたりて時々中から物尺が落るばかりに覗きてゝゐることもある、肩掛は首の周圍にあると云ふだけて、兩の耳朶は絶えず氷のやうな空氣を裂いて紅くなつてゐる。年齡は十六歳だと云ふが、見遣りは未だ十二三の少女、何處ともなく無邪氣である。顏には血の氣が少しもなくて何時ても蒼白い、目は鈴眼でも深く落ち凹んで、眸光が濕んで居る、口唇や頰の邊寒げに見受けられる、時には髮を結ふこともあるが多くは蓬々させてゐる、而して道を歩くにも人と話すにも。薄い眉を顰めて何事か思ひ惑ふ樣子があり〳〵と見える、それに鳥渡て

急げば胸が苦しくなつて、人の手前でもせい／＼と太息を吐く癖てあるから、自然と友達を避けて、獨身て遲々後から行くやうにもなる。私の宅の前を通り拔ける間でさへてまどれて、今にも行き止るかと思ふ如うな足音が、寂しい朝夕の空氣を傳つて門から入つて私の室へ來る。此頃幾日も空はどんより曇りつきりて何も降らず、道路は晝間の間少し軟かになるが、朝は遲くまで夕方は早くからかん／＼に凍るので、藤江さんの下駄の音は手に取るやうに聞える。生來涙脆い私は、其の音響が一つ／＼胸の底まで響きわたつて、種種と藤江さんの事情を連想せずには居られない。

「自分のお肚から產れた娘が不具であり病身であつたならば、自分の咎だと思つて猶更可憐がつてやらねばならぬのに、弱いからとて病身だとて我が子を叱つたりいぢめたりする理が無い、不具に產れた子を憐れまなんて、不具を產んだ親が他に責る親――藤江さんの母――の心は何と思ふんだらう？それも普通一般の小言位ならだが、何かの果には『汝見たいな不具者は死んで了へ』と云つて、弱い藤江さんを叩くと云ふ事てある、すると藤江さんは泣き伏したまゝ『死にたいけれども死ねないて困る』と輕く反抗ずるさうだ、尋常の事て奈何して若い少女の口から這麼淺ましい言葉が出よう、母が母なら藤江さんの云ひ草も當然である、譬へ自分は學校の途上で行き倒れるからとて、可恐母の傍に居て叱られながら手傳を爲ようなどゝは希望はないだらう……誰でも病氣て惱んで居る時、親や兄弟の口からでる慰藉め詞ほど嬉しく張合になる物はないのに、那麼言を絕へず云はれたならば、藤江さんは一生懊惱病て頭も胸も張り裂けるやうに苦しむだらう、そして遠からぬ將來に於て、藤江さんの念ひ入つた儚い希望が眞實に達しはしないだらうか？あゝ哀れつぽいあの下駄の音！。

或夕方私は村の湯屋へ行つて歸る時、不圖藤江さんの家を見ると、急に藤江さんの事が胸に浮んだので、其の方へ迂回した。餘り長浴したてもないのに、短かい冬の日は全く暮れて、一しきり人家の軒や祠殿の杜に喧しかつた雀の聲も、ぴつたりと止んで了つた。そして並木も家も山も悉皆黑くなつて、寂しく立ちならんてゐる中に、たゞ土藏の白壁と川の水、それに私の肩掛や足袋や手拭ばかり仄り白く見える。「例ならば道祖神の立石から斜に東へ折れて、畦路を自宅へ蓦直に小走るのを」と自分ながら怪しく感じた。藤江さんの住

宅は立石の前を眞南に行つた道の東側で、本家は五間間口の茅葺て、周圍には藁屋、物置、便所等西と北に家の方へ向いで立つて居る、それも同じく茅葺、南面には家に不相應な廣い庭がある、不規則に植ゑ込んだ松杉檜の常盤木と隅の方に楓樹が一本、その他地上一面にはいびやくが浪型に匍つて居て、何年にも人の手を加へた事が無いらしいけれども、自然と其間に趣きが籠つて人の心を惹き付ける樣な處がある。そして此の籠と茂つた松の梢の奥や、風も通さぬ程葉ばかりの枝を駢交して幹を包む棒杉の中には、毎晩幾對かの飢えた雀が宿をとるのである。こゝも夕餉の用意に始まつたのか、表の障子が二本パッと明るくなつて、髮毛を蓬々して坐つてゐる、母らしい人の姿が障子の番ひ目に映つた、と思ふと、軒端に積んである薪や糠俵の一面だけが暗の中にその影を描き出した、そして弱々しい餘光が破れ垣を洩れて、道の片端に彳んで居た私の身邊にまで迷つて來た、私は家の外を見たばかりては何だか、物足らぬやうに思はれたので、罪とは知りながら、ならうなら藤江さんの家庭をも候ひたくて堪らなかつた、私は一心に障子を透すやうに見詰めて目を掀てた、あの可憐さうな影法師は何と云ふだらう？

若し藤江さんが母の氣に叶らぬ事でもしたらば、那の火箸持つ手が奈何働くだらうと思つて。

『藤つてや何よ徐々して居やがるこんだか、水なら一荷ばか汲んで來るつて、手間の取れうるも程がある』と、靜かな家内から突然荒々しく母の聲、旋てパッと一層障子が白けて、影法師がます〱黑く、幾筋も一緒に垂れた亂れ髮が、障子の骨と骨とへ纏いて居る處まで明瞭した。

『あんな不具者ぢや仕樣がねエ、十六にもなりやがつて未だに水一荷と擔げず、薪木一束持てりやしね、那麼ことぢや幾歳になつたつて嫁になんか行けりやしねい、しやら煩せいとも何とも、又何處かそこらで突轉んでゐやがるに違へなエ、お園いつて見て來いッ』と垂れた毛をさつと波たゝせて側へ向いた。

「姉さん來たわ、あれ〱又兄が……」と云ひ掛けたばかりて言葉は途切れて了つた。

「金治ッてや又あんな者に汲んで來てやつたゞか」と云ひ棄てゝ、ぐつと立つたなり上り框の方へ行つたらしい、焚火は盛に燃えて、障子は萬燈のやうに明るくなつた。

「止きましよッてたら、そんねに叱つたつてどうーる

物だい、手を出さなんても口て云や解るに」と兄の慄へた聲。

「あれッ！、阿母様ッ」と消魂しく叫んてお園さんはわつと泣き出す、其刹那私も思はず慄然とした。

「こんな娘子嬌えかしや習慣になる、汝幾つだと思つて居やがる、汝と仝年でも隣家の時さ達や去年の師走に立派に嫁入したわ、そり、よく羞かしくもなくて擔いてやなん貰へるわッ。」泣きながらどん／＼板の間を踏む音、裂くような母の叱り聲、そして眼に見えぬ藤江さんの悲しさうな面影とが一時に私の胸へ突き込んで來て動悸が激しくなつた。

「そりや先前も云つたけれども、阿父様の云ふ通り時江さ見たような人は何處の村にも澤山ねエ人だし、家の藤やなんかは至つておぼこの方だて、いくら阿母様が急いたつて今の處ぢや三年かゝつても冊きやされね今夜だつて助てやらなんて置かすと思つたが、暗くなつて足根あ明らねエしたもんだて……」兄さんが妹の弱い事や、自分が水を汲んでやつた事も心から、母に詫して居た。

（入賞）清子



「遅くなつたつて誰の咎でもありやしね、學校から歸宅つたら直ぐやりやいゝに、歸宅と直ぐ父さに何か話したり、しん戯事して居やがつた故だ汝一躰今日父さに何によ話しやがつた……暗くなつたもねエもんだ。」

「そんな處にほ泣いてけつからなんて、さつさと水あけて飯よ煮きやがれッ」と唾を吐きつけるやうに云つて爐縁へ坐つた、其鬼神にも似てゐるらしい姿を見ると、烈火の如うに狂ふた心中が、悉皆障子の面へ洒されてある様、そして看て居る私の眼光も異様に輝いたに相違ない。水をあける音がド……と人を制する如く、後は少

時蕭然とした、時計の振子のやうに一定の時を置いて辛而聞えるのは、妹の咽び泣きとも姉のとも判然しないが、障子を暗くして人が通つたと思ふと、忽ちカチヤン〳〵と釜の音がする、兄さんは障子際の炬燵へでも坐つたらしい。

「阿父さまは何處へ行つたい」兄さんの優しい調子、

「汝にせ默つて行くもの俺知らすかエ」煩さげに毋の聲。

「それぢや藤江の裁縫道具でも買い行つたづら」と獨語のやうに云ふ。

「衣服位こしれるつて道具が入るもんか、あんな者學校い行つたつて親や兄弟の恥辱さらしだ、今日もお園から聞きや、生徒の教室を掃除するに机一脚運べ得なんて、雜巾ばか掛けて居るつて云ふぞ、そうしちや登校歸校だつて他人の三層倍もかゝつて來るは、些だつて家事の手傳なんか爲たもんぢやねエ、それよりや家に置て竹細工でもちつとらんづゝ習あした方が益だ。」と喋る間に時々いらだつた語調が混ざる。

「そりや骨が折れて通學ことが厭だと云へは仕方がねエが、自分から行きたいと云ふて遣りもするし、要用てかなあねエ道具は買つてやるだが。」

「取れる錢によ取らなんて、あんな者に金かけたつて後で役に立つもんだか何だか知れりやしねエ……勝手にしやがれッ。」

障子の一方に兄の影らしい物が寫つてだん〳〵大きくなると、すつと一枚開けて鴨居の上に佇んだ、慥に兄である、家内の光明は逃るやうに拔け出て庭や垣を輝らした、私はびくとして思はず身を細めたが、向ふからは見られぬと悟つて、猶も垣の穴から光りの射す方を見戍つた。兄は仕事服の筒袖で男らしく涙を拂つて雨戸を障子に代へると、家内も家外も幕を引いた如うに物の影を失せた。

私は始めて自分に立ち返つた、暫時鎖ち籠められた胸間が、急に開いた樣な氣持がして見ると、いつの間にかそこらは眞暗になつて、其中から寒氣が烈く頰や爪頭を襲つてくる、堅り搾つて肩へ掛けたタウルは、糊したやうにパンとして、下駄の齒が地面へ吸い付いて居た、星が出たかと思つて空を見ると矢張眞暗で、何處からか天とも境界が無い、私が歩く度に星のやうな燈火が、人家や並木の間からちらり〳〵と見えつ隱れつして、淋しい私を見舞ふ樣に、私は夜道の怖い事も藤江さんを念ふ心——造花用の道具でも優しい阿父さ

んに請つたらう、そして阿父さんは直ぐ町へ買ひに行つたのかしらん、それらの事から良人の留守に藤江さんを叱つたのだらう、藤江さんの母は良人にも不和がましいことを云ふのだらう、それて先前も酷く氣が色色と採めて何でも無い事に打擲したんだらう、阿父さんが歸つたら嘸藤江さんは嬉しいだらう——に打ち消されて平氣て家路を辿つた。

冷たさうに流るゝ水の音と私は下駄がいつか調子を合奏せてゐた、そして下駄の單調な曲ばかりが、遠く遠く幽かに………………。

藤江さんの悲慘な一家の樣子が、細心な筆で痒い處に手のとゞくやうに描かれてある、藤江も、母も、兄も其人物が活躍してゐる、人物が活躍してゐる許りでなく、場所が活躍してゐる、如何にも立聞してゐるやうに表はれてゐる、此才能恐らく一寸得難いものてあらう。（評）

春の怨

本郷箏子

一

「貴女にだけお話するわ。」

光さんは、私の袖を取る樣に橫町に曲つた。

如月下旬、冬も名殘と寒い晚、十日餘りの月冴えて、大觀音裏の片側町、軒の點燈光淡く、とある長屋から赤児の泣音弱々と、母が乳房を尋ぬるのであらう。

二人は深く肩掛を引寄せた時、光さんは、

「私、結婚爲樣と思つて………………」

何故か私は、無限の寂寥が迫つて、「………………」と光さんの顏を見た。

「餘り突然なので、私も夢の樣なのよ。」と云ひ淀みながら、細い指て、肩掛の房を弄んて、夜眼ながら、顏をほんのり染めたらしい。

「結構だわ、奈何せ女は嫁く者てすもの。」

吾ながら冷かな調子だ、而して自然と眼が濕んて宛も頭を押へ引込まれる如き心細さ、敢て嫉むのては無いが、餘り嬉しくもない。

「それて、破入る處は？」

「商人なの………」

「へえ、貴女には似合ないわね。」

と、輕く笑ふ、笑はれて鳥渡躊躇ひ、

「だつて、妙な義理て………」

光さんは、恰も惡事ても爲た樣に小さくなつて居る。

「けれど貴女！文學を捨ては爲ないてせうね。」

眞から私は光さんに念を押した。

光さんも私も、某傳習所て、和文を學び、殊に光さん

は、白萩と號して、善く筆に親しんで居た。

『那麽心算は、無いけれど……』と考へる手を私はぐつと取つて、『矢張り筆の手で、球算を彈く方なの。』

『あら』と鈴の樣な眼を見張つて、

『貴女は、人が惡るいのねえ。』

颯と風は、道傍の榎を搖つて、凍れる雲むら〳〵と動いた。三つ角の寺の門前に屋臺店、老爺が煽ぐ團扇の風、ぱち〳〵と火花が立つて、

『鍋燒饂飩……』

私は無言て、しよんぼりと影法師を踏んで行く。

二

私は何も、獨身を唱ふるのでは無い、咲き初めた花の女の片端、貰ふ、嫁にと、話は有れど、或る者の惡計に、家も富をも失ひ、剩へ戀をも破られ、泣きに泣いた曉は、人の情に疑の雲が挾まれ、此方から貰つてと思ふ人は無く、嬉しくも無く、可笑しくも無く、只一人、廣い浮世の嵐に、花散る里の春の怨みを慰むは、文學ばかり、例へ玲瓏たる詩は成らぬ未熟ながらも、好きに好き、殊に光さんとは同鄕の好もあり、同じ文學に趣味を置く、親しい〳〵友達である。

私は人の好厭が甚だしいが、一度信ずると、爲に火水も厭はぬと云ふ片意地て。此日頃世界に、光さん程好きな人は無い、可笑しいけれど、私の戀人は光さんてある。それがむざ〳〵結婚すると聞いた時は、手中の玉を取られた思ひ、と云つて決して光さんを、責めるのてないの、萬一責むるとなれば、私が無理だ、噫、友の良緣を嘉すべきを、奈何して私は、斯う悲しからう。何！妻と成つても、交際が絕えるとも限らず、互に千代迄溫い友情を、交す事が出來る――が然し、何だかそれが心元ない、奈何しても光さんと是限り、永い別離に成つて了ふ樣な。

彼の夜、光さんに、文學を捨てはしないか、と問ふた返事の煮切らないのには、實際泣きたかつた、是迄も捨てたなら此後、なつかしい、筆の跡さへ見る由なく波間漂ふ浮草の、濡るゝ袂を分けて泣く人無き私は、奈何しやう、過ぐる秋、宗林寺の眞萩の露にしみ〴〵と語つた折、光さんが私の言葉を打消しつゝ獨身生活を主張して、共に文學に獻身しやうと誓つた彼の時こそ、一點の濁りも無き誠心て、花の蔭に手を組んて、雁の聲も夕日の影も、面白く前途の幸を祝ふたのも春の夢と醒めて、今はよし、光さんの心は奈何あらうつとも、人の妻たる以上は、既う彼樣な、無我の境に現

なく、花に憧る丶胡蝶にも似た、那麽折は千年も萬年も再び返る術は無い、併し私は、友の行末を思つて、利をも慾をも一切絶てど、唯、光さんが文の道に其水莖の跡を消さんは、中々に盡せぬ口惜さてある。

三

殊の外春めいた日、光さん——花岡光さんの宿を訪ふた、千駄木の某別莊の梅林つゞきのだら〳〵坂の下、新築の仕舞屋の二階を借りて、自炊生活。

東風に梅が香通ひつ、悠然と日は格子戸に輝いた。

案内を乞へば、可愛らしい足音、此家の娘の花ちやんが、私を見て莞爾。

「光子さん被入つて？」

「居ないの。」

「え？」

「光さんね、お嫁に行くんだつて、お買ひ物ほ丶」

と笑つて「お上んなさいな」八才にはませて、下髮の赤いリボンがひら〳〵、面を私の袖に當て丶甘へるのをしほに、二階に上り、主無き、メリンスの座蒲團に少し隔たつて座つた。主の内儀さんが、お茶を持つて來る。

「餘程長いてせうか。」と尋ねると、

「否、既うお歸りてすよ、てもね貴女、光子さんも、近々にお目出度いお話な相て。」と内儀さんは、花ちやんのリボンを直しながら云ふ。

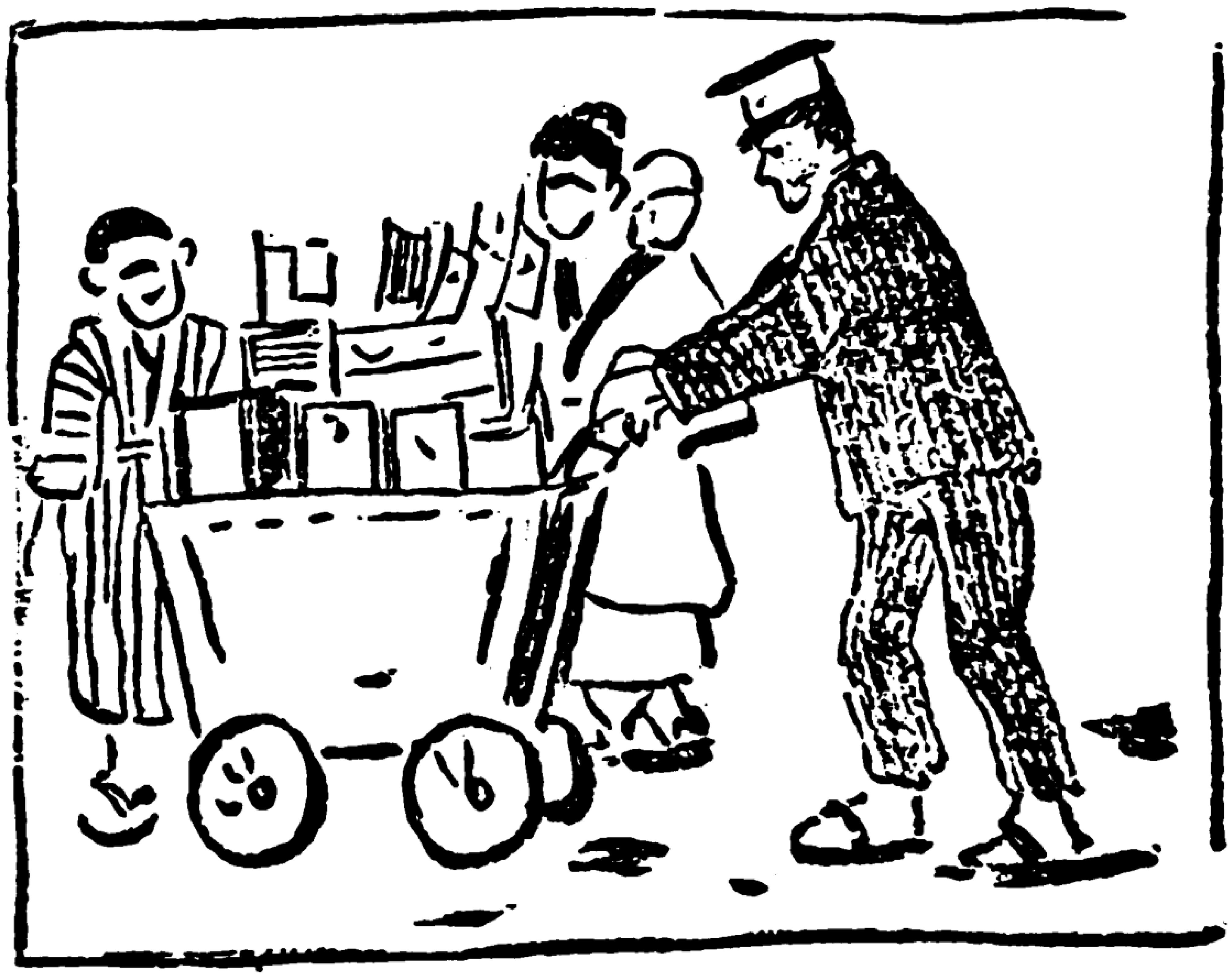
「あの、商人だ相ですね。」

「はい。」と一膝進ませ、「茅場町の仲買店だ相て、それがね貴女、お芝居の樣な話なんてすよ。」

「私見てよ、あのう、隨分ハイカラなの……」

「默つてお出てなさい。」と花ちやんの差し出口を押へ、「たしか、八日てしたよ、淺草の公園に此の子を連れて行きなすつた、雪模樣の泣き出し相なお天氣ても、暇が無いからつてね、彼の女婢としたお身體に、小紋に重ねた滸紫のお羽織、あつさりと

（入賞）　佐野良子



爲たお化粧てね束髮に白薔薇の造花が什麼に善くお似合てしたらう。」

「光さんは柔形だし、私達の中ても美人だつて評判するのてすよ。」

内儀さんは、さも意を得た樣に點頭いて、

「それてまあ、さん〳〵此子を遊ばして下さつてからあの池の處へ來た相てす。」

「而したらね、緋鯉が澤山麩を食べてよ。」と花ちやんが私を見る、莞爾して點頭くと内儀さんが又、

「ねえ貴女、すると雪がちら〳〵降り出したんてす、持つのは少さな洋傘一つ、お困りなすつて、電車迄と急いだ時、失敬だがお這入なさい、つて蛇の目の傘を差し掛けて與れたのが、此度の旦那樣に成る方てす。」

内儀さんの話ては、詰り其人が、光さんを見染め、便を求めての懇望が首尾善く運んだのてあつた。

云ふ事だけ云ふと、内儀さんは、花ちやんを連れて、下へ行つて了つて、跡淋しくて、窓より望む、日暮里田圃、未だ雪消を分けて若菜も見えねど、籠る長閑さ眼をそらせば室は、鉢植の梅の影、障子に映つて、何處にか朗な鶯の聲、繁華な神田の下宿から來た私の耳に珍らしく、其初音を聞いたのてある。

四疊半はきちんと片付いて、壁に寄つた本箱の上なる少さき花瓶に桃一枝もなつかしく、文机に乘せた湖月抄からはらりと、溢れた栞の房が色も紅い、萌ゆるはかりに、光さんはまあ、此の緣談を、何と思つて居るだらう、義理だなぞと、悲しい節が籠る樣だが、さりとて今の話ては、別に義理の柵に搦んだ理由もあるまいものを……私は又詰らぬ空想をしつ、人待つ間の徒然に偶と、書籍の中から引出した一片の紙、墨鮮かに亂れ書きも覺の光さんが筆のすさび。

と、打見遣れば、

石の上ふるの中道なか〳〵に見ずは戀しと思はましやは

私は思はず興さめて、妙に詰らぬ感じの爲た。此の古歌て大體、光さんの胸を想像すると、吾ながら馬鹿げて來て、光さんは案外に單純な人だつた。

「まあ、お待たせ爲ました、怒つて被入つて？」

此時、光さんはぽつと頰を染めて、這入つて來た。

「いゝえ、お買い物てすつて？」

「え、色々、それに國から兩親が出京するんて。」

小豆色の肩掛と友禪の包を傍へ遣りながら、伏眼になつて、何處かそわ〳〵と、落着かない。

「何う、式は何時なの。」

「兩親が來次第ですが……」

偶と私の手にした紙に眼を付け、「あら文子さん、まあ！非道いわ!!」と眞赤になつて、奪ふとするのをおらして、机の上に置き、「可いぢや有りませんか、既う皆伺つて了つたのよ。」

「文さん、貴女怒つて被入るの!?」と聲を沈ませ、

「獨身の事を僞を吐いて、澄みませんわ……、ても、堪忍して頂戴ね。」

「眞逆、那麽事を怒りは、爲ないわ。」

「本當!?」と聲を郤含ませて、

「乾度、何時迄も親友にねえ……」としんみり。

「去年は一緒に萩寺へ行つたり、それから善く道灌山の芝生に座つて、此湖月抄を讀みましたつけ……」

「そう〳〵、丁度夕顔の卷を習つて居た時で、夢中に暗誦なんかしましたわね、蝶々が飛んで、芝に雜つた少さな白い野の花に、怪しい俳句なんか作つて、大笑ひしたのも、二度とは既う來ないのね。」

「あゝ私、那麽事を思ふと悲しくつてよ。」

知らず見かはして、互に逐ひ涙ぐむで了つた。

やがて光さんは涙を拂つて、

「文さん今晩、泊らなくて？」

そゞろ忍ばれけむ、過ぎし舊事。春雨を帶びたる梨花のそれよりも、憐れにやさしき其姿や。

何事も今更、運命の手を引戻すよしもなければ、一人この佗しきを不言不語、私は淸く笑つて、友を送るべくと束の間に思ひ定めた。

『え、御厄介になるわ。』

「そう、嬉しい。」

遠く、工塲の滊笛が鳴つて、けたゝましく、午砲の響が青空の雲の波を破つた。階下では鹽物を燒く香がして、元氣の善い花ちやんの唱歌が聞えた。

*　*　*　*　*

其夜、私の發言て、燈下に二人手を取つて、夕顔の卷を繰り返し讀んで眠つた、いとせめて、其折の思ひ出にもと……。

斯う云ふ事は今の女學生の間にいくらもあらうと思ふ。幼いやうな處もあり、氣の利いた處もあり、それて一體に情が籠つてゐる、殊に女の筆として受取れる、今少し垢拔がすると作家たるべき光明も認められる。（評）

老婆

東京府　花　琴　女

上

「又來やがつたよ、毎日々々〳〵何が彼樣に話しがあるの

だらう。」

戸山が原の土手下を、若い男女が、さも嬉しさうに話して行くのを、見返り〳〵して忌々しさうに老婆が云ふ。

雨上りの道が辛と今朝から固まつて、珍しく下駄て歩けるやうになつた。北が開いて畑になつてゐる、其の麥の上を駈けて來る風が、覺えず人の頸を縮めしめるのである。老婆の後から從いて行く廿二三の娘は、チヨツと舌打した老婆は妙な顏で仰いだが、急に俯向いて考へ込む。

「お菊、さつさとお歩きよ。」と、二三歩後れた娘に云つたが、

「ねおい、彼の態つたらないぢやないか。」と、又振返つて凝と睨む。

「本當に毎日來るわね、母ちやん、先日ね、大變雨が降つたてせう、ね彼のときだつて傘を翳してね、男女ともビツショリ濡れてね、お宮の緣に腰掛けてたんてすの……」

「馬鹿だね、本當に！一體何が彼樣に話しがあるんだらうね、何時も〳〵男女てベチヤ〳〵〳〵話してさ第一見外ないぢやないか、お菊、本當にお前なんか確乎しておくれよ。」

「私なんか大丈夫よ……」

「何有爲うおやないよ。だけど彼の楠田さんは親切な可い將校ぢやないかね。未だ廿八つて云や末が賴毋しいぢやないか。」

「…………」

お菊は少し顏を赤くして下を向いた。垢の附いた黑い頸が、汚い襦袢を離れて明瞭と見ゆる。風が一しきり土手の枯草を吹いて行くと、其れに伴うて微かに喇叭の音が流れて來た。と、お菊は顏を上げて、何うしたか毋の白い頭を見上げる。頭上の方が禿げて毛がないので、小さい圓髷が後ろに落下つてゐる。着古しの絆纏は縞の模樣も分らないやうになつて、肩の上には焚火の燬が坊はれもせず散つてゐて、離れて見ると其れが丁度飛白の縱劍が當つてゐるやうてある。

老婆は此の近くに住んてゐるもので、少し位ゐの金も貯めてゐるさうてある。三味線も引けば琴も彈く、鳥渡した手踊ぐらゐは知つてゐるところから、元は田舍邊て酌婦をしてゐた、などゝ云ふ噂さへせられてゐる。今は亡くなつた亭主と只ならぬ仲てあつたと云ふが、此地に來てからは殆ど二人の中に爭ひのない日と

てはなかつた。
『何だい齒もないくせに、痴話喧嘩でもあるめえよ。』とは、能く此の夫婦の上に沐せかけられた言葉であつた。

此の老婆と一緒に二人の娘がゐる。新一郎と云ふ倅もあるが、去年の春に娶つた嫁が氣に合はねと云つて、出すとか去らすとか騒ぎ散らすので、新一郎は妻を連れて板橋に店を持つた。それでも時々押かけて行つては、年甲斐もないことを云ひ立て、店の妨害まですするので、今では倅の方も愈々愛素を盡かして、母が來ても碌々話しもしないので、老婆は他人の前だらうと何だらうと、寄ると觸ると倅の惡口許り云つてゐる。

お菊の上にお智慧と云ふ廿五になる娘がある、これはお菊より一段と醜い女で、額の出張つた唇頭の上反つた、それに剥落る程白粉を塗つてゐるので、大概なものが一目見ると失笑したくなる。が、縁は異なもので、此のお智慧にも今までに二三度妻に欲しいと云つて來たものがあつたが、縁談が纏つて、お智慧の方も別に不ふはないと云ふ段になると、不思議に母が破談しかける。如何乗地になつてゐた縁談でも娘が云ひ惡さうに、

『嫁つても可いんですけど……母ちやんさへ何でしたら……。』と、云ふと、

『ぢやお前は彼の人が氣に適つてるんだね？』

而して母の口がソロ〳〵と變つて來て、終には其の男の惡口を云ひ出す。斯うして何れも〳〵破つて了ふのだ。

お菊だつて同一こと。

其のくせ、何家の娘が縁附いたと云ふやうなことを聞くと、自分の娘の年を數へ出して、

『お前ども、早くお嫁に行くやうにしなくちや、一日だつて若い方には返らないからね。』と、溜息さへ吐くのである。

老婆の家は煙草駄菓子の類を賣つてゐる、而して戸山の原に近いので、軍人が始終出入する。その軍人で



（入賞）　玉川しげ

娘共に戯談でも云ひかけやうものなら、老婆の顔――眼附――が變つて了ふ。イヤに疑ひ深くキョロ〳〵して、カタリと云ふ物音にも膝を立てる、然し流行は商賣て、客の前では厭な顔一つするではないが、其れが歸つて了ふと、娘を呼んで其の客の惡口だ、て、娘も調子を合せて、此て人間も獸も差別がつかなくなつて了ふ。

下

今度老婆が振返つたときは、先刻の男女の姿は諏訪神社の後ろの立木の間に見えてゐた。

「チョッ。何の眞似だい。」

「母ちゃん、何時も彼處よ、何處で何時も話してるんだわ。」

「恰て春情の附いた犬だね。」

「まアホヽヽ……」

「本當ぢやないか、犬だつて彼樣眞似はしやしない。彼の態！　お菊御覽よ。あれ彼樣に！　おや〳〵！抱合つてるんぢやないか？」

「其樣なことはないわ。」

「だつてお前……あッ、まアお菊、御覽よ彼樣ことして……馬鹿ッ！」

「ホヽヽヽ。」

「今に見て御覽、飛でもない身軀になつて、汽車にても轢つて死ぬのが落だ！」

ハッとして二人が氣附くと、カーキー色の軍服を着た少尉が、

「何處に行つたんだね。」と、聲をかけた。

老婆は拔けかゝつた歯を露見してホヽヽと先づ愛嬌笑ひをして、

「楠田さん、彼の態は何てせう？」

「何が？」

「何がつて貴方、彼の態は何うてせう、他人のことだから何うても可いやうなものてすけど、餘り外見ないぢやありませんかね。私斯う云ふ性分でしてね、彼樣處を見ると、最う自分の娘でも惡い男から騙されてるやうに思ひましてね……」

「嫉けるつて云ふんだね、ハヽヽ、お止しよ〳〵、婆さんだつて腹一杯若い時を樂んで來たんぢやないか、然う若いもの許りを惡く云ふもんぢやないよ。」

「否然うぢやありません……」

「ハヽヽ可いよ〳〵、大目に見てるさ、ね菊ちやん。」

と、お菊の肩を叩いて笑ふ。老婆は其れをジロリと見

て、
「ホヽ、御戯談許り……」
「ね、菊ちやんを僕にくれないか、眞面目に。僕は全く菊ちやんに惚込んで了つた。可いだらう、え菊ちやん、君さへ可けりやお母さんが何と云はうと關やせんさ、當人同士か好合つてたら、自由結婚と云ふ重寶なことが出來るんだものね、菊ちやん、君だつて嫌ぢやあるまい？。え嫌？ハヽ、默つてたつて僕はチヤンと知つてるぞ。ハヽ、僕の顏を見る菊ちやんの目附が違ふからね。」
お菊は眞赧になつてゐる。
「ホヽ、楠田さんたら何時も〳〵面白いこと許し仰有つて……」
「可いか？」
「菊ちやん。」と、肩を叩いて、
楠田はスタ〳〵と行つて了つた。
老婆はお菊の樣子を凝と見てゐたが、お菊は默つて未だ頰を赧くしてゐた。
「お菊、楠田も何だか嫌な——氣障な將校だね。」
『然うね……、憎らしいわね。』
「軍人は今少し落着かないと不可いよ、彼れぢや恰て幇間だ。」
お菊は始終俯向いてゐた。
風は次第と烈しうなつて、塵埃が天を舞つて行く。疲れ切つたやうに軍歌の聲が聞えて來ると、諏訪の森の中に押込むやうに入つて行つた。

何うも駈出しの投書家などには書けさうもない、思ひ切つて大膽に筆を着けてゐるが、あてゝみやうなど云ふ野心はいけない、斯う云ふ老婆は何うせ自然主義中のスタイルにはまる人物て、又スタイルにはまるやうに書いてある、うまいには相違ないが、も少し手柔かに願ひたかつたと思ふ。（評）

お留守居

肥前　佐志あや

今日は二月の小春日和とでもいつてよいやうな、こんな風なら、三月の彼岸櫻も、だまされさうなあたゝかな、どんな物ても浮れ出しさうな、おまけに日曜とさてるので、六十三の田中の御隱居樣と、十のみさを樣と仰しやるお孫孃樣とは、お珍らしいお早おきて、そして、こんなお天氣なので、ひよいとお打立ちになつて、朝の十時少しまはつた頃から、御親族の北里樣へ御不沙汰お詫びと、お遊びと、半分〳〵てお出掛になつた。
御隱居樣のたまに、よそお出の時は、ぜひ二人のお召

し使の内誰なりとおつれになるのに今日はそれもなし四十九になる、ばアや兼、御家持の千代と、此變り目から來たかよといふ十七になる下女とは、御家内皆樣といつて、たつたお二人の御主人樣の珍らしいお留守殊に今日は一日お遊びといふので南向の緣側の日當りのよい所に陣取つて、かよはお緣に腰かけて雜布さし千代は横座をして昨夜解かけて居た御隱居樣のお召の解きのこりをといてゐたが、それをといてしまふと、ばた〳〵と前掛の糸くづをはらつて、解たお召を一々に丁寧に一寸位ゐの幅づゝにまいてゐた、そして仕事をするする、つまらない世間話しや、自分達の身上話しなどしてゐたが、かよがふとあはてた樣な聲で、

『御隱居樣が入らつしやる時には何だか、きかれないやうな氣がするので、いつか聞いて見樣と思つてたのだが、なぜお屋敷には旦那樣も奥樣もゐらつしやらないの、あなたその十何年お務めしてるといふから、お家の事何でも知つてるでしよう。』

『はい、はい、それにはいろんなわけがあるのよ、そして旦那樣は今東京へいつてゐらつしやるのだよ。』

『それでは奥樣は。』

『それがさ、それにがいろんなわけがあるといふ事だよ、ほんとに今でも思ひ出すと私だつて腹が立つて堪らないわ、つみもむくひもない、あのお優しい奥樣を。』

『それでは御隱居樣がお氣に召さないとか何とかでおかへしになつたの。』

『それならまア仕方はないさ、けど此處の旦那樣位、情ない方つて又とないんだよ。丁度私は、旦那樣がこゝの中學校をお卒業になつて、東京の學校へお出になる時、御隱居樣がお一人でおさびしいからといふので、御親類樣のおせわて、こちらに上たのよ、そして旦那樣が來夏には大學校とやらを御卒業あそばすといふ年の十月、御遠緣のお宅に十八にお成り遊ばす、それはおとなしいお優しい、御顏だちこそ十人並てゐらつしやつたけど、どこといつて申分のない、孃樣がゐらつしやつたので、御隱居樣が大變お望になつて、直に御婚約遊ばしたの。』

『旦那樣はお幾才だつたの。』

『そうね、こうつと、お幾才だつたけね、たしかお二十六だつたと覺えてるが。』

そして直ぐ、東京へいつてお上になると、お返事が、まだ早いとか今から四五年は勉强せねばとか何とか、いつて來たそうだけど、御隱居樣は一向そんな事には頓

着なし、私が一人て心細いからつて、來夏旦那樣がお歸省になる筈だから、そしたら直に御婚儀遊ばすお積て、それからは、やれ、八幡さんだの、呉服やの安賣だのつて一寸の事にもお招きになつては、お髪を結てお上になつたりしては、お連だちになつて色々なお召とか何とかをかつてお上になつたりして、自分は正雄（正雄つてのは旦那樣の事よ）一人て心細くて仕樣がなかつたが、ゆく子さん（ゆく子さんとは其お孃樣のお名よ）が來るやうになつてからは娘を一人、生み出したやうだなんて、それは悦んだり樂しんだりしてゐらつしやる、又お孃樣の方ても、ほんとによくお務になるので、ほんの親子でもあゝはゆくまいと思ふ程、お仲がよく、御隱居樣も私もこれてもう安堵した、これに早く孫ても出來たら、死んても思ひ置く事はないなどゝ、それは御滿足てゐらつしやつたのよ。

こんな事て日はたつて、お歸りになつた日さへ忘れもせぬ、翌年の七月十一日の夕汽車てお歸へり着になつた、その時の御隱居樣のお顏つたら今ても見ゆるやうよ、そして、ちやんと、七月の吉日を選んでもらつてゐらつしやつたので、十六日がよい日だからと、むりにおすゝめになると、何とか故障をいつてゐらつしやつたけど、日だけをのばして、其月の廿三日に式をおあげになつて、まあ、目出たくすんだ。

（入　賞）　加藤つたへ



そして奥樣はよく、おつとめになるけど、どうも旦那樣のお心が解ないらしい、けど御隱居樣ばかりは、ほく／＼ものてゐらつしやる。

旦那樣は又、東京へお出掛になるといふのを、むりにお引きとめになつて其年の十一月迄は辛棒してゐらつしやつたけど、十二月の始めに、是非行くなら、奥樣もお連になる樣にと、大變お勸になつたけど、お一人てお出發になつてしまつた、けど奥樣は、益々御隱居樣にお務になるので、お睦じさは一層て、其年も暮て、翌一月頃から、奥樣が何だか、ふら／＼してゐらつしやるので、

直にお醫者に診ておもらひになると、全くこれは御姙娠の爲めて、もう四ケ月位にお成り遊ばすのだといふ事て、御隱居樣はお一人で悦んて、まだそれから半年以上も先があるのに、御出產の初湯だらひ、とか何とかちやんと揃へておしまひになり、この甲斐があつてあつくて仕樣のない、八月の始めにあのお可愛らしい女のお子樣がお聲をお上になつたの、そして三週間位て全くお床をお離れになつて、すぐに筆おとりになつて、東京にお報知になると、何の御返事も無かつたのよ、あまりだものね旦那樣も、そしてお孃樣のお四つの春、餘り、責めていつておやりになつたので、やつと歸つてはゐらつしやつたものゝ、其時からがお可愛さうに、お孃樣は、親なし子にお成り遊ばしたの。おかへりになると直、奥樣がこんな子て御座いますよと、だいてお出になれば、手におとりになるてもなくそれはお目出たい事てすとまるて人事の樣だもの、或る晩、奥樣は、頭痛が遊ばすとかて、早くからお床にお入になり、御隱居樣も、旦那樣も、各自御自分のお部屋にゐらしつたが、私は御隱居樣のおそばて、お孃樣のヒモスのおべゞを縫つて居たが、旦那樣を、一寸呼んて來いと仰しやるので、直とお連れ申上てくると此度こそは、いく子も東京へつれてつてお吳れだらうね、いつにかはらぬ事をお云ひになると、旦那樣があんな者、今時東京へなぞ連てゆけるものてすか學校といつたつて、女學校なんてのぞいた事もないといふし、それあ、學校敎育がないにしても、今すこしはきはきした風なら、まだしも、顏つたらはぐれてまづいし、おまけに、子供までゐるやつを、どうして連てゆかれるものてすか、あんなお昔風な女が今、東京へ出たつて、一日も、半日も暮せたものじやあないなどゝて、まだ當世何んだの、かだのと理屈ばつたことを、並べたてゝ、揚句の果があんな女はどうしても私の妻にしておく資格とかゞないとか、あれがゐれば東京にゐても何だか心掛りがあつて、思ふやう勉强がされぬなどゝ、ごたごた仰しやる、御隱居樣も、まけず劣らずて、今にも親子喧嘩が出來さうになつたの、すると奥樣が聞きかねて、そんな事なら。私は里にかへりましやう、そしたら充分御勉强も出來ましやうから、つて、すると、丁度いゝ、かへるといふなら、おれも望む所だと仰しやる、御隱居樣は、それはならぬとおこばみになる、其晩はどつちつかずて、すんだけど、それがお里の御兩親樣に聞えると、娘一人の爲に、親子

仲違が出來ても、將來何だからといふもので、とうとう、お引とりになつてしまつたの、そして旦那樣は、お孃樣もやつてしまふはうが、こつちでも仕合せだからと仰しやつたのを、これぱかりはと、御隱居樣が强ゐておいひ遊ばしたので、奧樣はお一人でお返りになつた、其時は御隱居樣も奧樣も私も三人諸泣で別れたのよ。

そして旦那樣と、御隱居樣とは、お不仲で、直ぐ、お出發になつたのよ。』

『それから旦那樣は幾度もお歸省になつて。』

『そうね、二度ばかしはお歸省になつたけど、お母ア樣とはいつも、すれ〳〵で、それにいつおかへりになつたつて、お孃樣に、リボンのお土產一つ有てはなし東京では、澤山、お金とつてゐらつしやる相だけど、誰にだつて何一つお寄越しにもならない、そうかといつて、お金でゞもくれあまあいゝやうなもの、、それあ、そつけないものさ、何でも今では、前髮を板のやうに突出した、女の大學とやらを出た、どこの馬の骨だか知れぬ女が、奧樣然と構へてるそうだよ、そんな物が奧樣になつた所で何の役にも立やしない、ほんとに旦那樣は、彼ないゝ奧樣をむりにかへしてしまつていやらしい女なぞから、だまされたのかだましたか知れたものじやないけど、お孃樣のお母ア樣の事思ひ出すと、今でも淚が出るよ。』

『お孃樣のお母ア樣、今何してゐらつしやるだらう。』

『それがさ、今でも此の世にゐらつしやるのなら、兩方でどんなにかお悦びで、旦那樣には知れないやうにても、往來遊ばして、お悲しい內にも、どれ丈かお樂しみになつただらうに、口惜しい事には、お里におかへりになつて間もなく、一寸したお風邪がもとで、あまりこちらで、お心配遊ばした爲だらうよ、それから肺とかがちつとお惡くお成なつたとかで、遂〳〵おかくれになつたのよ。』

『それではお可愛さうにお孃樣は、御兩親、お持にならぬも同樣ね。』

『えゝ、お孃樣は、親の味といふもの御存知ないのだよ、それあ、一時といふもの、此お家は何といつてよかつたやら、奧樣のおかへりになつてからといふもの御隱居樣は親離てもした樣にお歎になる、お孃樣は、お四の一番、手の入る分のわからぬ最中、私もどんなにか心配してお育て申上たらう、それもいつそお亡なりになつたのなら、又あきらめやうも、有けど、あん

な、情ない事ってなかつたよ、お子様は、お子様てどうとかあやつゝても行くけど、おばア様は誰にもお話し相手がないものだから、私一人を目當に、愚痴も、不平もおいひになる、御隱居樣もほんにお氣の毒よ、たつたお一人子の旦那樣を、お少さい時からお父樣なしに、女親一人て、意氣地なしにしてしまつたと、いはれぬやうにと、それぱかりを思つて、やつと、學校も卒業して、嫁もとつて、孫まて出來て、まあ、これて御先祖に對しても申譯がたつものと、やれ／＼と思ふ間もなく、こんな事になつたと、いつては、お泣きなさる、まあ、そんなこんなて、面白くもない月日を過して、そして、だん／＼忘るゝのではないけど、自然と日がたつにつれて、御隱居樣のぐちも、すくなくなるし、お孃樣も、だん／＼お成長になつて、今てはまあ、何といふ事なしに暮してゐらつしやるのだよ。』

『お孃樣お母ア樣の事お尋ね遊ばさないの。』

『そりやあ、もう少し物心がついてお出になると、おばア樣が、いつもねばなしなどにはその事ばかりいつてお聞せになる物だから、ちやんとあきらめてゐらつしやる、そしてぜひ、月に一度の御命日にはおばア樣と、こゝから一里近うもあるけれど缺かさずお墓參りあそばすのよ、ほんとに、そういへば、廿四日が何だからもうすぐよ。

今はあゝして、何もわからずゐらつしやるけど、今にお年召したら、さぞお父樣、おうらみだらふね、わたしなら』と何か云はうとした時、可愛らしい、せつたの音がして、西日のまばゆい、お玄關の邊へお歸宅のやうなので、兩人は、あはてゝ、とんて、お出迎へに出た。

表面の筋を辿ると云ふことが主になつて、深く人間を觀やうとするのではないから、勢ひ舊式の書きぶりにはなつてゐるけれど、それからそれと語つゝ行つて、人を厭かせずに讀み了らせるのは筆達者なものでなければ出來ない。（評）

印象

上總　ひさ子

花降る宵てある。春の夜風は音もない。時計は先刻九時を報じたけれど、見上げて確めるそれさへ得せぬ靜けさてある。秒を刻む音が微にかすかに僅に夢の樣に耳に入る。鐵瓶のたぎる響、其さへ今は聞えずなつて、つぎ足した佐倉炭が半は白くならうとしてる。大通を離れた街の夜は人の足音も極めて稀に留守居の胸に言知らぬ暗愁の影がそれとはなしに流れ入る。

嫁いで二月、親もない小姑もない身の氣樂と言へば言ふかも知れない。十五も違ふ夫に仕へて遠縁の叔父にても見える樣な心地、なぜ打解けられぬ私かと怪しうも思ひ惑はれる。時間の嚴しい夫を銀行へ送出しては下女を對手の靜かな住居、奥向の用事は獨で片付けてもお勝手の細い用事には、此家には寧ろ歴史の永いお德に聞く事がまだ多く、學校で習つた料理や家事や實地に當れば手拙い事も一つならず、晝は兎角して紛るゝものゝ奥の電燈の明くなる頃は、さすが父母の膝元が偲ばれて罪もなく笑ひこけた食卓の團居が思出される、殊に今宵の御歸の遲さ、寧ろ氣樂ぢやないのか知らと疑つても見るけれど、また言知らぬ不安の暗い影にも襲はれる樣で例へば月の夕暮に櫻姫桃こきまぜた落花の旋風の中に立て何處へ吹かれゆくとも解らぬ思ひの其とも言はうか、夢ともつかず現とも知らず、あやしい怪しいそゞろ心地の得堪へずなつては、小さい胸をそつと抑えて靜子は深い吐息を洩すのであつた。あらい縞の羽織、紬の袷の下に模樣の半襟美しう低頭いた頸足が肌着の白襟に反映して飽く迄鮮かに見える。房房した髪はぐつと廂にして山梔子色の大きなリボンをかけてある。眉の劃然した色白の顏、目先に搖れる後れ毛を搔上げやうともしない。細い華奢な指から小さく座つた膝を辷つて編物の白と紫の糸玉がとけては轉び轉んでは解ける。偶々表を過ぎる物音に胸騷がせては、じつと其消えゆく響に耳傾けて、又恍惚と俯向いて終ふ。實に靜かな宵てある。まだ戸は閉さぬ窓障子に月の光がほんのりと、淡墨色の花の枝が倒に寫つて、見つめて居ると搖れるともなく搖らいて居る樣だ、散行く花も多かろう、彼女の心

（入賞）　清子



は今落花の渦と亂れて居る、目は唯無意識に編針の先を辿つて、指は機械のやうに唯動く。

あゝ‥‥あゝ私は‥‥何故あの時に打明けなかつたらう。潔さんは確に私を愛して居られた‥‥否え夫は如何しても私の心故とは思へない、學校で此麼事が有たと言ては、何を見たと言つては、盆栽の梅の蕾を見舞はれたさへ幾度て有たらう。幾許叔父の家だと言ても電車に遠い私の家へなぜ彼麼にまはり途して來られたのだらう‥‥私は知てる‥‥私は知てる、知てゝ何故なら彼時に私は意中を言へなかつたのだらう。

頰の邊が仄然と上氣して怪しくも双の小指が微に震へる。胸の底からわき返る悔恨と追憶と、例へば春の海原に花を泛べて湧立つ暖潮に身さへ魂さへ漂はされるかと計り、知識も意志も沈んで終つて其强烈なる本能の香ある渾身の熱血、其熱情の凝るとも見える美しい眼は深い〱測知られぬ思ひを秘めて偏に何物をか求める如く異樣な潤みにかゞやいて居る。彼女は今、恁くて肘突を編みつゝあるといふ事さへ、其意識からかき消されて居る。

私は知てる。けれど潔さんも餘り御心强くはなかつたらうか。父も母も信用されてるのに潔さんから言て下すつたら又何とかならぬものでもなかつたらう‥‥私は知てた、だから私は父の言を拒んだのに、彼夜潔さんは何と言はれたらう‥‥‥

『ね靜さん、夫でも嫁くのは厭だと言はれては、僕が板挾みの苦い目を見ねばならない、叔母樣には彼麼に賴まれる、貴女は此麼に厭だといふ――けれど靜さん考へて御覧なさい。何時迄親の許に居たつてそれで孝行と言ふ物でもありますまい。夫も何とか非難のあるんなら兎も角、先きは銀行の頭取と言ふぢやありませんか、僕等の樣なこれから漸と卒業しても資力もない學士なんて言ふんならまだしもだけれど‥‥』語尾はかすかに震へて居られた。

『あれ、あんな事‥‥‥私だつて孝行だから恁うしてるとは申しませんわ』顔をあげて竊と見たら、潔さんは手を組んだ儘天井を見つめて、また眼を瞑つて考へられた。僕の樣なと何故比較して言はれたらう。私は知つてる私は其御言をちやんと胸に印象してる。なぜなら其お口で父母にも私にも明には打明けて下さらなかつたらう。女とは弱者の名であるとか、心强いお言葉聞て如何して妾から言出す機會が得られやう。

『それは僕だつて恁麼お勸するのは甚麼に苦しいか解

らない。然しあれ程叔母様からも頼まれて見れば沸湯を吞む樣な苦しさをも忍ばねばならぬのです。貴女だつても少しは察して吳れなければ困る：：まあ靜さん操と言ふ事から考へて御覧なさい、何も古人の言慣はした樣な事計りが操とも限りますまい。親も許す自らも許した人に一生誠を捧げるのは操の操でせう。又心に染まぬ人に嫁いで强ても其人を思はうとするのも操でしよう、他へ嫁きながらも初めに思つた人を忘れずに居たいと思ふのも操と言へぬ事はないでせう：：』諄々と言はれたお言も兎角亂れがちてあつた。私は一層それが恨めしく、

『貴君は餘りですわ：：』と宛然胸も碎けそう：：。

——沸湯を吞む樣な苦しさ——初めに思つた人を忘れずに居たいと思ふのも操である！——一つひとつお言が身にしみて、銳い刄物で胸に彫付けられたやう：：：顏も得上げず泣崩れて居た私の肩に、軈て微な重みがすると思ふと、片手は緊と私の左手をとられて居た。

『ね靜さん、すべて夢だと思て嫁て下さい。夫が御父樣にも御母樣にも孝行と云ふものですから』燃ゆる樣お手の溫み：：私は思切つて言はうと迄したものゝ、折も折、母樣の足音がしてやがて來られた、言を添へて說かれるのに、吁私如何することが出來たろう。

靜子は玆迄考へては旣う堪らなくなつて、兩手で顏を掩ふた儘火鉢の傍へ泣俯した。寂として室の中は電燈の光のみ眩く、歔欷く聲が折々聞えぬ程に洩れる。彼女は今更らに軟かな肩の重みを感じる。痛切に指の溫みを思出す。眼が眩めいて耳が鳴て全身宛然燃え上るかと計り。かすかに汗が背ににじむのを覺える。そして追想はなほ縷のやうに續いて行く。

潔さんは其夜珍しくも遲くなつたと言ふので宿られた堪へぬ思ひに泣盡した夜半、今はと觀念の胸を定めてせめて一言彼人の胸に深い〳〵印象をとゞむべく階段の下まで忍び寄つた。二階には潔さんと幼い弟が寢んて居るので——。

殆ど夢心地に階級を昇りそめた。一足そつと踏んでは漸々と力を入れると、ミシリと其は微かなかすかな音ながら彼女の耳には世界の隈々にも響き渡つたかの樣に思はれて、宛然燃える體に水を浴びせられるやう、ぞつと身の毛もよだつ心地に立ちすくむ。そして僅に半ばを昇つた時、上では弟が眼さめて居て、何か低く話してるのを聞いた時、彼女はさながら失神したやう危くも搖々として轉び落ちそうになつた。

少時は其處に蹲んで聲を殺して泣いたのであるが、吁、彼女は遂に空しく階段を忍び降りて終たのである。

今更ら仕方がないけれども、妾は……妾はなぜ彼時に言はなかつたらう……と又しも處女と呼ばれた日の心の弱さが悔ゐられる。肩の重み、手の溫みを思ひ出す。あの一夜に二人の運命が決したのだと思ふと双の腕が戰ぐのを覺える。明瞭と胸に印象されたお言が寧ろ恨めしいとも思ふ。けれど潔さんとても甚麽にか寂しかろう、今年の試驗を終へられたら文學士である。何麽奥さんを迎へられるだらうか。そして夫にも猶私のやうに苦い追憶をつながれるであらうかなど考へる。

しばらく打俯した儘涙の顏をさへて居ると、突如と俥の音が表に聞へる。彼女に恰もはじかれた樣に身を起して、慌てゝ半巾で顏を拭く。俥が門を過ぎたのを聞いて僅に安堵の眉を開いたが眼を轉じると膝近くおち散つた編みかけの肘突に直ぐ氣がつく。――紫は潔さんの一番好きな色である、昔ならて今の心を告げるよすがもないけれど。ゆかりの糸にこの思ひこの手の溫みが籠つて居たならば、深くふかく印象されたあの夜のお言葉に對して美しい恨みを報ひる事が出來やうと思つた。そしたら始めて心から人に仕へる私となつて胸のなやみも癒えやうと思つた。

心をこめた糸の綾に、心强かつた人の胸みださむ願ひそれが彼女の彼人に對する儚い優しい復讐であつた。

障子の花影がまだ搖ぐ、庭は定めて落花に埋れたろう夫はまだ歸らない。靜子は俯向いて編針を動してる。白と紫と二つに染められた運命の糸の、慥くて一針一針に深い思ひを編出されるのであらう。

靜かな宵である。時計はやがて十時を打つた。

器用に書いてある、器用には書いてあるが魂はそれほど活動してゐない、極度の文字を用ゐて彼女の悔恨、追想を强く表はさうと努めてゐる、幼稚な讀者なら或は文字に眩惑されて心酔するかも知れないが、多少眼の高いものが讀めば、必ずしも然うてない、器用な人のしくじるのは其點にあるから作者深く反省して此才を善く伸ばせよ。(評)

秘密

上

赤坂　村主こと子

姉樣好い話しなのよ、まだ肩揚の有る十四五位、艶のある毛を時代後れの桃割に結上たあいくるしい娘。つゝみ切れぬ程の笑ひを見せて鈴子の顏を見つめて言ふ冬チャン何んな話しさ、沈んだてゐて問ひ返したのは姉の鈴子、年は二十ばかり、細面のくつきりと、しま

つた顔はどこやらさえない、肉落た頬のやつれも病上りの故であらう、冬子は今戸外から歸つたばかりと見え、ぬぎ捨た着物を疊みもやらず、室の中央にぐたりと座つた儘夫や好い話しよ、だから姉樣たゞはいやよ鈴子は思はずにつこりとして、冬チャン餘程好い話しだと見えるのネ、お前何がいゝのさ、さうネ、冬子は眞面目に首をかたむけて、何がいゝか一寸思ひ付ないわ、話しもしない先から考へないてもいゝてせう、じや姉樣妾造花を敎へてもらふわ、と言ひ掛て、鈴子の面を一寸見て、ネ姉樣明日明日つて、のばしちやいやよ、よくつて姉樣と甘へる樣な調子て言ふ、鈴子は氣のなさそうにかるくうなづいて、夫て冬チャンお話しは、お話しはネ、と冬子も同じ事を言つて、姉樣當てごらんなさいな、冬子は無邪氣に笑つて居る、いやな冬チャンだよ好い話しつて話しもしないて、お前ばかり可笑つても妾には、さつぱり分らないわ、だつても姉

（入賞）　玉川しげ子



樣好い話しつてばちやんと分るだらうと思ふわ、いゝえ分りませんと鈴子は思はずこゑをはづませて、分りませんよ、譯も言ないて妾がしつてる道理がないわ、冬チャンだつて然うてせう、聞もしないじやねへ、だから妾だつて分らないわと言掛て少し考へ込んだが急に笑顔を見せて、分つてよ冬チャン、お前樣のお正月の晴着が出來たんてせう、ほら當つたてせう、冬子おかしさに堪ぬといふ樣て袂を口に當た儘處がそんなじやないのよ、といつにないすまして居る、ても冬チャン、今日母樣と白木へいつたてせう、あゝいつてよ、ほらごらんなさいな、妾が言ふ通り當つてるわ、鈴子は得意顏に淋しく笑を洩した、いゝえ其なじやないよ姉樣、まア然う、じや、妾には分らないわ、と鈴子は、投る樣に言ふ、夫じや姉樣、やつぱししらないのネ、しらないから聞んてすよ、鈴子は、にらむ樣につんとした、言ひませうかと冬子は口をもじくして、居たがやがてあの姉樣お話しにも面白いとか嬉

しいとか悲しいとかつて種々有ませう、まア有ネ、そしたら姉様妾の話しがどんな話しだと思ふの、つまらない話しだと思つて、え姉様當てごらんなさいな、冬子はさも嬉しさうに、鈴子の顔を凝つと見詰て居る、冬子が落付程鈴子はなほせき込て、冬チャンお前も餘程分らない人だネ、話したり聞たりした上てこそ面白いとか悲しいとか、みづしらずの人の上にも、随分涙を注ぐ事も有るがお前のは話しもしない先から、妾の様なちゑの淺い者に、夫んな事を言つても少し無理じやないかネ、夫もいゝさ、今約束した口の下から、話しもしないてからかうなんて、随分だわ、姉様だからいゝけれど、お友達にこんな事言つちや、にくまれますよ、鈴子はたしなめる様に言つて、うつむいて了つた、冬子は今迄の勇氣はなく、さながら紅をさした様面を眞赤にした、そこて二人の話しは少時とぎれたがやがて冬子は、そつと鈴子の顔を差のぞいた、其涼しい眼には涙が一杯たまつて居る、姉様おこつたの勘忍して頂戴な、姉様と冬子はてゑくもらせて、妾其な氣て言つたのじやないから勘忍して頂戴な姉様おこつたの、え姉様、冬子も泣きくづれて了つた、鈴子は今更の如く、あはてたやうに冬子の傍にツと差寄た、鈴子は言ばを和けて冬チャン姉様が悪かつたネ、言ひ過して悪かつたネ、泣ないて勘忍しておくれ、よ、冬チャン好い女だから、泣ないてさ、冬チャン、夫なに泣んじやなくつてよ、鈴子は細く眞白な手を、かよわい冬子の肩に掛て、冬チャン夫なに泣て何うするの、姉様あやまるから、勘忍しておくれつては、もう泣んじやなくつてよ、冬子は鈴子の優しい言ばに慰さめられて漸つと顔を上た、けれ共まだ顔から袂を放さうとはせず泣じやくつて居る、鈴子の室は、茶のまの二階の四疊半なので室内はせまいが南向に日光を受けて割合にあつたかい、午後二時頃の日光は、硝子窓をすき通して座敷一杯に投て居る 鈴子は、正面に日光を受てまぶしいのか、何氣無體をわきへそらした、其途端漸く泣やんだ冬子は、不意に泣出したので、振返つて鈴子が、あら何うしたのさ、妾がおこつてはしないから然うなくんじやない事よ、そら御らんおさいさ、こんなに、あたまが、こわれたじや有ませんか、水のたりさうな、前がみのあたりを、鈴子は一寸かいなでゝやる、折柄何うなさいました、と襖を二尺ばかり明て顔を出したのは女中のお時て、鈴子は急に味方を得た様に、笑顔をば見せ、室内へお入りよ、と言ひ掛けなから

冬子の顏を差のぞいて、ねえ、時、この冬樣はネ、だだばかりでねて、困つちまふのよ、まア、どじようだんでございませう、本當なのよ、お時は何のまにか冬子の傍ににじり寄て、冬子樣何うしてさう、おむづかりなさいます、お姉樣がご病氣でいらつしやるのにお世話をおやかせ申んじやございませんよ、とお時は、したり顏に斯言つて、冬の大根其儘と言つた樣な手を冬子の肩に掛て、サア冬子樣、お母樣呼でいらつしやいます、時と一所にまゐりませう、冬子はお時の言ばを耳にも入ず邪けんに肩をゆすぶつて、母樣呼であしなくつてよ、あれまア、とお時は眼を丸くして、本當に呼でいらつしやいますよ、ねえ鈴子樣、お時は鈴子の方へ、眼をうつして、言ふ、あゝ本當かもしれないよ、と鈴子も相槌を打て、早くいつてごらんなさいな、いやな時だわ、妾の顏が何が可笑いの、そんなに笑なくつても、よくつてよ、然うじやございませんよ、とお時は故とらしく口をすぼめて、何か言ふとしたが、うつむいて了つた、冬子は拍子拔がしたらしく、鈴子の顏とお時の顏を等分に見くらべて居る、戸外には淡い日光をあびて梢をとび交ふ雀の二三羽、嬉々としてさへづツて居る。

下

冬子やお前は何故然う分らないんですよ、茶の間の火鉢に寄掛つた母のお由、四十五六の小造りな、色は少し淺黑いが人好のする顏、冬子は甘へる樣な調子で何うしてさ、母さん、何うしてつて、お前、母樣があれ程言ふのに、姉樣に話たてせう、冬子は丸い眼をきよつとさせて、いゝえ母樣約束はしたけれど妾まだ話しやしないの、何故約束なんかするのですよ、本當にお前にや困つて了ふネ、母樣があんなに言つて置のに、お由はなじる樣に言ふ、冬子は返事に詰つて、少時ためらつて居たが、いゝじや有ませんか、義兄樣です者いゝえ、よくア有ません、お由はこゑに力を入れる、だつて、妾姉樣にすまないわ、と冬子は悄れたが、ふと思出した樣に、につこりとして、母樣は、やつぱし春子樣を見違てるんだわ、ホヽヽヽ、妾が何うして見違るかネ、お前樣の方が見違てるよ、いゝえ春子樣だは、春子樣が、義兄樣と一所に歩のに、何も可笑い事がないわ、お前はよくも見もしないで、とお由は面をしかめて小ごゑになり、彼の女を春子樣だと言けれど春子樣ならも少し高くなくつちや、言ひもあへず冬子は、お由の言ばをひつたくる樣にして、あら母樣こそ

見違てるわ、春子様が義兄様と一所に歩た位、話たつていゝわ、お由は心から困つたらしく、吐息して、然うお前が一途の思込むなら、母様今話て上るから決して姉様に話しちやいけませんよ、先刻の様に忘たり、約束したりしちやいけませんよ、冬チヤンいゝテ、きつとてすよ、お由はくり返し念を押して冬チヤン姉様はテ、とお由は、流石に言よどんだが思ひ切た様て姉様はテ、もう青山には、歸らないのてすよ、えッ眞實と冬子は、眼を丸くして思はずこゑをはづませた、お由は無言てうなづいた、直とまたつゞけて、だから姉様に話しちやいけないと言ふのてすよ、今日逢た彼の女は、春子様じや有ません、あゝして歩く處を見れば姉様の後に來た、お嫁様てせう、母様も聞た譯てないから、よくはしらないけど、まア然うとしか思はれないのに、其な事を姉様に聞したら、折角よくなり掛つた病氣が、またぶり返して取返しの付ない様になつたら、お前何うします、こんな事が有といけないと思から、母様が夫となく言つて置んてせう、夫をお前が見違てゝ餘けいな事おしやべりしちやいけませんよ、え分つたかへ、じや其つもりてあんまり、姉様に世話をやかせない様にしないといけませんよ、夫てなくも姉様可憐さうなんだから、冬チヤンや、よく分つたてせう、お由はこゝ迄言つて、そつと涙をふいた、冬子はきざみ付られた人形の様、身動もせず、あつ氣に取れながら、聞て居たのて有たが、いかにも不審に堪ぬ様て、姉様何故離縁つたのてせう、其返事をうながす如く冬子は、お由の面を凝と見上た、其涼しいひとみには、あやしい雲が掛つて居る、何故つてお前、お前に其な細かしい事話したつて分りやしませんよ、流石にお由は之以上語る可き勇氣がないのてあらう、じゆつなささうに顔をそむけて、次のまに入つて了つた、後に取殘された冬子は、つゞいてお由の後を追つて、母様きかしてくれたつていゝてせう、お由はむねのくるしさをしづむるまもなく、冬子が何處迄も聞ふとするので故とらしく、しかる様に、お前様が聞たつて仕方が有ません、平常は蜜の様に甘い母親も急にこわい様な氣がしたので有らう、冬子は言ばのつぎほがないので默つて了つた、冬子は、この夜、頭痛を口實に、母の前をつくろひて、宵より床臥に夜着引被つて、しくしく泣て居た、今迄は病氣のため、かへつて居るとのみ思つた冬子、ねみゝに水の鈴子の離縁、母の口よりきかされて以來冬子の様子は、がらりとかはつた、昨

日迄は我儘一杯の、母もお時も、もてあましたのであつた、今日は口さがないお時の、うわさの、種にも、のぼらず、あの奥様「冬子様がこの頃はすつかり、大人におなりなさいました、と、お時の口振、まん更おせじでもない様子に、まゆをひそめたのは、お由一人ではなかつた元來が姉思ひの冬子、日をふるにしたがつて鈴子をやさしく慰さめるのであつた、其都度鈴子は例の浮ぬ顔に、淋しく笑を洩すのみ、元より鈴子とて年は行かぬ冬子の眞心こめた慰さめを嬉しと思はぬにはあらねど少さきむねにきざみし哀史を慰するにはたらないのであつた、ともすれば、世を悲観して、人しれず、夜着引被つては泣て〳〵涙のつきる程泣て漸く泣きやんだ涙の下からまた意氣地なく泣のであつた世は霜枯の寒い風の吹くある夜の事、鈴子はいつになく元氣付て、冬子を相手に夫から夫と話しに花を咲して居た「少時でもかうして忘れて居る夫だけ冬子もうれしいのであらう、涼しい眼に笑をたゝえて、ランプの光りが薄ら寒げに鈴子の面をてらして、やつれた中にも、どことなく氣高く、美しくまた艶なる姿を、うつとりと見とれていたやがて冬子は、姉さんあんまり、おそくなると、悪くなりやしませんかネ、と冬子は、やゝ氣づかうのである、よくつてよ、冬チャン、妾今夜はたいへん氣分がいゝのだから、ゆつくりお話ししませう、そしてネ冬チャン、いつかのお前の話し、今夜こそきかして頂戴な、いゝでせう、と冬子の顔を凝と見詰る、冬子ははつとむねとゞろかした、忘れてゐたと思ひの外不意にとはれたので少時ためらふたが故とらしく笑ひにまぎらして、姉様妾ネ、どんな話だつたか忘れちやつたの、とわづかに言ばをにごして言ひ抜けたが、今頃鈴子の口から斯問はれ様とは思寄らなかつた、て、むねとゞろかすと共に少からず心も動いた、一そ明して了はうか、いや〳〵夫では母にもあれ程言はれ自分も慰めた甲斐もなく、この上姉様を泣してはすまない、何も姉様のため何う

（入賞）　佐野貞子



しても明されぬ、と冬子は早くも決心した、鈴子はものたりぬ樣で、然う、でも、冬チャンは忘れぽくもないくせに、どうして忘れたのかネ、まアいゝわ、と鈴子は深くも問はず語を轉じて、だけどネ冬チャン、と言掛て何と思つたか、不意に言ばをくひ止た、何なの姉樣、詰らないからよしませう、と鈴子はほろりとした、また、姉樣は詰らない事考たの、冬子も涙ぐんでもうねませうよ、然うネ夜更しちやまた、母樣心配するわネ、と鈴子はほつと吐息してつく／＼堪られぬと言ふ樣で冬チャン妾眞實につらいのよ、と、はら／＼と涙を流して、みんなが心配してくれるので、つらくつて、と涙にむせぶので有る、姉樣お察するわ冬子も涙を飲のて有る、さう？、察してくれるの、鈴子は涙の顏を上て冬チャン有難うよ、眞實に妾切なくつてネ、後は言ひ得ず涙にむせんで、つと冬子の手をかたく／＼握りしめて、また一しきりあつい涙をはら／＼と注ぐのであつた。

蠶が絲を吐くやうに、縷々數千言面倒くさいと思ふほど細く書いてあるが、此作ほど女らしい處のあらはれて居るのはない、初めは廻りくどく、うるさいと思ひながらも讀みつゞけてゆくうちに、自然と涙の落るのを禁じ得ない、姉妹の美くしい情が深く人の胸に反應するからであらう、少くも女の方は讀んで御覽なさい。（評）

逝く日

一

本所　秋山欣子

お墓參を濟まして乳母を一足さきに歸し、寂光院の燒塲をぬけ、一人ぶら／＼歸つてきて裏木戸を閉めやうとすると、

『姉樣は一體僕を何と思つてるんだ。』捨鉢氣味なさびた聲が、ふつときこえる、オヤ、と私は一寸立留つて、ためらつたが、あゝ昨晩の事いつてるんだな、と氣がつくと、また妙に聞いてやりたいやうな、この儘返るのが惜しい樣な氣がして、紅緒の日和下駄がひとりでに前へ出る、何構ふもんか、見られたらそれまでと思ひ切つてそれでも出來るだけ音をさせずに離のいにしだの影を回つて、春の色をほのめかした小柴垣へ密と身をよせる、久し振りて歩いたので、忙しく息切がするのを凝と堪へて、兩手てかすかに痛む胸を押へる、大八ッての藥て何も見えないが慥に信也さんと妹だ、

『夫りや僕は、姉樣から見りや家臣同樣さ何しろどこの奴か知れないのを、亡父樣の力一つて、學士とか何とかいはれるものになつたんだから、併しねえ歌ちやん、僕も姉樣には隨分盡した積だよ、亡父樣が失くな

られてから以來つてもの、姉樣はあの氣性だし、歌ちやんはまだ小兒だらう、洋行へいつてゝも、自慢ぢやないが、忙しい中から手紙は絕やさず、始終氣に懸けて居たものさ、だのにどうだ、歸つてから姉樣は一遍も僕に逢つてくれない、夫もいゝが今になつて婚約をよして異れろ、歌ちやんを貰へ、とはあんまり、人をふみつけた。』一寸途切れて『が、まあいゝや、いつたつて要らんナ、』嘲ける樣な、沈んだ樣な調子て、こういつて態とらしく苦笑する。

誤解してるんだ、と思ふと胸がまた烈しく痛みだす、併し、信也樣は其程に私を思つてゝくれるのか知ん。懷かしい、懷かしい、逢つて見たい、チヨッとなゝと見たい、いつそ飛び出やうか、頭が糸の樣にこんがらかつて、目が眩む、體が堪らない樣にふるへる。

『えゝまゝよ。』と思はずふみだした前足に力が籠つたのか弛んてた鼻緖がすつと切れる、氣を拔かれて、ハツと我に反る、『そう〳〵自分は肺を病んてる體だつた直死んていく身なんぢやないか、一目、只一目、信也樣に逢つたからつて何だ、胸の痛を增す許ぢやないか折角、幾日を費して壓へつけた情の炎を、また燃しつける樣なもんだ、止さう、止さう。』唾を呑み込んて、疑と目をねむる、戸端に、よく透る細い聲て、

『あら兄樣、さうむきになつちや私ほんとに困るわ、そりあ兄樣の被仰るのも御尤だけども、少とは姉樣の身にもなつて考へてあげなくちや。』と歌ちやんは口を切つて『病氣が病氣なんだから、ほんとに御氣の毒なんだわ、昨晚だつて、お父樣やお母樣の御位牌の前て兄樣と私として水野の家名を立てゝくれる樣につて賴む樣に被仰つた時は、私、悲しくつて〳〵——どうしてまあこんなにも不運なのかと思つて——私は出來るなら姉樣と替つてあげたくて、思はず泣いちやつたんですもの。』聲を呑んだ樣子。

妾は其の可愛い聲が、いつになく銳く、冷やかな響て胸元をえぐられる時はかうもあらうかと、思ふ程、銳く響いて、空々しい、何つて事だ、言にまて虛榮をはつて、男の心を引つけ樣とするのか、チエツ嫌らしいもう〳〵金輪ざい妹なんかとは思ふまい。

唇を痛い程かんて、空を見つめて居ると、泣いてるのか、恐ろしくひつそりして、時々向合つたお隣の裏二階からハモニカが優しくひゞく、人の氣も知らないて、と舌打しながら見あげると、境の槇の葉の梢を越へて、白さけた夕陽が足許の龍膽まてすべつ

て、母屋へ續くどうたんの株の並びをうつすらと照反す、春日燈籠を抱いてる枯れたまんまの柳のこぶと脊合せに、枝を思ふさま伸した木瓜がちよい〳〵咲きかけて、其隣のかれ〳〵なむら薄の一簇から、小鳥が妙な聲て啼き乍ら御隣の連翹へ移つた、あとはまた靜かになつて、春も淺い夕の太氣はシツトリと濕りを帶んて、そよとの動搖すらない。

何て幽しい景だらう、氣も心もかう溶けていくやう、丁度、魂のおらびた罪人が、冷たい石の床に紛焉を呼ぶ刹那の想はかうもあらうか、今の私の境遇には、實にふさはしい脊景。

いつそ此儘。死んだら!!!　妙に情けなくなつて、胸がまたかつとなる、ハモニカがいやに哀れつぽく聞える

「えつ情ない――何故こう私は死ねないかしらん。」いらいらと搔きむしられる様に身を搖ぶる。

御孃様々々々と續けざまに誰かゞ呼ぶので、ふいと首を擧ると、母屋の椽に乳母が手招ぎして居る、變な顏して庭下駄はかうとするのを、手を振つてにらめると氣に懸ると見えて振り返り〳〵引込んだ。

「そんなら僕に、姉様自身いへばいゝんだ。」突然、はうる様な調子て信也様がいふ、「まあ。」と妹の呆れた聲て、

「兄様つたら、隨分同情心のない、姉様から直接にそれをいへると思つてらしつて。」

「歌ちやん。」と抑壓つけといて、また一寸ためらつて

「分つたよ、歌ちやん、僕は今だからいふが、僕は、僕は却つて本望なんだ、僕は元來姉様よか歌ちやんが好だつたんだ――。」

流星の様に、或物が腦へピリツと觸れる、咄嗟の間に將來を齎く思想の、それよりも尙早く、私はキユツと胸を抱いて、下駄を引づツたまんま、萩の刈株の上となく、傍となく、滅茶苦茶に居間の敷石の横まで――

二

目を開いて見る、電氣が急に目を射る、枕元に心配げな兩つの顏が浮ぶ、妹と乳母だ、私は何時寢かされたらう。

「御孃様、御痛はいかゞて被入います。」と乳母は摺膝て進んて、不安の眼光に凝と私を見る、私はまた卒倒れたんだな、と思ひながら、

「あ、もう可いのよ乳母、濟まないねえ心配計りかけて。」

「なんの勿體ない、乳母はもう。」いひかけて、ほろほ

ろと湯の様な涙を、小夜着の襟へ落す。
私は目をつぶる、明けて一昨年、父と母が前後して、矢張肺て失せてから、一層私を大切にしてくれ、私も母の様に思つて我儘もいふし、力にもして、行く／＼自分の身が固つたら、隠居の一つも拵へてやつて——とてんな思慮て居たのだつたが、今となつては皆夢、水野の家にどてまでも悪症はつきまとつて、私も遂々昨年の字蘭盆頃から夫を病んだ、最後キツパリ諦めた私は、昨夜母の忌日だつたを幸、妹、僅一人の妹歌ちやんを説いて、亡父から許された信也様、人からも許された其人を妹と夫婦にして、水野の跡を繼てさせる事に決めたのである、が、乳母に話すのは忍びない、確りした信也様の返辭を聞いた上て、否應なしに、とてんな目算だつたので——、それからが今日の立聞きと思ひ出す。
「姉様。」突然歌ちやんがよぶ、そつと溫かい片が額に觸れる、「苦しくはなくつて。」と汗を取つてくれる、夫には答へずに、「乳母。」と私は目をあいて、襦袢の袖てしきりと目を擦つてるのを目を据えて見ながら、
「私ね、歌ちやんに一寸話があるのよ、だからねえ乳母後生だから退いてゝおくれてない？居たつて可い事はいゝんだけども。」と心にもない事を云ひ足す。
「はい。」とまた私の顔にうるんだ瞳を向けて、「昨晩の様に遲くおなり遊ばしませんのなら。」と恐る／＼、私はいつもの快活な聲に反つて、態と笑つて見せて、
「あ大丈夫よ、今宵は少許なんだから。」
「おや可成お早く。」と立つて、「お歌様もし御用てしたら直ぐ御呼び遊ばして。」
「あゝ心配おしてない、早くお出て。」と歌ちやんの聲をきいて、又一寸私を見て、さも氣になる、といつたやうな態に引退る。
耳を澄して、足音の遠くへ消えるのを默つて聞いてる茶の間の障子がトンと音するのを待つて、私は寢返り打つて、「歌ちやん。」とよんだ。
歌ちやんは無言てにぢり寄つて、華奢な左の手をつい

（入賞）加藤つたへ



てそつと私の顔を見る。

大理石を刻んだ様な下豊の頬、濃い恰好のいゝ眉と、表情に富んだ二重瞼の切長な眼のあたりに、どこか御母様の俤が殘つて、眉の下からふつくり山をあげた鼻は御父様を其まゝ、生際のふるひつきたいほどすつきりしたのが、色白の顔をグッと引立つて見せる。其目が信也様を引つけたのか、其えくぼのよる眞紅な苺みた樣な唇て、私の夫を迷はしたのか、えつ口惜しい、私は信也樣に嫌はれて居たんだ、それも妹がある許りだ、口惜しい、憎らしい、口惜しくて、寢衣の袂を、ビッッとかみ裂る。

「歌ちやんつ。」かみつく樣によぶ、妹は吃驚して見る

「簞笥の一番上の引出に、三保松原の蒔繪の手箱があるだらう、出してお呉れな。」疳高にいふ、妹は心得て立て引出をあけて閉めて、「姉樣これと？」持つてくる

「明けませうか。」と首を傾げる、私は絶えず妹の顔を覩ながら、

「小さな鏡が入つてるだらう、御出し。」手を伸すと密と載せて呉れる「其むつりとした手を、確りと握つて鏡を左の手に持更へて、ありくと寫る「青白い、頬骨の凄い程たつた、自分乍ら呆れる程やつれた顔と、妹の若々しい十七の其顔とを、いつ迄もくゝ見競べる何と思つたか妹はシクく泣いてる、鏡を胸の上に載けて、また、「歌ちやん。」とよんだ、脈搏のいやに昂ぶつてるしなやかな手首を、思ふさま握りしめて、

「歌ちやんは、姉樣が死んだ方がいゝだらう。」

と皮肉つて、私は穴のあく程、妹の顔を見詰める、みるく口がゆがんで、唇がピクリと動く。

「まあ姉樣は！」手の甲へボロッと涙が零れかゝる、暫くうつむいて泣いてたが、堪へられないと見えて、握られた儘の手を斜かひに、枕元へ突伏す、戸端に格好のいゝ丸たぼの後を留めた水牛の角髮が、光線の工合でキラッと輝る、横ざまにさした紫のクローバがすりあげる度に搖く。

私は何となしに、いゝ氣味の樣な、嬉しい樣な氣がして知らずく、一種の誇た得た時に現はれる冷やかな笑がこけた頬に漲る、手を漸と放して、眞白な襟足を覩きこみながら、勢に乘つた私は血に飽く虎といふ見得て、

「歌ちやん、空泣きなんかおよしなね、見えすいてるわ信也樣も姉樣は嫌だつていつたし、歌ちやんもいはずと、好ぢやなからうしさ、散々いびられるこつたら

う馬鹿々々しい、何故こう私は因果なのか知らん、邪魔にされる、死なうにも死なれずつ。」思ひきりいつて、胸が晴々する、枕時計が入時を打つた。

「姉樣はあんまり――あんまりひどい、信也樣だつて私だつて、嫌だなんていやしないのに――」

濡れた顏をもたげて恨しさう、

「おだまり、昨日の事、なにもかも聞てるんだよ――氣を引いて見たのに、可い氣になつて、あのざまつたら何だ、人を馬鹿にした――信也樣も信也樣だ。」

氣を引いて見たのに、だけは妙に力を入れていつて、上氣したらしい美しい顏を眞面ににらむ。

「私は何といはれたつても、私は姉樣を邪魔にするなんて氣はこれんばかしもないんだから。」と暫く考へて

「だけども姉樣は私の心を少とも御存じない――そしてそれて私を欺して信也樣に、あんな恥かしい事まで賴ましといて――。」

口惜しさがこみあげたらしく、またつッぷす。

私は目も離さずに見て居ると、お佛壇の鈴がチーンとなつた、鼠か知らん、とひよつと首をあげる、お兩親の大寫眞が直と目に寫る、凝と氣を靜めて見て居ると灯のせいかして、急にお母樣のお眉のあたりが曇つた樣に見える、妙に物悲しくなつて、密と目をそらす、いらしつた當時を追想する、御臨終の間際、私と妹の手を、瘦せた兩手に御握りなすつて、

「二人仲よくして、信也樣によく相談して、水野の家をつて被仰つた事を、ふつと想ひ浮べる、刹那!!!

はつとして、

「あ、いひすごした。」と氣がつく、急に妹が可愛想に成つてくる、泣き倒れてるのを見ると堪らない、何故私はこんなに妹を泣かしたらう、どうしてこんな優しい妹を一寸でも辛い目に遇はしたらう、廣い世の中に只一人の親身の妹を、假令一日でも、どうして私は苦しめたらう――、恥をかゝせて置いていゝ氣味だなんぞと思つてるなんて、なんてまあ、私は鬼の樣な――悔悟の念が犇々と迫つて、はら〳〵と淚が湧く、やにはに起きあがつた私は、鏡も何も投り出して、

「歌ちやん、勘忍おし姉樣が惡かつた、よ歌ちやん手をつくよ、勘忍するといつておくれよ歌ちやん。」

寢衣の儘で、妹の上へ、

と、電氣にでも觸れたかの樣に妹は起き直つて、

「あれ姉樣、また無理して、惡くなると不可い、さ、

早く床へ入つて、と、無暗に寢かせて、

「私、怒もどうも爲ないんだから、姉様さへ分つたら私はどうもないんだから。」とまだ泣きすゝつてる、

私はもういとほしくて〳〵、

「歌ちやん、眞に勘忍おしかえ、そしたら機嫌を直して乳母か、松かに、信也様を迎ひにやる樣にいつておくれてないか、今夜はね、大變氣持がいゝから、姉様から信也様に直接に逢つて、お前の事をよく御願するから、ね可いだらう。」のぞく樣にしていふ。

「だつても姉様は、先刻、氣を引いて見たんだ、つて被仰つたくせに、今になつてそんな事いつて、また私を——私は馬鹿なもんだから。」と一寸口籠つて、

「私、姉様さへ可愛いがつて下さるんなら、私、信也様なんか貰はないだつていゝんだから。」なんて、手巾て目をやたらにすりながら、すねるのだもの。

「ホヽ信也様なんか貰はないつて、小兒ぢやあるまいしもう可い加減に笑つて御覧な、よ歌ちやん、そして遲くなるぢやないか、え、早くよびにやつておくれ、そら〳〵そんなに姉様に世話をやかすもんぢやないよよ、歌ちやん。」私は首を傾げて莞爾する、妹は默つて夫てもいやさうに立つて行つた。

見送つて私はまた、投げ出されてた鏡を拾つて見て、痩せた腕を眺めて、思はず母の名をよんで、そして、逝く日の近づいた事を、誰にともなく感謝するのであつた。

女の嫉妬心、偏執の一念、その上病身で他人も一族も皆妬ましく見える、況して自分の夫たるべき筈の男を妹にくれる、如何に妹でも其處が女の淺猿しさ、妬みの炎に煽られて、氣も狂はんばかりに罵ると云ふ混入つた筋ではあるが、無難の出來榮え、随分書き難い筋て元來が矛盾した性格を表はすのだから骨が折れる。(評)

友千鳥

豐橋　藤田小百合

机の上に置いた小い花瓶に入れた水仙の香が幽かに迫る、風も凪いだ冬の夜の八時頃。

落葉を踏む音がしたと思ふと、障子越に、

「清さん、清さん。」と無邪氣い聲がした。

「はあ、お入んなさいよ。」

其の机の前に、陶物の火鉢を抱へつゝ雜誌を見て居た清さんが言ふ。

「あら厭、私清さんを呼びに來たのよ。」と可笑しさう

「何か用かね。」

「あのね、お祖父さんがお茶が沸きましたから、被來いつて。」

『有難う。』と未だ雜誌から目を放たぬ。
外に立つたのは些と甘氣味て、『被來いよう、さあ、一緒に。』
『はあ。』と漸く、大きな影法師が上に消えると、燈火を背に、煤びた障子が開いた清さんの姿が現れた。
清さんは小造で色が黒い、村の小學校の先生である。
『千代ちやん、御苦勞樣。』
『まあ、御苦勞樣だつて、おほゝゝゝ。』
清さんも笑ひながら、ちやんと揃へて脱いである下駄を突掛けて、植込の間を拔けて、二人母屋に來た。
『やあ、お呼立て申して濟みましねえ。』
圍爐裏の緣に胡座をかいて居たお祖父さんが、にこにこして迎へる。
『何うしまして。』と尋常な挨拶して、清さんも爐傍へ座つた。

（入賞）　玉川しげ子



圍爐裏には焚落しが澤山ある。
『お千代、薯を持つて來い。』
『あゝ。』と立つて行く。
『先生、悠然するが可いよ、今薯を燒くだで。』と氣の長い事を言つて居る。お祖父さんは相變らず先生といつてるのに、千代ちやんは清さんと呼ぶ、是れは先生が恁ういふ風にしたのである。
『然うですか。』と言つて、其の先生の清さんは、暗いランプの光で祖父さんの顏を見た、見る度、誰やらの面に逢つた事のある顏だと思ふが、毎も思出せない。
千代ちやんは切板の上に切つたまゝ薯の乘せてあるのや、焙烙や丼を運んで來た。
祖父さんは直ぐに焙烙を掛け、其の上に生薯を並べて鍋の蓋をする。

「今夜はお作どんが見えませんね。」

お作といふのは十年も使はれて居る女の名である。

「はあ、今方用達に行きやした。」

「それにや風が無いから可い。」

「靜かな晩だ、暮を境に全然凪いだゞね。」と腰のまはり、太い煙管を探つて煙草を詰める。

淸さんは煙草も喫まぬ、手持なさゝうに腕組した。

「あ、然うだ、先生の許へ手紙が來て居やした。」

すると、火箸で灰に何やら書いて居た千代ちやんは、顏を上げて、「あら、お祖父さん、未だ差上げりやしないの、まあ。」と淸しい目を瞬る。

「うむ、忘れてたゞ、戸棚の上にある、ちやつと持つて來い。」

千代ちやんは些とも遠慮なく、駈出して取つて來た一通の封書をば、淸さんに渡した。

「此手紙、女の方から來たのね。」

「うむ。」と唯笑ふ。

「私誰から來たのか知つてゝよ。」

「おやあ誰？」と封を切つた。

「あのね、淸さんの阿母さん。」

「はゝゝ、お祖父さんに聞いたね。」

「あら、然うぢやないわ。だつて、いく、と昔の字で書いたるんですもの。」

「はゝゝ。」とお祖父さんは齒もない口で大笑。

淸さんも笑ひながら、繰擴げて眼を通して行く。

「阿母さんはお變もないだかね。」

「はあ、有難う、お祖父さんに宜しくつて事です。」と讀んで了ふと、元の如く封筒に納つた。

「私淸さんが阿母さんに、一度逢つて見たいこと。」

「逢つたら、恣意だて屹度愛想をつかされるだよ。」

「あら、可くつてよ、お祖父さん。」

「何、愛想なんかつかされるものかね、私の阿母さんは、千代ちやんのやうな娘が大好だもの。」

「まあ、おほゝゝ。」と美しい瞳が輝いて、心から嬉しさうな笑顏をする。

「然して、千代ちやんは最早直きに阿母さんに逢ふんだらうよ。」

「あら、何うして。」

「阿母さんが來るもの。」

「眞個？」

「ふむ。」と頷いた淸さんは、千代ちやんよりはお祖父さんに、「何ですよ、此休課にね、歸れつて言つて寄來

たんですが、私は、此方に居ないぢや都合の惡い事もありますから、寧そ母を呼んで遣らうかと思ふんですよ。其の方が、一入喜ぶに違ひないんですから。」

「其れが可いだ、はあ、可えてがすよ。」とお祖父さんは直ぐに賛成する。

「何彼と又御厄介なんですが。」

「何の些とも關ふものか、然うして上げなさい、是非然して。」と頼母しい口吻。

「あの、何日頃被來るの、阿母さんは。」と訊いて見る。

「其れは未だ解らないさ。」

「然う。」

阿母さんも清さんの通な人と一人て決めて、千代ちやんは一時も早く來れば可いと思ふ。

話が途切れると、最早可い時分と、祖父さんは焙烙の蓋を取つた、湯氣が白くぱつと立つ。

「お千代、串は何處だ、之か、可し、うむ、もう燒けてるだ、上等よ。」

其處で丼へ取出して、代りに生のを入れた。

「さあ、先生。」

固より遠慮のある中ではない、三人の手はかはる〴〵丼へ出る。

「はゝ、先生の前だが、矢張薯はお好きだと見えるだね。」

「大好物さ。」

「結搆な事た、其れが下戸の證據だてね、死んだ倅なんざ豪い酒飲だ見向きもせなんだ、能く泣かされたもんてがすよ。」と十八番を云ふ、此倅は千代ちやんの親て三歳の時腦充血て死んだ、阿母さんもまた程なく其のあとを追つたので、千代ちやんは其れから此祖父さんに育てられたのである。

其の所爲かして、ふつくりとした下ぶくれの、可愛い丸顏で居ながら、千代ちやんは何處か寂しく沈んで、哀れつぽい處が見える、と清さんは然う思つて居る。

丁度二度目の薯も燒けた。恁うして話し〳〵喰べた、腹一ぱいになると、清さんは、更けない中に、同僚の岡野さんの處へと言つて立上る。

「あら、私も一緒に連れてつて頂戴。」と隙かさず言ふ千代ちやんは、過日、岡野さんの處には雜誌が澤山あるから美しい口繪を見せに連れて行く、と清さんの言つたのを忘れずに居るのである。

清さんは直ぐ承知して、

「ぢや、小亭へ行つて本を取つて來るからね………。」

旋て二人は出て行つて了つた。

祖父さんはお作の蹄るのを待つて片附けさせる氣の、爐傍を離れず、又煙管を取上げつゝ、

「眞にな、那麽温順しい人も少ねえ。那麽子を持つた阿母さんも幸福者だ。」と獨言つ。それから其の阿母さんに就いても、いろ〳〵と想像して見た、勿論祖父さんは浮世に長い經驗を積んで居るから、それは千代ちやんの如き單純なものではなかつた。

淸さんをば小亭に下宿させたのは今年二月の事で、其れから仔細に觀て居る祖父さんは、今では、全然其爲人に感服して居る。一體淸さんは大の讀書好なのだから、暇さへあれば手から本を放さぬが、其れをば甚く褒めつゝ、那言ふ人は、末には屹度豪い者になるだらうと言つて居た。又千代ちやんと、他所目には兄妹かと思はるゝ迄親しくするのを見ては、嬉しさうに笑つた。而して何時の間にか、お千代の婿には那麽人を、否彼の人をと心の裡で八分迄決めて了つたのである。て、其れとはなしに、鄕里の摸樣をも訊いて見ると、父が淸さんは些とも氣が着かないで、包む處もなく、父が去年亡つた事や、自分が三男である事などを話した、今も無論那麽心で尋ねられたのだとは知らぬ。

容こそ可成だけれど、千代ちやんとて未だ小兒のやうなものなのだから、差迫つたといふてはないが、其れても、阿母さんといふのは甚麽人なのか、逢つて見たいやうな氣がして、兎も角祖父さんも、其の人の來るのが待たれたのである。

此祖父さんの家は、今は餘程衰へて居るが、其れても未だ村では第一流なので。

二人は、薄靄罩めた夜の道、其の道に添つて飛び〳〵にある農家の、早雨戶を鎖籠めて灯影もさゝぬ、他には人氣もないやうな邊をば、通り馴れて居るので提灯も持たず、星明で辿つてゐる。

「今ね。」と淸さんは取つて來た本を持直して「小亭のランプをフッと吹消すとね、炎が煽られて、ホヤに絡むやうになつて上の方へ消えたが、其の時、机の上の水仙の花が、ぱつと大きくなつて、千代ちやんの顏に見えたよ。」と笑ひながら言ふ。

「あら、噓よ。」

其の水仙は千代ちやんが插したものなので。何時であつたか、淸さんは生徒四五人と、千代ちやんとを連れて、後の山へ遊びに行つた事があつた、その時、山白合の咲いてゐるのをば折つて來て、花瓶に入れて、旋

て其れを歌にして手帳へ書付けた。それを強て見せて貰つた上に其の意味迄委しく話して貰つた千代ちやんは、其れからその花瓶に花をば斷たないので、何もない時には、白粉の花を折つて入れた事もある。

清さんは和歌を作る、又俳句をもやる、新體詩や文章を作るのは其れ以上に好なので、藝術家といふ名を聞いたゞけでも胸の血を躍らすといふ風である、新らしい趣味は殆ど其生命と云つても可いので、座敷の壁には西洋の文豪の肖像――雜誌の口繪を取つたのが一面に貼られて居る、是に見入る度、清さんの瞳は美しい夢にでも襲はるゝやうになるので。

而して、這麽田舍の小い村に居ながら、若い心は、絶えず時代の新らしい思潮の流を汲まうとして居るので、宛ら渇ける者の泉を思ふやうに、藝術に關した新刊の書をば讀みたがる、けれども薄給の身の、思ふやうにも買はれないから、同じ心の友、岡野と貸したり借りたりして、其の幾分かを補つてゐるので、今夜も今持つて居るのを返却して、他のを借りて來やうといふ意。

（賞外）　井上さわ



『今夜は暖かな晩ねえ。』と千代ちやんが思出したやうに言つた。

『然うだね、何だか春が來たやうだ。』

『這麽晩岡野さんは居らつしやるんでせうか。』

『居るさ、那の男の事だもの屹度本でも讀んでるよ。』

『然う言や、あの、奥さんをお持ちなさるんだつてね。』

『うむ、お祖父さんに聞いたかね。』

『否え、今朝お作が然う言つたの。』

『千代ちやんは其れを何う思ふかね。』と、兎も角も訊いて見る。

『何うつて、其れは私可いと思ふわ。』

『何故。』

『あら。だつて、その奥さんと、お友達になつて頂かうと思ふんですもの。』と癖て、妙に人懷かしがるやう

なことを言ふ。
濟さんは暗を透かして一寸其の横顔を見たが、寂しく笑つて、「千代ちやんも、お嫁に行つちや何うかね。」と調戯を言つた。
「あら、私お嫁なんかに行きやしないわ。」
「それぢやお婿さんを貰ふんだね。」
「厭よ！那麽事を言つちや。」
「ぢやあ何うするんだね。」
「私はね、あの、何時迄も、濟さんと仲好くして居ればいいのよ。」
「はゝゝ。」と高く笑ふ。
「あら、笑ふんだもの、隨分よ、濟さんこそお嫁さんを貰ふが可いわ。」
「お嫁さんを嫁ふと、もう千代ちやんとも仲好くして居られなくなるが、それでも可いかね。」
「まあ、何うして。」
「何うしてゞも、屹度然うなるんだよ。」
「眞個に？。」
「うむ。」
「ぢやあ貰はない方が可いのね。」
「然うさ。」

「だつて、濟さんも最早直きにお嫁さんを貰ふやうになるんでせう。」
「何貰ふものかと。」屹と肩を聳やかして眞面目で言ふ
「然う。」と千代ちやんは直ぐに安心した容子て、
「なら、岡野さんだつて、奥さんを貰つたら、もう今迄のやうに濟さんの處へは來なくなるんでせうね。」
「然うだらうさ。」
「ぢやあ詰らないわ。」
「眞個詰らない。」
濟さんは、岡野さんが結婚したなら、其の爲に縛られて了つて、今迄のやうに藝術に憧れて居る心も次第に消えて了ふのだらうし、兄弟のやうに親しく思合つて居る友情さへ、虹のやうに薄れるのだらうと思つてゐるので。
道の片側は藪疊となつた、風は殆んど吹歇んで居るやうだが、それでも時々思ひ出したやうにざは〳〵と音がする。
「それぢや濟さんと、岡野さんとが仲好くしてゐるのも、最う少しの間ね。」と心細さう。
「然うだね。」
「何故濟さんはもつと早く、岡野さんにお嫁さんなん

か貰らはないやうに然う言つて上げなかつたの。」
「それは言つては遣つたんだが、然うもならなかつたのさ。」
「まあ、何故?」
「何故ッて、千代ちやんもう、少し大きくならないおや、其れは解りやしないよ。」
「然う。」といつて默つて了つた。
今こそ這麼て居るが、最早二年とは經たぬ中に、千代ちやんも全然變つて了ふのであらう、あゝ、何時迄も何時迄も恁うして無邪氣て居れたら可からうに、と淸さんは染々と然う思つた。
やがて藪疊に添つて右に折れると、前途の方に、障子に迫つて燈火が見えた。
千代ちやんは急に我に返つた如く、
「あら居らつしやるのね。」
「居るよ。」と淸さんも一緒になつて言つた、其れは岡野さんが居る家なので、其の借りて居る間の灯である。
二人は言合はしたやうに足を速めた。

くらうとらしい書きぶりだが、根本にしつかりしたものが無いから只一わたり小說になつてゐると云ふだけて、深く印象を殘さない筆は此位ゐ伸縮自在に動けば澤山だから、これからはあたまを練ること。(評)

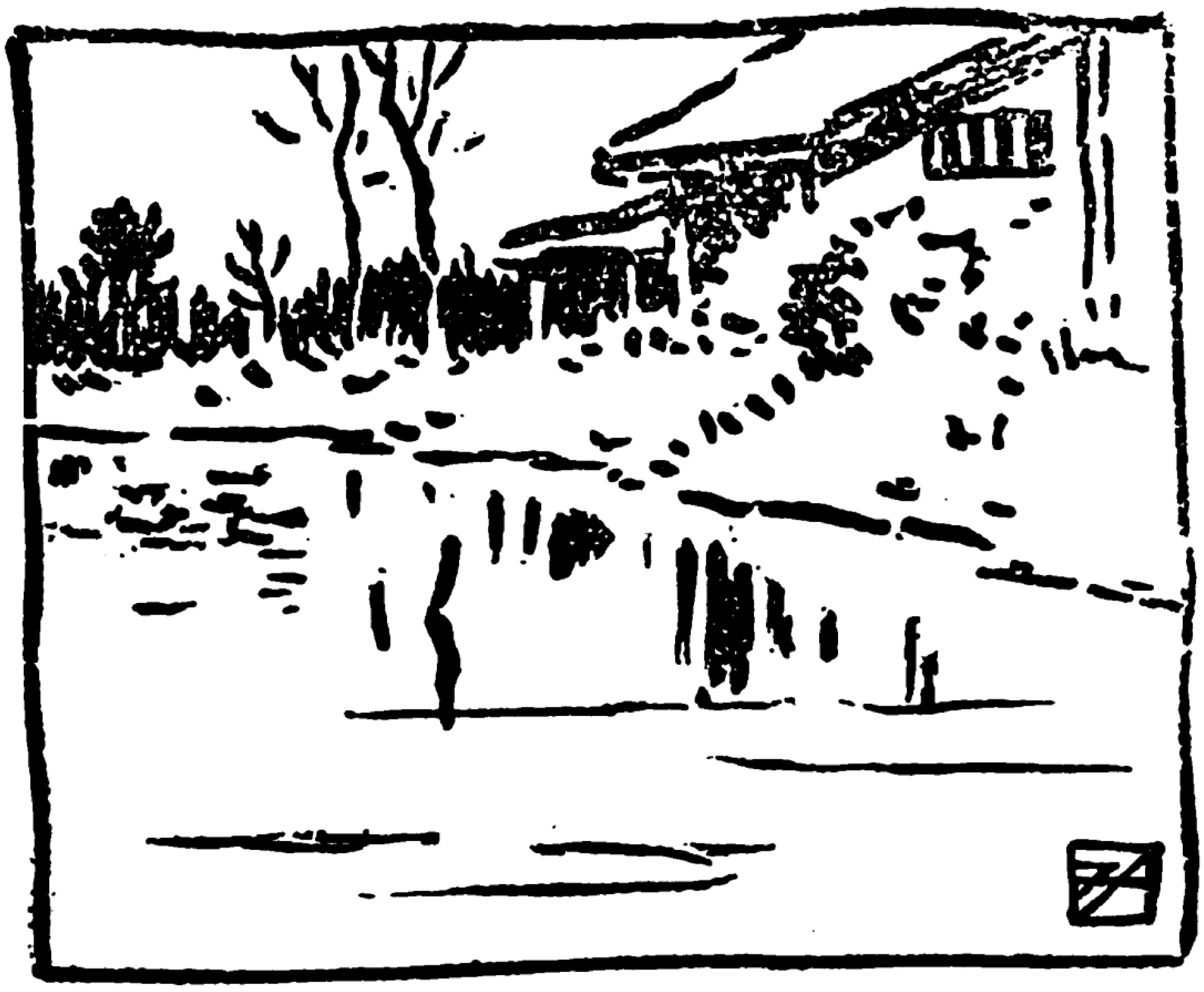
雪の夜

丹波浪江

コト〳〵と、下駄の雪を拂ふ音がして、
「おしまひなはれ。」と大きな男が、袖の邊をばた〳〵拂ひながら入つて來る。酒屋の下男—吉樣である。足袋をくけてる家の嫁樣が、一寸、會釋して、「お出てなはれ」と云ふ。吉樣は、此處へ來て、
「お寒いに、よう御湯たきなはつて、明きましたら、どうぞ一ばいよんどくんなはれ。」
と頭を下げる。肩の邊にまだ雪がついてゐる。
「今明ますて…さあどうぞ、此方へ來てお炙りな。」
其處には、緣のかけた四升釜を箱の中へ入れた、廢物利用の大火鉢が出て居る。山根家の爺樣と吉田屋のお雪樣とが先客だ。爺樣は上に上つて、御亭主と云つた風に、火鉢——釜のへりへ、かん〳〵たゝき付けながら、よく煙管のつまるらしい粉莨を止めなしに喫んてる、少し離れて、爺樣の後に、煤けた天井から長い鍵が下つて、それに三分心のランプが掛つてる。笠は紙のながら新しい。其の下に、此家の嫁樣が夜業を爲てる。

「どなたはんにも、お寒う御座いまして。」
「へ、お寒御座す、まあ　炙して貰ひなはれ。」
と云つて、お雪樣が一寸、身を避ける樣にする。爺さんは、煙管を喰へたまゝ、うなずく。吉樣が、其の横へ來て、お雪樣と差向ひに、腰かけると、
「大變寒うなつたな、雪がひどう降つとるな。」
と吉樣の肩の邊をみながら、爺樣が口を開く。
「へい、だいぶ降りよります、この分ぢや、明朝迄にや、小一尺も積りますぢやろ。」
吉樣は、寒さうに、火鉢の中を交ぜかやして、高く盛り上げたコク葉火の灰になりかけたのを擴げる。横のお雪樣が氣をきかして、風呂の下から、十能―小さなおぼん程もある、圓い樣な四角の樣な銅の重い十能だ、それにコクバ火を山盛りにして持つて來る。庭へばら〳〵と落ちたが、直ぐ消える。
「これは、大きにどうも‥‥寒うなると、火が一番てごだすわい。」
と、うまい事を言つて、ぢつと、嫁樣の爲てる仕事を見てる。
「お寒いのに、よう夜業をしなはるなあ。」
「へい、夜業ちう程のもんやごたへんけどな、受取つとるものだすてな。」
「やつぱり町の足袋屋樣のだすかい。」
「へえ。」
「裏でも指しなはるのだすか。」
「なあに、このねえ、裏と甲との縫目、こゝんとこをねえ、糸でしめるだけだすがな、手が遲いのに、家の事しながらやて、何程も出來ません。」
「へえ、さよなら、通常の足袋とは、違うのだすな。」
「へえ、草鞋足袋たすげな、裏の皮のやうなものだしてな。」
お雪樣が嫁樣から、其の足袋を借りて見る。吉樣がそれを又借りて見る。危く、紐が火鉢へ入つたのを雪樣が氣をつけた。
「おゝ、どえらい事をしよりました、‥‥商賣品だすてなあ。」
と、慌てゝ元へ返した。
「そこだけ、縫ますのなら、日に十足どま出來ますかい。」
「まあ、あんたの言ひなはる事、どうやらこうやら、このい夜業して、五足てきる位だすがねえ。」
「さうだすかい、併し何程

になるものだすえ。」
「一足二錢八厘だすがねえ、常便貫や、糸代しよつたら何ぼにもなりしませんがねえ。」
「そら、さうだひよとも、今は何しても、ぼろい事はごだへんてな。」
話が暫らく吐絶える。爺樣は、ただ煙草を吹かしてる。そして相變らずカン〳〵やつてる。吉樣と雪樣とは、嫁樣の仕事を見てる。嫁樣は、せつせと針を動かして居たが。ふと思ひ出した樣に、
「ほんに、吉さん、俊次樣は、ちつと快うごだすかえ。」と聞く。
「旦那でごだすかい、へえ、ちつとは快い方のやうだすけど、病氣が病氣だすかいなあ。」
「ほんとにさうだす、あの病氣は、癒つとる樣でも、いつ又、變が來るかも別らんさかいねえ。」
と言つて、嫁樣は、手を休めて、どこともつかぬ處を、ぢつとみてたが、やがて、『肺病ではとても助からぬはな。』と獨言の樣にいつて、針を、二三度、クシャクシャと髮になてつけて、又仕事をつゞける。
「さあ、お風呂が明きました、えらい、ゆるつともらひましてな。」
と、風呂場から聲かけながら、上つて來る、山根家のおば樣だ。湯氣の立つ半身をむきだしたまゝ衣をかゝへて、上つて來た。
「さあ、どうぞ誰方なと、えらい、お後にしました。」
「ごゆらつとおめしな。」
吉樣と、嫁樣とが、同時に云ふ。雪樣は、輕う頭を下げる。山根家の爺樣が、『明いたかな。』といつて立ち上る。嫁さんが仕事をしながら、
「さあ、お次の衆、おゝお爺樣だ、爺樣もうしたか、ごゆつくりおめしな。』と云ふ中に、裸體になつてる。
『そんなら、先きてすまんけどな。』
と褌一つてゆく。ゴリラの樣な顔に似ず、背は



（貫外）　近藤達江子

白い、手と足が俄に黒くなつて、恐ろしく細い。

「おぢい樣、灯つけまいよか。」

嫁さんが大きく呼ぶと、爺さん、

「まだ入つとらんがよい湯のやうぢや。」

火鉢のぐるりの三人は、ふゝゝと吹き出した。嫁さんもほゝゑむ、今度は、前より大きく尋ねた。爺さんまだ、聞えぬとみえて、

『そんなら、すまんけど、一くべして貰おかな。』

と大きな聲でいふ。又三人は笑ふ。嫁樣が立ちかけると、お雪樣が『あの私が貰てあげます』と、風呂場へゆく。

『大きに、すみませんな』と、嫁さんは座つて、『受取仕事だすて、おばさん、御免なはれよ』と山根のおば樣に會釋して、仕事をつゞける。山根は此處の本家で、此家は夫婦二人暮してある。

『さあ〳〵、おかまひなし、だいぶんに、出來たな。』

と、おば樣は、髮のほつれを、かき上げながら、嫁樣を見て立つてる。

『まあ、お灸りなはれ、ひどう寒氣色になりましたな。』

と吉樣が聲かけたので『大きに。』と、其のまゝ差向ひに座つた。やはり頭をいぢつてる。

『さうだすか、まだ俊次樣は、よい目がみえませんけ。』

と、おば樣は、前の話をもち出した。

『へい、どうしても、もうこの冬は、もたまいといふ事だすがな。』

『さうけ、可愛想にねえ、けど、どんな御影がないとも限りませんてねえ。』

『へい、そらもう、信心ちう信心はしとるのだすけどな、先日も、遠坂の權現樣へ、お家樣と二人て、お參詣しただすがな。』

『へえ、御祈禱てもしてもろてだしたか。』

『遠坂の權現樣は、大變、あらたかにごだすやげなねえ。』と、嫁樣が、針を例の髮てふきながら、口を入れる。

『へえ、さうだすげな、何ても何處へ上げてもらた御燈明の灯が、風がないのに消えたら、たのんてもらた病人もあかぬといふ事だすな。』

『へい、さうだすけ。』

『それよか、あんとて、近頃に、大變、造作しなはつたちうのは眞實だすかい。』

と、おば樣が又聞く。おば樣は、やつと、髮いぢるのを止めて、帯の間から、はぎの三錢こを出して、一服吸ひつける。
「造作？へい、奥に窓が出來て、障子が悉皆、ガラスになりましたが……」
「さうだすげさな、そんな話だしたが、やつぱり何け……その病人の氣まぐれに、よく見えるやうにしたのだすか。」
「へい、まあ、さうだひよが、私等も阿呆らしてな、……つまり、私達が惡い事でもしやせんかと思つてだすてな……いゝえ、それにきまつとりますわい。」
「けど、病人はだれても心がひがみますてね。」
「へい、併し、この頃は、する事、なす事、皆、こせこせしとりますてなあ、前の大旦那の頃は、そらようごだしたけどなあ。」
「まあ、さうだすけ、そんな事もごたすまい。」
「いゝえ、あんた、きたない話だすが、御飯でも、大旦那の頃は、米一升に麥五合だしたがな、今は、あんた、米一升に麥一升だすてなあ、それに、下女が若いので、ほん叮嚀に、ガサ〳〵と洗て與れるので、そら難くそてうまごだすがな、はゝゝゝ。」
「ほゝゝ。」と、おば樣と、今きた雪樣とがついて笑つた。
「あの娘は井口の娘だすな、お雪ちやんと同年？」
「へ、せいちやんは十七？……そんなら同年だつしや。」
「十七位ぢやと無理もありませんわな。」
と、おば樣は、一たんしまつて居た、煙管を、又出して、はぎを吹せる。
「併し、俊次樣も可愛想だすわね、三十やそこいらでね。」
と、嫁樣は、いつか仕事をしまつといて、ぼんやりランプの灯を眺めてる。
「三十？明けて一になつてのだつたかな。」
「へえ、私より二つ上だしたが……」
「へい、三十、さうだつしやろ、あんなに、慾にしとつても、四十二は、とても出來ますまいがな。」
と、下男はしたりがほに云ふ。皆だまつてる。風呂の中で、眠つてやしなかつたかと思ふ程、靜に、ゆつくりしてた、爺さんが、やう〳〵上つて來た。
「さあ、お雪ちやんぢやろ、お後にした。」
ゆて蛸のやうになつた、赤い湯氣のたつ身體に、袢

纏、ぬので、てんち、襦袢と四五枚も、重ねたなり、ぬいておいたのを、そのまゝ、ごそつと着た。

『さあ、吉さん、あんたから、もらとくんなはれ、私は、もう遊んどるのやさかい。』

『いゝえ、さあ、お雪ちやんもろてきな、もう眠たからう、私ももう休ぢやて。』

お雪樣は遠慮して、とうと吉樣に讓つた。吉樣はすまんけど、すまんけどと云ひながら這入つた。

『お雪ちやんは中々よい娘になつたつたね。』雪樣にともつかと、山根のおば樣は、嫁樣にとも、雪樣は、顔をあかめて、うつむいてしまつた。

ぬ事をいふ。『まあ、おばさんは‥‥』、雪樣は、顔をあかめて、うつむいてしまつた。

『へえ、吉田屋のは、皆、大きなる程、よい子になつてだすがねえ。』

と氣がついて、嫁樣が、ほゝゑむで言つた。が、又ぼんやり、考へてる。火鉢の側へ來もしない。

話は吐切れた。電信柱に下駄の雪を拂ふのであらうコト〳〵といふ音が街道に聞える。宵からの雪ながら、二三日來のから風に、土地は、全く乾き切つてるから、もうだいぶ、積つて居やう、殊に、この地は、雪が積るのが早い。

英語でローカルカラー（地方的特色）と云ふ言葉が流行る、斯んな小說を云ふ。（評）

妻の心

千葉縣　白石光子

まあ考へても見い、私が役所から歸つて來た時に、汝が家に居たとがあるか、やれ何處へ行つたとか、何の用足しに出たとか、つべこべと云ふ口が能く減らない事だ、それや出るは幾ら出ても構はない、何も汝を束縛して年中家の內で居竦んで居れとは云はない、勿論そんな事は云はないが、汝もよく私の身になつて見て呉れ、私が朝早くから夕方まで一里に餘る途を電車にさへ滅多に乘らぬ位にして、少しのお錢も子供の貯金にでもと、注意に注意をし、細心に細心を加へて、それで日終始汗を流して働いて、やつと一日の仕事を濟して家へ歸て來る。その時の私の胸は極樂へでも往く樣に、家へ歸つたらば、女房が如何、子供が如何、これを買つて歸れば喜ぶだらう、半襟を欲しがつて居たから、今日はその喜ぶ顏を見やう、どれ五十錢奮發して‥‥いや〳〵、女房も女房だが、子供にまだ奇麗な春着でも着せやうか、それとも草餅の方を喜ぶか知らと、彼樣も考へ、此樣も想つて、懸命に歸宅を急いで、それ其處の大阪

の喩しい坂も眞一文字、靴の先を空にして歸つて見ると、

　まあ如何だらう、呆れるぢやないか、今日こそはと思つて居たのも駄目！。

　薄暗い格子口を、歸つたぞと這入つて來るのを、お歸りなさいとも、何とも聲がしない、奥の方は早や夕暗の淋しい室の隅に一人置き殘された坊やが聲を嗄らして泣いて居る、何だ馬鹿馬鹿しい、阿母樣は不都合な奴だ、怪しかる奴だと、私は誰に喰つて懸らうやうもない、唯例の癇癪玉がむらむらと破裂して、さしもに妄想を描いて笑顔見たさに持つて歸へつた半襟も、之れ此の通りべり〳〵と引き割いて了つたぞ、一體何處を如何歩き廻つて居る？何に晩のご馳走!? とぼけるない、何時も〳〵私が歸つて來る時刻を違へずに買物に出る馬鹿があるか、朝から丸一日何をして居るんだ。

（霞外）



佐藤若江

大體私が歸つて來た時に、家の内を眞暗にしておまけに子供をぎやあ〳〵泣かせて、そして汝が居ない位不快なとがあると思ふか、御馳走も何も要るものか。もう、こり〳〵だから明日からは必ず御馳走も何も願まぬ、ちえッ腹が立つわい。

毎日汗水を流して役所で働くのは、何のためだと思ふ汝と子供とを養はうばかりぢやないか、それを慰めてくれる所か、毎日毎日此んな始末は糞ッいま〳〵しい。

　それに第一考へて見ろ、近所隣りの思はくもあるぢやないか見つともない、私が何か云ふと直ぐに口應をするとばかり、はい惡ふ御座いましたと一口でも言つたとがあるか強情の張り通して、子供の始末よりも自分の喰ふとばかりに氣を付けて：：：：

　それや無論、汝は教育の足りないものさ、教育の足りないものにそんな無理なとは云はない、無理なとを云はないかはりに、一通りは道を盡して貰ひたいぞ。

小供に添乳をして、寝轉んで居るばかりが能でもあるまい。

其れに家の内が何時も片付いたとが無いぢやないか針箱から戸棚の隅に至るまで、亂雜と云はふか、ふしだらと云はふか、そして自分が縫物でもしやうとなると、やれ絲が見えないの、針が無いのと、何か私が知つた事の樣に云ひ立てゝ、そんなとを云ふ樣ならば初めつから整然と物を順序正しく片付けて置いたら可いてはないか、え、如何思ふ、少しは分つたか。

見なさい、子供の着物だつて何時から裁つてあると思ふ、裁つ放しに放擲り出して置いて、誰が何時着られる樣にする、それで今にさあ着させねばならぬとなると、尻に火がついた樣に周章るのだ、そんな事で子供の養育が出來ると思ふか、躾が出來ると思ふか、もう汝も一人前の人間になつて、子供を産んだ程ならばそれ位の事は氣が付いて呉れそうなもんだのに。

まあ實に呆れるぢやないか。

私は毎日外へ出て、頭腦をつかふ、其の苦勞は並大體てはないぞ、その苦勞を夕方家へ歸つて汝に慰めて貰ひたいばかりて樂しみにして歸ると、直ぐに此麼ことだ、慰めて貰ふどころか苦勞を增すんだ、何も小言が言ひたくあるものか、言はいて濟む樣に汝が立派にして呉れたら私は笑つて居る、私はそれが願ひだ、望みだ。

思つても見い、汝は一口私が言ふと、直きに大きな顏をする、何？　最う出て行きます？　馬鹿なッ！出て行かせて可いものならば私が何てこんなとを言ふものか、他人に如何な不品行なものがあつても忠告する氣にもならない、之れが眞身てあればこそ。

其處を汝、よく嚙みわけて、ねえ暴なとを言ふが手柄でもあるまい、出るわ、行くわは下等社會の事さ、冗談にも見つともない、それに此麼可愛い子供までが居るのを捨てゝ汝は何處へ行かうと思ふ、ちえッ馬鹿な……子供の可愛さも知らないものは、これ汝畜生にも劣るものだぞよ。

序だから今少し言つて置かう、必ず憎くつてだと思ひ違ひてくれては困る。

愛嬌と言ふと、語弊があるかも知れぬが、汝は私の友人が來た折ても、實に私がひやく＼する樣な事をするとがある、第一應接が不公平だ、虫の居具合によつて顏色が違ふ、氣に入つた時には云はずともの事も饒舌るが氣に喰はぬとなれば御客樣にも無頓着て大きい顏

そする、こんな汝が氣隨我儘の原因は、或は容貌を頼みにする、云はゞ顔自慢からだかも知らないが、此樣私の口から言つては可笑しいけれど……よし此の容色が美しいとしても、それよりも倚ほ大切な必要なものは、よい聞いて居なさい、心の美といふ事なのだぞ。世間には妻の氣立て一つて、良人が曲つたり、くねつたりする例が澤山あるもんだ。

私たちにはまさかそんなこともあるまいが、汝が假に何時までも／＼この通りで惡い習慣を改めやうともせず、また何處までも私に反抗して行くといふ樣では、自然私も家が厭やになつて來る、自づと足が外へ向つて、つい惡所通ひもする、自棄酒も煽りたくなる、それは一般の習はして、よくあることだ、左樣なつて一家が別々に離れ／＼の心になつて御覽。家庭は滅茶々々て中に立つて可愛想なのは西も東も知らない此の子供ばかり。それでも汝は汝の惡い習慣を改め樣とはせぬか、家庭の幸福を思はないか、連れ添ふ私を慰めて、勢ひをつけて、より多く元氣づけて社會の活動界に立たせる考へはないか、いや／＼、此の可愛い子供が：……おゝ此の無心の笑ひ顔を見い！　これが可愛くは無いのか。

今から十四五年前、饗庭篁村の作「帳中說法」といふのに此れと同じ趣向て、初めから終まで、細君に說法する言葉で一篇み成してゐる小說があつた、内容は勿論違つてゐる、兎に角斯う云ふ作は讀みかけると終まで讀んで了はないと承知が出來ない、それだけ何處か面白い處がある。（評）

我姉

金澤市　齋藤外喜

わたしは兄弟もなんにもありませんと云のですけど、ほんと云へば姉がありますの、それはなくなりました母が他家へかたづいてましたとき、生れたんですて、わたしより五つ上の今年二十一てす、父樣ちがひの姉さんて、今栗が崎の乘光寺と云ふ寺へよめにいつてるのてす。それを乳母やからこつそりきゝました、お父樣もお祖母樣も妾にかくしていらしやるんてす、一度なつかしい姉さんにあひたくて、今日は日曜だから行きたいけど、道知らないし、こまつたわ、いつか折りがあるわ、今日はお天氣がいゝから、喜代さんでも誘つて、お山へても登つてこやうと繼母樣の御部屋へ行つて伺つたら『早くかへつてらしやい。』『ハイ。』と返事をして帶をしめなほして新町の喜代さんのお宅へあがりましたら、喜代さんのお母樣は『オヤ喜美子さんおはいんなさい喜代はさつきから待て居りました。』『あ

りかたう今日はいりません川原へ散歩に行きたいの。』

『オヤさう。』とおつしやつてふりかへつて『喜代、喜美さんいらして散歩に行くつてさそつて下さつたよ。』

『ハイ。』と答へて出ていらした喜代さんは妾より一つ年上で、目のパッチリした面長の鼻の筋がよく通つてすらりとした美しい人だつてみんな云つてるんです、妾とは大の仲善ですわ『喜美さん待つて下さい御供してよ。』『早くいらしやいな。』『オヤそんなに急ぐの。』

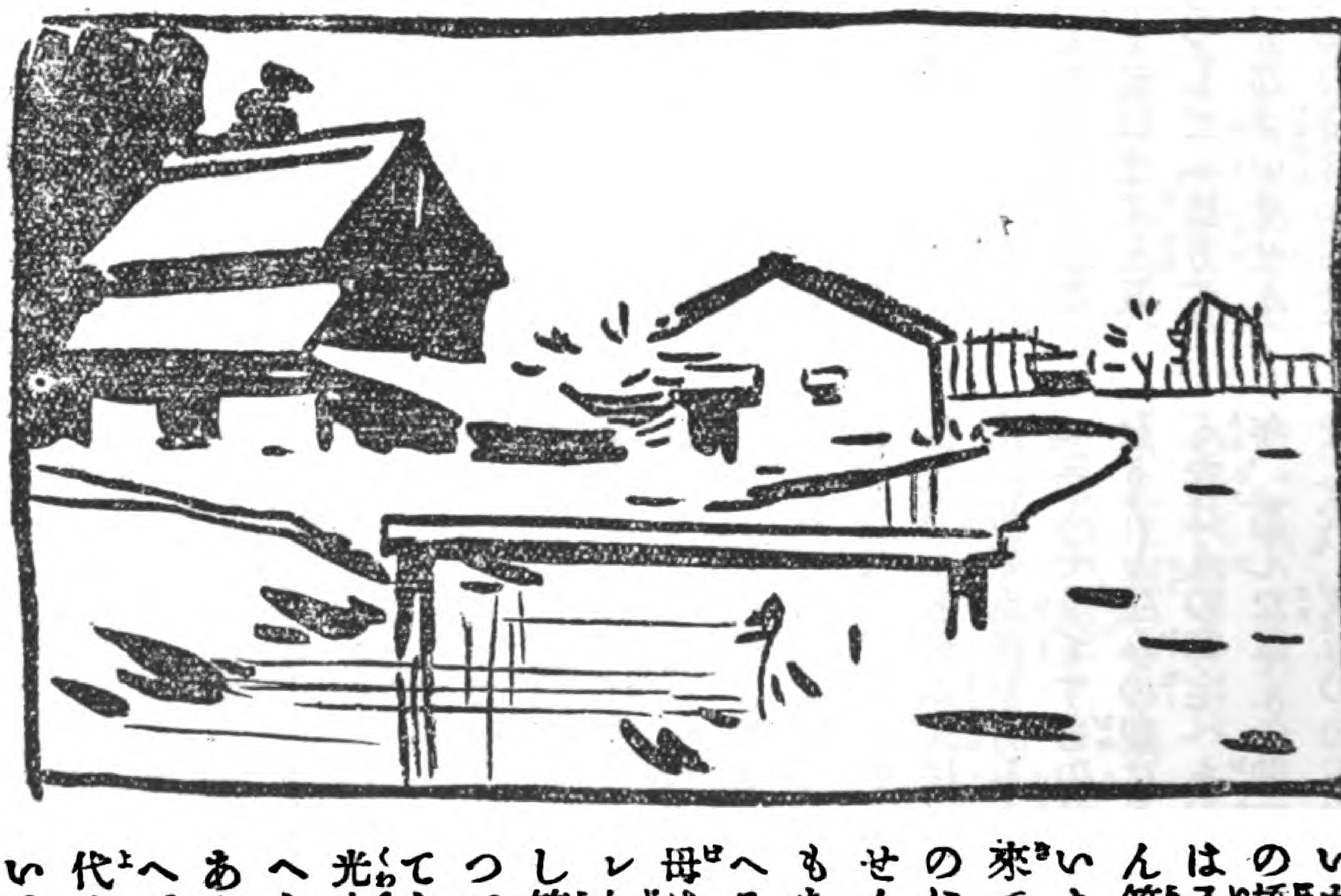
『アラそうぢやないのよ、ぢやあいそがないでいらつしやい。』『ホヽヽヽ。』と奥へおはいりなさつた。

＊　＊　＊　＊

二人川邊を散歩してましたら、ふと姉さんの事を思ひ出しました、二里ばかりあるつて事だし、道は此川にそふて行くんだつて云ふのに、一人ぢや行かれないしとおもつて深いためいきをつきましたら突然喜代さんが『喜美さん如何かしたの。』『イヽエ。』『そんなら何を考へてるの。』『アラ何も考へてやしなくてよ。』『うそうそさつきから見てるといつもと違つてるよ。』『ぢや云つてよ。』と喜代さんがあんまり心配して下さるので姉さんの事を皆云つたの、すると喜代さんは『いゝ事よ今一時前だから行かれるわ大丈夫ですわ、此川についてけんですてね。』『そうですて喜代さんつれだつて來て下さるの、遠いかも知ないわ。』『いゝ事よ。』『ぢやア堀川から行きましよ。』それから又元の樂しい心になりまして淺野川にそうてる粟が崎往來へ出ました、こゝは夜も人通りのはげしい所だそうです、それは「いたどき」が數多粟が崎から魚賣りに來る人です、「いたどき」と云ふのは、ちやうど京都の小原女に似て居ります、頭に魚をのせてくるんです『あまさぎやいそめぐりやい。」つて賣にあるきます、妾等二人は「君と來たまへ我も行く」の唱歌をうたつてだん／＼進みました、左側には黄いなたねの花盛り、右側には淺野川の川瀬音たてゝ流れてゐる、皆樣がよく心も浮きたつばかりだつておつしやるのは、こんな折りの事だらうとおもひました。一群の田舎の人等は妾等におつゝきました、其一番あとの二十七八の女の人に喜代さんが『あのあなた御家どこの村ですの。』『そらけ、そらはぢき此蚊々爪だす。』『粟が崎のそばなの。』『ぢきそばだす。』『オヤ左樣喜美さん御たづねなさい、わかるかもしれませんわ。』わたしなるほどゝ思つて『あの粟が崎に乘光寺と云ふ寺はありますか。』『アレ乘光寺さんなら粟が崎でありましねい、そらが村だす。』『オヤ

さうわたし栗が崎とさいてました。』『いんぢや栗が崎ちかいから尾山の人さう云なはるんだ。』『さうですか、そこの寺に二十ばかりの女の人ゐらして。』『ハン御新造はんけ、ゐられます。』『どんな人なの。』『ほうやね、せいのてつかい、顏の長い美しい方だす、アレあんたはんによく似ておいだす。』『さう。』『そつくりだすよ。』とつくづく妾を見てるの『なか〳〵遠いわ。』と云つたら『もうぢきだすそら橋が見えた、あの橋を渡るとすぐだす。』と云ひましたとき、アッしまつたとおもひました、多分あの橋を渡りますにお錢が入るでしよう、わたし持つて來ませんでしたもの、喜代さんでも持つてゝ下さればいゝがと心に念じましたけれどだめでした、二人とも持つて來なかつたの、それてもいらな

（賞外）　杉浦豊子



いかとおもつて『小母さん向ふの橋はお金入りますの。』『己等は入りましねいけど、あんたはん等入りますやろ。』と云ふの、いよ〳〵こまりました、二里も來てそして向ふに家が見えてるのに、しかし、しかたがありませんとあきらめて、只此所迄でもあひに來た事を姉さんにきてへるやうと思ひましたから『小母さんこゝでお別します。』『アレ如何なはつたけ。』『あのわたし等うつかりおもつてお錢を持つてませんの。』『ハンお金持つてらしやらんのけ、そんなら乘光寺さんへおいだいてかりてかへらしやる時やつてくだつせ。』『ようがすやろ」すると喜代さんが、左樣なさいよ。』『けどいけなくつてよ小母さん村へ御

かへりなさつていつか御新造さんにあひなされたら金澤から妹がたづねて來たつて云つて下さい。』『アレやつぱりあんたはん御新造はんの妹はんけ、此所までお出だに。』『ありがたう、だけど初めて行うちだから。』『アレ情ない。』『御願ひいたします、きよさんかんにんね遠までひつぱつて。』『よくてよ、けど殘念だわ。』『ほんとに。』此時ほど殘念におもつた事はありませんわざ／＼あはれる事とおもつて來て、そこに家が見えてるのに。淚がとめどなしに頰につたはりて半巾を顏にあてゝきびすをかへしました、すると後ろから『アレ尾山のお孃さア——金入りましねい渡らしやれ尾山のお孃さア。』つてよんでる『喜美さん呼んでるよ、田舍の人は親切ですわ、受けましよね。』それから又橋のところへ來ましたらさつきの女の人も居るんです、多分云つたんてンよ『お孃さア達乘光寺さんなら入りましねい通らしやれ。』『ありがたう。』と禮を述べて左へ行き右へまがると敎へられてまゐりましたら、大きな門のある寺てす、勝手口へまはり案內を乞ひますと五十四五の品のよい小母さんが出ていらつして『誰方てす。』『アノ此方に操さんと云ふ人お出でなさいませんか。』『ハイ居ります、どちらから。』『あの金澤からまゐりました一寸御目にかゝりたう御座います。』『さうですかまアおはいりなさい、そんな所で話も出來ませんと御きゝ致したい事もありますから、サアどうぞ。』何だかおかしな事を云ふ人だわ、早く姉樣にあはせてくれゝばよいのにとおもひましたけれど、左樣も云はれなくて『じや失禮します。』と御座敷へみちびかれましたら、お茶が出るお菓子がてる、只二人かしこまつてゐましたら、さつきの小母さんが出ていらつして『わたしは操の養母です、若しかあんたはん、あれの妹にあたるお方てはありませんか。』と星をさゝれて『ハイさうてすて。』『やつぱりさうやつたけ、さつきからよく似てお出やとおもつたら、よくたづねて來て下された如何して來られた。』『あのわたし乳母やからいつもきいてたの、それて一度あひたいとおもつて今日此の喜代さんと云ふ人につれだつて來て頂いて、あの操さんの母さんは里村みきと云つた人てはありませんか。』『エヽさうですあの子をわたしの方へもらひましてもをり／＼生みの親にあはせたうて、わたしがつれてあんたはんの御宅へあがりましたが此子あの操の二つの年、あんたはんの御宅は御役がへのため遠方へ行かれました、又瓜つのときに風のたよりに産後でなくなら

れたときいて、ほんとうになげいてをりましたが、ふと一昨年お墓が卯辰の昌廣寺にあるときいてあの子をつれて行きましたら、御住持が此佛にもう一人娘さんがある、此御子によく似てゐられますとおつしやつたから、きつと金澤へかへつてゐらしやるとおもひましたけど又聞くとつぎのお母樣が居られる樣子、たづねては心がまがつては御子のためでないとおもつて其まゝにしておきました。』きけばきくほど涙の種只なくばかり、操はお湯に行つて居ります、どれ呼びにやりましよ。』『イエよう御座んす。』『イヤそてはない時間がおくれてはすまん、コレつき操に早くおかへりと呼んでお出。』『ハイと走つて行つたやうす、暫くして只今と靜に入り來たものは生れて始めてあひます、なつかしい姉さんです、『アイ御かへりか、この人はいつぞやから話して居たお前の妹さんだよ。』『エッ……妹マア御前さんなの、よく來たのね、何といふ名なの。』『わたし喜美よ、姉さん……』つてわたし手を握つて泣いたら姉さんも泣く、姉さんの養母さんもそれから喜代さんも……折から三時を報じたからなごりはつきねど、おそくなるといけないとおもつて『小母さんありがたう、もうかへつてよ。』『さうですかまた時々來て下され。』『ありがたう姉さん左樣なら、御體を御大切に。』『ハイありがたう又お出。』いとまをつげて後の川の岸へ出ました、なごりおしくてふりかへつたら、姉さんは窓の戸をあけて、前だれで顏をふいて此方を見てるの、禮をして左樣ならと云つたら泣いてました。さつきの橋守りの小母さんに禮云つて元來た道を我家へかへりました、姉さんは赤ちやんが出來るんですす身長の高い人よ、其夜の夢はどんなのを見ましたでしよか、皆樣御察し下さい。

こんな小說なら私にだつて作れるわと仰る方がありさうだ。(評)

その夜

小石川　明石光子

秋月菊男は、役所からの命を帶びて甲府へ一月程出張した。

寒い寒い雪のチラ〳〵降る晩であつた、今日は夫の歸りと朝から其となく待つ若き妻の雪子、夕飯も終へ、我子をねかしつけてから一入淋しく、昨日のお手紙に九時過ぎのお歸の樣あつたけれど、若しや早く汽車にお間に合つたかも知れない等と一人待つ身のもどかしく門に車の音のする度に其と耳傾ける。まだ年端も行かぬ下女の竹も、此一月程旦那樣お留守の何となくては

く、此も今宵嬉しと待つ身の主從顔見合せては、又逆つたよ。オヤあれは空車でした等、淋しいながらも待つ間の樂しさ。

お竹は早く片づけて參りませうと立てば、雪子は炬燵に夫の平素服暖めるべく、火鉢にも炭を起して、參らするお茶の用意等怠りない。

ふと見れば、ランプの影に眠る稚子の姿、今宵父の歸るとも知らで、今如何なる安き夢を見るであらうか、父の歸りまさば、大きうなりしと仰せ給ふか、明日起き出で丶父の顔見なば、一月のお留守に早もみ顔忘れてか、又笑ひて父のヒゲ玩具にするであらうか。雪子は種々に思ひ廻らして、我子の愛しく、頰ずりもしたき風情。

お歸りにならば定めて此雪にお寒い事であらうと、其となく暖かき物取りよせあれば、お酒召しあがるとも心落ちなし。

外は雪まだ止まず寒さは寒けれど、嬉しさに心ときめきて我頰の色は赤――。

此だ此だと聲のするに、竹やお歸りと云へば竹走り出で丶門の鈴鳴らす、菊男は今し車よりとび下りて、玄關に早くも靴のひも解く。雪子はいそ〳〵として荷物を受取り夫に從つて奥に入れば、皆變りはなかつたかと一言、皆丈夫で、貴方も御無事で御歸り遊して、と手をつけば、毎日忙がしくて勞れたと二言三言、旅に勞れた身の漸やく樂な日本服に着代へて、長火鉢の前に、竹が出す茶を手に取つて一すゝり。

お土産があるぞと、手づから手鞄開いて出せば、これは私にかと、雪子が手に取るは紫甲斐絹や、水晶の玉等、麹町の母樣には枯露柿、母樣大好物と聞けば、定めしお喜びなるべしと雪子は只嬉しく微笑めば、菊男は出張中の物語面白く話して聞かす。

坊の顔が見度いなと、急に思ひついたものゝ樣に立つてスヤ〳〵と眠る我子をさも可愛ゆげに見乍ら、大へん大きくなつたなあとしみ〳〵と云ふ。

折柄そこの置時計は十一時を報じた。雪は益々降り積るであらう。窓の呉竹バサリと音して、雪に打勝つた樣子である。

菊男が歸る迄には、必らず咲くと思つた庭の白梅も、遂々開かなかつたが、又今宵の雪で蕾は可憐さうに、皆凋んでしまうてあらう

一瓣の花瓣、楚々として搖ぐ美人草の如し。（評）

雪の日

和歌山　木下操子

昨日受取つた此袷羽織今朝からせえ〱と働いたお蔭て、漸やう袖だけにしてしまつた、けれども針持つ手の冷たい事、千切れて終ひさう、今朝から降りしきつて居る眞綿のやうな雪はまだやみさうもない、何んだか陰氣ぐさい日だ。

妾だとて夫がまあ少し意氣地があつたならこうもあるまいに、拾年以前から今に子の三人もあるのにまだ只の巡査！あゝもう今日は二十日お正月は來てお祝餅の一つも搗けない、米屋には十五圓酒屋には五圓まだ染屋にも多少の借りはある、勿論今月の月給で米代は拂はれる、けれども酒屋と染屋とは如何しよう、自分は忙しい中から此内職をして居るが之れが出來上つても僅か十二錢！酒代にも染代にも足りやしない、それに小供には着物と羽織を買つてやらねばならん、けれども今の境遇ではとても



（賞外）　梅野花子

とても出來ない、せめて自分の古着でも仕立て直してやらうか、こう年を老つては柄もあらくなるし何の用にも立つまい、さう〱さうしようそれがいゝ、どうれ何處に入れてあつたかしら、簞笥の引出しかしら？いや柳行李の底？あつさう〱其處にあつたつけ、長襦袢の下に……あつこれだ〱あつた〱あゝ大分柄があらいが是れが似あうかしら？こんな黄茶が少ないといゝんだが、でもこれ買つた時分は隨分よく流行つたものだが、さうこれは妙子さんと同時に行つて三越で買つたんだわ、大分古い筈だ何才だつたかしら、十五だつたか、否や十六……さうださう十六だつた、妾は十六妙子さんは十七、さう〱此へ嫁る二年前だつたから……妙子さんは翌年新島さんへ嫁しやつた、それにしても變れば變るものだ、幼な友達の妙子さんは村一番の豪家へ……お金はあるし夫は技量はあるし、此春も伊勢から京都の方へお遊びにいらしつたつて、それに妾は見陰

もなき巡査の妻！あゝほんとうに羨しいわ……ても夫だつて別に贅澤をするじやなし。眞實に愛して下さるのだもの、今日も此雪を冒して二里もある警察へいらしやつたのですもの……嘸お寒いだらう……おやもう二時、今にお歸りなさるでしよう、此間に此袖着けて置かう。

雪は一しきり強く降つて來た。

あからさまに生活問題に觸れた作（評）

女郎花の姫

青柳に皐月の雨を織交ぜて、流るゝ水のたてぬきや、影衣あらふ河風に、裾吹巻る女中連、花塗足駄長柄の傘、掩へど戀の花芒、女郎花の姫君は、過し詞の契より、深くぞ思ひ頼風の風のたよりもなつかしく、腰元ばかりお供にて、態と姿も町風に輕いとりなり忍べども、御所は御所なり縫物の、糸推高く見えたまふ。

（竹田出雲）

柳の番人

某の入道と云ふ人あり、人の許より柳のおろし枝を貰ひて、これ、庭に挿して、生し立てばやとて、使ひける童に云ひ附けて、垣のあたりに挿させつ、さて「子どもなど入り來て、拔きもぞする、能く守りてをあれ」といひつけ置きぬ。童、其日より、簀子に机持て出て、手習しつゝ、柳守り居り、七日ばかり過して、入道庭に下り立ちて「此柳、子供や拔きなましと思ひつるを、然もせざりけり、怠らず守りけるかひあり」とて童を褒めけり『さるにても、夜の間に子供の入り來て、引拔かむには、知りて咎めむやうもあらじを、かしこくも夜入り來ざりけるよ』といへば、童、したり顔に袖かき合せて『然にて侍り、夜の間に拔き取られんには、守りつるかひなしと思ひ給へて、例も初夜すぎぬれば、引拔きて筥に收めて、夜明けて後ぞ挿し侍りつる』と云ふに、入道もあきれて、大口ひろげ、きたなき齒むき出だして、笑はれけり。

（石川雅望）



美　文

『天』

北の海

函館　山田くに子

何と例へよう、此夕波の悲しい調！
じつと胸に手をくんで、黒い冷い岩の上に、立竦んだ私の胸に、波の響が其儘入つて、云ふに云はれぬ悲しい思と、歌を合せて、意志の絲をかき亂してしまう。うち見やる夕の海は、雲のはてに結び合つて、いづれが空でいづれが海か、空は海に入り海は空に流れて、あだかも太古の世。

　地は定形なくして黑暗淵の面にあり、神の靈水の面を覆ひたり。

との、其！其！なつかしい太古のまゝにもう／＼として一點の象も見えない。こぎ出す舟なくこぎ返る舟なく、うちけむつた太古のまゝの海の彼方へ、今宵此國の、天父を慕つて泣て居る人の夢はこもるのであろうか――あゝ夕の海の深く遠きが中に立て「我」と云ふ、力弱きものゝ上を思ふと、知らず涙が頰をつたふ。信濃の山の高きが中に人と成つて、十八の生命をのばして來た身は、渡島へ渡つて始めて潮ざゐどよむ大海原の、長くかびろき朝びらきを見て、其ひたり／＼とうちよせる波に、旭の光がかゞやき／＼、希望に滿ちつゝよせてきたのを見た時、我世の廣く長きに驚き、詩も出でず、歌も湧かず、只空と海てふ廣き二字に、小さき魂のもてあそばれては、さすらひの國、渡島の二字も何となく、大きく胸にひゞいたのであつたが、やがて夕の海に立つて、よせきし汐は海の彼方、何物かの胸を戀ふて咽び歸り、こうして海は灰色と成つて、空と水との境は破れ、太古の天父が胸にかへつて、世のもの皆は夕の淋しさにたへて、愛のかげにやどつて居るのに、我のみ一人取り殘されて、よらんに暖き母の胸なく、泣かんに強き戀人の腕もなく、罪の疑りか黒く冷い、岩の上にたちすくんで、孤の我を我と慰

めねばならないと――こう思ふてさすらひの國、渡島の夕にそゝぐ涙の、冷く悲しい胸に入つて、痛きひゞをますのである。渡り鳥があはたゞしう、白きが一つ海をこなたに來ると見て、ふと夕の氣に消えてしまつた、……あゝさすらひの國、昔は「えぞ」とて熊のみ住みし此國に、よしや今何萬の人が群れある共、それはみんな涙をのんて、内地の春をかへり見がちに、破れ破れた胸をだいて、さすらひ／＼きた人のみの、あつまつて成す都だもの、雪にまじつた黃金の光のよしかがやくとてもそれで心のひゞがなほりはしない、天地の神父にはぐれた淋しい魂を煖めるには、あまり冷い光てあるもの、其淋しみをやるために、島人はみんな一時の酒に肉をあたゝめて、わづかに慰て居るのてあらう。あゝ世にさすらひの身ほど淋しくあはれにたよりなく、罪をおかしやすいものはない。と、しみ／＼思つて泣て見た心のまゝに泣て見た。

海づらはやゝに黑ずんて、波の音はしのび／＼に淋しく底に咽んてゆく、――此悲しい波のひゞきは、涙の過去を未來につなぐ、時の刻の其ひゞきてはあるまいか、此暗く淋しい海の底に横つて居る、すでに死だ冷い過去は、たゞそれに殘つた、不朽の魂を甦らそうと、波と共にをどり上つて未來にはせて行くのてあらうが、不可解の人生に立つてしかも不可解に、もろく弱き性質ながら、何物かの能力に守られて、刻々に確たる生命は、人各の魂を貫て、生の名を失はないて居るけれど、やがて最後の刻みが終り、さて我を泣せ我を笑はせ、みにくゝはた美しくすべてをきざんだ、魂の行えはどこてあらう――。

「どこてあらう――」とこう叫んでつと咽び返つたのてある――。我前に横はる、現在てふもの〻一刻の彼方には、すでに死の波はよせて來て居る、一足さきはやみのやうて、そこに希望も慰安もない、ないけれどそれはやがて來るべき事實てあるものを――私はかくして永劫く孤の淋しい道をたどつてさすらひつゝ逝くのてあらうか。あゝ光！光！光！「光を!!!」と叫んて岩の上にはたとたほれた、目とづれども流れ出る涙のそれは、父なく母なく野に生し孤の子が、眞と淋しらに泣く涙の玉！、あゝ天父の煖い胸を出てさすらふものは、かくまて淋しく苦しいものかと、目をあげて天をあふひだ時、強い光の星を一つ見出したのてある。

此れが今の若い女子の胸から出た言葉かと思ふと、不思議な位、暗い、強い、烈しい思想てある、魂の滅びに就いて悲しい歌を歌ふものも多いけれど、此處まで強く言ひ得るものは少からう、北の海と云ふ感じと能く接合して、暗緑の大海原と、聰明い少女との配合が更に此文章に力あらしめた(評)

『地』

繭玉

栃木縣　青木たか

外は畫の樣な月の夜てす、學校から歸ると取小屋掛に

と出たまゝの弟が、息せきとかけてきたが、すぐ又夕飯もたべず繭玉を一枝もつていつてしまつた、私は一人炬燵にはいつてふと上を見ると、み燈の油が盡きたのか、消えさうになつては又ぱつと明るくなる、其度に繭玉が眞紅になつたり、うす黒くなつたりする、靑い葉の澤山ついたさかきや、枯葉一つない枝には、赤や白や圓いのや長いのが澤山垂れ下つて美しい、實がなつたやうなのが、懷かしい、思出の糸となつて其から其へと果もなく手繰られる、彼の頃はまだこんな小さな家ではなかつたので、朝から家中で繭玉こしらえに忙はしく、母樣はこね役下女がふかし役、をば樣は爐の側で煙草をふかしながら、あれ是とおさしづをしていらつしやる、私と姉樣はこしらへ役でしたから、色々な形を作つては、赤や黄や靑等にそめて振のよい枝にさして、神棚の前へずらりと飾つた所は實に美しかつた、彼の晩は前の田圃へ取小屋を掛けたのであつた、トン／＼竹のはねる音がするので見ると、取小屋がもう半分程もえ上つてゐる、妹と弟はすぐかけていつてしまふ、後で私と父樣と母樣と

（賞外）　近藤道江子



姉樣と四人炬燵にはいりながら、障子をあけて見てゐると、火は焰々ともえ上つて、美しい火の子か螢の樣に舞上つては、み空の星と一所になつてしまふと、鏡の樣な月が今にも焦てしまひさう、子供等は手を上げてときの聲を上げる樣がよく見える、だん／＼下火になつてくると、てんでに長い棒を出して、繭玉を燒く顏が熱さうに眞赤に見える、其内に妹等も歸つてきたので、繭玉はとさい促すると、袂からまつ黑にこげたのや火に當らない所や斑形のを四粒出したので皆で一つづゝ食べましたつけ、其時でした母樣が今夜あの後へおこもがねるだらうと仰有つたのは。數へて見るともう二年前の事、其から姉樣はお嫁にいつてしまふし、母樣はお庭の白菊が枯葉色になつてしまつた頃とう／＼返らぬ人となつておしまひなさる、其からは商業の失敗やら、何やら泣面に蜂で不幸ばかり續いて、とう／＼こんな小さな家に住むやうになつてしまつた、それはまだ止むを得ぬけれど、年も行かぬ妹をあゝ傷はしい奉公に出したのである。今頃は何をしてゐるであらう、こんな月夜には母樣の事

や家の事など思つて一人淋しい勝手の隅にないてゐるのではあるまいか、まだなれぬ初奉公なれば、何かにつけ奥樣にしかられてゐはすまいか、あんな氣象故悲しい事等は少しも言つてはよこさぬけれど、まだ子供だもの、女だもの、外の子供が美しい衣着て遊ぶのを見てはどれ程若い血汐の波打つ事であらう、をちぶれた故とは云ひながら、何不自由ない家に生れ、浮世の風の冷たさも知らず、慈愛の手に育てられたものがと思ふと涙が止度なく頬を流れる。スタ／＼橋を渡る草履の音がするので、父上のおかへりてはないかとあはてゝ涙を拭つて何氣なく雜誌をひらくと、其足音は行きすぎてしまつて、隣の家の戶がガラリとあいた樣な大工さんが歸つたのであらう、父上は此晩くまでどこに何をしてゐらしやるのか知ら、私は再び懐かしい空想にふけらうとする時、頭の上でガタ／＼音がして何か襟へポタリ落ちた、とコロ／＼と乳のあたりへはいつた、冷たさにあつと身をすぼめて出して見ると、それは繭玉であつた、大方ねずみの仕業てあらうと、ふり仰ぐと柳の樣にたれた枝がかすかにふるへてゐる、とトン／＼竹のはねる音が盛んに聞える、取小屋へ火をつけたのだらうと出て見たが、向側のうらなので、火は少しも見えぬけれど、杉や柏の木が日の出の時の樣に赤くうつゝてゐるのが見える、取小屋を燒く煙に蔽はれたのが、幾重も折重つた雲の彼方に月影がうつすゝと夢の樣に見える、どこかて犬の遠吠が人の魂をさそうやうに微に聞える、今宵も宿なし乞食が燒跡の生温い灰の中に一夜の宿りをするのであらうか。

繭玉が焚くのは其地の風俗と見える、さて此文章の好いところは眞實を書いて少しも僞らないところにある、のみならず繭玉を作るところなど、涙の作者の人と爲りが表はれてゐる、目前に浮ぶやう書いてある、眞に美文としては生命のあるものてある（評）

『人』ありのすさみ

羽後　菊池りう子

「あるときはありのすさみにつらかりきなくてぞ今は人ぞ戀しき」と繪筆吸ひながら先生は淋しく微笑んで私の顏をお覗きなさるのが常でございました、私は又如何しても此の歌の意味がとれません、朝夕顏を合して笑をかはして居てさへ好かない人は好かないものを如何して別れて戀しくなる事が有ませう、私は先生が此の歌をおよみなさる度にそう思ひました、實の所を申ますと私は上なく柔しく親切にして下さる先生が何故か餘り好かないので！。否、心の奥の奥を探りますとどうやらすまないと思ふ事のないでもありませんがさて先生にお合ひ申て優しい御言葉を承りますと妙にすねて見たくなるのが私の病とでも申しませうか。

あれは學校に展覽會の開かれる時でした、皆が競爭して圖畫を出しますので先生は私に特別に幾日かの苦心

に出來上つた「秋聲」と題した四條書の御手本を下さいました、「之なら露さんが一生懸命になつて習つたら誰だつてかなふもんぢやない」と。それは美いものでした、尾花がぼう〳〵繁つた深山の崖に一疋の男鹿が妻をよんでる淋しい景色でした、私はもう〳〵好て〳〵たまりませんのでしたが、さてかたくなの性質としてさつぱり嬉しい顔も致しませんので、先生は「露さんは氣に入らんのかい！」とのお尋ねにも倚一言も云はずうつむいて居りましたので先生は吐息をして「僕は如何にか心をこめてかいたのだけれど露さんがそんなに氣に入らんのならもうよすさ、丁度高田樣が手本がないので困つてたから之をやるとし樣！」とさすがやさしい先生も此の時は餘程お腹立ちの樣でした、私は只もう悲しくつて口惜しくつて涙はとめどもなく流れましたそれでも先生に私が惡かつたからと云ふ程なやさしい心にもなれず只々泣いて〳〵、其結果が腦神經を痛めまして廿日ばかり學校を缺席致しました、で病床でさんざ泣いたあげく、自分は先生にすまない是非お合ひ申ておわびを致さなけりや！とふら〳〵いえぬ身體で學校に參りましたら、まあどうでせう！友が先生は一昨日突然に濟國に御出發遊ばしたと……。私は夢ではないかと校舍の隅々をあてもなくさがしました、が誠、先生はもうお出でゝはなかつたのです、私はいつもの圖書室につとかけ入つて先生のおかけ遊ばした椅子にたふれて聲を立て泣きました、嗚！私は此時初めてしみ〳〵先生は慕はしい！なつかしい！と思ひ初めました「ある時はありのすさみにつらかりきなくてぞ今は人ぞ戀しき」嗚！之が分つた時の私はもう涙の人でございました、先生は只の一度もお便もなくて……嗚……先生の御年？まだお若い…。たしか廿四とか。

斯うした性質もある事は能く分る、情の文、一個の短篇小說たる價値がある（評）

『秀逸』

床の朝

京都　濱部風窓女

今先程婆やが戶を啓けに來た時から私の眼は醒めて居るがツイ寒いのと日曜とて凝乎横に成つて居る、今日の天候は什麽か知ら……と鳥渡頸だけ動かして硝子越に中庭を覗くと澤山蕾を持つた梅の枝が重なり合つてる間から薄いコバルト色の氣持よい空が見へる、何だか鶯でも啼きさうな朝だ、はや太陽の光線が二分許り隣家の高塀に映つてゐる、偶然、私は東山の朝景色の美觀が想像された、今日の日曜を如何して暮さうか、梅は未だ早いし動物園も毎々はつまら無い……清水へ行かうか、オヽ清水で思ひ出した、此の前の日曜は東京の伯父さんがゐらつしたつけ、私が「京都で何處がお氣に召して」と聞いたら「僕は清水さ彼の山の背景から堂の建方舞臺から見降した眺は實に京都らしいね彼の舞臺に立つた時僕は昔が偲ばれて空想に耽

つて來た」と仰有つたが、さう思ふと彼處は艶なる空想に耽れさうな處だ、艶なる空想？と私は奇抜な言葉に微笑をして居ると不意に人の足音がして襖がスーと啓く、私は急いで今迄大きく開いて居た眼を閉ぢて寢た振りをする、誰だらうと出來るだけ眼を細くして見ると妹のお照ちやんだ、私が寢てると思つて抜足して呉れるのが可愛い、髮を結ひに來たのだらう甚麼にして結ふのか見てやらうと寢返りする樣に見せかけて上向になる、蒲團が邪魔に成つて上半身しか見へ無いが照ちやんは髮をとかずに凝乎鏡を眺めて居る甚麼顏をしてるのだらうか、私はソッと頸を上げて見たが生憎身軀が鏡を隱して居る、頸が倦いので直ぐ降す、間も無く抽斗を開けて髮を漉き出した、其の音が薄絹でも裂く樣にスースーとして朝の靜けさを破つて居る。い丶香がする！バイオレット香油だ、お照ちやんは櫛立て前髮を分けて前の方へとく、庇を能く出す爲だ後の髮を集めて紐で根を括つたが一寸頭を左右に振つて根の具合を見る、よかつたのか直ぐ前髮にかゝつたが後よりズット御丁寧だ、紐で結んで根と一所にしてといては上半身を鏡に摺り付けん許りに見る、引込み過ぎてるのか、一寸引張り出して髷にかゝる、幾度もといたのをクル〳〵と巻いてS形にするピンを指し終つて一寸兩手で髷を抑へたが又前髮をとき出した、今度は手鏡を出して鏡臺を後向に影を寫して頻りと頭を振つて手鏡を見て居る、其の無邪氣な顏、澄した顏。照ちやんの心には今髮と云ふ者より他に何も無いのだ、長い睫毛が上に成つたり下に成つたり動いて居る、私はモー大きな眼を開いて見てるのだが照ちやんは氣が附か無いエヘンと咳をすると照ちやんはフト私の方を向いた。

「姉さん起きて被居るの」と極り惡るさうに謂ふ、私はムックリ起きて「綺麗に結へたチ」と謂ふと、

「爾ですか」と嬉しさうに一寸頭を弄つて道具を仕舞ひ出した。庭前で雀の囀る聲が八釜敷く聞える。

照ちやんが髮を結ぶところは面白い、蒲團の中から眺めてゐるのも面白い、冒頭の方はあつてもよし、無くてもよし、短くしてもいいのだ（評）

野邊送りの前

筑前　和田八千代

姉樣はとう〳〵死亡なられました。そうして今日が其のお葬式なのです。

田舍の例として村中の人は皆手傳ひに來てくれますし會葬者も多くて、挨拶やら饗應やらて中々多忙を極めて居るが、何處となく人々の心も沈み勝ちにひつそりと、常には面白ふ聞いた梢の小鳥の音も何だか憂を帶びた泣き聲のように聞える。

私は棺柩を供へてある御座敷にお父樣、伯母樣、義兄樣と共に、靜かに火鉢の側へ座つて、準備の出來るの

を待つて居る。皆無言。棺桶には姉さんの紋付の羽織を覆ふてある。前には机ようの臺に線香と、蠟燭に火を點けて並べてある。私はそれを凝と見る。線香の煙は白く細く、糸のように昇つて次第に薄く消えて了ふ（あゝとう〳〵恁麼になつて……）彼の優しいお姿を思へば、はら〳〵と涙が溢れる。見られまいと手早に拂つてお父樣の方を見る。彼のお矢つ張り考へて居らつしやる。彼のお顔のお窶れなさつた事、男丈け口にこそ出さね今迄の心配は決して少なくは無かつたらう。

目を瞑れば、それからそれへと想ひは泉のように湧いて、はてし無い。姉樣が十九、私が十四の四年前、お母樣が逝かれて後であつた。お父樣は膝近く呼び寄せて言はれた（世の中は何でも樂に暮すに限る、財産が何にならう、只食つて着る丈け有れば其れて可い、俊——私の名——も大概で學校も止めて、宅に居て姉さんの加勢でもするさ、今迄のように子供心で居ては困るよ）泌々と感じて今でも忘れはせぬ。お父樣は毎日役所に通はれた、そしてよく可愛がつて下さる。雖然平常快活であつた性も、妙に寡默となられた。寂しい夕暮やしんめりとした雨の日などは、よく悄然として物思はし相に、偶には涙さえ浮べて居らるゝ事を見受けた、其れだのに又しても杖とも頼んだ子に先立れて、老ゆく身には嘸かし心細いだらう。



（賞外）　とよ子

伯母樣も俯向いて、ほろ〳〵と落ちる雫を半ケチに受けて居らるゝ。兄樣は火鉢の縁に右手て頰付して、左は聽て消え相な火に炙つて居られる。最愛の人に死なれて悲しさは誰も變りは無い、過去の思ひ出に胸も亂れよう。

時計は悠々と十一時を打つ。未だ互に言葉を交さうともしない。暫らくすると叔母樣が這入つて來られる。時始めて皆は驚ろいた樣に目を移す（もう大抵準備も出來て和僧さんも見えたが、晝食を了つてそろ〳〵仕度でも致ましては……？）座りつゝ叔母さんは恁う云はれる。流石に聲は低かつた。

勝手もとでは、お膳の用意か器物の音がする。人の行來の足音が騒しうなる。父は無言で出て行かれる。義兄樣も續いて行かれる。

（貴方ご飯は？）火鉢の側にすり倚りつゝ叔母さんは

伯母さんに問はれる。(私しや食べ度う無い)と無愛想な返事。すると叔母様も同感らしく(私も何だか昨日から御飯が不味くて、ちよつとも食べる氣になりませんよ!)(そうねえ……俊さんは?)(私も矢つ張し―)と外に何とも言葉は出てませんてした……。屋外は極めて靜かな日和。初春の弱々しい日の光りはぼんやりと冷たい土地に照つて居る。母無き私、母と便る姉様愈々是から野邊の送りてす。母無き私、母と便る姉様と永い永い別れをせねばなりません。あゝ私はどうしたらよいてしよう。

悲んで居らずと云ふ方て、恐しいうちにも取りみださぬ態度が分る、描寫も細く小說的に進まうとする點てある(評)

くもり日

岩代　松風

「一寸來て見な!。」母さんの冴えたお聲がする。少し痛む頭りをおさへ乍ら、ゆつくり歩いてお座敷へ往つて見る。黑、銀ねずみ、緋、小紋、などの上着やら下着やら、散らばつて在る眞中に、ポツチリすはり込て被居る母様は、青いお顏に笑を湛え乍ら、未だ、仕立てない小豆色のを指して、「之さへ縫へばすつかり揃ふのだがお前、未だ髮は結はれないの」と被仰る。柱に寄りかゝつて庭を眺めて居た私は、「だつて未だ痛むのてすもの」、言ひ乍らグル〳〵巻きにした髮へ手を上げて見る。

「島田にても結て三ツ重ね着た寫眞ても東京へ送たらお前、「文壇趾へネー」、元氣好く言つたが、また沈んて了ふ。夕べ末さんが遊びに來て、うちの姉さんはお嫁になるのを喜んて居るよ、と言つて居た。それに私は闇い穴へても這入る樣な氣がして嫌やてならない、例へ、嫁く身ぢやないにしろ、今迄の樣な、呑氣な事は言つて居られないからうし、文壇や他の本との中もうとくなるだらうと思て……。私は、結婚を一つの關所だと思て居る。此關をくゞると種々の事に出遇ふのだらうと。今迄憂目も知らず平地を歩いて來た丈け私は、今後の難所を想像する。併し、却て興味が在るてあらうといくらか樂しむて居ないものてもなかつた。が、こう迫られて見ると、流石に處女時代を脫し度くない。抔とまた考へ初めて頭が痛むて來る。と目の前に平氣なお顏して被居る母様が恨めしい。何か、思ふ樣我まゝを言つて困らしてやり度いと思て居るうち、「オヤ、曇つて來たよ、張物は乾ましたかネー」獨り言乍ら出て行かれた。着物は依然、散はつたまゝ……。今日もまた、病む頭りを抱え乍ら、煩悶に日を暮らすのてあらうか。

着物の散らばつてあるのは好かつたが、煩悶はたいしてきゝめもないやうてある(評)

春の宵

赤坂　大野梅子

私は春に生れた爲か春が一番好きてす。野も山も街も

川も薄霞が懸つて素絹を透かして物を見る樣なのが何だかいゝのです、それに心地のいゝ薫りを吸つて居るやうで樂しいのです。

春の夜も亦、人を待つて居る樣な氣がして興が多い、春雨がしと〳〵と降つて庭の櫻がバラ〳〵と散るのを燈火に透かして見ると、平安朝時代の繪卷物をくりひろげるのです、古代錦の振袖に溫かい風が當つて音もなく裂けて、又、裂けてきりの無い樣に、――ていつ迄も緣側に居る事があります。漸く部屋に歸つて机に向つて歌でも考へると、きつと淸少納言や紫式部が目に浮ぶのです。

弘徽殿か飛香舍の渡殿に色白のふつくりした頰に薄紅をさして涼しい眼を羞しさうに細染骨の一扇を輕く持つてうらは濃き紅のひとへの綾にうす紫のきぬをきて立つて居ると、淸少納言は白い素絹の下に紅梅の下がさねを着て、欄にもたれて櫻を見入つて居る、そこを山吹色の直衣の下にいだしうちきを着て、しとやかに過る三位何がしに、櫻がバラ〳〵と散つて直衣にかゝると、紫式部が『散りかゝる花をみすてゝ』とつぶやく、淸少納言は無言でほゝゑむと、山吹色の殿上人が、振向いて『花こそは、散らぬこそよきを』、とすまして庇の間に這入る。後から行く美しい小舍人を招いて淸少納言が『今宵こそ……』と囁くと小舍人は頷いて去る。紫式部は妬ましげな顏をして居る、聯想はそれからそれとはてしない。

時計の音に驚かされて氣が附くと十一時頃で、雨垂れの音はゆるく、ポタリ〳〵と地を敲いて、ねむけを覺える。

こんな事が每晩なので、お友達に話すと、納言の君、納言の君と云はれますけれども私には淸少納言程の才も筆もありません、けれど昔の公達と、こんな春雨の降る晩に佳い香を薰いて、歌語りでもして見たいと思はない事はありません。

素養のないものには書けない、然しこれだけの素養がありながら、上手に書きこなすことの出來なかつたのは殘念である、文才が伴はなかつた爲であらう、昔のやうでもあり、今のやうでもあり、其境を分らぬやうに、うまくぼかして了う事が出來たら此文章は優勝な地位を占められたのである(評)

昔の身今の身

芝　波奈子

鴨川の土手から熊笹をサヤ〳〵分けて細い道を降りてうねつて行くと、淸い小流れが自然に家迄導きます。生垣を廻らした庭、大きな木瓜の木は一番私の好きなのでした。二階では松並木、水車小屋、西陣の工場の烟突が野や畑の間に散在して、それを圍むだ比叡、比良、鞍馬、愛宕の山々迄一顧の內にあるのです。奇麗な御座敷、閑雅な茶室、殊に私に氣に入つたのは、鴨川海苔と云ふ青い木葉のやうなのが雨あがりに庭に生へるので、いつも仲よしのお友達と籠に集めてお池の水で洗ふのでした。

磊落な伯父、慈愛の伯母、優しい祖母とは子供と云へば唯一人の私を可愛がつて呉れました、無理が通れば道理引込むといふやうな塩梅て。伯母は時々人形や細工物を思ひがけぬ時呉れて驚かす事もありました、冬の夜など祖母や女中を火の氣の無い座敷てお茶坊主させ困らした事もあるやうてす。落花がお下髪に絡むで矢の字帶の所までもない毛を持て餘した頃てした、私は實家に歸るやうになつて懐しき家を見捨てました。

東京の家は廣くない。女中も居なかつた。參つた當時私は母にもつと〳〵大きなお家を買つて……と強請つて母を困らせた事も覺えて居ます。が私は以前と變り從順な子となりました。

私が實家に來てから間もなく兄の許に嫁した義姉の爲めには、小姑の鬼千疋とか云ふ境遇になりました。私は此の時、未來の幸福の中半以上は殺がれた樣な氣がしました。義姉は「私の内は」と里の自慢をするのが癖なのてす。けれど姉は有福ながら淋しい家庭に育ひ立つた身にはどうかすると思ひ僻みもあるのてした。時には自分の着物も人の手に掛ける事もありました。母はいつも「よい手本だ決して眞似をしちやいけない。花は他に嫁つても苦ませ度ない」と被仰つては、お裁縫や張物、お炊事などせつせと仕込まれて、母の髮を結ふ、肩を揉む。もう昔の私とは全く別人となつたのてす。

「花がこんなになつたのを伯母に見せたら……」と母は涙を拭いた事も再三ては御座いません。埴生の宿ても兩親のある溫い家庭て修業しつゝある私は、本統に幸福だと思ひます。我儘だつた京の家、其處に育つたなら、今日のやうに私は色々の業や、處世の事を覺えなかつたかも知れません。私は自分は慥に幸福な人てあらうと信じます。

境遇の變つたせいもあるが、時間の力もあるてせう、只、境遇の變つた爲に昔の身と、今の身と變つたことを書いて、時の力を閑却しくゐる處は流石に女性てある（評）

外科室

信濃　依田花園守

もろ肌おしぬいだ妹は、わな〳〵とおのゝく色褪せた唇をきとかみしめ、兩手にしかと袂を握て手術臺の上へ横たはつた。

時は冬ながら、窓よりさしこむ日は和らかに、其の枕邊へ庭の木の枝を網にゑがいて雀はさつきから面白く賑やかして居る、おゝ其聲も妹には聞えぬらしい。

執刀なる副院長の眼は輝いた、院長は靜かに妹の右の手をおさへた、二人の看護婦は息をこらして枕べに立つた、見てさえ寒むけ立つ樣な器械はそれ〳〵手落ちなく備へられた、私は不安の目をあげて院長の肩からのぞいた、あゝ、あの美くしい胸へなぜあの樣な物が出來たのてあらう、醜草の種は何者がまきつけたのであらう、刀を執つて微笑む副院長の面を私はきつと見

入た、何となく獸の姿のひらめく樣に思はれて……妹はかすかに目を結びてと云ふ、私はすぐに看護婦にトキ色のハンケチを渡した、看護婦は輕く結びて其耳をおさへた、器械の音の聞えぬ樣にとてであらう、一室には何とも云はれぬ陰氣な厭やな〳〵物のしつとりと沈むで居る樣におぼえて私は身振ひした。

秒を刻む樣に高鳴る皷動の響の、一脈毎に副院長の手はのびて、今や、やはらかくとも、やさしくとも私には惡魔とも、鬼とも見ゆる恐ろしき其手は、妹の胸の上に進んだ、「院長十文字にやりませうか」「いや女……まだ娘さんだ、大きなきずにしてもわるい上下二ヶ所」靜かな間にてんな問答があつて、やがて腫物の上に刀はあてがはれた、知らず、私の目は閉ぢられてしまつたが……あッと叫ぶ妹の聲に夢から醒めた樣、ふと目を見ひらけば、痛々しや、眞白な其の肌にはしたゝか膿血は流れて、かみメた唇も握りつめた手さきも哀れ電氣にふれた樣、ぶる〳〵とふるえて居る、私は胸をおさへて又目を閉ぢた、副院長が「エ、ヒ」を取りあげられたのを見て、腐肉をかき出す有樣の酷たらしさの忍びがてに……妹が苦し想な太息はやがて聲になつた、あッ……先生、もう、もう、やめて下さい、先生、ようございますもう、先生、痛いッ……あッ痛ッ、先生——堪へがたなの悲鳴に、もうおへましたしつかりなさいと叫んで、ソとのぞけば妹は、おのゝく左手をあげて副院長の血のとびついた胸のあたりを犇と握て居つた。

私は忍びかねて其のまゝ手術室をのがれたが、冷たい廊下の空氣に逢ふとほと甦た心地に太息したが、又更に其處の椅子へ魂のぬけたもの〻樣にどッと腰を下して身振ひした。

手術室は多くの人に書かれもし歌はれもした、此作は無造作に出來たやうて、實は然うてない、實際から來たものらしい、一讀人を動かす(評)



(賞外)　田邊夢也

たのしき日曜

京橋　三好まさる

尋ね倦ぐみし目に深田と師の君が御名黑々と記せる門を見出せしうれしさ心も浮立つ思ひに車より下りて案内を乞ひし時しも、片時も忘れぬ師の君が謠曲の御聲此方にとの案内に靜に唐紙引明けて入れば、八疊の間師の君には書見臺を前に御聲もほがらかに、謠をなして居給ふ御姿一年前のまゝにておはしき、床には早咲の梅一枝淸う佛像の前に匂りて奧床しく、御机には和

洋の書のかず〳〵、書棚にはクロース金文字入りの洋書美しく並べられ、片隅硝子書戸棚の上には和洋の樂譜ヴァイオリンも黒塗の箱に入りしまゝ、オゝそれよ古里に居りし頃、月清き夜書に倦みての散歩に、師の君がつれ〴〵を慰め給ふ音床しと、杉垣に佇みて聞たるもこの樂器なりしよと、當時のことゞも夢の如く思へる折師の君の御聲は太う緩うなりてやがて終り給ふ、書見臺をおしやり給ひて「ヤー失敬しましたよく來ましたネ」と火をかき起しつゝ「實に久しぶりだ然し此頃から磐丈は電話で時々聞てたが」と笑みつゝ髯なで給ふ、御話は一年前の師の君に敎へ受つる頃の事やら、同じ敎への友達の身の上話に耽る折しも、入り來ませし奥樣の「貴女の御顔見てすぐ料理したのですから何もないが」とはや御飯臺など運び給ひてもてなし給ふ、古里遠く隔つる身のうれしくてかゝる御情深き師の君御夫婦を持てる幸ある身を神に感謝しつ。

市中とは云へ、本郷の塲末なれば、靜さは人足繁き地に住まふ身には、さながら古里に居たらん思ひして、硝子越しに打ち見る庭もかなりにひろやかに、冬枯の景は春淺き此處にも面影殘して、鳥影一つ障子にうつりてさびし。

「久しぶりでヴァイオリン聞かしてやらうか」とやをら立たせ給ふ、弓取り上げ二三度調子合せ奏で給ひぬ、妾は若草萠ゆる校庭に黒の制服に同じ袴身にまとひ、學びの友達とダンスに餘念なかりし時代思出でられし時、師の君が「どうだをどり出し度なつたらう」と我はほゝゑみて曲は終へぬ、妾は餘りのなつかしさに堪へかねて「先生何ぞ校歌を」と乞ひまつりしに「一年ぶりだ引かう」と奏で給ひて妾は唱へぬ。

學びの海は深くとも渡らばなどか越ざらん
敎の山は高くとも踏むに至らぬことやある
よはしと見ゆるなよ竹の………

二度くり返して曲は終へ、露營の夢を引き終へさせ給ひつる頃、三つ打つ時計の聞えしまゝに、今暫しと引とめ給ふ師の君を後に門に出づれば角迄送らんと仰せつれども、餘り御厚志に甘へても如何と思はれて、本郷四丁目より電車にて歸る。

車中に美をつくせる女學生の三人、何れの校の生徒にか、人前も憚からぬ師の蔭口、妾は聞くともなく聞ぬ、吁如何に妾は僥倖なる身なるよ、かくも良師に敎へ受けしとは、さても何れの校の敎子かと、仰ぎ見し目には確にブラウドの色がほの見えたて有らう。

上手と言ふのではないが、間違はぬやう、思ふことだけを書いてゐる、師に對する敬愛の意も溢れてゐる、師その人の動作も表はれてゐる、只なに〳〵し給へりとか、し給ふとか、給ふの多いのは煩はしい（評）

ゆふ霧

松山市　落　美知江

ほのかに夕霧がまよふ。阪の手前で葬式に會ふ。さび

しい葬式だ。白い被をした小さな柩、人はみな、うなだれて靜かにゆく。私は果物屋の表に立ちどまつた。淋しい此の一列をゆき過して、見かへりがちに阪を上る。何所ともなく花の香がしてくるやうな心地、春の夕の靜さは、人懷かしい涙の零れそうな哀愁を誘ふ。月のやうな仄かな明るさが漂ふ。

處女だらうか、それとも人妻だらうか。私はふとかう思つた。そしてそれが、どうしてもまだ若かい、そして女だとしきや考へられない。夢みるやうに、阪を上る。いまの柩は此阪を下つてきた。そして自分はこの阪を上る。何だか妙になる。

死の影がそこいらを彷徨ふてゐるやうな。ふら〱と阪を上る。上りかけて阪の中程で立ちどまる。ふりかへると町の上は夢のやうに白く明るく靄して、波のやうに一帶がどよめいてゐるやうな。

「私はいつ死ぬるのだらう」と考へる。つゞいて私は生きてゐるのだらうかと思ふ。いつの間にか歩き出してゐる。さは〱と耳の傍で何かゞ囁く。俯向いて上る。「私は生きてゐるのだらうか」と又思ふ。「生きてゐる、だからかう歩るくのだ」と思ふ。がいつとなく自分の存在があやふやになる。「死ぬるとどうするだらう」靄の氣が心をしんみりとさす。又立ちどまる。立ちどまつて振りかへる。燈の影がわく〱と瞬きながら浮いて見える。夕靄がひつしりと漲りきつてゐる。阪は砂利で廣い傾斜は緩るい。片側は公園の裏で葉櫻がかすかな戰ぎの音も立てずに白く見える。「月が上るのだらう」阪を上るのは私一人だ。今夜は上るのかしら、何日だらう。空は曇つてゐる、靄はあたりのすべてのものを夢の樣に見せる。

「此道はどこまで續いてゐるのだらう」妙なことを思ひ出す、私は家へ歸るのだ。「このまゝ冥府へつゞくのだらうか」と思ふ。「さうすると私は死んでるのかしら。どうしたのだらう」何だかわからなくなる。自分は生きてるのとも死んでゐるのとも。夢のやうな。阪を上りつめる。兩側とも家並だ。廣い道だ。店に點した洋燈の光が靄に罩められて滲むやう。やはり此の世でないやうな氣がする。人は一人も通らぬ。

ふら〱とゆく。菓子屋の門へ行きかゝる。男がぼんやり立つてゐる。寢てるらしい幼兒を抱いて、男はその寢顔を見てゐるか俯向いてゐる。私はそばを通りぬけた。さつきの柩が若かい人妻のだと思つた外、やはり皆夢のやうな。夕靄はなほ小迷ふ。

新しい感想も含まれてあるが、書きやうが單調で、生氣が乏しい、今一息(評)

日曜日の午前

滋賀撫子

カラ〱ガタン、牛乳配達の車の音に夢を破られた、たつた今床に就いたばかりだと思つてたのに、チリンチリン新聞を入れて行く、何時だらうと見ると六時、もう起きなきあならない近所でギリ〱とつるべの音、

ガチャンとバケツの音が仕だした、飛び起きて寢衣を脱ぐが早いか冷たい不斷着がヒヤリ、手早く帶をメめ雨戸を繰るといきなり寒い風がスーと肉までしみ通るけれど好いお天氣だ楊子と手拭さげて裏へ出た、杉垣つゞきの畑には雀も未だ來て居ない、ふと見ると向ふの屋根も霜、地面にも眞白な霜柱が立つて居る、やをら水汲み上て手をつけると胴震がした。內へ這入つてばたん〳〵上蒲團を疊んで二枚目へ手を入れるとまだ炬燵の暖みがぬく〳〵‖笑ひ玉ふな自分は病身の爲めに炬燵をいれるのである‖敷ぶとんも能くはたいて押入の襖をぴしやん襷を掛けて手拭を姉さん冠り、そこらぱた〳〵拂ひ初めると風を切るので手の冷たい事、お湯を取りに行く、花やお早う、お早うございます能く沸いて居りますよ、有難うとバケツに汲て雜巾投げ入れ提ていく、つる〳〵つッと拭き終てさあ一休み、と急に衿元がヒヤリとする‖何故か自分にもわからないが‖鏡臺を引き出して髮を結う、相撲や裸體で風引かんトコトツトコト何所の子僧か金切聲で、嘯寒いだらうブン〳〵と時計が入ッ鳴つた、姉ちやん御飯よ喜美ちやんが呼びに來る、有がたう直ぐ行くわと殘りの一本のピンを挿し終へて、紙屑は籠へ入れ手を洗て行く。いつもの賑な食もすんだ、今日は――魚字さんが來た、今日は喜美ちやんの幼稚園もお休みだからあたいのお友達も誘てね―と、三井寺へ遊びに行くお約束があるので、正午までゞ前からかゝつて居た繪を書き上げて仕舞うと室へ蹄つた。身――蜆よ――い、皮蜆え――、蜆賣が通る、水菜え――菜え――。漸く繪具をとく枠に張た絹を下す、早や太陽は庭一ぱいになつて緣はぽか〳〵暖かい朝は彼樣に寒いのに。其また藥の効顯は……、プーと麻會社の笛が鳴た、最う九時、遙かにつゞく菫野に立てる憂愁の少女、是では些し紅が濃いかしら、チリーン〳〵屑は溜て……紙屑は、オーイ斥候どう仕よッた、彼方が何んやい？鐵條綱かやーい突貫々々。墨が中々乾かないし思ふ樣な色が出ない、ブリウに筆を染めた。ブカ〳〵ドンチンヤ〳〵チン、樂隊やーと子供が走り出す、染めた繪筆を走らす幾分時、夢中の耳元に姉ちやん！びつくりして顏を上げると喜美ちやん、幾度も呼んでよ、と――、とけたゝましい豆腐屋の聲、自分の前には幻の樣に憂の少女が顯れて居た。

噴井

靜岡　野崎道子

自分は今、ライオンの齒磨箱を左に、楊子を咬へながら、近頃雪の解け初めて水かさの殖えた、噴井を見詰めて居る。井桁に一つの穴がある。其穴から水が溢れる。それに、二つ割の竹を夾んで水を受けて井戸流しに落す。先へ落ちた上に後から絕間なく落ちる。ジブジブと音がするように感ずる。板の上に水が落ち重なつて積み上がるかのように見えるが、下折れがして、流しに旅ごり、新らしい流し板の上を流れて行く。流

れるといふよりは此塲合辷つて行くといふ方が適切かも知れぬ。板の上ては水が有るか、ないかは一寸見境ひが出來ぬが、板の端の溝に落する處を見るとショボショボ音を立てゝ、細い流れを作つて、梨棚の下を裏の方へ流れる、て板の上をも流れて居たと初めて思はれる位。氣がついて楊子を動かす、何氣なく歯磨粉の泡の出來たのを吐き出す。

櫻色の泡は板の上に觸れる、同時にさつと四散して、動かされながら、朝日に透けて、四尺たらずの流板に一面淡く辷り、流れに過ぎて溝に落ち込む。

平和な朝の景色には、此の一瞬時の光景がなか／＼に一大活動て、面白い。又吐き出して見る。流れる。二三回繰り返す。口に泡が最早ないので歯磨粉を楊子に澤山附けて泡を作つては吐いて見惚れる、泡の多い方が面白い、楊子を箱の中につき込んで泡を作つては、吐き出す。後ろに誰やらが來たと思つたが、尚やつてゐる何かあるの……何んだ何んにも有りやしないあ――弟に自分が何を行つて居るかは、知れる筈はない、弟の來た時は恰も、口一杯に最後の泡を作つて吐かんかと思つて楊子を動かして居た時てあつたから。

風はないが春は未だ寒い。寸餘の麥の畑と安倍川堤の枯木が、あざやかに眼の底に映る。

（賞　外）　增田靜子



夕暮の我家

臺灣　稗貫みつ子

姉樣はお書齋でバイオリンを奏してらつしやる、私は詩集と雑記帳とをもつて縁側へ出た、庭の前には。高い／＼山は、重り合つて、今にも家の庭へ、くづれかゝりさう、山の、頂邊にある木は、雲にとどきさうである、其山の、東の方は、今し、沈み去らうとして居る、日光に、映じてパット華やかに、美しい、雨上りの、濕つぽい風は、芭蕉の葉を一ゆすりゆすると、白い露は、ほろ／＼こぼれて、くだけてしまふ、何かよい詩材を、得ようと思つて、折角縁に出たけれど、多く、詩神に愛されぬのか、一向材料は見つからぬ、其上、妹まで傍へきて、手鞠つきやらお手玉とりやらで、大騒ぎ、胸は益々混雑する、「さあちやん、宜い子だから彼方へお出な」波立つ胸

を、静めて云ふと、「いやよ」首をふる、「ぢや咲あちやんは悪い、いやな子ね」、わざと云へば、「あら妾宜い子よ」、けたゝましく叫ぶ「いゝ子なら、彼方へ行くわ」、云ひもはてぬに、「ねきねえさん、妾宜い子だから、母様の所へ、行くわ」、ついと、奥の方へ馳けて行つた、ふと、山を見ると、もう、夕日は、西の山蔭に沒してたそがれの雲は、東から西に、走つて居る、鳥々塒へ静まつて、只數人の、臺灣人は、鍬を肩に、何事か、しきりに話しながら、山からおりてくる、姿が見えるばかり「美イさん、私お臺所の方に、用があるから、ランプのお掃除を頼むよ」、ねえ様はたすきをかけたま、障子をあけて、こうおつしやる「えゝさうしませう」、私は、立ち上りながら「お母様は、」何氣なく問ふと「おゝ……知つてるくせに」、べにさゝぬ姉様の、お顔が、いつしか、紅ゐに染まつて居る「それより美イさんこそ、なにかよい文章の材料でも、見つけたの」、只ほゝゑみながらおつしやる、あゝさう〳〵、お母様は、姉様のお嫁入仕度をしてゐらつしやる、と氣がついてもう、其上は云はぬ「ホゝ……私よい文材でも見つかれあ、嬉しいんだけど、全く、見つからないから、腹立しいの」、「例もの通り、文章氣狂ひね、餘りさう熱心にこつても、心がもだ〳〵するばかりて、いけないものです、少し山にても昇るか、基隆港へ行つて、廣大な海や、軍艦汽船でも見て、氣晴しするのが宜いわ、それに、明後日は、西京丸と云ふ、大船がくるさうだから、行つて見てお出て、わづか汽車て、二時間ばかりかゝれば行かれるもの」、いつも、姉様は情け深い、「それも宜いけれど、一人ぢや淋しいわね」、「お友達を、おつれ申しても宜いてせう、私などは、女學校時代には、随分お友達と、旅行しましたよ――おやつ、思はず長話したわ」、姉様は臺所の方へ行かれた、私はランプを皆掃除して、座敷毎に燈火を點じ終つた、お母様は、姉様のお嫁入仕度をすつかり、整へられて、いそ〳〵と、お部屋を出てゐらして、お父様とこよみを見て居られる。

春の雪

熊本縣　藤村たくゑ

起て見ると、まばゆい程雪が積つて、世は一色て、裏の方てはザラ〳〵と瓦を辷る雪の音が淋しう聞える、物憂げに雀が軒端をあちこちとチョ〳〵囀づりながら、飛び廻つてゐる。

御船川の河畔に彳んで見ると、水は音もなく波も立てないて、流れて居るか居ないか、わからぬ様な静かさて、川向ふては銃獵家が小犬を連れて森を指してゐる、小犬が先に立つて川近く行くので、足跡がボク〳〵して見える。

前の方ては、大きなハジの木が岸近く枯れた様に只一本、雪の中から突き出て、何となく物哀れな感を起さしめる。

少し下つた岸に小舟が一艘長い棹につながれてゐて、

それに雪が一ぱいになつて、さながら人が積んだ堆に高く低くなつて居る。

鳥がガアーと鳴いて西の空から、一羽來た。大きなハジの木に止まると、今まで奇麗に積んだ雪がサラ〳〵と落ちて、川面には圓形を畵がいた波が立つ、鳥がカアー〳〵と鳴き始めると、間もなくして、向ふの森に銃聲がドンと聞えると鳥が飛び出す、雪が又サラサラと落ちる、森では煙がボッと見えて、何とも云へない好活畵である、妾に繪が畵けるなら畵題ともならうが、嘆しい事には畵けない。

名もない小鳥がすげなう通つて、舟のつながれた長い棹の端に止まると、又雪が少し落ちる、そよ風が起ると、今まで靜かであつた川の面に小波が立つ、岸ではタク〳〵と音をして、舟がうごき出す、

上の方からは寫眞師がしきりに此方を寫してゐる樣だから、驚いて身を整ふと、最早、寫してしまつたのかレンズをはづして居る。

只もう妙な氣持になつて、此川の面を見つめて居ると、何處からかゴーンと鐘が鳴り出す、その音が餘韻遠く消えてしまふと、今度は小供が呼ぶのであらう、直ぐ向ふの森あたりから「あーとの烏さ、さーきなれ、さあきの烏さあーてなれ」と唱ふのが聞へて來る、見ると烏が二羽、後になつたり先になつたりして、頭の上を通つて居る。

小鳥はまだ去らずに、棹の上で自分の身體を何かブチブチやつてむしつて居る。

ハジの木からは雪の塊が落ちて來て、美しい花は、後では殘りなく散つて了ふだらう……。

交代

伊藤曉子

チン〳〵と時計が七つ鳴つた。我家の夕飯時である、例の如く妾は店にゆいて父樣に「御飯をおあがりなさい」と申しますと父樣は明瞭に「アイ」と仰せられ乍ら矢張新聞を讀んでいらつしやる、「平七もあがつておいて」と云ふと眠たげな目を妙にきろつかせて「ヘイ」と云つて早速臺所へ引き込む。帳場の傍らに立つて父樣のお起ちになるのを待つて居ると、「もう行くよ」を三度も云はれて漸く新聞を下においで奧へ入られた。

今夜は何故か實に電氣燈の光が惡い。帳場へ座して天打つ浪をよんで居たがフと目を上げた瞬間に店に入りかけて居た師範學校の學生と偶然に視線があふ、と二人はあらぬ方に眼を轉じる。學生は慌てゝ極り惡るげに出て終つた。

二十分間程は誰もお客樣が來ない。やがて平七が店へ座ると白い袴を穿つた丈の高い中學生が「水彩畵の具を下さい」と云ひ乍ら入つて來た。平七「ハイ」と答へて繪の具を幾種も出して並べて見せる。自分は尙本をよみ續けて居ると表から「オイ松村一しよに歸らうじやないか」と云ひ乍らいやに氣取つた友達らしいのが

入つて來る先の學生は「これにしよう幾何かね」「七十錢でございます」平七は一圓紙幣を受取つて「お釣を」と自分に渡す。三十錢の釣錢を出して而して賣上帳へ七十錢繪の具とつけて終ふと二人は釣錢を納めて「有がたうございます」を後に押しならんで表へ出た。出るやいなや、

　去年今夜淸凉に侍し……………

と勇ましく歌ひ乍らいつて終つた。

郵便屋さんが取引先のハガキを二枚おいて行つたので父樣のハガキ箱に入れて居ると「今晩は、硯箱を見せて下さいまし」と下女らしきがお孃樣のお供をして入つて來た。お孃樣は花ならば盛りの十八九才位て矢絣の對の小袖と羽織を召して、お髮は上品な桃割れに結ふて其根元にはばらが一輪さゝれて居る。お美しい方よと思ひ乍ら「どうかおかけ下さいまし」と云つて居る所へ父樣が楊子を用ひ乍らお顏をほんのりと紅くされて出ていらしつたので心は少々お孃樣の方へ殘るけれども早速と奥へ入つた。扨、お孃樣は何れの硯箱を求められたであらう。一圓の梨地のか、否々、必つと二圓七十錢のを求められたであらう。何故なればあの方には董の金蒔繪のでなくつてはお似合ひなさらないと思ふから。

柳並木

東京　不佐子

午前の日が赫つと照してゐた。片側町を柳並木に添うて風に吹かれて歩いた。

南日が家の甍を温かに照し、店に並べた陶器が、美くしい色に輝いてゐた。何所にか憩う活動の後の平和と言つた風が仄めいてゐる。風が吹きまくつて往來の塵埃を濛々と高くあげるかと思ふと、街は一樣に黄い色に韜まれて了ふ。と自分の直ぐ前を行く菓子屋の丁稚があつた。金字で、黑地へ屋號を拔いた車を重さうに脊を曲げて、横を向き〳〵曳いて行く。

風が過つて了ふと、町は一樣に吐息をついて、頭を擡げるつた風だ。その癖、風が第二の音をたてゝ、遙かの電車路の方を吹いてゐるのを知らぬらしい。茫然と不用意てゐる。路もさうだ。柳もさうだ。人も禽獸も皆さうだ。其の中を自分獨り意識して、用意して、如何なる出來ごとも期待してゐる樣な心地て歩いた。

川は恐ろしく石を流して、臨終の人の寐息のやうに、微かな音をたてゝ流れてゐる。それても、所々淀んて家鴨の群れが羽搏し乍ら泳いてゐた。

河を隔てた陶器陳列所の方て、敷石をふむ下駄の音がしたが、霎時して聞えなくなる。

妙に口が渇く。其癖唾液が吐いて見たい樣な心地だ。

上を見る。北境を限つた埴山に日が褐く照り付けて、其の邊りから雪雲が悠然と露はれて來る。

陶器問屋の前まで來た時、電車停留所の方てベルの音がした。乘合が潮のごとく待合をなだれ出て往還に滿ちた。

寒さうに外套の頭巾を蒙つた紳士や、ショールの端を片手て揉んだ美くしい婦人やらが肩を並べて行く。冷に紅くなつた鼻端を匿してゆく女。油氣の少なさうな、粉をふいた様な顏の百姓の子供。皮膚がちゞれて薄黑く光る勞働者。中には口唇が乾ききつて、血を泌ませてゐるのさへあつた。

風が一陣またどつと吹く。

突然、怯者の如く尾を垂れて、疑ひ深い目色をした尨犬が、のそのそと自分の傍を過つた。振返つた時、尨犬も振り返つた。

ステーションの音

府下　菊垣田鶴子

『山手線品川行、日暮里、田端、巣鴨、大塚、池袋、目白、新宿、品川方面行が出ます、エ、御乗りの方は　御忘物の無い様ーに』と割鐘の様な聲が、隅から隅迄響き渡ると、ドーッと立上る音につれて、塵だらけなベンチがギー〱重荷を下したと喜んで居るかのやう。

忙し相な下駄の音や、落着き拂た靴の音、さては索足に雪駄引掛けた様な音やら、地響の仕相な音やらが、改札口の方へ押かける。

（賞外）　操子



バチッ〱と、鋏の音が判然聞えて来るにつれて、人足は漸々とプラットホームに消えてしまふ。

『二本松は此車けえ』と慌ては居ても、のろ〱した、其くせ馬鹿に大きな聲が驛夫の呼び聲をブッと切る、『イエ此の次！』と情なく言ひ放たれて、しほ〱と歸る重相な足音、トッ〱と體操の馳足的の音に續いて、カラコロ〱と汗の出相な足音が、開札口で共に止まると、やがて、バチッ！バチッ！と鋏の音！

チリン〱〱段の付いた様な五分鈴の音。

『さ早く御馳けな、花ちやん』と、かなきり聲の直後から、ワーッとたまぎる様な泣き聲、『まあいやだねー、轉ぶのも場所によるよ、確固おしな』

無理な叱言に自分迄が泣き相な聲、開札口でも、まだ音の絶えないのは、切符を切る間も焦躁しがつて頓足踏んで居るのであらう。

『お乗りの方は、御早く願ひまーす、』と焦き立てられてホームは又一しきり賑いだが忙し相な一分鈴の音で、さすがに途断えた。バタッと開札口を閉める音、ピーッと車掌の相圖にポーッと太く答へて、カチャーンと

一揺！ポッ〳〵と漸々早く成つて遂にゴーッとレールを軋る音に交つて失ふ。驛夫の聲も人の足音も途絶へると妙な節で雜誌を讀む人の聲、あゝゝと待ちあぐんだ人の欠伸にゴホン〳〵と衛生家の眉を顰め相なしわぶきの聲。

「おや暫く、誠に御無沙汰いたしました、皆様御無事でいらつしやいますか？」かんばしつた女の挨拶。ゆつたりした靴の音が、助役室の方へ消えて行く。

驛長室のドアがギーッと開いて、

「田代さん、今日の試驗如何？」「相變らずよ、違へた處、數へたら限がありませんわ」「あらあんな事！御謙遜にも程が有るわ」「おやさう仰しやる、あなたは」「ホヽ、」と可愛らしい笑聲と共に、輕る相な靴の音は、はたと止まつてしまふ。

始は風と思つたのが、漸く強く遂には雷のやうな音に成て眞しぐらに、ホーム目掛けて進み入る汽車の音、「上野々々」と異様な調子の、呼び聲に、ガタン〳〵とドアの開く音、箱から溢れ出す幾千の人の呼と、足音とが、一致した、喧しい音は、景氣の好い車夫の聲と、手荷物取扱所係員のどうま聲とに迎へられて別れてしまふ。

其れも之も、ホーム用のトロクの、耳の裂け相な音に打消されて、其音も遠くなると寒相な風が一陣！颯と上野の木立をゆるがした。

朧夜

三重縣　鷹山銚子

唐桃の木の下に据へてある隣家の風呂て、はら〳〵と散つて來る花瓣と共にざつと一浴びした妾は、其まゝ寢るのも何と無く惜しい心地して、只ぶら〳〵と當ても無く彷徨ひ出た。

春の夜の月は薄絹て包んだ樣て、夢よりも淡い光りに野も、山も、森も、家も幻の樣てある、彼所、此所の家の窓洩れて搖ぐ灯も紫に霞んで見へ、藁打つ音、米搗く響などが斷續して聞へる。

二三日の内に咲く筈の庚申堂の牡丹櫻の下を通ると得も云はれぬ香りが鼻を打つ、少しは咲いたのもあるのかと、月に透して見ると、半ば開いたのや、今にも破れそうな蕾が鈴の樣について居る。

妾は何時の間にやら、土橋の處まで來た、橋の側に立つて居る「右伊勢道」「左熊野道」と刻んだ石には踏む程の影も無い、さら〳〵と流るゝ川水も音なく、蛇籠のあたり、折り〳〵チヤボ〳〵と音するのは、若鮎の上り行くのか、白銀黄金の波搖ぐ、岸の女笹が風も無いのにざわ〳〵と騷いて居る。

向ふ阪から小提灯が一つ、狐火の樣に下りて來る、薄闇い蜜柑の木や、杉の垣や、藁小屋などをかけぬけて土橋の方へ來た、誰れてせうこんな朧夜に、提灯を見ると『一寸そこまで』と筆太に書かれてある、成程、例の無口な何事にも急がしげな寺の和尚か知ら、と思

つて居ると何時の間にか橋を渡つて庚申堂の方へ廻つて行つた。

又和尚が來た方から白いものが宙をふわり〳〵と來る、何んてせう、丁度橋へかゝつた時白い手ぬぐひて頬被りをしてゐる男てある事が判つた、夫れが橋の外れに立ち止つて凝乎とたゞずんて居る、妾が玆に居るので來ないのてはあるまいか、何時か元來た方へ引き返して藁塚の二つ並んだ中に姿を隱した。

後ろから駒下駄の音がころ〳〵として來た。

「何誰てすか」と不思議さうに後ろから妾の顏を覗いて「まあ、靜さんてすか、這麼處にお一人、何誰かと思ひましたわ」「お米さん今晩は、何處へ入らつしやるの、逢ひに行くんじやなくつて」「まあ、靜さん、誰れにね、逢ふ人なんてありやしませんよ、一寸貰ひ風呂にねえ」躰裁惡げに糠を手ぬぐひに包んだのをぶらぶらさする。「お風呂なら、態々向ふまで行かなくつても妾の隣家にもありましたのに」「さう、妾一寸つとも知ら無かつたの、おや一寸往つて來ますよ」一寸頭を下げてさつさと往つてしまつた、お米さんは今年十八村中て一等の美人てす。

藁塚の處から又白いものがひよつくり出てお米さんと連れ立つて何か私語きながら行く。

妾はうつとりなつて二人の後影を見送つた。

美文

燈

岡山縣　國富榮子

洋燈を消して蒲團を腮の處まて冠つて寢やうとする、眼を天井に据ゑる、十疊の居室は佛壇の燈てぼんやり薄い光線が漂ふて居る、伸した足の方向には間床が附いて、それに隣て佛壇がある、障子作りの觀音開きは半ば開かれて、金屬製の釣燈臺には豆のような火がともつて居る、下の香爐には絕えなんとする香烟がゆらゆらと亂れて、高臺に盛られた蜜柑、花瓶にさゝれた樒、奥に祀てある位牌を霞めて、薄いもやのやうに、佛壇の中から入口迄立てこめて佛燈は小さな暈をきて居られる、其灯は次第に小さく滅入つて少し青味を帶る見つめて居る眼が草臥てウットリすると、心迄無我の境に入つて仕舞た、と自分は廣々とした原に出た、際涯もない此大きな原は淡き狹霧にこめられて、水の流れ、森のたゞづまゐも見えぬ、言ひしれぬ心細さに暫く見て居ると霧の奥に一點の火が見える、たづきも知らぬ廣野の果に見付け出した一點の燈火はどれほど嬉しかつたらう、突然どつさと云ふ大きな音がした、ハッと我にかへつた枕元にバラ〳〵塵を落して騷しい物音の天井の一隅に消えたのは鼠てある。

住み古した揚句、借家にした屋敷、庭の廣いのと風通しの宜しいのが取柄て、移つたが、天井は煤て眞黑、砂壁の砂ははげて、雨漏の痕は怪しげな形を現して居る、立てずめの合はぬ襖は、白地に雲母の薄の模様、軒が深ふて晝も薄暗い、陰氣な家、自分ながら這入る時、少く物數奇と思ふた位ゐ相馬の古御所と友人が呼

ぶのも無理は無い、寝られぬ眼を天井に据ゑて居ると俄に燈火が暗くなつた、消えたのかしらと首を上て見ると、何と云ふ凄じい色であらう——正に消えんとする燈は眞青な光を放て、障子をさつと下からぼかして、佛香爐の一角に其餘を砕いて居る、パッと明るくなる蜜柑や香爐や位牌が一寸見える、それも一瞬、また暗くなつた以前の青白い螢のやうな火は眞紅な色を呈しパッ／＼と音を立てる赤い火は、次第に青く元の螢になる、パッと又明くなつた佛壇を一寸見せる、元の順序て螢を作る、五六遍繰返して同じ事を見せる、見草臥れて、、臉を合して寢らうとすると、隣の鷄が高く時を作た、驚いて首を上げると時計は一時を打た、佛壇の燈は音も無く消えて居た。

車輪の音

三河　三浦八重子

更け行く春の夜を、懶き車輪の音——遙かに／＼東より響き來る。われは机に凭りて、まどろみ心持に其の音を聞きぬ。

がら／＼とある音は高う、がら／＼とある音は低う、近寄るに似て、また遠のくやうな其の響、歌ふかと思へばうめき、泣くかと聞けば笑ひ、さながら、遠きとほき人知らぬ國の子守唄を、傳ふる聲の如し。

怪しき其の唄に誘はれながら、われは幾度か、深き眠に落ちんとしては危く醒め、醒めんとしては又まどろみぬ。愁も歎も悶も苦しみも怒も怨も、はた喜も樂しみも戀も野心も、何物もすべて念頭になく、たゞ一輛の車の音をのみ、わが心は聞くなり。果ては、わが心が車の音なるや、車の音がわが心なるや、はた車の音、わが心、別々の物なるや、その境を知らず。今は在りと有らゆる世のすべての物、溶け果てゝ、たゞ此の一輛の車の音となりぬとぞ覺えし。

俄にわれは、机の端より肘を落して、驚きて醒めぬ。夢心持は、名殘なうさめたり。車の響はあざやかに聞えそめて、其の音とわが心、其の音と世のすべての物いづれも別々なるを覺ゆる事、たしかになれり。今は其の音、魔のうたふなる怪の唄にはあらずして、世の常の、人の引くなる車の輪のとゞろきと知れぬ。今其の音は、東より西へ／＼と、わが家の方にぞ走り來るなる。

忽ち、わが想像力は、この音に向ひて活動を初めぬ。がら／＼と響く其の音の底より、一臺の人力車ゆらぎいて、車夫の紺足袋の、すッ／＼と塵吹く風を拔く。車上に美くしきパラソルがゆれて……………

車の音は、辻角を南に折れて、わが家の門に來かゝりぬ。忽ち、すぼりと窄む傘の花瓣、内なる人は人か花か、露重げなる白朝顔の、くッきり白き玉の顔、藤紫の香襲、三ケ月の眉、小鳩の目、優しくふるふ口唇より「車やさん、此所へおろして……」その聲、鈴を振る如し。

「あら、お葉さん！」とわれは思はずも、其の幻の人

を呼びぬ。

されど、あゝ、車の音は行き過ぎぬ――止まらで、其の儘に。がら〳〵と轟き響を、寂たる夜の街に響かして、南へ〳〵と、遙かに遠く、さて幽かに。斯くてあゝ永久に南へと、車は行きて歸らざるらんか。今年こそ必ず行かん、梅の未だ綻びぬうち、鶯の未だ來鳴かぬうち、花よりも鳥よりもいや早く、われは御身の故郷の春を訪はんとの、いともうれしき玉章に。其の友今日や來ん、明日や來らんと待ち侘び居りし折からなれば、斯く仇なる車の音のとゞろきにも、美くしき幻はゑがゝれしか。笑止。……さてもあゝ、夜の靜なる哉。

寺の一日

越後　歌川幽草女

思ひ出した樣にそよ吹く風に代赭色に熟した稻の穗も低う波を打つて居る、兩側には松竹楓百日紅等が雜然と茂つてる餘り廣くもないお寺の門を過ぎると、行あたりは格子戸の入口、本堂もまだ新築中なので、鉋や鋸の音が騷々しい。

老翁やが格子戸を開けると能う御出てなさいましたさあ此方へと、何時もながら愛想の能いのは御寺の梵妻樣、二十四五の色の黑い鼻の低い、つい近傍の百姓屋の末娘なさうてある。子まで有たお僧樣が去年の夏肺炎て、三十成るかならずで死なれたので、後住の定る迄壇中で留守居を賴んだとか。二十疊の座敷は疊も天井も皆新らしい梵妻樣に、老翁に、白七分の髮を小さな島田に結つて杉の櫛挿した老婆ばかり。堅くなつた羊羹、重づめの枝豆が出るお茶が入る。普請場の方ても折々笑聲も聞える。「本堂ももう直に建ちますのにお住持樣てんがいな能い寺見ないてお死なさつてなんぼか御氣の毒う御座いますのし」と老翁はあたりを見廻して目をしばたゝく。「壽命て仕方が御座いません」と梵妻樣も一寸淋しさうに鐵瓶に水を挿して「お婆々お前さん目はもう能いかね」と老婆の方を向く〳〵、「此間中はねつから能う無うて困りますねし」と頭をもたげる、今迄氣付かずに居つたが、兩眼とも惡い、殊に片々も役に立ちさうもない。

(賞外)　いは子



墓所は一面の青苔、彼方此方に蛸蛤草のすがれ花が見える、香華を供へる、老翁ゝ水を上る、直ぐ傍の新らしい卒塔婆は前住職の墓、萎れた菊花が淋しう戦いて居る。

裏の日當りには、子供のおしめが乾して有る。

湖畔

名古屋　清水とよ子

湖畔を去りてこゝに一とせ。あゝ、この切なる追懐をいかにすべき。

瑠璃盤廣う湛えたる七十里の水は、雲ある日、薄き暗緑色を帯びて、湖心、多景島のあたり夢のやうに霞ひ、雲なき日、湖砦を守る將軍の振せる膽吹と比叡との尾を長く曳く群峰小巒は湖の四圍をうねりて走れり。住みけるは湖の東、田疇やゝ濶けたる近江の大野の北に迫れるところ其名に云ひ知らぬ寂もてる彦根の里よ。石田治部が百間の橋と島の左近とを誇りしてふ佐和山は、嬉しや、朝な夕なにわが窓より仰ぎ得べかりき。行く水の末は鷗安らかに眠る大わだつみよ。風吼り浪立つとても雲散じなば聽ては凪ぎて、刷毛一筆の眺めに歸らむ。いと奇しき運命の絲に繰られて喘ぎ〳〵『生』の坂辿る人の行末こそ實に測り難きことゝし踏なりかし。峰深く嶮多き丹波に生れし頃はえも覺えじ『流浪』てふさだめに弄ばれて、さゝ波や滋賀の都を過ぎりしは垂髫愛らしとめでられたる頃なりけり。父君うせ給ひて後は一しほ數ある憂きことに惱まされて、魂の莚まで弱り呆けし心地。人無き折、人無き處、獨りひた泣いて涙の泉の涸れなんこととてそ唯一の願ひなりしか。家を南に流るゝ芹川の岸に上り、月光木のまを洩れて流るゝ水に黄金の鱗と砕くる夕、幹うつろなる大樹に倚りて身のこし方を思ひ出てゝは泣きける涙の、あはれ、幾度か水にこぼれて湖へとは注がれけむ。されど、磯山に續ける松原に霞淡う立ち亘れる朝、城山の頂なる西の櫓の壁に身を倚せて、西の空に廣がれる湖面の眼も遙に竹生島より北江州かけて曳ける一抹の雲のさ動ぎもせず、晴れたる空の陽影麗らかに、鰕漁る舟の入江漕ぎ行くを打ち眺めては、胸も自ら清々しく、今更に小さき運命を喞つ人間の弱さの大自然の前にうら耻かしき心地して、やがては四邊に人なきを窺ひ好める詩の一節を唄ひ出てける事もありしよ。鳰の浮巣の藻に咲く花の、風吹く毎に漂よふ如きさだめの身や。寄る年浪の數色あせし額に刻まれて、日毎術なき世を愛しと宣へる垂乳根の、切めては血を分けたる同胞と共に餘生靜かに住み送りたしてふ仰かしこく、十年の知己を後にして人事繁き都會に移り住みてより早や一とせ。雲映ゆる朝の湖、風清き夕暮の湖、あけくれに振り返る心のみは、今も尚近江の空に殘れりとぞ覺ゆなる。都に咲く花は美はしとて見る人多し。琵琶湖の東、石垣頽れ、蔦生ひ茂れる古城の森に、寂しう笑みそめけん花を心よりうるはしと見んは、あゝ、幸うすきわれのみにはあらじか。

「天」

倫敦塔

下谷　美代女

今日もまた母の后は牢守の情なき言に、
夕霧や、浮城のごと灰色に聳ゆる塔を
振り仰ぎ、振り返りつゝ、彼の窟の
いづれの裡に
最愛しき吾子は在るや、と河の邊を
たちもとほろふ。

知るや如何、此處に入りては復と世に出て得ぬことを。
白塔の冷たき室に籠めらるゝ幼き君よ。
﨟けき二人の王子は、母君を慕ひつさては、
亡き父を憶ひいてつゝ、夜を明かし
又日を暮らす。

兄君は椅子にもたれつ、「命さへ宥したもらば、
王の位は叔父君に上げうものを、」と
呟きぬ。
弟君は窟に倚り居ぬ。黄昏の空を眺めて、
「あゝ、けふも斯うして暮れてゆくのか、」と涙を流す。

薄闇の物の陰より、飛びかゝる曲者ふたり。
あと叫ぶ。どうと仆れつ。喉笛を壓さるゝに、
虚空をば攫むとすれど、はや魂は骸を離る。
しかすがに、曲者も眼と眼とを見合はしにけり。

石床によこたはる兄弟の遺骸は、
名匠が彫みけむ大理石の像かとも。
あなあはれ！

風暗し、壁掛搖ぐ。寒月は窗にさし入り、
蒼白き二人の顔を、ひやゝかに照らしつゝ。

敍事詩の新しい形式、熟れたものである、恐らく昨日今日の作家ではあるまい、二節三節、最もすつきりとしてゐる。（評）

「地」

木の葉髪

徳島縣　長曾我部菊子

夕間暮窓の木の葉の散る日なり。
髪に落花の觸れてだに
こゝろ戰く少女氣に
たゞいぢらしう手に受けて
みれば冷たき木の葉かな。
秋なれば胸もつめたし――一時は
刄を踏むもなじかはと
思ひ歸りし鋭心の
傷の名殘を母の目に
見せじと口紅はふふめれど、
豆の葉飜る古里の
野ははるばると草の浪
遠きにわたるひゞきより
夢こそ起くれ蘇りたる、
小鏡かけし扉のまへに
母が愛づなる髻や
白元結をとき放ち
手にぎりあます亂れ髪
といき――かすかに梳づれば
あなうら佗し落つる毛よ。
（夢か少女が香のにほひ
吾は朽尼とならんとすらん
惜しきかな）
かき梳るつげの小櫛に
短きも交りてあれど
身丈にも越して長きが
性もなく脱けて落つるに
うらめしき命の我れや
胸はまだ乳さへ固きを
艶ある千筋の髪を
われにのみ神は惜みて――。
鳴門の浪の寄るところ
阿波は椿もこぼるれど
其の實の油つけねばや
毛はかく弱くなりにけん――惜しきかな。
惜しけれど、いて。
一人の人を失ひて
終にかなはぬ吾が戀ならば、惜しけれど、
脱くるも落つるも木の葉髪
秋は木の葉も大地に散るなり。

若し名を隱してあつたら、てつきり夜雨の作だと思ふ、若し此作を夜雨集中に入れても恐らく遜色はなからう、此の一種のにほひと云ふものも、歴史的に持つてゐる日本の詩歌のにほひ、一語一句と突込んでは來ないけれど、遠の山の根を雲がかゝつてゆくやうに、感じが

ゆるやかに動いてゆく、而かも心持が好い夜面が明治の詩壇に功蹟ある、此一事を以てしても永く沒すべきでない。（評）

『人』

仇花

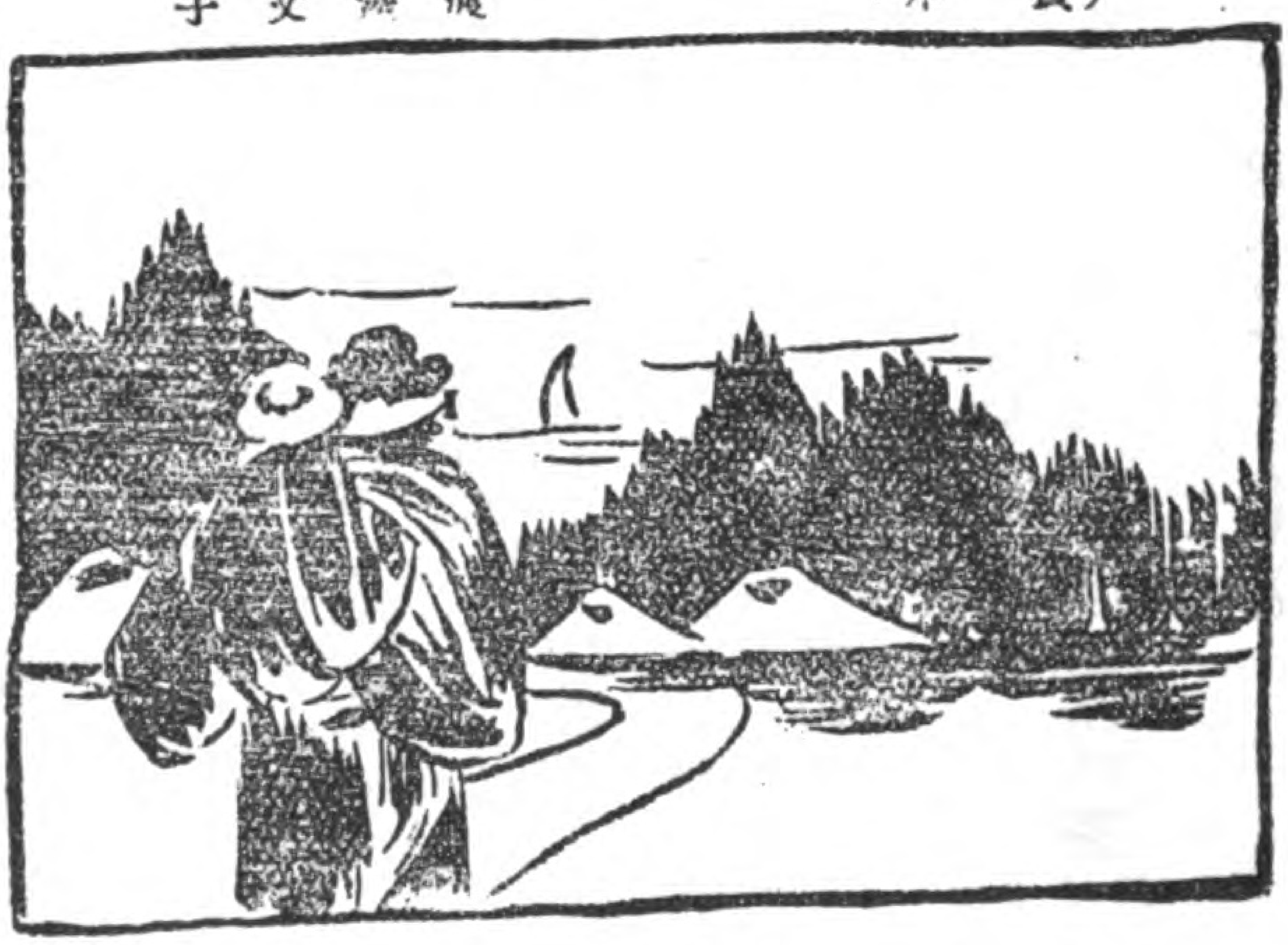
牛込　新庄奈津子

紅き緞子の垂幕を今しも出づる二十人。
緋羅紗の上衣、はた赤裳、面熱れたる貴人は
密語交し、手に肩に亂れ縺れて花瓦斯の
光くるめく室を今、帷の蔭に退きぬ。

舞踏ぞ果てて大廣間。暖爐の火熱蒸しわたる
花絨氈の床の上は、散り敷く花の眩暈く
香の渦に爛れ立ち熱き渇ける火の咽び。
ああ歡樂の夢の塢。夢の焔のその樂に
醒めて喘げる火のピヤノ、ゐ並ぶ彼方彩繪濃き
壁の面は一筋の淫れの色の朱ぞ引けり。

あな今かかる逸樂の宴の笑の中に見よ。
顫へ搖ゆるその胸に培ふ毒の仇花ぞ
かかる夕を淫惑の暗き心に幸ほひて
赤き衣裳の人に咲きその唇に薫るなる。

（賞外）　渡邊文子



得て斯う云ふ作は、官能の美に眩惑させてしまひ、一種の威嚇に終るものが多いけれど、此作は必ずしも然うでない、眞面目な根底のある作である。（評）

『秀逸』

滿つ潮

けい子

新汐は熟れ果のつゆれ
下滴るゝ熱れの色に
湧きかへりはた和らへる
春凪ぎの海の玉杯

黄金さす美酒の薫り
ゆらゆりてくゆり湛よふ
酔ひ痴におもふは天の
ふるさとや温かきみ手。

あこがれの眼路にたなびく
うす霞あえかのさまや
夢ごゝちほゝ笑む君が
美しき眸ぞ輝く。

傾まけは御口ふるひて
頰丹摺らひ口籠りませし
優言や刹那の思ひ
繰りかへす遠き汐鳴り。——

塔へかたや胸なる小琴
音にふれていしくも和すれ
底つ海の小魚のつどひの
戀がたりひときもゆるに。
現心恍け佇む

貝の扉ふとあはたとし
満つ潮は裾とるひまを
麻裏の緋の緒沈ひぬ。

五七の調も手に入つたもの、酔つてゐるやうな情調の摇曳は詩の人でなければ歌はれない境です。（評）

薔薇の芽

信濃　有賀まさ子

ほのほの環。「天」「地」の
接吻に生りぬる——さうびの芽

ひとつこぼれてふと人の
心臓に根ざせり——さうびの芽

日ごと夜ごとにいくとせを
つちかふ。かくて——さうびの芽

愛のしたゝりすく〳〵と
一寸、二寸、——さうびの芽

延ぶるたゞちによろこびの
花さきくゆる——さうびの芽

幹は瑯玕、大理石の
かゞよひ。やがて——さうびの芽

若きうれしみ「憧憬」の
宮居きづくと——さうびの芽

花は瓣ごとに君といふ
華紋ぞにほふ——さうびの芽

はしきみ胸の香の爐に
焚かれむねがひ——さうびの芽

一聯毎に「さうびの芽」と置いた形は、割にうるさくない、おちついて作つてある、然し慾を言ふと今少し生氣が欲しい、殊に二句一聯のやうな短い聯をつないでゆくには、血の滴るゝやうな句があつて欲しい。（評）

幽宮

土佐　石川一薫女

日の見えぬ空は、重たくたれぬ
殿邸なり、定紋彫りし

甍の碎片や、高殿の跡ぞ殘れる
これも亦、その昔の榮のかたみと
あせぬれど、古池は唯蛙らが
狂ひのまゝに、汚水よどめり。
見るからに、毒氣みなぎり
人取りの、魔神こもると
折れ落ちし、石橋の片端
ものすごく池中に頭もたげぬ
白き根をたれ浮草の浮べる水に
映れる空のかげさへ色寂びて
幾卷か秘めたる、榮の歷史
怪の幽宮の、扉開かん
詩人ぞ暗きに來らず。
おゝ、冷めたき、自然の姿
人生の、冷えの極みか。
ものゝ色、その隈までも滿しぬれ
ひし／＼と、とり圍きし氣は
胸をまて、射とうして
心に迫るけはい、魂は痛みぬ。
幽かにつける息の餘りは
沈める、かげをゆりて
四周の色ぞ、灰ばめり
ふと思ふ。いつとなく
ふら／＼と、怪の幽宮に
我は來つると――。」

壞さずともよいところまで、强て調子か破格にしてあるのは何んなものか、此作者も未だ摸倣時代にあるけれど、向うとしてゐる處は好い。（評）

冬のわかれ

鹿兒島　橋田なみ子

木に通ふ夢の脉々
春の日の光をまつと
沼の遠こゑもなく
立てり靜に影ひたす
雪の斑ぎえ、氷の歎き
嘆きの森はいまふとき
吐息もらしぬ、寂びの繪に
素描せる空の色、何をまつや
春を醸むみどりの酵母は
うごめきおもひ揺れゆれて
枝がらみ吹く歎の風
梅のすさびに「春く」とうたふ、
ほろ／＼と土はころげぬ
崖の石氷消えに鳴れば
たまゆらに野面は日をあび
銀色に草はきらめく
終焉――冬は今
柔き芽のときめきに
「別離」をおもひ、かゝる日を
靜にふして眼をとぢぬ。

泣菫の流れを汲むもの、摸倣でなく、創意がある、只此詩全體のヒントを泣菫から得て居るのは確かである。（評）

夢の華

上總　ひさ子

ふと夢さめぬ――
春の夜の花のみだれを、しら鳩の
優羽たゆたにかへり來し、
あやなきおもひ、
伽羅の香ぞうつゝにかをる。
（憧れ心地――灯の方に、

枕がへする瞬間を、
頬に鬢毛のい觸れては、
胸の和魂また搖ぐ）
十束にあまるわが髮の、
梳れば蝶も寄り來たれ、
春をさかりの生命とて、
笑みし誇りの、
——はなやぎの中や翔りし。
四尺の袖を片取りて、
似ると言はれて
伽羅たくに、母ある人を妬みしか、
若き愁ひの、
さびしみの中や迷ひし。
あゝ灯影のみだれ、夜のみだれ
生の汀にふと見えし、
『華』よはかなく散りにたれ、
根ざしよ天に深からむ——
夢の白羽のあとゝめて、
うつゝに辿るわが魂よ。

未だ全然摸倣時代から脱れてゐない、今一息深く自分と言ふものを探り出して見ると好い詩が作れるやうになる。（評）

闇の間

四谷　槇子

めひらけば闇にあやあり
百千片あやし彩羽の
縦横に亂れ舞ふ影
ちら／＼と吾目さへぎる。

めとづれは闇に聲あり
夢ともわかず現とも
遠くよりあやしき響
耳底にうれひぞ殘る。

聲もなく目にもみえねど
陰森と身に迫りくる
冷き香肺に充つれば
胸の血はひえて凍りぬ。

中暗き蠱の甕に
醸されしうれひの酒を
掬むが如恐怖にふるへ
含む如胸痛みつゝ。

あゝ憂愁、煩悶の國を
のがるべき術はありやと
求めつゝ『眠り』の影を
『暗中』にひとみてらしぬ。

少し、自覺し過ぎて歌つてゐるから、理性の勝つたところが眼に着いて、却つて感興に乏しい、あなたの才を以てして、未だ囚はれてゐる處あるのは殘念に思ふ。（評）

曇り日

信濃　依田花園守

あなやわが胸——若き日は、
いつとしもなく日なぐもり
風にあざれし空の汚染、
倦んじたゆげのにびのいろ。
寂のさやぎに滅入る氣の、
重き愁ひにうなだれて、
悔の深みにありわびつ、
あなないざくる晝のやみ。

曇れる「胸」の夕ぐれに、
つかれ息づくなげかひの、
魂はよろばひ躓りきぬ、
愛てのまどひに身ぞ痴れて‥‥

短いが要領を得た作だ、詩の壇上に嘉讃し得られる人だ。(評)

闇の夜

土佐　大和田靜子

闇の夜はくらき哉、わがゆく徑。
みよ飛びちがふ誘惑の、
ゆら〳〵と闇にゆらめき朧かに、
はた明かにひきさそふ。
影としもなきもの丶影いやさみし。
過去なる夢のおもゝての、
まのあたり走り揺めきふら〳〵と、
魂のこかげにつきまどふ。
闇にゆらめく誘惑や、はた過ぎし日の、
夢の影、小さき胸をさし覗き、
目にし浮ぶは闇の徑、つらなるは、
恐怖の斑、くひのみだれ斑。
こゝ遁れんとひたぶるに、日も夜も



(賞外)　佐野貞子

すがら、
光明をし願へども光明もみえず、
どす黒き「不安」の闇路、たましひは、
うと〳〵とかくて眠るか永久に。

これも暗黒の象徴詩、上手ではあるが未だ人の上へ出抜けるところまでには到らない。脱甲すれば抜け出られるたちだ。(評)

彌生の森

館林　山田哲子

いと輝かに、今日こそは、長閑かに
春風薫へ、芽に出でぬ落葉森、
芽に出でぬ間の艶だちや現身に
なほ冬をこそ領ずらめ、去年の實の
老枯れかはきて丶彼處音に歌ふ。
あゝ春に聴く冬の歌、冬の眼の
痛傷き凹みに映り來し冬の笛、
苦患や更に照りかへり、爛壞せる
朽葉を壁に春寫す若葉の
生の調色板掻き混ぜて白に歸す。
白綾天幕つと垂れてつと消ぬる、
我が眼の刹那胸もはた白み添ひ、
心の原始影さすや、束の間を

永劫に彫りなす銀盃に耳傾げ、
彌生の森の私語を我は愛づ。
此時我が身法身の遍ねきに
照り添ふ衣明圓の如意輪と、——
これや我が身の、これやまた我が衣の
過去無量劫、——疑念の罣礙もなく
我が立つこの地、この心觀自在。

なましりの佛語などは好んで使はぬ方が安全てすけれど、使つて見たいもの亦强て咎められない、考への深い句もあつて、再誦して見る價値はある。(評)

夢の香

熊本縣　宮野かず夫

暗きかな——我が今ゆくは暗の國夜
見の曲路
幾曲ゆけどくらきかな
みよ飛びちがふ黑き綾黑なき日影の斑
さら〳〵と音なき響無なる影寂しきかなや
たまゆらに黑きにうかぶ微笑や悲びの色
はたあきらかにおぼろげに
過去なる面は現今の影影とみだれて
もつれあひ「夢」の香はゆら〳〵とやみにくゆりぬ
ふら〳〵と闇にくゆりし夢の香は
「惡」のくすぶり
胸はけがれの色にみち
なまでひらけばあゝてゝも闇のまた闇——
たへがての恐怖懐き叫べどもあゝ叫べども
ふつ〳〵と夢のつぶやきさながらに
汚れの水泥
悶え動けはいや深う
沈み行くけはいあゝついに——胸もうなじも——
繰り返し夢より夢に——かくてまたうつら〳〵と

夢より夢、闇のまた闇など同じやうな言葉を繰返しては居るが、其氣象が如何にも暗黒な衣を被て居るから、暗い泥の底へ沈んでゆくやうな心持がする。暗面を歌つた詩では好い方である。(評)

靄夜

松山市　勝島愛子

水明り
夢みるけはひ
ほの白の紗の帷
靜かに搖れぬ深のおも
遠町の
燈火のかず
濡れ絹にちぢむさま
車のすがひ軌る音
靄のたゞよひ——
月に似し
靄夜の明り
匂やかに水氣して

廣き道ゆく人もなし

闇夜と言ふ語の非音樂的なのが疵。（評）

魂靈の幸　窓雪

大なるかな天地の
そぎえの極たゞ靈光
千名の五百名の萬名に
配る生命の幸ひや
現實は聖き神の世の
靈魂の土產をもたらせり
高產靈のうながせる
その御統の玉瑤に
天路の星と炫きて
今も神世はてゝにあり
常に大殿の御門べは
時間の翁もうかゞはず
あゝ物象のありどころ
つひに御神の手ばなれじ
おのれとありのすさびもて
などわが幸をなげうたむ
天に神實靈魂實
すなはち人は地に永く
生存の生命のいちじるき
わが世のはえよ整頓よ
日の經緯の遠長に
靈魂の幸はたらしたり
見よたなぐもの扉より
不斷の息の迸しる

いかめしい神の名や、宣命式の言葉があるので、不思議なもの〻やうに見えるが、考へて作つた詩て、かいなての作とは異つた點がある。（評）

樓上　信濃　太田きし女

「春」つかのまの、たのしみを
埋めたてゝ、いと高く
築きたる、たかどのに
人のさだめは、すまゐけれ
たかく／＼と勇ましく
きざはしを、登りゆく
跫音は混り亂れ
悲しみに魂めけて
たゝずむ吾の胸をさす
「秋」風さむき窓により
日の落つる山見れば
思ひ出や――いと遠き
心の故里をはせめぐる
あゝ故里は青草の
香ににほふうまし國
花かげにまどろみて
ほゝ笑みし樂しさ思ふ
思ひ出に蘇り
たどりてはもどりゆく
吾が耳にたかく／＼と
また恐ろしき跫音の
身をまいてのぼりゆく。

心の奥へ　下總　小澤蝶子

わが心、
心の奥へ――芽ざしたる美しき花
億劫に枯れんともせて。
その花を
培ふ水は紅のわが血潮
肉こそはそが餌食なり。
血は失せて
心もくらみ頰青く

しかはあれど美しき花
奥より奥へひろごりて
きはみなき苦惱の花は
凶の果實をむすぶらし。

黄にはた樺に「震慄」の影こそ
追憶色に赤き笑
死に似たる苦しみにしも悶へては
その刹那わが心神にいのり
心に深む美はしき花
枯れはてぬべき日を願ふ。

里にて　麹町　里子

君訪はて淋しき日かな
こもりゐのものうき日かな
うつら／＼夜の雨きゝぬ

しと／＼と春雨すれば
雨天の近くに立ちて
思ひ入る其のかほばせよ
あゝ悲し吾が世はとぢて
遠くさり人の面かげ
忘れねば悲しきいく日
はては今天地も裂けよ
其せつなわれはしゆかむ
けがれをすてし君かみ側に

あこがれ　岐阜縣　大島かつ子

あゝあこがれのわが瞳
美しみ國をたまゆらに
そこはかとなく見ゆるなれ

若き日の影刻々と
消え失す如も果敢なみて
ひたに戀ふなるあこがれよ

老いては胸の血も淀み
夜遠こゝろはなやげる
あとのみとゞめ逝く影や

さと靡る振袖に
わが若き香のわれと笑む
心地こそすれはなやかに

湧く血躍る血いたづらに
え隱すすべのあらずして
あゝあこがれのわが瞳

塔の影　茨城縣　小泉濱子

夕なり、亂るゝ花は、
靜寂の領にかへりて、
かすかなる物の氣勢や
そのかみの美き日をしのぶ。

戀失せぬ淋しき思ひ、
野の塔の影によりそひ、
袖あげて胸をいだきつ、
かくて見し筑波の峯よ。

雲の襞ほのかに鈍み、
空ひくに滑りぬかくて、
あゝ山は戀しき山は
目を去りぬ、我は泣きけり。

淋しうも生きし身なれば、
世を泣かむ運命にはあれ、
夢の如うすれ／＼て、
我影も消えゆくおもひ。

誘惑　伊勢　かはらよもぎ

美しき瞳の映えは
朧夜の花にあこがれ
優心そと漂く彩に
「誘惑」の影はこもれり。

唯想ふ快き氣と
微笑みし笑靨の裡や
あな、おぞの執念ひそみ

忘られぬ胸をこそぐれ。
想はじと瞼とづれば
幻のなほなつかしう
悟りたる眼開けば
心惜、恍惚るゝ姿。

「誘惑」よ罪の若草
戀に摘む弱手しなえて
春の夢結ぶに任す
朧夜の花のあこがれ。

灯かげ　大津　夏山ゆり子

あゝ深夜ひたく\迫る
灰にびの幽暗の香に
胸おされ重き息して
くらがりを闇へ辿りぬ

遠かたにふとほの見ゆる
うすれ灯に心はとみに
蘇みかへり和みぬ胸裡
瞬間の安らひ覚え——

せかく\と灯しを眼路に
辿れるにあなこはいかに
灯の光りにはかに消えぬ
跡もなく闇のおくがに
さきつ世にはた後の世に
わが知らぬ恐れ悲しみ
つぶく\と忌音をたてゝ
戰きのたまに迫りぬ

(賞外)　きむほ子



夢の國　丹後　鹽見千代子

靈香いみじき金色の
雲の戸開けば——天の樂
波の輪傳ふさまにして、
餘韻幽かに響き來ぬ、
幻想の跡追ふが如、
我足地を今離る。

花咲き匂ひ風かほる、
見ぬ世の園に何時か來て、
辿る流れは幽森の、
萬古の姿浮べたり、
水金鈴のさゝ鳴りに、
しらず深入る「夢の國」。

こは訝しき水上や、
白羽をさめし水守の、
罪を洗へと招き寄る、
姿よ崇高うなりぬれど、
なほ憂ひ帶ぶ優聲に、
あな高響くわが胸血——。

あはたゞしあゝ劍拔きて、
誰ぞや尋ぬる魔のけはひ、
み眉ひそみし白羽人、
握れるわが手つとはなし、
幻のごと夢のごと、

何處ともなう消えゆきぬ。

おもかげ

羽前　弘子

花木犀の香にわびて、
夢は園生を逸りけむ、
覺めてもすゞろ幻を、
偲ぶあしたの手枕よ。
されば夕べを垣間見に、
ふと面影を戀ひそめつ、
うたて亂るゝ胸にして、
「わびしさ」をこそ覺えけれ。
扇骨木の離冠木門、
葉茸小さき君が家は、
今、朝霧にほの〴〵と、
門の青柳けむるなり。
緑に萠ゆる若草の、
やわらかき香を蹠に、
踏みて過れば朝の風、
わが衣手になびくかな。

薔薇園

尾張　林　こま子

燃ゆる紅あざやかに、
玉を聯ねて一つらに、
香を吐く花や日の駒の、
あゆみとゞむる薔薇園、
可愛ゆき小鳥の忍び音を、
葉蔭に忍ぶあとゝめて、
遲々たる姿舞ふ蝶の、
翼の風を追ふはたぞ、
快樂の極み長春の、
さかりを占めし佐保姫は、
今し霞の幕閉じて、
白晝の夢を夢むらし、
この徑よ初戀の、
この芝生よ邂逅の、
この亭よ相共に、
この池水よもろともに、

觀音寺墓畔に立ちて

越後　志良ゆき子

木闇に、黒う沈みたる
　時劫の韻ゆすぶりて嵐は過ぎつ
　古杉の領かも――萬象は音を秘めし
　　息づき深き寂莫に
　　め覺めて一人立ちにけり
あゝ石碑よ面荒らび
　乾反りし苔を薄き陽は黄に浸入るを
冷けき地の眠をゆすぶらば
　古き秘密をひそめたる
　靈はほの白う湧き出てん
麓はつゞく春の街
　櫻吹雪に曇りては、醉歌たゆげに
　絃の音か木靈に遙く通へども
　　こゝにはとわの冬の闇
　　淋し音のみぞ殘りたる
照る日の領の外なれば
贄の小鳥裂く梟の闇の香吸ひて
うつぼ木に呪文唱ふるだみ聲は
　罪の障の滅びざる
　迷へる魂か誘ふらん
とこしへ消えぬ聖燭をも
魂守る星のみ光は葉越に洒れつ
ものゝ香や草を離れし微白の
　煙るが如き幻影は
　虚空にかろう浮びけり

松葉掻き

常陸　川島千鶴子

潮は鳴る――松の磯
紅の襷の海人の子は
波折きゝつゝ黒松の

落葉ぞ拾ふ唄ひつゝ
（千本松原小松原――）

砂光る――白き濱
春の日はたゆらにわたり
赤き貝、白き小貝の葉を照し
磯唄の調はたゆむやさ聲に
（千本松原――）

琴は鳴る――「春」の曲
音もなく松毬こそおつれ
砂は舞ひ風は狂へど
手は止めず一葉掻き二葉かき
（小松原松の數より）

露ぞ散る――松林
潮は薫ず亂麝の香
韻は傳ふ、無絃の音
さゝと鳴る綠のゆらぎ歌きこゆ
（松の數より猶かわい――）

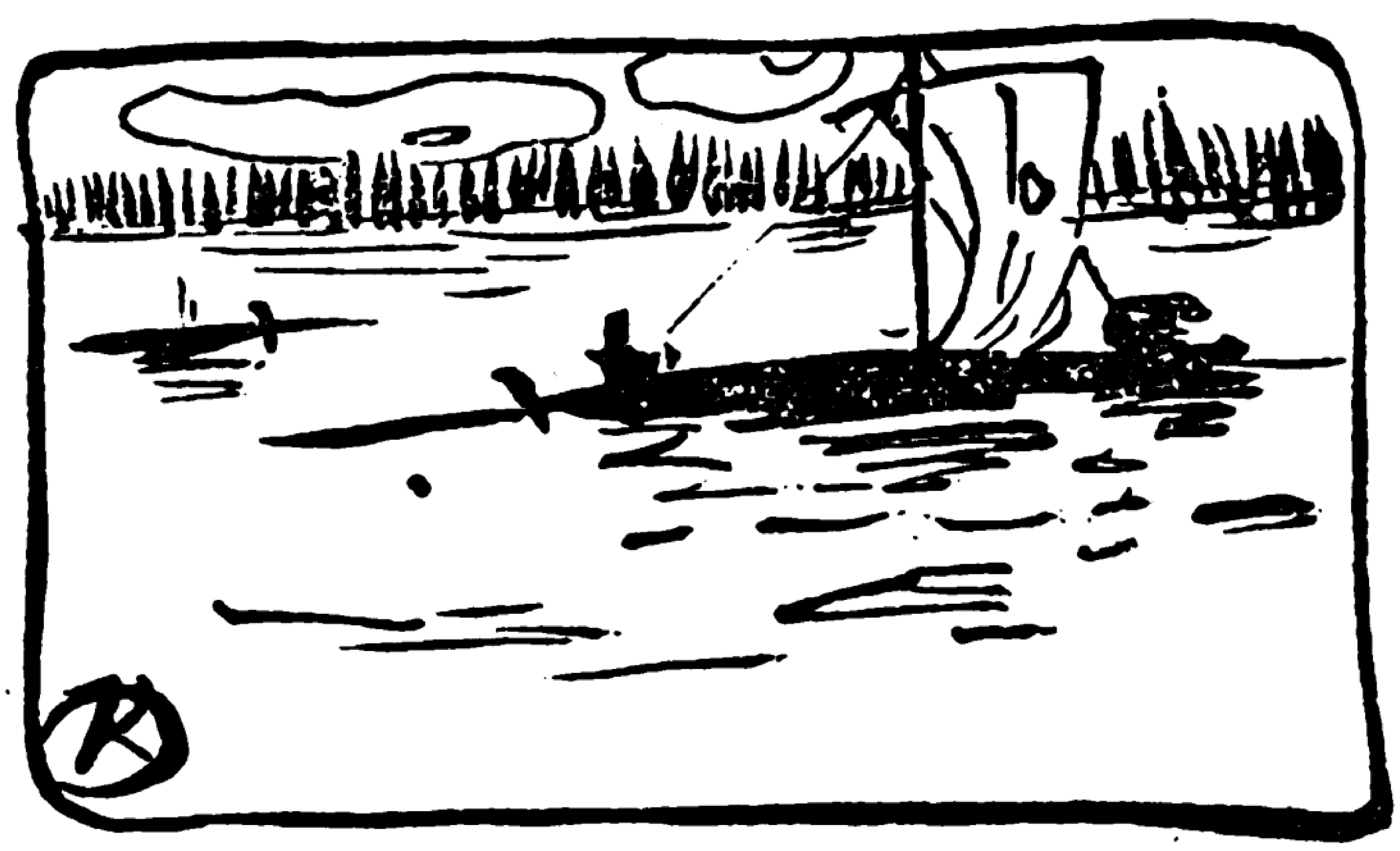
漂泊

廣島縣　小森　佳子

誰かはかゝるかなしみを、
ありと夢見む――
身肉のおとろへ、
あはれ君も見よ。

いとかすかなる果の日に、
さながら似るを。
あゝひとり沈みつゝゆく――
生のかげ。

現そ身の影、今はもや、
あな壞えつゝ
朽ちゆくか、崩るごとく。
しかはあれ



（賞外）　すみれ子

世は悼ましき空身たゞ葬りゆくや。
なほおもふ
（卷き寄する浪、轆轤と）

あゝ「われ」盡きぬ。
ふたゝびの「精」もあらなく。
過ぎし日の、
聞け勇しき潮の聲。
うつゝのひゞき轆轤と顫るを、
あなや
見しや、げに、
わが精進こそかゝりしを。

漂泊――あはれ刻々に、
このかなしみは
沈みゆく。いつの日見なむうらわか
き
うつゝの影を、
しかれども「精」もあらねば
よろぼひて、たちもとほるや、
ああ路上

眞夏の巷

京都　しづ子

日は眞晝、まなつの巷、
石疊む大道に、はた

家々のいらかに強く、
晃々と光の波照りて、
町はたゞ、熱病む人のごと
うつらうつらと横はる。

炎熱に物皆は、たゞれんず、
すがひ行く人もなき炎熱の
ちまたを――轍ぞ走る――
石積みし荷車一ッ――素足して
苦行の人は、あはれ見よ
額に流るゝ「努力」の珠をぬぐひ得て
――。

あゝ、負ふはたゞ「苛責」の
重荷――見返れど道坦かに
轍のあとも刻み得ず。

海の鳥　神戸市　加藤富美子

我が胸の小琴のゆらぎ―それかはた
美しき戀のさゝめき―あくがれの―
それのごと―汀の巖によせ寄り來
歌の波その岩影にたゆらかに―
甘睡せる―眞白羽鳥よ―海鳥よ

そが夢よ―夕べ高鳴る潮騷に―
白銀の白沫のかざし―亂れ散り

水色なる衣の裳ひきて―さはやかに
さらゝ舞ふ波の美女―「潮の花」
海鳥は姫を戀しぬ―いつの日か―
ふくよかの小さなる胸の奧の奧―

さはあれど海鳥の煩悶はあたなりき
片戀よ―海草生ふる海底の
青黑き滑の巖に堅付ける
貝類の奇し戀の如―さながらに―
慕ひてぞ汀なる巖より岩へ―
朝な夕―悲し聲して君を呼ぶ
戀しては寢醒め佗びしき波床に
幾夜かも―はかなき夢や―あゝあは
れ。

哀韻　本郷　岩崎千代

底に金沙の光ゆらぐ
御花の水に月朧ろ
一夜の夢に姫君の
胸の扉を破りにし
曲者花の木陰にて
またも右手に花礫

空炷薫る瑠璃の爐の
紫檀の机影寂びて
血汐をみだす麗の息吹に

調べん琴の絃は斷れ
翼とられし星姫の
下界に落ちて嘆くごと
黑髪長き身を悶え
まろびて泣きぬ……行燈の影

あゝ君　淺草　なを子

あな君は
わが魂うばひかるかると
双の袂に掻い抱き
行く衞も知らに走りゆく

高らかに
呼べども君はかへり見ず、
生のはやりに息ぎれて
眼くるめき倒れ伏す

勞れたる瞳あぐればあゝ君は
綠いろ透く木がくれに
うちかへり見て笑みたまふ

「やぶれ菅笠しめ緖がきれて
さらにきもせず、すてもせず。」
人に思ひのなまなかあれば、
夢に現を代へ難き――
えい、なんとせう、――あだごころ

上田敏

「天」 雪日記

徒生 阿部秀子

一月四日。雪。

舊冬三十日から降り出した雪は、まだ止みさうにもしない、本當によく倦ずに降るものだと、感心してしまつた。母樣が平地を計つて御覧なすつたら曲て、五尺之て屋根の雪下しゝたら、二階から出入しなければならないかと心配のやうだけど、道は毎日々々踏み固めて有から、それは大丈夫。去年の秋當地に來たので、御年始に被入た方が、さぞ乾驚なさいましたてせうねと、被仰るけど、此前居た處も澤山降る處だつたから左程にも思はない。然し此樣に降つた事は當地ても珍らしいと見えて、皆樣が、十年目て御座いますの、五年目て御座いますのと、皆違つた事を仰るので、どれが本當かわからないけど、何にしろ珍らしいのてせう、此樣な雪を見るのも他國へ行つた時の話しの種に成るてせう。今日は別に用もなかつたから、炬燵の中て、新年の雜誌讀んて、暮してしまつた。雪の降る時は、之が一番の樂みてせう。

同　五日。雪。

起きるとすぐ雪？、と思ふて戸を開けて見たら、矢張根氣よく降りつゞけて居る。座敷の障子はとう／＼開かなくなつてしまつた。早く屋根の雪を下さないと、開かない戸ばかりに成るからと思ふて、人足に催促するけど、方々て雪下なさるので、なか／＼來て呉ない。座敷は眞暗、御客樣が被入たら、どうしやうかと、はらはらして居ると、十一時頃やう／＼人足が蓑笠に身を固めてコイスキ（雪かきの事）持つて、カンジキ穿いて勇ましげにやつて來たので、やう／＼安心した。早速座敷の方から、下し初めてもらふ。見る／＼庭は雪の山が出來てしまつた。人足に何年ぶりてせう？と聞

いたら、そうだナア、去年はこんげに降らんかつたけがナア、と云たきり、人足なんて、毎年あつかひつけて居るから、わかりさうなものと思ふけど、矢張鳥のお仲間と見える。此の山の様に積つた處も美しいが、常磐木に積つたのが一番、美麗だと思ふ。此様な處を一目でもよいから暖國の方に見せて上げたいものだ。今日は年始客が七人、此様に降る中を來て下すつた御心が、嬉しくて成可く暖い物で御酒も暖くして御馳走したら、大層喜んで御歸なさる。今日もまだ汽車不通で東京の郵便も新聞も來なかつた。

●同　六日。雪。

まだ降つてるかしらん、もう晴れたであらふ、とこわごわ戸を少し開けて見たら、アーア又雪。あきれてしまつた。三十日から降りつゞけだから、今日で八日間、雪達磨を造たら、さぞ澤山千も二千も出來るだらふ、東京あたりでは、たつた三寸か四寸も積ると一大事でも出來たやうに大騒ぎだが、百聞一見にしかずと云ふ通り此雪を見せてあげたい、見る間に二寸や三寸位わけなゝ積つてしまつた、今日やう／＼手紙が來た、然し新潟方面ばかり關山と新井間はまだ不通だとの事だから、東京からは何時くるかわからない。夕方から少し小降りになつたから、此の様子では明日は晴れるでせう、東京は梅もそろ／＼咲くでせうに。何時になつたら此の雪が無くなる事か、と思ふと、何んだか心細くなつてしまふ。

感想の動く通りに筆が運んで、少しも無理がない、讀んで居る者も日記を書く人と同化する、文の至れるもの（評）

『地』

縫物日記

長門　新田ひし花

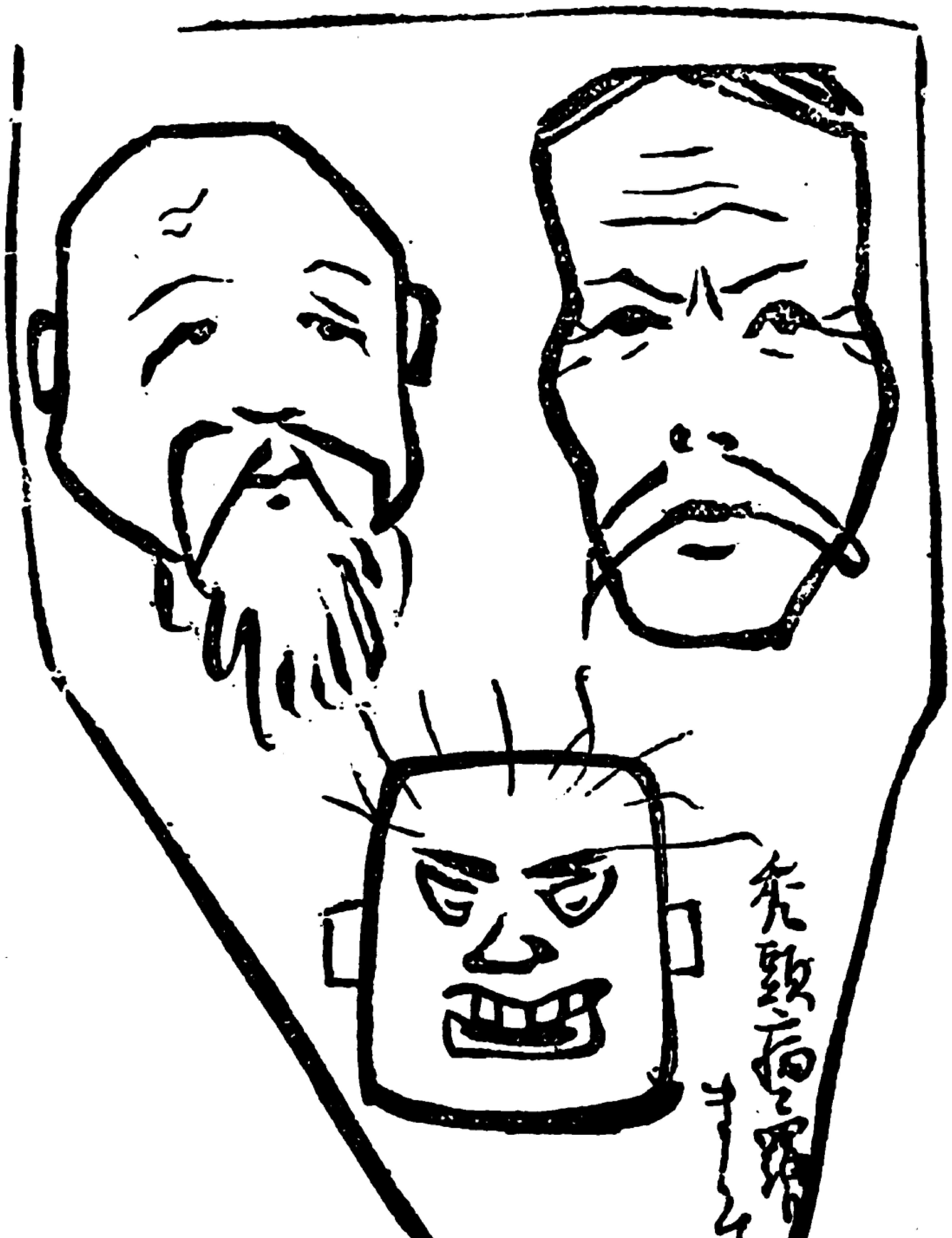
●三月二日。朝の程は霧がたてこめたが最う晴れた。庭向ひの六疊にお母様と竝んで縫物する。今度の春祭に弟がお馬に乗つて出るといふので、その時の召物になかなか忙がしい。お母様は氣がつむだら休むでからまた縫へと被仰るけれど、ちつとでもよく縫はうとおもへば、さう／＼休むでも居られぬ。

午後、久様がお出でだけれど、その理由を話して直様縫ひにかゝる。慣れた仕事でもお針持つ手が痛い。指抜を外づしてみるとその痕がうす青くなつてゐた。

●三月三日。寝床の中で、最う弟の下衣が二枚程出來上つた夢を見た。朝餉を戴いてから一寸近所へ用達しに出る。遠山がいつになく煙つてみえる。麥も青々と伸びたし雲雀も囀る。お庭の櫻が咲いてあの可愛い美代ちやん（叔母の子）がお出るのも最う間がなからう。私はこんなことを思つて、自家へかへつて再びお針持つ人となつた。

三月四日。晝前にやつとフランネルの下衣と袴が出來あがる。お母樣はそれを袖など幾度も礒へしてみながら、ほんとによく出來たと仰言る。袴には押しをして、お母樣下衣は立派に疊みこむでその傍へしまはれる。お母樣は重に上縫や、着物の寸法をみて反を裁たれる。私はせつせとこれにお針をつけてゆく。絹物はネルなどゝ違ふてなかなか縫ふに六ケしい。そして思うたより手間がとれる。それでも夕方まて、どうやらこうやら大かた羽織の型をつけた。夕餉を濟して弟へ下衣と袴を着けさしてみる。自分ながらシックリ合ふて何處と云つて惡い所もない。お母樣がどうもよく出來たと又言はれる。お父樣まてが口眞似される。弟はこれてお馬に乘られるのだと大威張りて家中を歩いてゐた。

(賞外) とよ子



女でなければ書けないやうに思はれる、何か特別の事ある時の日記は自然に生氣があつて平凡の域を脱する(評)

「人」

下女日記

尾張 ゆき子

二月一日(晴)。昨夜遲く迄お客樣があつたので朝寢す、今日は舊暦の大晦日、うちの方では大いそがしだらう、下半期の給金を頂く。帶と下駄をねだるつもり、夜奥樣から舊正月二日づゝお竹どんと代り合てうちへ行くやうにお暇がでた、くじ引したらお竹どんがさきへ行くことになつた。

二月二日(晴)。中々寒い霜燒が惡い、今日こそ舊正月の元日、けれ共當家は新暦ですんでるから平常の通りだ、それでもお總菜はお雜煮、郷里の方では皆遊て居

るだらう、父母は丈夫で年を取つたかしらん、お竹どんは今朝喜んで行た明日晩方迄に歸る筈、舊正月のせいかお客様が多い。

●●●●二月三日(晴)。舊正月二日午後より曇り、昨夜は何だかうちの事が思ひだされてろく／＼ねられず、何となくうれしくて仕事が手につかぬ、お晝のご飯をこげつかして小言を頂く、お竹どんが早く歸つて來ればよいが、お土産の給金はこゝにあるさぞ母上が喜ばれいてあらう、多くもない衣類を支度して休む。

日記を書くなら此邊が最も手ごろである、外の階級のはむだが多い、餘り長く書いて居ると毎日の事だから緻かない、要領さへ書いて置けば澤山である、此作は要領も得てあるし、情も表はれて居るし、短いうちに餘裕もある、例へ作りものであつても日記の模範とするに足る(評)

『秀逸』

造花日記

岡山市　加藤波子

●●●●●一月二十七日。二時過ぎ南縁の障子に影を寫して、木理の正しい枝に、輪にして針金から、一本引き抜いて置く、曲線の美が生ずる、直ぐ直線となる、何度も曲線の美は直線となつて、遂には直線の美となる、直線の美も曲線の美もゆかしい、ばらの下ごしらへと思へば尚心床しい、三四十本も青い紙を卷いたのが出來たので止める、杉の柔かな處に小さいきずが、幾つとなくついて居つた。

●●●●●一月三十日。姉さんの御針の傍で、姉さんに敎はつて葉をつむ、葉らしくならない、一枚は四角に出來た、一枚はきざが深くなる、ハート形ときざの深いのや何かわからぬ葉が出來る、一枚しては形が可笑しいので笑ふ。

姉さんは一寸見てはほゝ笑む、又つみ樣を敎へてくださる、十枚目程にやつと葉らしく成つた處へ、六ツに成る芳雄が手紙を持つて來る兄さんからと、開いて見ると泣菫の「娘可笑しや」が二節許り書いてある、姉さんが何と覗き込む、恥かしくも腹立もする、これにてもおかしう思し召さずやと書いて、持たしてやりたかつた。

●●●●三月一日。

學校から歸りに香を買う。梅形に切つた寒冷紗を中央だけ淡い黄にそめる。

●●●●同じく三日。午後九時頃より、

鐵瓶の口から出る湯氣に竹紙をしめす、姉さんは水を持ち來よと。山吹の髓の樣な白いもろいものが、濕せば直ぐと破れる樣になる、それで綿をつゝむ、蕾も出來た、花片に鏝をあてたが思う樣に窪まぬので、姉樣をわずらはした、妾は葉に蠟をひく、小さな鍋に入れて火にかける、次第にとけて、とけた方が高まる、遂には平たく成る。ラッパ形にした新聞紙の內で、蠟のついた葉を乾かぬ間に、早くぶん／＼とまはす、蠟は

とぶそして葉には蝦が薄ら奇麗に引かれる、此樣にして葉が皆出來た頃姉さんもすんだ。
明日花に成るんだが、遲いから寢るのと姉さんが云ふ
寢たくはない、今日の方が好いに。

造花の出來てゆく筋道が分つて、日記としては思ひ着きが好い、文章も熟錬してゐる(評)

三日間

松本市　上條遊龜子

●二月十二日●●●●
ブラッシ持つ手が朝風に寒い、兄さんが御渡米の年接いて行かれた白梅が、昨夜の凍て萎れて居た、手を水中に入れると挘られるやうて、池の鯉も陶器製のやうに沈んで居る、朝よりのべつに客が來る。その中二人は私の緣談であつた、茶を入れる度に私が座敷へ持つて行くと、凄い目をして私の顏を差覗く男の心中が察しられぬてもなかつた。夕方氣霽しに庭へ出て見ると、死人の顏の樣な半月が、寒さうに西へ吹かれて行く。
●二月十三日●●●●
桶屋が桶を勇ましく叩く音が村中へ響きわたる、バスが未だ歸つて來ない、御飯の冷えない中にと思つて居ると、例の離の穴を潜つて走つて來た。一夜の中にバカが一杯寄生したのを彼は知らんで居る、午前讀書して午後文壇の花の原稿を書く、記者樣に眺められる時の事を思ふと悲しい樣な嬉しいやうな變なもの、寢てもまだ考へ續けた。弟の鼾が羨ましい、雨戸の外てする振子の音と胸の動悸とが調子を合せて私を夢幻境へ送つた。
●二月十四日●●●●
鵯が寺の大杉て「春が來ますよ!」と啼いて居る、小さい羽虫が五六羽許りづゝ群集して、空中に遊戲をして居る、二羽三羽增加すると輪が崩れて了ふ、何事も大勢よりは少い方が圓滿に出來る物だ。午前十時開會の婦人會へ出席した。私時代よりも女學生が一般にハイカラになつた傾がある、餘興が斬新な事てあつた。老年株員は御菓子より御茶を多量に吸收する、歸る頃はもう四邊が淡い暮色に包まれて、山の麓はぼうつと打ち煙つて居た。食ひ殘してない、殘して來た蒸菓子を家内中へ分配した。バスが鵜飲みにしたとて大笑ひ。

書くべきことは書き、書かずともよき事は書かぬと云ふ手加減が甚だ好い、垢拔のした文字てある(評)

山入り日記

土佐　大和田　しづ子

●二月二十一日。明日は山入りだとて、夫は其の用意に忙しい。命ぜらるゝまゝ御味噌や、御醬油やの荷造をする。何とはなしにそわ／＼と落ちつかぬ日だ。ふと御隣の芳ちやんか來た。前垂の新しいのをして得意げに立つて居る。見て貰ひに來たのてあらふ。明日限りあの無邪氣な芳ちやんと、御別れかと思ふと、妙に又

胸がふさぐ。來るかと思つた弟は來ない。夕となつた。
●●●二月二十二日。近所となりの人々にも別を告げて、朝とく出立した。生れて二度しか通つた事のない、繁藤の町を經て、一里半奥へ入ると、此處が目ざす樫の谷だ。種々めづらしい草木などもある。鳥の囀り風の音鄙びた樣が嬉しい。二時頃漸く辿りついた。
夕方から曇つて來たので、兎やかく忙しくてならない。荷物などかたづけて、夫は眞木拾ひに出てゆく。風は吹き止むだ。米をとぐ可く谷川へおりて行く、春とは云へどまだうらさむい奥山の谷邊、そこ此所に菫の花が咲いて、白蟹の穴も見えて居る。うつとりと物音のしない夕暮だ。夫はまだ歸らない。
●●●二月二十三日。しと〳〵と雨がふる。まだ御近所とも馴れないので、つれ〳〵なるまゝ衣類を包むだ古新聞を延べて讀む。別に面白い事もない。此の樣な日には芳ちやんが居ればよいにと、しきりに御隣の子の事を思ひ浮ばれる。今頃は何して居るのであらふ。夕方から夫の足をもむ。夜に入つて西風となつた。明日はきつと御天氣に相違ない。仕事の手始めなど語らひつゝ十時過ぎ床についた。がさ〳〵と筧鳴のひどい晩だ。

淋しさが思ひやられる(評)
文曰く、山中に入つて猶此好文字あるは、幸福の人と言はればならぬ。

家庭日記

伊勢 佐々木 らく子

●●●一月五日。三年ぶり親子兄妹が揃つて、目出度い新年を迎へたと、母樣が喜んで入らつしやつたが、明日から又兄樣等は、東京の人になられるのである。紀念に朝寫眞を撮つた。どんなに皆が寫つたか。寫眞屋に一日も早くと頼んでおいた。少尉の兄樣は乳母の御墓へ參られた。いつも歸宅されると、一度は參られるので乳母の子は泣いて喜んでゐる。三時半に車屋が來たので皆門口迄送る。角帽をお隣りのお婆さんが不思議そうに眺めて入らしつた。今夜からは亦淋しく成つて仕舞ふと、妹が言つた。
●●●一月七日。日當りの窓で文子の着物を縫ふ。文ちやんは側で人形と遊んで居たが、さも嬉しさうに、此度のは新らしいのね。と言つた。大抵私の派手なのを讓つて居るので、ほんの唐縮緬のであるを、こんなに喜ぶので有る。自分は何だか可愛想になつたので、早く着せて喜ぶ顔を見樣と、一生懸命に縫つた。夜お父樣の新年宴會の御土産に折詰を貰つた。お腹がよかつたけれど皆が戴いた。玉子燒は明日の私のお辨當にと、母樣が殘しておいて下すつた。
●●●一月八日。學校では始業式だけで有つた。歸つてすぐ縫物に掛る。二時頃出來上つた。一寸着せて見たら大變よく似合ふので、自分もほんとうに嬉しかつた。「後向いて御らん。向ふへ行つて御らん。」といへば、嬉しさうに言ふがまゝに成る。母樣は側で笑つて入らつし

やる。寐押しをかけてからと約束しておいたから、定めし今夜は嬉しい夢を見る事で有らう。

平和な一家の樣子が目に浮ぶ（評）

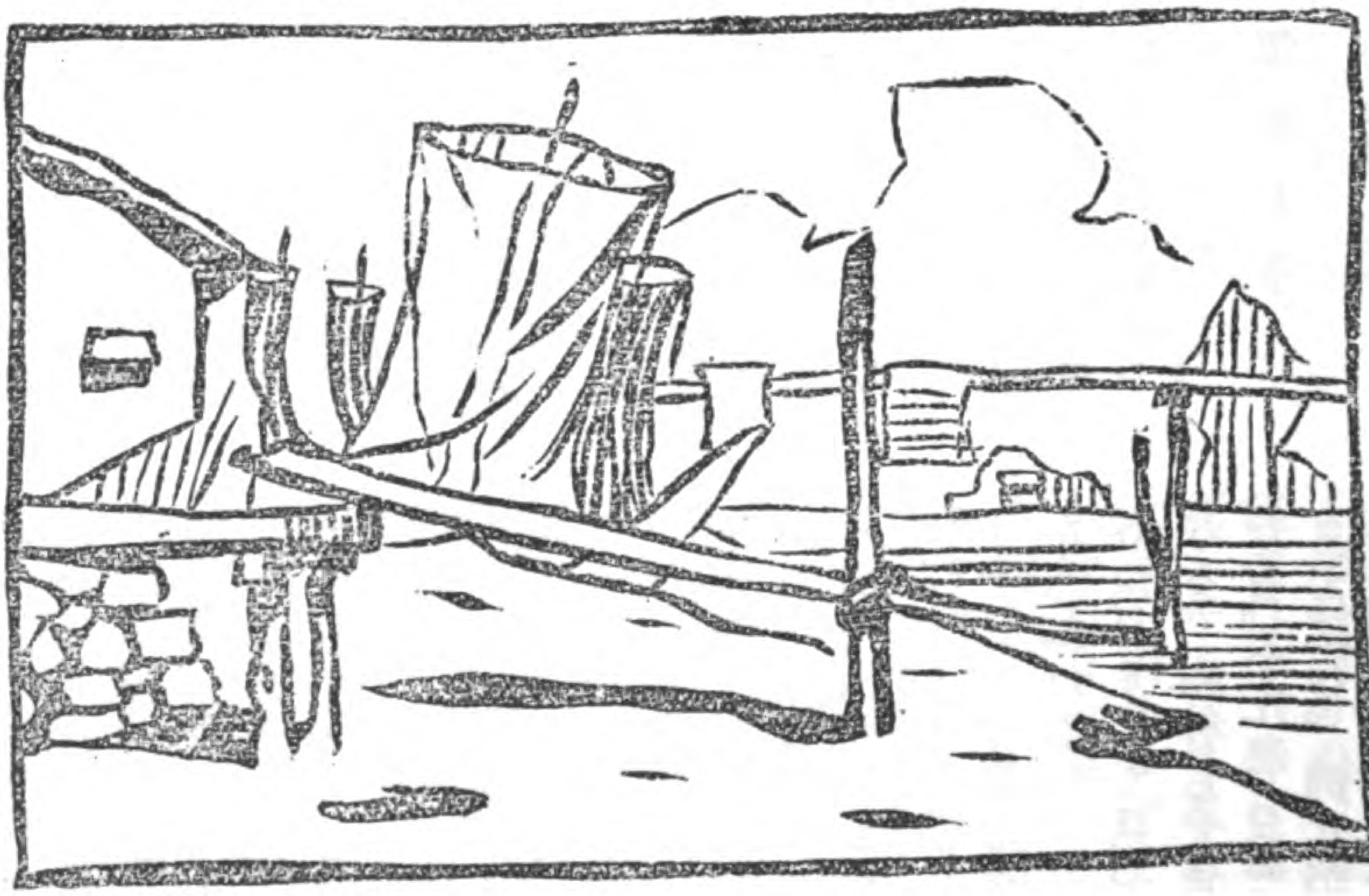
日記の中より

栃木縣　磯　みい子

二十八日。曇。春とはいひ、うら寒き日なり。久しぶりにて露子樣より御手紙來る、さてもおみ事なる筆のあと、露子樣は女學校の二年生、私は小學校の卒業生、私は自分の書いたのと露さんのとをならべて見て、思はずホロリとした。あゝ二年前の成績は露子樣が九十點、私はそれよりも五點上だつたものを。これからは私もきつとまけずに勉强いたします。夜お返しす。外來患者の數七十六人、內男四十人、女三十六人。床に就きしは九時。

二十九日。雪。下を見れば眞白なきれいな綿の樣て、上を見れば黑いきたない塵の樣

（賞外）　杉浦豐子



な雪が音もなく降つてゐる、こんなに淡雪がふつてはさぞ麥が赤くなるだらうと心さわぐ、今日は月末にてなか／＼にいそがし夜金錢の計算をなす、從兄樣は四八九四〇錢の事を、しやくしの下に〇一つなんておつしやると、いつになく伯父樣までがお笑ひなさる、おばあさんよりはごほうびにみかんをいたゞく、患者の數四十六人、內男二十二人、女二十四人、十一時床につく。

三月一日。春雨細し。朝はやく使に行く、其途すがら硝子ごしに花田屋の中を見るともなしに見れば、はや咲きそめし梅の花がチラと目に入る、其の向ふて、玉ちやんが、鳥はさへづり蝶はまひ、といゝ聲でうたつていらつしやる、おしい事には小父さんもうぐひすも見えなかつた、患者の數五十四人、內男が二十六人、女が二十八人、比較的患者に女の方が多いのは、實に心細い、夜九時床に就く。

おうちはお醫者樣と見えますれ、實地の日記、作りものではない（評）

ある日

鹿兒島　天内ゆき

昨宵は大變鳥が啼いた。杜鵑であつたらうと思ふ。朝から土佐日記を讀むだが四枚位になると厭きてしまつた。幸にも宿は丘上にあるので、すぐ障子をあけて野を眺める。庭には柘榴が咲いて紅く池に映つて、其側に草の花が咲いてをる。野はうす紫の靄が流れて遠き山々はゆめさながらの姿なのもうれしい。緣に鳥籠があるが空になつて紅房だけ風にゆれて居る。聞けば宿のお婆さんが水を入れてやるのを忘れて鶉は可愛相に飢死したとの風流ならぬ物語、こんな寂しい日は鶉でも居ればよかつたらうと思ふにつれお婆さんの不注意が氣に障つてならない。黄昏から小雨となつて軒を遶る點滴の音が言ひ知らぬ寂しみを覺えさせる。こんな雨の夜は何時でも英夫さんの事を思ひ出す。いくら思ふても叶はぬ戀、忘れてしまひたいと思ふても忘れられないのが矢張戀であらうかなんて馬鹿な回想にふけつて居ると、また啼くのは昨宵の鳥、お婆さんは杜鵑てはあるまいかと云ふ。自分もそうだらうと思ふ。日記を書き終ると早や十時、野の夜雨は實に寂しい。

色もあり、聲もあり（評）

女中代り

四谷　鳴澤ゆり子

●●●●二月十五日。近在ては今日が藪入だから「御暇を」といふので「二晩は泊つて來てもいゝよ」と許してやつたら。ニコ〳〵覺えず嬉しさこぼれたのらしい。昨夜はとう〳〵寢られなかつたとの話。道理でいつ迄も〳〵カタコトして居たつけ。兄様はもう御出まし。火鉢の艶拭きも濟まし御書齋も美麗になつた。チンと坐つては見たが針箱出す氣にもなれず。室へと水を入れに行つた。何とかいふ兄様御自慢の蘭がプンと香を漂はす。今日は一日いゝ御天氣だ。女中は大當り。

●●●十六日。まるで春の樣かげろふも立つかと思はれる位。一寸顏を出して居たふきの薹も俄かに延びた樣な氣がする。此間乳母の所からよこした八頭。何とか甘しく御料理して見やうと考へながら。御晝食を一人ぼつちこそ〳〵終う。床の間の梅を藥牡丹と活け更へる。午後爺やが來て庭の掃除をして行く。「御茶でも」といつたら今日はガキにせびられましてちよつくら淺草迄とあたふた出て行つた。此樣な日に美佐子樣でも御出になればいゝが。何だか腰が坐らなくつて仕樣がない。

●●●十七日。今日も又上天氣。こんな時候では蒲田もいゝかも知れない。二日續きおさんどんした御ほうびにおねだりして見やうかしら？。御隣の要ちやん御出になる。相替らず角力の御話。面白半分一寸逆らつて見たら「そんなら遣つて見せよう」つて矢庭に立上つてシコを踏む。例ながら面白い御子だ。おやつは御注文で粟饅頭にする。今日は兄様御歸りが遲いとの事。御菜の心配もなく雜誌讀み初める。

東京の家の中に居る女は、皆斯んなことをして日を送つてゐる(評)

舊曆日記

下野　青木高子

●●●●舊一月廿日。晴天。
朝髮を結ぶ、何となく友戀しく待たるゝ日なり、されど待人は來らず、來客あり、栃木町の商人とか父上言ひ給ひぬ。如何なれば斯く都の人は姿から言葉使までみやびなるにかと思ふ。四時頃客は去りぬ、まだ早けれど夕飯の仕度に取かゝる、今宵はゑびす講なり、父上はゑびすを取出し、机の上に飾り、御燈や今宵の御馳走を上げて合掌あり弟は貯金の通を上げて是も合掌す、いつもながら厭々しきゑびすの御顏には、溢るゝばかりの笑を堪へ給へり。

●●廿一日。曇天午後雨。
何か父に用事ありとてお隣りのおば樣に起され、ねむき目こすりつゝ起き出しに時計は五時を打ちぬ。空いたく曇りて星の一つだに見えず、月影おぼろに照して夢の如し、いづれの家よりか二聲三聲ちらりと鷄の聲をきけり、かくする內日は出てたるらし、月影追々うすうなりて雲間にかくれぬ、されど嫉妬の雲は猶日の面を蔽ひたればうす黑き雲の間より赤き光りのかすかにみとむるのみ、暗ければ障子にそふて綿入を縫ふ、板緣をつゝく音しきりなれば、障子がらりと開けしに米ひつのまはりにゑをひろひ居し雀二三羽、驚きて逃げ去り、庭の隅なるなんてんに止りしが、幹細ければ地につくる程くねるに、再び驚き叫びてくらの屋根高く舞ひ上りぬ、其樣のをかしくも愛らしきに一人ほゝ笑まれつ、昨日まで一つ二つ見えしなんてんの實は、勇ちやんにもぎられて一つもなし、唯葉ばかりの木が大きく動けり。

午後疱瘡の種返しに行きたり、今年は疱瘡流行とかにて四十才以內の者は皆うゑたれば、しまだの娘、丸まげの人、愛らしき少女、赤子までも思ひ〳〵にうでをまくるもあれば、一思ひに兩はだぬげる青年もあり、白き人、黑き人、赤き人、皆夫々に平常の職務を思ひやらる。夜に入りて弟の讀書の書取をなせる折柄、火事よ火事よと叫ぶ聲、チャン〳〵半鐘の音、驚きてかけいでしに十四五軒上に當りて火は凄まじく焰々ともえ上り、煙と共に上る火の子の物凄さ、空もこげんばかりなり、風なければ煙は直線にのぼりて、尾は長く南にたなびける樣のをそろしさに總身ガタ〳〵とふるへて、齒の根も合はぬ程なり、父はあはてゝかけ出し、人も馳せぼんぷもガラ〳〵と掛聲いさましく行きて、火事塲は早まつ黑き人なり。さすが猛烈なる火も多勢のために漸く下火になりぬ。

いつの間に晴れけん雨雲は殘りなく拭ひ去られて、數知れぬ星の美しさ、いづこの地に雨や降りしと云ひ顏なり。

變化あり、光彩あり、日記を書くには材料多き日である(評)

紅梅

岡山市 岡崎雅子

●二月二十一日 土曜日晴。

鶏の聲に眼さめて起き出れば六時半、登校の準備をして家を出る、高子樣を誘ひて同道す、學校で(造花)福壽草(圖畫)チョーク畵共に嬉しき科目なりき、午後二時退校歸途ワットマン紙を求む、又高子樣に紅梅を一枝頂く、其花の濃く咲出せるは最も愛らし、歸りて細口に挿し机上の詠めとなす、夜算術理科の復習をなし十時就寢。

●二月二十二日 日曜日晴、夕方風寒し。

姉樣の機の音にふと眼を覺して見ると緣側の障子に庭の松の樹影が寫つて居る、今朝は大層遲いのかしらと時計を見ればもう八時前、顏を洗ひに出て居ると、母暫程あつて久しくお休みてしたなと、お母樣がおつしやる、何だか極りが惡い、昨日求めた紙を葉書判に切つて水彩畵を試みる、出來上つたのが三枚、一枚を赤木の君一枚を板野樣一枚は妹の許へと投函す、正午頃鹿子樣がお遊びにお出なさる、嬉しく書齋に迎へて色々の話を聞もしつ語りもしつ、其内に鹿子樣は寫眞掛をお編みなさる、妾は弟にせつかれて肘蒲團を縫ふ、西の山根紅らむ頃又の日曜日を約してお歸りになる、弟と二人で途中迄お見送りする、夜は皆んな炬燵でお母樣の面白いお話を聞く、又日本百美人寫眞など見る兄樣の批評が可笑しい、昨日の紅梅宵の内に咲いて香りゆかし。

學生らしい處が能く表はれてゐる日記(評)

嫁日記

駿河 松永しげ子

●二月二十日。此日母樣の姉樣にあたる叔母樣が來られた、旦那樣のお話では、最早五十になるのだと伺つたが、髮の毛も黑く長く、お顏の色も艶やかに、五つや六つは若く見える、どうしても街に住む人は派出な所がある。

晩餐の食卓は中々賑かである。俊雄さんは、お土產の帽子を被つた儘で、御飯をたべながら、學校の受持教師の事や、習字で甲を取つた事を、聞かせる。

叔母樣は栗のお汁を、おいしいと云つて、更へて迄召上つた。

●二月廿一日。銀行へ御出勤になる旦那樣をお送り申して、茶の間へ戻つて來ると、叔母樣は出しおくれましたがと云つて、水引を結んだ反物を下すつた、阿母樣がお頂きと仰有つたから、遠慮なく頂いた。

午後。背戸で張物をして居ると俊雄さんが來て、此紙で鶴を一ツ折つて呉れと云つたが、手が濡れて居て駄目だと云ふと、何か口小言で座敷へ飛込で行たが、叔母さんに折つて貰つたと云つて、旋て見せびらかしに來た。叔母さんが背戸へ出て來たから何か云れはしないかと

思つて居ると『俊雄がいたづらてすから困るてせうねえ。』と、お世辭だつたかも知れないが嬉しかつた。夕方、茶の間の廊下を通ると、叔母樣の聲て道代々々と云ふのが聞えた。妾が話の主題になつて居るらしかつたから、何となしに耳を澄すと。
叔母樣の聲で『ほんとに好い嫁てお前は幸福だよ。』とおはづかしい、叔母樣はお世辭の上手な人だこと。

境遇が變つてゐるから、日記も外のものと類が違つて、別に味がある（評）

うつし

京橋　澄子

二月二十七日、晴。お父樣がみかん箱に私の古いお清書だの圖畫をはつて下さる、反古張も一寸いゝもの、三十九年一月から四月までと十月十一月の日記をといてしまつてはたきをこしらへてゐたら一體何の爲に書いたのてすと叱られる。夜森黑樣がかるたをとりに行ませうと御誘ひなので御許しを受けていつてみる石井樣とかいふ方の御宅、皆て七人私は大方讀み役、奥樣が大變面白い方なので、知らず〳〵長居して九時頃まて遊ぶ。

二十八日、晴。單物は縫つて終つたし張物は片づいて別に用がないのてお母樣と庭を掃く、お母樣は一番隅の松の根本から私は土手の處から、日にやけるといけないと仰る故手拭を姉樣冠りとやらにしたら變てをかしくて妙な影にうつるので、すぐとつてしまつて皆に笑はれる。芝生はほんとに掃きにくゝていや三時までに漸く半分、あまり一度にすると手が痛くなるから好いかげんにと、お父樣の御注意うれし。夜弟は不動樣の縁日て日ポン地をかつてきて遲くまて讀んてきかしてくれる、あんまり面白いのてお腹が痛くなつた。

二十九日、雨。明日は日曜て一日、梅見にでも行かうと思つてたにくらし雨、お鏡餅の石のやうに硬くなつたのを燒きながら皆集つて面白い御話する、午後は皆本を讀んでゐるので淋しい程、中松樣から御手紙悦んで見たかひもなく足におできが出來て切開まてなされし由、さぞ御困りでせう、すぐ御見舞状だす、今月の日記の整理す、今日は大變靜な日だつた。



（賞外）　玉川しげ子

書の無い書き方、甚だよし（評）

草の戸日記

愛知　病葉子

二月三日、雪なるべし、空薄曇る。晝頃中町のお歌樣御いて、母樣と談話數刻、夕方御歸り。正月も早や二日を過ごしぬ。まことと月日の立つは早きものよ。姉上みいちやんもろ共數入。

二月五日、雨しよぼ〳〵降る。雨の中に何か混つてゐると母樣云ふ。雪に變るかも知れぬと弟のこゑ。ポッポッと軒滴の葉蘭を叩く音、胸に應へてわびし。雨を衝いて郵便配達來る。都のふじ子樣よりなり。いつもながらに御情あつき御ふみ、唯幸あれと祈る。午後雨歇み、風溫く吹きて春のやうなり。畑には麥青くなりぬ。幼き頃毬つきし日のことゞも思へば、一年一年、年を增すことのいとうらめしく、何時までも冬で居ればよきものをなど思ふ。夜は裁縫。

二月十四日、薄曇り。父上は西方に用事ありとて、朝おてかけ。母樣と二人して野に暮す。珍らしく凪たり社に近き藪疊には、人あつて火をたけり。午後少しく風出て、所々の風車たゆげに廻轉す。

「食なければ働けず。」と母樣と共に喰ふ。迫に活動寫眞の廣告隊とも覺しく、笛皷のこゑ花田町のあたりよりきこゆ。今日は何所よりも書信なし。

夜に入りて父上御歸り。

二月十九日、快晴。

夜宗住寺の鐘の音、陰に響きてさみし。幾十の善男善女、あのこゑに呼び集へられて、佛に歸依せんかと思へば神々しかり。西の家へ通ふ開き扉の風に煽られて衣擦り〳〵偲びよる跫音の如し。

二月廿一日、晴。霜白き朝なり。

午後襦袢を縫ふ。襟はとにせん、かくやせんと思ひまどひて夜にいる。

千代樣、時子樣より來書。

簡潔、普通文體も斯の如くなれば言文一致に劣らず、殊に日記のやうなものに適した文體（評）

種痘の日

群馬縣　かるかや

義姉樣、芳子、私、赤ちやんの君子、それから附添として母樣までみんなで五人。芝居見かなど父樣に惡口いはれて、ぞろ〳〵出る。

病院に着けば、もう町の人々にて混雜、辛じて片隅に陣取る。豫診室と一六風に書いてあれば、玆が數ある肉の疲れし人の、竪をも殺すか或は生かすかの定まる所かなど思ふ。中々に手間取れ相なり、まだ前のまゝ隅に居る。手術するのは一間置いて彼方、狹いと見えて皆仕度してから行く、色黑く逞しい男の子も人形の樣な女の子も、此室で帶解きながら、幼い銳敏な恐怖に伴ふ快味を裂つてるらしく見える。

芳子が可愛い眉をよせて、痛かないのと母様を見私を見義姉様をみる。何ともないよと靜に義姉様。ぷーんと仄かな酒精の匂がする、ドヤ／＼先細が出て一心に腕を見てゐる、中には造作もないなどゝいふお神さんもある、あんな太い腕をドクトルの前へ突出したのだらうかと思ふと、私の胸は頻りに亂れ初める。

漸う受付の方に、貴方がたと呼ばれる、細く短册の様に切つた紙片へ名前かけといはる、義姉様に代て書く、星京子と書いてお顔を仰ぐ、義姉様もニッとなさる、目の前て星を冠せられたのはまだお初らしい。スリパ引いて廊下通りながらよく立留まる、顏みると氣後れがすると一氣に四枚かいた、然しも少し手習をと耳が頻に熱い。

手術室に入る、胸が躍る、煖爐の溫みと機械の輝きとて眩しい。優しげな看護婦の手を借り、まづ君子の柔かいのに植ゑる、看護婦の小鳥の啼聲効があつて初めなのに泣かない。芳子のにかゝる。思つたより若い方とドクトルに驚いた、愈よ番がくると思ふと、私は十人の身を何となしに怖れた。其にしても溫い室よ。

折々氣取つて見せるが別に眼に障るほどではない、斯んなものは樂に書ける人らしいから、少し作りすぎて風雅の氣を缺いてゐる（評）

懸取り

飛驒　あやめ子

二月廿九日。「御免下さい少々て御座いますがどうぞよろしく」、「ハイ何方樣で、ハアそうてすかどうぞ暫らく」やがて判取帳とお金とを持て來て「ては之れに受取りを、一圓八十錢て御座いましたね」「ハイ左樣て……………有り難う御座います、又御入用の品は御遠慮なく左樣なら」と出ると又次の家へ「今日は某屋て御座いますがどうぞ」返事もなく赤ッ面の內儀さんが出て來て、突けんどんに「そんなに來なくともお金が出來れば持つて行きますよ」、「オヽ恐い事とそこ／＼に飛び出す、又次へ行くと、美しい娘さんが「ハイ某屋さんてすか暫く御待ちなすつて」と奥へ這入る、暫くすると又出て來て、「誠に申兼ねますが只今都合が惡う御座いますから…………」とうつむきながら恥かしさうに、お氣の毒になつてえ「い何時でも御都合のお宜しい時に左樣なら」と出る、又次へ行くと「こちらから持て出ますから」つて橫柄さうに云ふ、その癖一度も勘定に來たこともない客なので、面憎くなつて「そうては御座いましようけれど帳簿の都合もありますから是非御勘定を」と云ふと險しい目をして「ては夕方にして下さい」つて恐くなつて返事も出ず、ハイ／＼と出る、アヽ嫌やだことちつとも寄りやしない、之れでは家へ歸つて申譯がないから、ドレもう一廻りして來よう。

日記文と云ふより寫生文であるが、懸取の實地が見えておもしろい（評）

さつき

福井縣　小里

五月二十日。今日からさつきにかゝりたので、九時頃小晝を調へて、辻田、八石、苗代へ持ちて行く、浮打をして居る傍を通ると、まアお氣の毒樣などうぞそこへお置きなさつてくださいませ、とか赤いのが通ると鍬打が遊ふぞ、とか何だそんなになまけて打の、姉えさんが笑らつてゐらつしやるぜ、なんて戯言を言ので、廻り道をして浮打をして居る傍を通らぬ樣にして戻る、晝飯の時宗吉が大曾塲が出來ましたで、明日はおたの秋野も植ゑによこします、と云ふたので苗取はおたけ一人で足らぬから自分も出る事になつた、故に午後は姉えさんが家に居られた時の野衣を出し、小菊ちやんの肌衣にして餘りた桃色祠輪て、たすきを拵へた(今年は桃色半巾のたすきが大流行)

二十一日 朝五時に起き身ごしらへを爲し、たけと共に苗取りに行く、八時頃兄上や宗吉や行一が田移りすとて苗代の傍を通る、兄上がみきさん短冊蒔はふち苗は殘さんてもよい、と當こすりを言はる、たけに負けぬ樣に與中の取よい所を取りし故なり、朝の中は人通りなかりしに九時頃より南の小母やら上出の露さんやら皆が苗代の傍を通られて、よくお出ましなさいましたとか御苦勞樣とか、言を懸けて行かれるので、はづかしくつて返辭もろくに出來ない、午後たけが苗持ちて行つたなり二時間餘も歸らぬので、人が通られる度毎返辭をするに困まり切る、歸へつてからなぜ長い間來なかつたと聞けば、圍まはりをせし故なりと云ふ、そして又行くと云ふので、今度は自分がと代りに行き、圍まはりをなす、然し縱橫各一尺が八寸程やら一尺三寸程の所が出來、五本六本が十本程のが出來二三本程のが出來、そしてはてぬのでお上手と皮肉を言はれたり、笑はれたりするので又こりこりした、六時頃川で荒土を落し浴して夕飯を食す、其時の旨しかつた事!。

田植の實況、田園趣味を解しないものには面白くないかも知れないけれど、實地を知つて居る讀者には興味を深くてあらう(評)

雛日記

静岡市 葉浪

二月二十五日――今日こそは飛び梅も、香の床かしかるらん。日朗かなるまゝに、待ちに待ちわびし內裏樣の御位を定めぬ。殘りなくお裝束遊ばしたる御姿は、またなう睦まじげに、にこやかに笑ませ給ふに嬉しうて……。母樣のお指圖に、簞笥、長持、夜具などそれ〳〵に並べたて、官女を初め五人囃子、潮汐みも二段目の右にと落ち付かせまゐらせぬ、氷解けし春風のゆたかに家中の急に賑はしく、いとゞうれし。

電氣かゞやく雛店を見物に、母樣妹と三人にてものす七間町の山由店の四十七士は、なか〳〵の細工なりて、そゞろ昔の義武士のゆかしさに、感に打たれぬ。

三月三日――曇りぬ。

桃の花咲き出てたるを選びて、內裏樣に供へぬ。

昨夜出來上りたる被布を、妾の人形に着せまゐらせし

に、こよなうはえ／＼しくて、今日の節句のお待ち遠樣なる樣子なり。
二三の友垣打集ひて、心許りの御馳走す、ほんのりと紅さしたる田鶴樣は、白酒にも敗けて、醉者の襲ひ來たりしに第一番の敗走、なか／＼にをかし。
例の汐汲を琴と三味の合唱、いつもよりは面白う聞えしよと母樣もうれしげに云ひ給ふもをかし。

（笈外）

山田小紫

月なきさへにくきに、九ツ頃より雨の軒つたふ音するに、まして恨めしうて……」

言文一致を避けて、わざと擬古文にしたるは、趣意にもかなひて佳し、併し其爲に活氣は抜けたやうだけれど（評）

侍女日記

丹後　建部　梶子

廿二日晴れ。朝の化粧を了へお孃樣のお部室伺ふ。長き廻り椽の我顏もうつらむばかりにともすればまろびやせむと思はるゝに、白梅の花一瓣二ひらこぼれし樣又なう床し。七時にはお二方樣坊ちやまもお目ざめになりたり。朝のお給仕終りてお孃樣の重ければとて、廂髮になし給ふをお手傳ひす。午後お活花の料に梅の御注文を受く。飛び石傳ひ梅林に入りて、枝振りよきを見はからひ、手折らむとすれど……。口惜しき事よと見上ぐる折しも不意に人の氣配、振り返れば、達夫樣なりき。夕方何となく故郷戀ひしさに椽端に立つ。坊ちやまづきの靜江さんも來まして共々に宅の前にて草摘みなせし昔を忍び語ふ。お召との聲に二人ともやう／＼我れにかへりし程なり。九時すぎ達夫樣おかへりになりたり。



廿三日晴れ。旦那樣御仰せ下さるゝをうれしと、目白籠お書齋の日當りに持ち出す、春は目白と犬の仲善よなどとからかひ給ふ。午後お孃樣、照澤樣をお伺ひし給ふ故御供す。達夫樣の兄君が嫁樣、瓜核の地藏眉に鈴を張りし樣なる御目、薄紅の唇莞爾やかに、此方のお孃樣といづれ劣り給はぬ御美くしき奥樣なりき。止め給ふなかをお暇せしは三時半、道にてお二方樣坊ちやまへのお土產品調へ給ふ、歸れば靜江樣の春樣お樂しみ等と何事ならむと心もそゞろ。お召換のお手傳ひすまして部室に入ればそはなつかしき戀ひしき父母よ

りの玉章なりき。夜お琴との御注文、千鳥を嬢様とみだれを奥様とお相手なす、十時お下りをなして急ぎ今日の返し認めむと筆は取りしものゝ思ふ事の十分の一もかけずして時間のみすぎ行く事の心せきて見返る床の静江様も時折りね返りし給ひては、此方よりも宜しくとお傳へを等とおねぐるしき様子と見受けたり。

紅葉の「不言不語」をおもひ出す(評)

三日の記

天鹽　相原壽美子

●●●●二月三日。今日は母様の御誕生日なればおひるに妹と二人にて、御馳走を作へお隣の靜子様も御招待する。おすもじが大層の好評にて、いつもは三杯より多く召しあがらぬ父様まで餘分のお代りをなさる。悪口やの兄様も今日許りは何とも仰せられず、ハイお代りツレお給仕と何處へお食べなさるかわからぬ位なり。

●●●二月四日。母様のお傍にて、裁縫せんと仕事をひろげし處へ、女子文壇來る。待ちに待ちあぐみたる文壇の漸く手に入りしなれば、すぐ開く。まあ誌友諸姉のお美しいこと！あら淑子さんの美文は當選よなどページひるがへす毎に聲立てつゝひたすらに讀みゆく。

●●●二月五日。都の友より御玉章あり。美しきリボン送り給へり。文壇に當選したる御祝ひなりと。あゝやさしきみ心の友よと御うつしゑに向ひ感謝する。

午後より兄様と共に國元の叔母上に送る林檎の荷造りをなす。向ひの御隠居様來り、雪は一丈五尺ばかりなりといふ。さすがは御隠居様かな雪の深さを計りて暮し給ふとはと、兄様とほゝゑむ。

他郷日誌

和歌山　清子

●●●一月十日。朝目がさめると、我家ではなかつたので、もう父様や母様に逢ひたくても、御目にかゝれないのかと思ふと、急に悲しくて、知らず／＼目には涙が一ぱいたまりました。一昨日まで、冬休みで、なつかしい故郷に居ましたものを。あゝほんとに、夢のやうであります。

學校に出ましても、先生のお話は心にも入らず、たゞ今頃はうちであつたら等と、それはかり考へられます。

●●●一月十一日。故郷より手紙來る。まだ／＼寒いから、からだを大切にせよつて、いつものやうに、やさしい御言葉、あゝほんとに有難い親の情、どうして妾はこのやうな故郷をはなれてきたのでせう。なつかしい父様や母様と別れて來たのでせう。はじめて、他郷にもの學ぶ身となつた時には、喜び勇んで出立した妾ですもの、此頃のやうに、日々歸りたくて泣いて居るとは、父母様は、よも御存じなさるまいに、あゝ。

●●●一月十六日。夜、雨戸をしめやうと思つて椽に出ると、まあいゝ月ですこと、今のぼりかけた眞圓いお月様は、

むかふの柳の木から、笑つてゐらづしやいます。何んと澄みきつた寒さうな光ですこと、どうぞお月樣、その鏡のやうなところへ、なつかしい〳〵故鄕や、父母樣を、うつして下さいませ。

故鄕の母上も、きつとこの月を眺めて、妾の無事を、祈つて下さつて、居るのであらうと思ふと、思はず淚が出て、雲がないのに月が曇りました。

どうぞお月樣、父母樣の御無事でゐらつしやる樣、御守り下さいませ。妾のこの心をどうぞ御告げ下さいませ。空を見ると、お聞き屆け下さつてか、お月樣は、やはり笑つてゐらつしやいます。

あゝ、この月、わがなつかしい故鄕をもこのやうに、笑つて、照らしてゐるのでせうに。

あゝ妾は、どうしてこのやうに、悲しい思をせねばならぬ身でせうか。どうしてこのやうに、氣弱い妾でせうか。あゝ故鄕が戀しい、なつかしい。

熊本へ

熊本縣　久野いと子

●●●●●

二月廿八日　六時起床、晴れ、朝のしまひを終へ裁縫す、午後熊本に買物に赴かむとて打立つ、水前寺輕便鐵道の停留所に至れば今し發車せむとする所なり、急ぎ切符も買はで乘る。

車掌が切符改めに來りし時、向ふ側にありし人切符をいだせば車掌はこは一度使用せしものなりとするどくいふ、否これは全く此前の汽車にて往復切符をかひ引割りもらひしものといきまきていふ、双方暫く爭ひ居たりしが車掌は後に停留所にて調べむとて去りぬ、他の乘客は等しく車掌の間違ひなりとさゝやき居たり、されどこは乘客も不注意なり、切符を受取る時注意せばかゝる間違ひは起らぬなり、牛乳搾取所を通ほる時隣にゐたる男の此處にかはるゝ牛の子ほどあはれなものはなし自分に飮む筈の乳は人に飮まれてとつぶやく向ふ側の女、そはさぞやせてあらむと優しく答ふ、連れなるべし、間もなく安巳橋停留所につく。

降りて此處より步にて水道町にいづ、今日は陰曆二十四日にて淸正公の御緣日なり、參詣者の通行夥しく過半は田舍人なり、廂髮に巾廣のリボンをかざし白の肩掛をまとひ額に汗して顏赤らめて行く、見るに氣の毒なり、すれ違ひし二三人の學生らしきが遠慮なく、今日は田舍美人計りね、でも御自身では隨分プリユーストクキングの積りさ、後は何やら笑聲のみ聞ゆ。

通町にいでゝ買物をすませ明午橋より歸途につく、廣き往還も例の參詣者にてよけあふ程なり、家に歸りしは四時半なり、急ぎ夕餉の仕度をなし六時頃しまひ果てつ夜は縫かけの着物縫ふ、父母君は八時過ぎに就寢せらる、水車の音は水がれのせいか常よりは鈍く聞ゆ、九時過ぎ縫ひ終へ日記つけ床にいる。

春雨の日

芝　眞崎靜子

春雨さびしう降る日なり。
姉さまの御病氣も快方に赴き、やつと皆々、愁眉を開く。
御床をあげて、久し振りにさつぱりと、病室の御掃除をする。其の間、姉さまは御髪をあげながら、少しお痩せになつた顔を硝子窓に近寄せて、雨の御庭を眺めて居らつしやる。
白梅は大方、散つて仕舞つて、只八重の紅梅が時々、美しう香のよい花片を散らす。
若い鶯が美しく芽の萠えた木の梢を、雨に濡れて、ちや、ちやと優しく鳴きながら飛び廻つて居る。
椿の花が濃い綠の間に紅をもやして、春のあはれさが身にしみて、故郷なつかしい。
やさしい風が咲き切つた椿の紅を散らす。
お掃除がすんで、又御床をのべてから、多賀樣から頂戴した美しい林檎をむいて種々のお話をして居る所へ、お光が出張先からの兄樣の御手紙を持つてくる。
「出張先はまだ雪が深くて、梅がやつと、ちらほら咲き出したばかり、鶯などはとてもまだ聞く事は出來ない。そつちは追々櫻の時節になるだらう、早く歸りたい。皆身體を大切に」とやさしい御手紙。
「兄樣が歸つていらつしやつたら、皆て御花見につれてつて頂きましよう」と姉さまがおつしやる。
晩の御飯を頂いて、國の母樣へお手紙を書いてから、ねる時にも春雨がしと／＼と降つて、淋しい。
又、今夜も故郷の夢を見るであらう。
――三月十日――

夏より冬

山口縣　奥田はな子

●●●●●七月十六日　朝の庭。
夜が明けたと思ふて寢床をぬけ出たまゝ庭に出た、見れば庭はまだほの暗い、梢より露、涼しい風は流れる樣に吹いて縁端の風鈴が折々チリンチリン、何ともいへぬよい心地の朝である、妹の種を蒔いた朝顔は初めて今朝一つ、星の樣なのが咲いた、日はほのかに東の山から光がさした鳥は塒を出てゝあちこちと空を飛びまはつて居る。
●●●●●十月二十八日　夜の雨。
ほつと目を開いて見れば假寢てあつた寢床は勿論しいてない、ランプは小暗い油の減つたのであらう幽かにジーンとなつてゐる、と雨がポツ／＼とおち出した、乾した稻を濡らすまじと田の中のはなれ家に戸のあく音がする。
●●●●●十一月二十九日　初霜。
顔を洗ひに背戸川に出た、菜園の菜も大根の葉も深い霜て凋んだ樣に縮みて居る。藁葺の家はどの家も眞白になつて居る、川に渡したる板橋も白うなつて奇麗な、犬の足跡一とつもない、歩けば惜しい樣なのを二間ばかり歩いた下駄の跡て七八つ汚した、すると五つにな

る弟が、いつの間にかかけて來て「雪が降つた雪が降つた」と言ふて喜こんで居る。

十二月二十一日　雪の日。

朝から風が烈しい、それに雪も盛に降る、電信柱の側面には打ち着けたように上から一筋に吹雪が凝り着いて居る、通行の人は鼻を赤らめて急ぎ足にありく、町も家も三盆砂糖を蒔いた樣になつて居る。

時には大きな霰も屋根を彈ぢいておちる。

日記その儘

愛知縣　永田舞鶴子

二月二十八日。梅の花瓣も散つて仕舞つて、小さな梅の形ばかり殘つて居る。

家のジョンも懷妊になつて、可愛さうな程横に腹が脹れて、難儀相に道を歩く。打越の叔母さんがお出でなすつて、ジョンが兒を産んだら一匹お呉れと云つて約束してお歸りなさる。妹の梅さんが、お父さんの大切な筆を持ち出して來て、新聞紙にお坊子を書いて居る所を見付けられて、お母さんに叱られる。

二月二十九日。私の寐て居る前の雨戸を、お父樣が何時も佛樣へ詣るついでにお開けなさる。今朝もお開けなすつた。何時もは最つと明くけれど、今朝は何となう暗い故、耳を欹て居ると、春雨のしと／＼降るのが聞える。また藪鶯のホーホケキョ／＼／＼と優しゆう啼くのが、私の寢床にまで聞える。「やあ鶯は此處に居たな、遣つ付けろ／＼」と、隣の榮作さんが餓鬼大將になつて、土を投げる音が蜜柑の木にバラ／＼と當つて聞える。すると鶯は何處へ行つたのか啼きもせねば兒供の聲も絶えた。

（賞外）　佐野良子



枕時計が七時を打つたので床を上げて井戸端へ行くと、「お早う御座んす。はゝゝ」と威勢よく云つて、當擦つて愛嬌者の一吉さんがお行きなさる。池の金魚がちよろ／＼と落る水の邊に集つて居ると、池に浮んで居た笹舟が、水の流の加減で池の縁を廻つて來て、金魚の頭にあたつたので、金魚は驚いて沈んで仕舞つた。昨日梅さん達が日進春日だのと言つて居た笹舟だらう。

三月一日。机に凭れて女子文壇の原稿を書いて居ると、チヽ／＼と啼いて小さな鶺鴒が、西の方から飛んで來て茅屋根に止つて、暫く邊の樣子を眺めて居たが、

思ひ切つて私の書齋の前に降りたのが南の障子の破れ目から見える。

今まで餌を拾つて居た鶺鴒が、不意にチヽ〳〵と啼いて飛び出したので、行方を眺めて居ると、藪の間から猫が一匹現れた。と一緒に、庭の梅の木にも鶯が一羽現れて、ホーホケキヨと啼き出した。儘かきのふ來た鶯てしやう聲がよく似て居ります。

父の歸り

播磨　佐久間　紅花

十四日晴。雀の聲に驚きて雨戸を繰るに、まだほのぐらききみ空もいとよく晴れ渡りて心地よし、ふと見やるに庭の面の餘りに亂れたれば、朝露しげきをもいとはず、そこかしこに生ひ繁れる草引きて掃き淸めぬ、かくて樂しく朝げの膳に向ひ食後は裁縫に時を過しぬ、午後弟妹をつれて野邊に遊びぬ、董花れんげ草等手に手に摘取りて美しき花束つくりぬ家づとにせんとて、夜御旅行中の父上より電報來りぬ急ぎ開き見れば、アスアサヒチジツク、とあり新橋よりなり、母上の明日は驛まで御出迎へせよと仰せ給ふ、さらばとて九時過る頃臥床に入りぬ。

十五日晴。今日は父上をステーシヨンにお迎へせんと常よりも早く臥床を出てぬ、見れば日頃にも似ず、弟妹のはや起き出て嬉しげに妾の許にはせよりて、姉様おはようと云ひぬ、それより亂れしかみ取りあげ妹にもおさげに結ひて紅のリボンかざしやる、朝飯もそこそこにすまし身のまはりとゝのへていそいそ立ち出ぬ妹のリボン朝風にひらめきて蝶の如く弟は小旗手に持て水兵服の足もかろげに…………やがてステーシヨンに至りぬ、父上ののり給ふ列車來るまでは卅分もあり弟妹のかはる〳〵線路のかなた見やるもおかし、果ては着きぬ、父上のみ姿ちらと見とめて三人一樣にかけ出しぬ、かくて七時半父上をまつ先に車をつらねて我家へ歸りぬ、弟妹の父上にすがりてお土産お土産と騷ぎ立つるも愛らし、父上は行李開き給ひぬ、妹は可愛き人形、弟は自働花電車藏きて嬉しげにはねまはりつ母上には反物、妾にはかねて望みし水彩寫生用具一式なほ妾にとて目もさめんばかり美しき帶地給はりぬ、今更に深きお情身にしみて嬉し淚こぼれぬ、午後妹の友染被布仕立あぐ試みにきせ見るに大きやかなる花摸樣のうつりよくてこよなく愛らし、夜は父上に珍らしき東京の御物語等聞て十時床に入りぬ。

十六日晴。今日は殊の外長閑なる春日和なり、窓外の櫻笑み初めぬ、折柄書き終へし君子樣へのおとづれに二片三片封じこめぬ田舍の春偲び給へとて、夜明日は春の野邊寫生せんとて種々仕度す、十時過て臥せりぬ。

「天」美しい時代

本所　田中久子

兄はよく私にかう申ます「是からの女は自分といふ事を明に考へなければ不可ない、今迄の樣に周圍の壓迫に甘んじて是が非でも服從して行くようぢや直ぐと他人に負けて終ふ」と。妾は此事を時々考へて見ちやあ恐しい樣な寂しい樣な心になります。

つまり個人意識の發達とでも申すんでせうか。

今迄の妾等日本人は支那道德の博愛等といふ美しい（？）思想の爲に成るべく自分をおほひ包むで他人の爲、人道の爲めと言ふ樣に考へて居たのでした。夫が今はどうでせう。新らしい人達は皆、自分を主張して個人主義の聲が盛んです。自分の價値、自分の威嚴を飽くまでも守らう、落すまい、として居ます。そして自分は自分、他人は他人、といふ樣に考へてゐます。けれども之に伴つて起つて來た新らしい一の現象が御座います。つまり餘りに自分を主張する爲「ひとり」「ひとり」といふ感じが盛んで周圍の物を無視したり、押し退けたりする所爲でせうか、一種の悲哀、一種の寂寞、を覺える事です。殊に妾の樣な弱い〳〵女の身としてはなほ更しみ〴〵と感じます。

これはホンの一例ですが、一人でお留守番をしてゐる時、何もする事が無くてぢつとして居りますと何かなしにホロ〳〵と涙がこぼれる事がよくあります。

あゝ是からの長い〳〵未來、母樣とも兄樣とも別れて了つた長い〳〵未來を冷い個人主義の波にもまれてこんな事でどうして送つて行けませう。

妾とて申さば成る可く自分の思ふ通りにして見たいとは思つて居ります。自分の價値、自分の尊さは出來る丈け保ちたいとは思つて居ります。けれども夫と一所に來るこの寂寞、この悲哀をどう致しませう。

之を忍むでまでもなほ自分を主張して行かないではな

りますまいか。男子の方なら知らず、弱い女の身そらとしてとても堪へられまいと思つて居ります。未だ經驗の淺い妾にはよく分らない事では御座いますが是等の點から考へて見ますと極端に自分を主張する結果は却つて自分を滅す樣な事になりはしますまいか。成るべくならば昔の樣な他人の爲、義の爲には自分を犧牲にしても顧みないといふ、美しい時代に蹈したいと思つて居ります。

個人主義と謂ふのは斯ふ云ふ意味でありますまいけれど、斯ふ云ふ側から解釋してくると、誠に寂寞を感ずるでせう、小説も此處から生れ、詩歌も此處から現はれる、議論として筋は立たなくても、此文章には美しい感想が現はれてゐる。（評）

「地」

忘れ難き作品

本所　江原田鶴子

寡聞淺學の私、敢て好める作品と言はぬ、批評と言はぬ、たゞ今まで讀むだ作品の中、（讀過して何等の刺戟や印象を與えぬものと、その作の趣が彷彿として永遠に忘れえぬものと、二種ある。）その忘れえぬ作品の事を書いて見やうと思ふ。

忘れ得ぬ作品。その第一に浮ぶものは國木田獨歩氏の御作である。武藏野に收められたもの、獨歩集に收められたもの、運命に收められたもの、濤聲に收められたもの、皆強い一種の哀愁を殘して、私は常に忘れ得ぬ、その四冊は常に座右に備えてある。

武藏野では卷頭「むさし野」の、時雨降り白雲飛び、落葉行手にみだるゝ野の景色、「忘れ得ぬ」人々の哀愁や、「河霧」の悲慘、獨歩集の「牛肉と馬鈴薯」の痛切な人生に對する煩悶の叫びや、「春の鳥」の悲哀な物語。運命の「惡魔」「日の出」「空知川の岸邊」。濤聲の「帽子」や「神の子」や「死」や、一つとして氏が痛切の心靈の叫びならぬはない。

さうして氏の作に現はれる人物は皆一種暗い影を帶びた人物ばかりで、無限に展げられた人生のパノラマの一部々々を抉出して示されるやうな氣がする。作の底には強い悲しみが通貫して、目を瞑ると油然として、その姿が現はれてくる。

私は小川未明氏の短篇集も好むで讀む。そしてその愁人の「暗愁」と「煎餅賣」は共に忘れ得ぬ作品の一つてある。

村落に煎餅を賣りに來る女、子供、お母さん、それ等が薄暗い天地の中に一團となつて、今も何處かにそれ等の人々が現存してゐるやうに思はれる。現に作中にあるやうなことを演じつゝあるやうに思はれる。「遠い響」それには私も胸の奥の奥の遠い遠い所の響を聞かうとして手をあてた一人である。

その他二葉亭氏のカルコ集にある「ふさぎの虫」の粉屋のチホンが遊びにゆく銘酒屋の光景や、高濱虚子氏

の鍵頭の『風流纎法』の祇園の妓樓、『斑鳩物語』の奈良の物寂びた春の宿に梭の音を聞くといふ幽趣。皆、忘れえぬ作品である。

批評ではない好きだから忘られぬと云ふ其理由が最も好い最も公平な批評になつてゐる、作品の批評はこれで澤山である、仰々しき天下の批評家を煩さずとも、江湖一女子の聲、自ら他山の石となる（評）

「人」自然派の是非

東京　龜井ひさ子

近頃の自然主義に就て是非曲直の聲が四方に喧しくなつた。吾々が斯かる大きな問題を捕へて其の是非を解決せんとするのは大早計かも知れないが唯淺薄な頭腦で識別した單純な考へを告白したいと思ふ。私は自然派なるものゝ概念を梗概的に云ふよりも寧ろ直接に其の產む所の作物に就て言ひたい。先づ之れを是認する者は文學思潮の立脚點から立論して其の進歩を促し、之れを非認する者は宗教的、道義的制約の見地から其の作物を蛇蝎視する。前者は祈らんとし後者は呪はんとする。其處に對流作用の如き衝突が起るのである。雖然之の是非の論は既に根底からして葛藤を生じて居る。其の枝葉の細密なる論議に至りて、更に、より多くの反觀を生ずるのは火を見るよりも明白であらう。开は藝術と宗教との二元的見地より論ずるからである。

却說小說は思潮に伴ふて變化する複雜煩瑣なる社會の反映である、更に大自然の縮寫である其の眞髓を捕促して、之れを活躍せしめ髣髴せしめるのが第一義の目的て、絶大なる權威と無限の價値の依て起る源である。勿論藝術たる以上は技工の巧拙、用意の如何、字句の操縱、表白の工夫等も當然必要てあるが、所詮之れ等は第二義に屬する目的である。自然主義を標榜する作物の主張も玆にあるのである。藝術家は偏へに己が天分を守れ而して僞らず己が作物に忠實なれとは、誰かゞ言つた言葉である。立派な主張の下に堂々其の作に從事するは大工が家を造り、農夫が畑を作ると何の異なる所はない。勞すれば即ち從つて結果も良好であ

(賞外)　乙蟬もん子



る。

自然主義は我國文藝上の大なる革新てある。過去より見れば破壞的運動てあるが現世より見れば正しく建設的運動てある。例ひ其の創作は過渡期の所産なりと雖、常に地歩を進めんとする進歩の聲てある。吾々は文藝上この意義ある運動を他の些々たる制約の爲めに阻害し呪咀するものを、遠慮なき蜚と嘲笑するに躊躇せぬものてある。

或る者は云ふ自然派の作物は餘りに靡爛して居る肉慾の爲めに肉慾を描寫する故に不可なりと、吾々は今の小説の悉くを擔ふて斷乎として然らずとは云はぬ、雖然之れを以て自然派を葬らんとする彼等の淺見を憐まずには居られない。

彼等は其の作を春水一派の物と同視して居る。彼等は嚴格なる作者の態度を感受する能力を持たぬ。彼等は作物の前に堅實なる自覺を持たぬ。彼等は文藝と宗敎との確然たる區別を知らない。彼等は文藝に對する藝實なる之等の諸要素を忘却して居る。之れ等が大なる誤解の原因で其の弊も亦明らかに自然の不用意にあるのてある。

敢て云ふ將を射んと欲せば先づ其の馬を射よと。

幸に自然派の作物は之れ等不具の言辭容喙に傾聽する餘暇を持たぬ。吾々は正を棄てゝ邪に與する程の盲なるものでない。此の是非の論議の依て起る源を公平に含味して吾は當然前者に與するものてある。

餘りむきになりすぎて、かたくるしく論じつめやうとしたから、文章に潤ほひが無くなつたけれど、確乎たる基礎の上に築かれた議論てあつて、所謂時文評論の好摸型てある（評）

『秀逸』

滿足

京都　小笠原　あき子

是を奢の心と申すのてしやうか、或は體裁を飾るてふ、所謂女の儚い虚榮心なのてしやうか、只何と無く、白銅の襟留よりも、銀製のが好しくて購ひますと、今度は金針が目につく樣に成りました、若し是を求めますなれば、更に寶石入を羨望するのても有りませう、斯樣にして慾望の滿足に、其際限を見出す事の不可能は、諸事皆おなじて御座いませう、去れど、諸姉樣と同じ樣に、新刊の女子文壇を讀み終りました時の妾は、云ひ知らぬ滿足を感じますのは、何故て御座いませう？此一冊に就ては、世界中の誰が又、妾以上に良書を讀む事が出來ましやう⁉王侯の權威と巨萬の財力を以てしても、妾以上の興樂を、此一冊に於て獲る事は、決して出來ないと念ひます時に、妾は最幸福な者の一人て有る樣な心地がするからて御座います。

款待を受け、美味を饗せられ、名所の遊覽に伴はれます時には、惡い心地は仕ませんが、倘、妹と共に摘菜に參りまして、綠萌ゆる芝生の上て、手詰の割子を披きました時の其樂しさ、面白さには、遙かに及びません、須磨の浦て見る月よりも、裏の隅て見る月に、多

大の美と感樂を覺える事が御座いませう。

凡そ是等の事は、妾一人の經驗では御座いますまい、然らば何故、財を費し乍ら羨望の邪念を生じ、却て無上の滿足を一冊の雜誌に得るので御座いますか、到り盡さぬ所なき歎待を受けます時よりも、疏食水飮の樂が勝つて居るのは、何が爲で御座いませう?。若ソロモンの榮華に倣ひますなれば、桂を焚いて玉を煮るとも飽かぬは人の慾で御座います、デオゲチスの桶にも、興樂其中に在る事を知りますなれば、人が滿足を感じ得ると否とは、只、心一つに在ると申さねばなりません。心一つて、物皆樂しく、自分の幸福を歎ぶ事が出來ます。

論旨は別に奇拔でもないが、根抵がしつかりして居る、婦人の言論としては襟を正しうして聽くべきもの（評）

結婚につきて

羽前　紅　波

小學校の六年間高等女學校の五年間を同じ敎室で學び通した佐野淑子樣は、御目出度い事がお有りで御上京なすつたのは、つい二三ヶ月前と承りましたのに、今は御離縁になつて、お宅へお歸りなすつたとやら、妾は是を聞いて深い深い感慨に沈んだのです。

何故去らるゝ人は斯樣に多いものだらう、橫町の吳服屋のお嫁さんも、ついその向ふの官員の息子さんのお嫁さんも去られるとか去られたとか、こんな狹い町內てさへ彼方ても此方ても、離緣といふ語は全く多過ぎる、而して相當の敎育ある方でさへ尙且然りてある、近在では「嫁つて見て厭だつたら歸つて來い」といふやうな慣もあるとやら、まるて犬の子や猫の子でも呉れてやるやうに思ひなしてゐるのだらうか。

去る人が惡からうか、去らるゝ人が惡からうか一槪に言ひ得ぬには相違ないが、妾は女としての立塲から、如何しても女の方を責めたいと思ふ、考へても御覽なさい、愛の半身として二世を契るべき其人が全く憐むに足らぬ無能の女と知つて、最後の手段をとる男の人に果して罪があらうか、それを示導し敎養しつゝ生涯世話のやける伴侶に滿足する丈の餘裕ある人は、妾はそんなに有るまいと思ふ。

若しも到底提携して行けない男女が夫婦として存して居つたら、よしや表面は如何あらうとも、裏面は實に悲慘なものでは有るまいか、高樓の甍の上にたつた一本咲いて居る花のやうに、美しい空や賑やかな町は見えても、それは自分の有ては無いてはないか、世の中に是程情ない事が有らうか。

畢竟女は其處女時代に於て、盤根錯節もつれからんだ人生の事件を處理して我をも人をも滿足させる丈の決心と技倆をそなへて、然る後に嫁ぐべきものと思ふ。高等小學校で既に婦德の何たるかを敎へられ、高等女學校で家政學の全部を授けらるゝ方にこんな事を云々するのは無理かも知らぬが、妾は轉ばぬ先の杖といふ事を思ふ、男子の側から、やれ智の程度がひくいの、

料理法を知らぬのと、批評され注文される前に、女自身が自分の地位を自覺して、共に世に立つだけの智なり學なりを修養し鍛錬して如何な試驗にも應じて、美事切りぬいて見せやうとの自信あつてこそ、始めて妻といふ名を受くべきものでは有るまいか。

然するには卒業したての十七八ては時期が至らぬ事と思ふ、尙實際の修養に要する今一二ヶ年は待たねばならない、花の時代が過ぎて了ふと、無性に急ぐのが既に破鏡の獄を醸すべき第一步の失策ではあるまいか、此責任は誰か負ふ、親、母親と妾はいふ、自分の愛娘が如何な場合に臨んでも耻しくないと信じて、嫁がしむるお母樣は幾人あらう。

此理由を以て早婚を拒むのなら、生意氣とそしる人もなからう、離緣の如何に悲慘なるものかを知つたら何處までも其處女時代に於て、眞摯に硏究し講習せよと云ふ、極端と人はいふとも、轉ばぬ先の杖と妾は絕叫して止まぬのです。

輕浮ではない、眞面目に心の底から出た絕叫である（評）

人生と疑問

玉枝

凡そ、人として疑問なき人はあらざる可し、人は過去も疑問、現在も疑問、未來も亦悉く疑問なり、人生の一生總て疑問にして、疑問は人生の疑問より寧ろ疑問の人生なり、人は疑問に生れて疑問に死す、既に人類が萬物の靈長として、此の世界に生れしや、亦疑問にして、學者の唱ふる進化論、單に想像に過ぎずして事實は疑問なり、人は又如何にして生るゝか、如何にして男女の別を生ぜしか、今、試みに、貴女は如何にして生れ、如何にして女子と成りしかと問はゞ、誰れか果してよく答ふる者ある？、所謂　疑問に生れて疑問に女子たればなり、故に現在妾等亦悉く疑問にして、何時何を爲すか自ら知らず、何時病魔に襲はれ何時天災來りて斃さるゝか又知る可らず、自己が生死の疑問より、人は何故生活するか、此ぞ人生一生の大疑問にして、人は多く此疑問を解せずして疑問の間に逝く、人は喰はんが爲めに生活する？、生活せんが爲めに喰ふ？、人生一生此疑問を自覺する者少なかる可し、人の一生とは、生れて死する迄での生活を稱するなれども、甲と乙とは處生を異にし、各自長短の差ある亦疑問ならずや、生れて即時死する者あり、百歲の高齡猶ほ多く米を喰ひ、糞を造る者あり、故に人生一生の長短は、恰も時間と空間の如き者？、一秒時の十萬分の一も亦時間なり、十萬分の一秒時に、十萬哩の速力で、十萬年走つても達する能はざるは空間にして、人生の一生亦斯の如き？　又は如何にして生長する、學者は言はん、喰物より滋養分を吸收し其の滋養分は人體組織の細胞を漸次發達長大せしむるに依ると、然れども滋養分其の物が解す可からず、種々の成分物質や種々の變化を經て滋養に成ると言ふに外なく、單に机上の說明に過ぎずして、其の實際は疑問なり、人の生長に

先つ細胞の長大は、原素分子の膨脹するに依ると言はん、然れども原素と言ひ、分子と稱する物亦疑問ならずや、近來科學進歩に伴ひ、物理の疑問は解し得ると雖も、或る程度に止まり、換言すれば世界の萬物七十三原素に外ならずと言ふに過ぎずして、原素其物は解す可からず、唯だ萬物を構成する物なりと言ふの外なかる可し、觀じ來れば、人間萬事悉く疑問にして、一生此疑問を解する能はざるは、抑も人生が疑問の人生なればなる乎。

（賞外）　きよし

餘り題目が大きいので、空漠の裡に消えはしまいかと思つて、讀んで行くと、然うでもなく、存外要を盡くしてゐる（評）

數學の必要

芝　ゆみゑ



數學の出來ない照子さんはこうおつしやいます、女なんて數學なんか出來なくともさほど不自由はないわ、文章がよく作れて、お仕事の上手の方がよつぽどましだわ、私は敗けおしみであると思ひました。

女は商家に嫁かなければ算盤は持たないでせう、お裁縫ほどは數學は女に關係はありますまい。けれど女に數學は一番大切だと思ひます。何故なれば、幾何の說明の出來ない樣な人は、文章を作る時に、いくら美しい言葉を並べても、つじまりのつかぬ文になり、明晰の頭腦を持たない人は、世渡りをする時にも折々正邪の判別に苦むだり、子を育てゝも才勝れた有用の人物にはなれないでせう。

言葉を換へて云へば數學の下手な人は、良妻賢母にはなり得ないと思ひます。

私友について觀ますと、數學の運算を奇麗にする人は、心持も奇麗です、——そして上手な人は決してそゝつかしい人ではありません。又數學は婦人の長所たる綿密とか丁寧とか云ふ精神を養ひます。

また宿題でも出て御覽なさい、人が出來るに私は出來ない、恥しい口惜しいといふ心も起ります。

本統に數學は女に必要です、そして上手な者にはなるべきです、けれど私は所謂數學の天才を持つて居ません、が數學の上手にならうとつとめて居ます。

畫の眼があつてこそ其道に上達するのでせう（評）

借本の落首

岩代　白雪子

打續いた休業日の徒然慰むる爲にとて、友達の方から小說本を二三種お借して讀むで見ました。讀卒つてから、何心なく終末の頁を見ましたら、其所に一首の狂歌が書いてありました。讀むで見ると、『世の中に本貸す程の馬鹿はなし、切れる汚れる末は無くなる。』まア此麽事てす。普通よくあるもので、別して奇拔なものでもないてすが、苟も當世の文藝に眼を曝す方の業としては、餘りにさもしいお心柄と賤しく見られは爲ないだらうか？亦他人に見せるとしたなら、其人によつては隨分失禮にも當るてはなからうか？と、其友達の謹直な平素に較べて、かう考へると同時に、常に物品を大切がる私は、唯何がなしに侮辱されたやうな氣がして、一時は甚だ不快に思つたのてありました。併よく〳〵甘味して見ると、中々穿ち得た面白い歌てあるといふ事が分りました。

今更改めて言ふ迄もなく、由來我日本國民は、公德を重ずる念慮が誠に薄いと思はれます。自分の書棚や机や日用品は、丁寧に取扱ひ、いつも清潔にして置きますが、學校などの机器物などいつたらありません。夫はひどいものてす。屋敷の草花樹木は大切に栽培しますが、他家の庭木、公園の花、野の花などゝなると遠盧用捨もなく折り採られます。神社佛閣は落書の公認所てす。板塀や橋欄や電柱なども同じ運命の手に、さいなまれます。厠屋の板の間などは、不潔不淨極まる所てす。夫て多くの人は此等を平然と觀過して居る、何と淺ましい所業てはありませんか。人は忠愛の念深く孝悌の情密に、國は山紫水明の勝景に富み、氣候中和に產物亦豐裕にして、誠に世界の樂園君子國てあると、賞賛の辭を惜まぬ諸外國人さへ、此公德缺如の一事には、非常に驚いて居るさうてす。尤てす。維新以來泰西の文明を輸入してから、僅に四十年の間に驚く可き長大の進步發達をし、凡べての點に於て其美を謳歌さるゝ我同胞は、何故に斯う公德心に乏しいてありませう。『櫻木折る可らず。』『無用の者入る可らず。』的の見苦しい標札を全く徹退して終ふのは、果して何時の世てありませうか。私は此一首の落首を見て、深く〳〵心に感じました。願はくは、一刻も疾く此理想を現實にして見たいと切望に堪へません。否、之を理想としなければならぬ現在の日本の狀態が、恨めしうございます。

鷄頭

松山市　勝島愛子

緣さん。御病氣は如何てすか。

▲虛子の『鷄頭』を讀みました。自然派と同じく、事象の渦中を超過した客觀的態度――所謂抵徊趣味、觸れない、餘裕ある態度――はありながら、情味を加へて、

物を美しく見せて、淡い美しい感じを起させる、「風流懺法」や「斑鳩物語」等がそれて、いかにも感じの好い作てす。「雑魚網」「八文字」「細打」「欠び」の四篇は寫生文の脈の多い、小説としてはプロットが複雜てない。「樂屋」は少し違ふ。

▲最も忘れ難い新らしい意味のある作は、「大内旅宿」と「勝敗」と「秋風」とてす。

▲「大内旅宿」は人生の矛盾、葛藤、波瀾の、複雜な事件が長からぬ一篇の小説として、それに迷信的思想を織り交へて、巧みに表現してある。「勝敗」は老人と小兒の口爭ひを以て、老人が青年に追々征服せられる事を書いた虚子の新らしい着眼が見られる。「秋風」は最も佳い作て、短かい中に主人公も好く描れて、人生の悲哀に、時代の煩悶が仄見える。

▲同じ客觀的超越的態度にも、漱石にはシニカルな冷笑がある。虚子には温かい同情がある。心憎くい程落付いた冷靜な作者の態度の裏に、微温的な同情が潜んてゐる。兎に角「鷄頭」は小説として價値ある佳作てす。總てゞ十篇てす。

まだお讀みてなければ、あいてゐますから、お送りします。身體をお大切に。さよなら。

平　和

茨城縣　小泉はま子

平和！美しい語てはないか。

私は之を耳にする度に、花が咲いて蝶がとぶ麗かな春の日を思ひ浮べる。あゝ平和、平和てなければ、和氣藹々とか、秩序安寧とか云ふ事は望み難いと信じます。我等が社會は常に此の平和を切望して止まない。それて平和の反對を亂世といひ、戰國時代と稱へ、社會の運命は退歩する。解り易く云へば亂世とは殺伐を何とも思はぬごく悲慘な時代てあります、こんな時代が永續すると國家は終に滅亡せざるを得ない。あゝ美しい。平和！我等が家庭もまた常に平和を望んて止まない。

それて私は斷言します「家庭の平和は主婦の心掛にあり」と。

何故なれば夫の望む所は妻の全幅の愛情てはあるまいか。即ち二人の肉躰を入るゝ邸宅てはなくて、人の心情を安置せしむる神聖な家庭てはあるまいか。

若し茲に善良なる品性を有し、貞淑なる婦德を有し、秩序ある習慣を有し、良人と心を共にし、苦樂を一にし、倶に憂を共にする婦人があつたならば、其の家庭は必ず平和にゆきます。

こんな婦人は、其の會心の伉儷に於て他に求め難い熱心な協同者て、良人の爲めには尤も正直な會計係てあります。秘書官としてはこれ以上の誠實なものはない。憂あれば慰藉者、病あれば看護婦、悲みあれば同情者其の清醇な情懷、これ塵外の樂園てはあるまいか。

其の甘美な溫言、これ天籟の音樂てはあるまいか。

あゝ平和！家庭の平和！、世に美しい家庭はこうして初めて得る事が出來やうと思ひます。

女子と文學

渡島　森野桃子

文學の中心は、小說であらうと思ひます。凡べて小說に限らず、詩にあつても、歌にあつても、是等總べては、其人の情緒を以て、成立つるものでムいます。女子は、天性、男子と違つて、心が優しく、物事に微細な觀察をするものでありますから、斯のやうな、小說、或は詩、歌を作る上に於て、男子より有利なる地位にたつてる譯であります。

ものに同情し、美しい泪を拂ふは之れやがて、美しい文なり、詩なりに顯はれる當初の事實でムいます。綿密な、審美眼より見ますれば、自然のあらゆる現象も、物を言はぬ木や草も、よろづ代の變りなき海も山も、ひとしく有情のものであります。綴密な眼の更に綴密でありましたならば、それらの凡べてには、人の知らぬ血や泪ももつてゐます、人の知らぬ神祕や崇嚴もあるのです。これ等は、凡べて鋭どい觀察と、暖かい同情の眼あつて、初めて解する事の出來るもので、男子より、より以上の同情ある心と、より以上の細かい觀察の眼も、天性より見て有利な位置にある私等は、決して男子以上の女文豪になれない理由はないのでムいます。

紫式部は、女子でありました。淸少納言は女子でありました。近くは一葉女史は女子でありました。是等の方々は、日本文學史上の大立物であつたてはムいませんか。決して女子の、文學に於ける前途は悲觀すべきてはありません。たゞ私等の、發奮の仕方ひとつなのであります。

體育の必要

福島縣　原しづ子

妾が今述べむとする所は、讀む人皆な耳古しと、うるさく感ぜらるゝやも測らざれど、論あつて言はざるは、懼とすべき事ならずや。而して是れ決して其の實行に六ケ敷が爲にはあらで、たゞ之を忽にするなり。西哲は曰へり、健全なる精神は健全なる身體に宿ると。寔に是れ、千古の金言と謂ふ可し。

人の世に處し物に接し、人生の活路を愉快に通らんには、必ず先づ自體强健ならざるべからず。精神は身體あるが故に存して、極て密接なる關係あれば、體育の缺點は精神に不快不滿の念を惹起するは、當然の理なる可き也。身體の贏弱は必ずしも社會に害を爲さず然れども贏弱の個人が他の强健な欲望して、自己に悲然を與ふべきは、免る可らざる事實ならむ。或は廣く萬卷の書に渉り、或は深く物理に通ずと雖も、其身の之に伴はざるときは、悲愁多くして功少なかる可し。生來の不具疾病は姑らくおき、滿足なる身を享けて、而も用に足らざる滯綱の體となすが如き者に至りては誠に問はざる可らざる問題なり。

國と女子は奚を尊とぶ。蓋し奚は、女子の生命の一助ともなる努力あることあればなり。然れども一般道德に於て、身を殺しても奚の必要ありや。

將來良妻賢母たらんとするわが友よ、願はくは鏡と操との他に更に、體育の必要なるを思ひ玉へ。或は將來、樂しきホームを作り、有用の材たらんとする兒女を欲せば其の基礎の母たるべき君等の健康を求め玉へ。贏弱なる身が、或は家庭に風波をたて、或は早世して一家に悲波をたゞよはす事のいかに大なるかを想はれ給へ。



和歌

『天』　四谷　小川なみ子

もろともに棄てし生命のうつわもの再びひろひのろ／＼火たく

批評ではなく説明を試みて見ましやう、もろともには男と女です、棄てし生命は戀の爲に棄てし生命です、うつわものは身體です、再び拾ひは一旦捨てた生命を二度拾ふのです、のろ／＼火焚くは象徴した語で、一首の主眼は此句に在るのです、のろ／＼火は盛んに燃ゆる火でなく、のろ／＼した火、燃えて居るか、燃えて居ないか分らないやうな火で、つまり嘗て一度戀の火は盛んに燃えて、二人とも諸共に燒き捨てらるべき筈であつたが、燒盡きもしないで、再び餘燼を焚いて居るけれど、昔のやうに盛んに燃えない、のろ／＼した火であると、先づ斯う云ふのでせう、戀の凋落と云ふやうな意味です、廣く解釋するとまだ／＼さま／＼の聯想が起りますけれど、それは諸孃の讀詩力に任せませう、全體詩歌は説明すべきものでありませんが、新派になじみの薄い大多數の諸孃の爲に並に蛇足を添えて置きます。

『地』　四谷　高橋牧子

君見ればものこそいへね日に向ふ心地のみするわれは少女子

此歌は第五句を初めにして解釋すれば直ぐ分ります、自分は少女であるから君―勿論男子―を見ると太陽に向うやうに、まばゆくて思ふやうに物が言はれないと云ふのです。

『人』　弘前市　佐野てる子

海のはて赤らに生るゝ滿月をよぎる早櫓のいさな舟かな

大きな景色の歌です、海のはてに滿月が赤い色して上る處を櫓を早めた鯨舟が通ると云ふのです。

『秀逸』

○　牛込　直井敬子

つれなし人なかにすめども美しう霞にきゆる遠里小野

○　麻布　小川みつ子

春空は霑ふ君が眼とみへてやわらかき日の胸に泌けり
麹町　椿　友子

○うすやみの母が家出てゝ旅にゆくわが魂は神にまかせむ
函館　山田くに子

○やぶれたる胸をいだきて人あまたうなだれあゆむ黄昏の町
本所　田中久子

○君が家をもるゝ灯影はわが庭の芙蓉にさしぬほのに虫鳴く
岡山市　矢延幸枝

○屋根の上にあやめ花さき紫の雲居るやうに來し五月かな
牛込　執行英子

○われ君を思はずなりぬ君われを思はざりけむ日のごとくに
若狭　津田汐汀

○野に秘める大香爐にたく神のありてけぶるか春の霞す
大津市　夏山ゆり子

○胸の草いと温き露うけて芽を吹き出てぬ君とかたる日
長崎市　一瀬みどり

○大聖の臨終に侍す心地して凪の濱邊に落日を見る
三重縣　北村みつ子

○大なる時てふ魔もの日毎きて我が血吸ふらし頬ぞやつれぬる
上総　森ひさ子

○戸をくれば朝露ゆれて花草の夢の香おくる野の鳥のこゑ
東京　加藤花子

○美しき人はなつかし君がごと心と心ゆるさずあれど
下総　秋山桔梗子

○白の梅紅の梅ちる丘の上に少女十人が花輪つくれる
富山市　小林芳枝子

○舞衣なかばたゝみてみかへれば春雨すなり連翹のはな
越後　山本やす子

○あなうれし千年まちぬ戀人にあひたる心地ふるさとに入る
府下　永田津根子

○朧夜の桃の小窓になつかしき君の影しぬ琴の音ぞする
關　三輪關の人

○心なほ二つの花を戀まとひなやみてありぬうき蝶の身よ
紀伊　榎本千鳥女

○一山の木は皆かをり百鳥のよき音つたへて春の風ふく
熊本縣　藤村たくゑ

○うちなびき春は來にけり今川の岩しの氷けふや解らん
箱館　和田やちよ

○島は朝霞して海鳥のみだるる中に白帆行くかな
千葉縣　高濱尚尾

○春雨は黄金色なる山吹の床しき花に細う降るかな
鹿児島市　岡積貞子

しづくする廣葉の靑菜寸の葱小女は畑を素足して來ぬ
靜岡市　野崎道子

○腹がへる小魚の群に春日さす水ゆるやかに底の砂見ゆ
天鹽　菅井女史

○和田の原霧ふきはらふ朝風に眞帆打あげて行船の見ゆ

○筑前　花田寒野
水汲むと山の少女は百合の咲く谷間を辿る朝月夜かな

○土佐　美枝子
春柳の糸くりかへす春風に波のあやおる庭の池水

○岐阜　大島かつ子
あゝ胸の風巻は遠の温き君こふみ國縫ひてぞ行く

○山口　深山鶯
今はたゞ峰の嵐も堅たえてわが山里はみ雪降るなり

○韓國　多賀笹舟女
櫻ちる花のしがらみがけしよりよどむ田川に蛙なくなり

○山城　村田まさ子
音高き瀧のひゞきをよすがにて知らぬ山路をいくめぐりつゝ

○橫須賀　藤野百々子
夕煙る紫紺の筑波雨晴れて馬にせまり來人にせまり來

○紀伊　室井白莽子
駒ながらみどり十里を行く君の影小さうなりぬ夕うす月に

○佐賀　西ちよ子
朝寒や野末の寺に鳩むれて狹霧流るゝ菜の花のみち

（賞外）　玉川しげ子



○岐阜　りつ子
山里は春とは名のみうぐひすの一こゑだにもらさぬぞうき

○山口　空の花子
手折りして胸にさしつゝ更に思ふ奇しき運命や道のべの花

○南千住　小町紅
君とわれ櫻ちる中さまよへば雲に乘りつゝ空行くおもひ

○安藝　上田まさ子
底しれぬくらきに落つる思ひする病むおそろしのまどろみの夢

○靜岡　伊藤みどり
我れひと時胡蝶なりせば少女子の室にひそみて夢みまほしき

○京都　吉田しづ枝
雨止みて南天の實は白銀の雫するなり月のぼる時

○靜岡　増田たけ子
峠路や藤さく茶屋ののき近う春の富士見るひるさがり哉

○紀伊津　村文子
梅の花咲けるかたへに庵見えて旭さしてぞ鳩のなくなる

○奈良縣　中富よし子
燃え果てしおもひのむくろともすればよみがへらむのけはひしろきを

○越後　齋藤忠子
けさはまた見るぞ嬉しき八重櫻雪をあざむく花のさかりを

○相模　成井金子
君が代の惠の露にうるほへる大和少女のうるはしきかな

○美作　春山
詩思ふ机の梅の花瓣に戀と書きしは誰がすさびぞや

○澁谷　山崎幾美子
春淺き宵の灯のさゆらぎに胸の思ひのふとまぎれぬる

○　岡山　田鶴子
夕ぐれの窓にそとより外の方を眺めてゐます美くしの人
○　石狩　椎野藤波
羨まし梅に柳に木傳ひてのどけき春を歌ふ鶯
○　北海道　小林恣雲
風さゆる明石の浦の夕空にとがまの如き月ぞかゝれる
○　千葉縣　ちゑ子
いぶせしと笑ふ人こそ心なけれ賤が庭にも櫻咲くなり
○　豊後　加納豊子
春の雨灯のかげに微笑みてもだして居ます美しき人
○　山城　廣江まさえ
妹と梅が林をさまよへば赤のリボンに白の花散る
○　岐阜　日野歌子
足音に白鷺たちてをち方にすがた消えけり夕やけの空
○　千葉　秋山花響子
君故に胸の白壁朽ちにけり夕陽は射れど照り榮えもせぬ
○　上總　かをる子
秀才てふ君が御胸の花戀し其の花一枝給はずや君
○　中津町　やま川
朧月よゆらぐ花の影にして何をやなげく黒髮の人
○　徳島　永田丁子
かつてわれ世に知らざりしあるものに泣くとし思へさひはひ人よ
○　徳島　藤井茂枝
舞姫がかざす扇の影なかれ霞となりて花笑ふ日や
○　秋田　佐々木艶子
きえもせで雪はみ山に殘れどもはる風かなる梅のしたかげ
○　長野　高橋雪子
春風に匂ふや門の梅の花訪來なく時もあるらん
○　静岡　きみ子
鶯の聲を知るべにたづぬれば谷やこゝにと梅の花咲く
○　大分　工藤たまき

淡紅色の牡丹がつゝむ春の神花漸ひらかば光明こぼれむ
○　山形　秋葉芳子
をちこちに鼓の音ゆるう春めきて緋桃咲くらむ乳母住む里は
○　伊賀　吉村美津子
何となく不安のおもひおよすける君の姿をまぼろしに見て
○　羽前　白梅女
朝晴れや小猫眠むれる南縁に紅梅匂ふ三月の日よ
○　播磨　桃の花
月影のくもると見へしはり窓に音なくかゝる春の夜の雨
○　千葉　菘岡花子
殘し置きて出て來し宿の妻しあれば花をすてゝも雁歸るらむ
○　上總　はな子
山村の茅屋の上の大木の銀杏をのぼる朝けぶり哉
○　愛知　紫雲女
きのふまでたえ〲見えし故郷の山にも今日はわかれぬるかな
○　福島　遠宮いち子
雪とけし淺間の小路草萌えてふしとゝのはぬうぐひすの鳴く
○　島知子
友はみな學びの業にいそしむを我たゞひとり我田たがへす
○　千葉　青木任子
行く春や茶摘みの唄と舟歌と日毎に聞ゆ川ぞひの村
○　信濃　山本鶴
曇らず我は磨かん二ツなき心の玉の光り見るまで
○　埼玉　渡邊忠子
曙の野に咲き出てし紅花のそれにも似たり妹が頰の色
○　鳥取　學子
咲きにほふ垣根つゞきのうの花は音なき涙とあやまたれつゝ
○　千葉　青木しづ子
梅ちるや思出多き旅にして母の文よむ春雨の宵
○　備後　井上年子
うら淋き北山里の春たけて殘りし雪のうすくなるかな

○ 千葉　牧野とよ子
打なびく稲の穗なみの水上を思へば汗の粟なりける
○ 埼玉　近藤登久子
思ひ出の松はみどりに繁れども植ゑけん人の世にあらずして
○ 長門　原田春子
ひきわたす霞の奥の小松原けさ鶯のはつねもらしぬ
○ 岐阜　かさゝぎ子
落つる日は臙脂の血とも小柳とも眉とも小なりて春の日暮れぬ
○ 伊賀　山村野菊子
よき衣のよき香殘して一列の車は過ぎぬ春雨の街
○ 阿波　武市壽美子
あなかしこ白絹かろき舞姫の垂れのかざしの花よ紫
○ 大阪　山田房江
奥山の深谷の下の菊の水汲めどもつきぬ友ぞうれしき
○ 尾張　林美樹子
鶯の聲音のどけき薰風に梅の香りや天に滿ちけり
○ やす子
池の面にさえ凍りたる月かげをふすまに魚はゆめ結ぶらん
○ 上總　ひさ子
熱を病む母はねむりぬ月影に春の殘りの雪もとめゆく
○ 栃木縣　豐子
うぶすなの神のみ社あれはてゝ一こゑたかく百舌鳥なき渡る
○ 熊本　安藤政子
花染のとばりの下に若き日の貝寶り思ふちりちる櫻
○ 宮城　菊池葉子
春の海菖蒲に似たる紫の夕雲ながめ君と語りぬ
○ 伊賀　關本きし
あたゝかき風の吹く日は琅玕の淵に鱗魚の腹かへすなり
○ 長野　瀧澤けい子
あかつきのうすもやわけて飛ぶ鳥のまづ長閑なる春の野邊かな
○ 青森　成田よう子

[illegible]れて沖の鴎乃護むとも磯の妻戀ふ濱のまに〳〵
○ 長野　宮島清子
うらぶれし身をもりかげの春の宵しづくおちきぬ山鳩なきぬ
○ 三重　川原操子
ぬぎすてし衣桁のきぬにはなの香のさまよふごとく春の灯ゆらぐ
○ 三重　長井蓮月子
荒磯や貝拾ひ居たる人去りて暮るゝ夕を潮の香高き
○ 大坂　山内渓子
世をすてしよき人住みぬ山庵に春雨細く椿花ちる
○ 小川蔡奥子
朧月夜わがうつゝなき思ひのせて流れを降る利根の河舟
○ 本所　秋山欣子
影凍る月を木の間にかけおきて嵐ふきまく八甲田のやま
○ 新潟　稲葉緩子
幾ちたび髮はけづれどみだれたる心のすぢをとくよしのなき
○ 和歌山　加藤重子
夕まぐれ里なつかしむ新發意が白衣のそでにちるさくらかな
○ 北海道　髙橋きみ子
ほのぼのとあけゆく春の朝げしきそのまゝゑにもかゝまほしきや
○ 越後　山本白萩
心いま大渦卷のなかにある木の葉の如し君をみしより
○ 信濃　平野操子
水面におつる櫻の二つ三つむかし榮華の名殘とゞめて
○ 青森　木村てつ子
胡座しきて桃さかりなる木の許に土の人形に胡粉ぬり居る
○ 山梨　笹本いく江
きら〳〵と朝日輝く山の端の宮居に櫻芳しきかな
○ 紀伊　山本治子
醉ひざめに庭の木の間をさまよへば衣にかゝる梅の一ひら
○ 弘前　中村花子
心なく櫻みだれて夕月の霞めるもとに君まちて居ぬ

○きさらぎや天の宮居に聲ありて花よひらけと春雨のふる　飛騨　荒垣千代子

○さらばとてたもと別ちし村端れ南に急ぐ雁の聲きく　長門　林梅子

○色も香もふかみ草なる下陰に靜かにねむる蝶追ひし猫　栃木　磯みい子

○思ひ佗び獨りぬる夜を何となく人來るけはひ桃の花散る　東京　風間晴子

○亡き妹は落葉を踏みてしめやかに泣きに來しかや秋の夜の雨　磐城　遠藤いさを

○何となく君思ふ日は胸みだれ飾るゝかごと罪悔ゐし我　伊勢　田中耕子

○板垣の裏にひとりふきの花春知りがほに芽ぐみ初めけり　長野　瀧澤月子

○歌聲をたどりつ行けば若草のもゆる澤べに少女つどへり　本郷　朝井千とせ

○冴え渡る月かげ更けて野狐の聲ものすごし山下の庵　神戸　東川梅子

○水鳥の浮寢の床やこほるらん蘆間にさむき聲たえずして　茨城　矢口てい子

○船に醉ひて人の手をかり春の磯さくら貝てる中を歩みぬ　三田尻　淺田治子

○君が代を千代とさかゆる老松のみどりの陰に神ぞましします　鳥取　盤[illegible]雛子

○とり〲に花は咲けども敷島の櫻は武士のためしなりけり　三河　稲垣みさを

○君は今われに情なし目をとぢて前歡今悲たゞ恨むかな　熊本　桑原露子

○犠牲壇にたちし羔羊なりてとばりはさけて罪人ぞ生く　鎌倉　岡本文子

○春雨や君とありにし日を想ひかたみの袖にうつり香を嗅ぐ　横濱　中村静枝

○逢はぬ日の戀しうなりぬみけしきを見てはものいふわが昨日今日　三河　房枝

○束の間よ君に遇ふ爲め生れ來て世にさすらへる我とも思ひし　麹町　横田愛子

○あゝ遠き過去と未來の分れなき日に歸こゝろ君をたゝへむ　東京　長谷川静枝

○我胸はいたくおどりぬわけもなく君がやさしき言の葉をきゝ　下谷　細谷野子

○春の潮わかばと告げし人おもひ朧月夜の渚に立ちぬ　群馬縣　森下花子

○夢に入り神の御手にや遊ぶらん乳房枕に笑める稚子　滋賀縣　鈴江文子

○古寺のまひる靜かにちら〲と雪かと見れば卯の花のちる　大阪　花桂女

○葉櫻に夕雨はそゝぎ向島蛇の目の傘のみやび姿よ　本郷　花子

○流れよるむかつ小島のはな白く潮の香たかし春のあけぼの　栃木縣　芳子女史

○白梅や庇かたむく小家にして朝な夕なの茶の煙り立つ　大阪　生田みのり子

○幾年もかからまほしよわが望み村のをさなご敎へをしへて　上總　大崎ゑい子

○春日影とけてながれてかすみけむ緋桃咲くてふ沖の島山　品川　町田篤子

○大利根の霧はうすれて目路遙の遠野に浮びぬ根なし筑波峯　本郷　静子

○美しき心の籠にぞ餌飼ひしぬ君がはなちし小さき鳥を　龜井戸　鵜澤喜舞

○艀のせて菜の花のせて春の小川京を南へゆるう流れぬ　四谷　鳴澤ゆり子

○ 龜井戸 うざわ きん子
春を笑く霞の母の懐に眠るが如き淡路島山

○ 日本橋 吉田 さく
鳥なきて月影うすくなりゆけば春はきにけり花の都に

○ 伊豫 駿 子
桃色の衣襞ひつ波の上に浮びてありぬ伊豫の小富士は

○ 福井縣 片山 千里
ものみなの懐かし心地蛙啼く春の雨夜の燈のゆらぎ

○ 佐賀 植松 君代
澄み渡る池の水面に風たちてくだくる月に蛙鳴くなり

○ 武藏 白倉 千代子
牛ひきて行く小童のかげきえてかすみぞ渡る星の夕ぐれ

○ 靜岡 根岸 眞江子
霏々と春雨降れる夕闇暮窓に慿れて物思ふ子よ

○ 京都 村上 きよ子
賤の女が小聲に歌をうたひつゝ幾群すぎぬ秋の山路を

○ 岡山 桐本 悦子
をさな子がまゝごとしたる數阪の鐘は朽て梅雨のふる

○ 遠江 すみれ女史
雨晴れて霰吹く風のしづかなり沖の白帆は卷繪にもにて

○ 青森縣 荒井 掬子
牧童の笛の音遠くなりゆきて野寺の桃に月かすむなり

○ 靜岡縣 秋山 さわ子
梅の下ひとり我たつ影淡し梢のひまにたそがれの月

○ 遠江 糸 子 女
たとふれば手毬かゞらむあや糸のゆきつもどりつ迷ふわれ哉

（賞外） 乙[illegible]もん子



○ 長崎 村田 ふみ子
春の宵白百合多き野を過ぐる心地に磯の橋渡りけれ

○ 下野 手塚 妙子
那須山にうすもやめぐる夕ばえの空にそびえて煙ぞ上る

○ 大分縣 野田 なるみ
鶯も來鳴かぬ梅の大木の花に靜かに降る雨小さき

○ 三河 長坂 よし子
野邊の色漸く青むこのごろは空も長閑に雲雀なくなり

○ 近江 佐野 よし子
かぐはしき花のかをりの床しさや垣根をこえて匂ふ白梅

○ 茨城 今泉 磯千鳥
さゝ川に咲きつ匂へる花愛でつわれは暫しをたゞずみて居ぬ

○ 芝 伊藤 政子
いろづける庭のもみぢにこの頃は三山の秋をしのばるゝかな

○ 美濃 落合 かき子
月こぼる露のほらより生れしや心つめたき性もてる君

○ 近江 太田 靜花
寒の息氣よ冷たき風は隙間より雨暗き夕燈火ゆらぐ

○ 美濃 傍島 みゆき
同じもの同じ性生む世ながらに師は君のみ二人しまさぬ

○ 下野 春野 すみれ子
賤がたく夕餉の烟たなびきて水面にゆるう鐘の聲きく

○ 筑前 多久 しま子
迷ひたる心も今は悟りたる心と思ひ微笑まれけり

○ 甲斐 矢[illegible]子
少女子が朝とく起て米かしぐ水よりしらむ春の曙

○　愛知縣　竹下芋代

紅もゝにうす白粉をあふひたる色して明けぬあけぼのゝ空
○　ちたの里　しらはぎ子

梅の香かそれかあらぬか月影のおぼろにかすむ春のこの頃
○　臺灣　稗貫みつ子

愛し兒のイエスのみ手に眠る如かすみにくるゝ島山の影
○　伊勢　香雪子

朝明けやうす霧まよふ野の丘の小家つゞきを初雁わたる
○　安房　安西なみ子

春の日も長くやなりしくるゝまで花にねむれる蝶もありけり
○　相模　鍋田靜子

玉川や鮎とる船の燈火は水にうつりて金輪えがく
○　岡山　中治武子

千里をば眞こそへだつれ我胸のおもひは君にかよへるものを
○　千葉縣　深山りゅう子

おぼろ夜の月にゆきかふ難波女の袂ゆかしく梅かをるなり
○　常陸　妹子

千早振る加茂の宮居の姫子松神の心やこめて吹くらん
○　佐賀縣　五郎川みち

おとめ子が菫つむ野にかげ見えてかすむ夕日になくひばりかな
○　土佐　森田林

たそがれも急がぬ河や嬉し消き流れに梅花をのせて
○　神戸　加藤富美子

巫女あまた榊の楉して春日野の鹿に餌あたふ春の日永よ
○　大阪　根津峯子

散るは花舞ふはらうたき少女にて霞洞淡うゆく春の夜や
○　茨城縣　廣瀨みさを子

新らしき年をむかへて咲く梅は君が千歳を香に匂はせつ
○　山形縣　茲滑女史

ながゝらぬ桜の雫の落つる朝かげろふ草に便る命の
○　福岡縣　夕霞

少女等が摘みし菫をしたひ行く黄色の蝶の羽勞れけん
○　神戸　櫻井時子

春の宵歡樂謠ふ二の姫の朱緖の鼓花散らしける
○　相模　高橋莊一

梓弓はるや朧の夕月夜深山の猿猴花いくさする
○　群馬縣　飯塚きみ子

緋桃咲く酒屋が門のつなぎ馬つながれしまゝに日はたそがるゝ
○　靜岡縣　齋藤千花

いづかたも若葉しげりて夕月の出ている森の影わかぬまで
○　山口縣　氷室貞子

弦月は水草に伏す鰐ざめの鱗の銀をふるひしさま哉
○　長崎　平田すみれ

春の川若き男が馬洗ふ姿ゆらめく朧月夜や
○　紀伊　九鬼道子

跡もなくにごれる水を葬りし氷の上に月はいてけり
○　奈良縣　下澄白萩

すみれつむ少女ゝ見えず蝶飛ばず春雨送る雲のひとむら
○　遠江　小林とし子

あめ晴れて細き烟のいくすぢは霞にきえて春の風吹く
○　埼玉　秋子

果てもなく咲きつゝきたる八千草の數も多かる武藏野の原
○　千葉縣　太田光子

鶯や梅に夕日の影落ちていとゞのどけき朧月哉
○　麹町　千足桂美

少女子の若菜つみにし此の野邊も路わかぬまてしげる夏草
○　讃岐　笑且

榮えありし昔のまゝのけしきかなしら梅匂ふおぼろ夜の月
○　岐阜縣　山田はぎ子

たゝなづく五百重八重山明けぬれば八千の溪々鶯のなく
○　鹿兒島縣　松井はな

山賤が筒井の水をくむ袖に散りてかゝれり梅の初花

○　岐阜縣　後藤英子

誂ひ綠風に吹かせて姉妹雛の衣縫ふ花蔭の家

○　肥前　佐志あや

北極の光りみぬ闊海洞に渦かるゝ小舟それわが悩え

○　德島縣　野豐子

秋ゆきて虫音もたえし柴垣の枯し小菊に霜の眞白き

○　伊豫　曉子

うす絹につゝむ夜光の玉ぞともみ空に輝く笑める星かな

○　榮愛子

うたゝねの夢にふとみし其の日よりうつむきがちの白百合の花

○　京都　羽倉信子

春風に稲荷の山の雪とけて鶯うたふ深草の里

○　相模　鍋田美代子

力なき鐘のひゞきや宮守の翁は病みて春ゆかんとす

○　磐城　芳賀久子

春の夜のまがきに匂ふ梅の花月は枝にもかゝらざりけり

○　信濃　平栗千里

大孔雀舞ひ立つさまや楠の芽に春の日させば風光るかな

○　三河　藤田小百合

相見ればほゝ笑む君よ世にさへ別れしよべの夢は知らずや

○　岐阜縣　後藤英子

開くべき花の小草となへ果てぬ日毎水やる君ありぬれど

○　熊本　澄子

幼子のうたにこぼれぬ桃の花鶏の音に晝靜かなり

○　名古屋　加藤仲子

霜をれをしらぬ柳ぞくらべなむなほきを人の寶とはして

○　尾張　竹谷秋子

戀人の名よべと聲なき淋し夜の冷たき月の空を行くのみ

○　遠江　倉田むつ子

彩雲や殘霞うすき遠山や色紙に似たる春の曙

○　伊勢　福島初子

天際にかゝるよと見る星の子は流れて入りぬ伊勢の大海

○　千葉縣　深山信子

うつくしき春の彩濃き快樂をばとはに語らへ蝶よ牡丹よ

○　紀伊　西よれ子

紅き花白き霞につゝまれて日はさしのぼる山里の春

○　丹後　小谷清子

磯にいて明けゆく空をながむればまだ月やどす海の上の露

○　紀伊　田中文子

其夕春まだ寒き丸窓に白梅多き古里思ふ

○　千葉縣　深山りゅう子

うすぎぬに光つゝめる紅玉の花とうまれてさむし寒牡丹

○　千葉縣　渡邊わか子

野陰の畦が伏屋のくづれ垣おもひかけずも梅が香ぞする

○　山形縣　大類利子

我庭の香あふるゝ梅ヶ枝になくか一聲籠の鶯

○　播磨　薄紫

敷島のいづこの里をおしなべてむかしながらに香りあふるゝ

○　福島　大原ふよ子

昨夕ながき眠につきてまたさめし君が夢みて覺むる朝かな

○　北上河畔　さだを

凩に紅葉散り敷く夕暮れや梢に淡く弦月かゝる

○　群馬縣　飯塚美喜子

枝にして啼けば鳥籠の鳥もなきて眞晝のどけき山の家かな

○　愛知縣　永田舞鶴子

雨あがり泥にまみれし花びらの蝶とし舞はん春の閑けき

○　千葉縣　朝倉さつ子

三日月や杉の樹梢を掠う過きて湖の彼方へ啼く杜鵑

○　越後　廣野敏子

徒然に宿を立ち出て眺むれば若菜摘むべく野はなりにけり

○　神戸　船戸ゆき子

ともし火は鼓うつ子を華やかに照して更けぬ下京の春

○ 福島縣 原しづ子
夢にも忘れし戀を人のいひ胸にひゞきて愧ぢて思ひぬ
○ 越後 根津美都子
散る花に袂かざしてやゝしばし遠野に暮るゝ春の空みる
○ 廣島縣 笑岡秋子
君を送る夕殘んの月影に散りてこぼるゝ山茶花のはな
○ 相模 星崎治子
春がすみ花の都にたなびきて見れども見えぬきさらぎの山
○ 攝津 千足桂二
常春の土暖き國やあらむ我が戀草の咲くに得堪へぬ
○ 滋賀縣 奥村樂子
うめの花いろは雪にもかはられどめしひもしるは香にぞありける
○ 神田 藤掛鹿登里
花ちりて若僧の一人ほゝゑみぬ春の朧の月の下にて
○ 千葉縣 三浦あい子
相生の松の緑のそれのごと千代に八千代に榮へ交へむ
○ 長生郡 關くに子
夜嵐にも梅が香かをるまとなれば吹き入るゆきもゆかしかりけり
○ 名古屋 鵜飼欽子
麗人の彈く玉琴に花散りて繪に似たるかな月淡き夕
○ 下野 藤原けい子
急ぎ行く枯れ野の夜路提灯に傘にたばしる玉霰かな
○ 筑紫の果 知登子
かた破れの月影なゝめ襖におちてこゑもしどろに千鳥なくなり
○ 千葉縣 竹内路が女
山深く蕨ひつゝゆけば百合の花かゝるところに君は居ますや
○ 京都 富原紫紅子
また一つ垣根の椿こぼれけり古里しのぶ夕ぐれの窓
○ 名古屋 清水きよし
神の庭老木のさくら花さきて神樂の響のどかに聞ゆ
○ 越後 阿部秀子

吹きあれし嵐山松の音も絶えて寒月高く千鳥なくなり
○ 靜岡縣 鹽澤きく子
薄く濃く山の端そむる紅のみれはさかりの白梅の花
○ 千葉縣 今井しげ子
戀を知らず君をいとひし幼子は女神のみ手にはぐくまれにし
○ 奈良縣 山中哲子
嫁ぎ行く姉を送りて立ち出でぬ梅さく里の春のあけぼの
○ 大阪 津田春子
幕赤し花の影さす盃や宴のむしろに宮人多き
○ 京都 上原芳子
朝霧のほのめく方を來て見れば靜々開く櫻花かな
○ 下總 宮本やよ
ゆく春を淋しさとかぬ朝の輿大川ばたは紅流す雨
○ 新潟縣 川崎てい子
桃の花つぼみのうちに小さき君ゐますと思ふ息ふきてみむ
○ 岩代 大河原春子
吹く東風にゆらぐみ旗の影うかべ屠蘇のむさまやはらぎの花
○ 信濃 鈴木靜江
世の中の氣高さを見ぬ春の山の松の根方の菫の花
○ 八王子 富本登美子
佐保姫の舞のみ扇ひらかれて笑まひぬる時春は來にけり
○ 山口縣 栗喜子
春の野やひねもす花に憧憬れて夢路も迷ふ花のみちかな
○ 千葉縣 山本さかと女
佐保ひめはかすみのうちにこもるらし調べゆかしき朝の里川
○ 埼玉縣 萩原靜子
むらさきの山眺めては君の住む里を思ひぬ夕ぐれの雲
○ 廣島 國信操子
我が家は大江の南山越えて小鳥生るゝ花多き里
○ 石川縣 川端なみ子
鶯や紅梅殿の朝日影聲はりあげてなくぞ愛らし

○ 長野縣 瀧澤みずえ
やは風は歌の小島が胸それて小草に春のおもかげと吹く

○ 津市 越村文枝
笑ひ聲きぬたの音に打ちまぜて月おもしろき里もありけり

○ 越後 細野藤子
別れては詩にあくがれむ夕榮の風たゞ寒き葉櫻の宿

○ 雋心坊
わが戀ふる岩にあだ浪寄せ返し千々の思ひも泡と散りつゝ

（賞外）

○ 石見 三明ちどり
手向けする香げの煙冷たさの墓を廻りぬ亡き君思ふ

○ 大阪 中島貴美
漣に月はくだけて磯の香や眞砂に白き花吹雪かな

○ 遠江 平野すみれ
谷かすむ木々の梢の遠近に春風立ちて鶯の啼く

○ 上毛 納尾子
まらうどを送りて門にたゞづめばぬるき夕風くろかみなぶる

○ 備後 三上荷曉
隷は落ち柱は朽ちて行宮の女宮やつれぬ五月雨の頃

○ 伊勢 川原國枝子
芳しき花の根わけに二人して命を賭けぬ黄菊白菊

○ 水戸 重子
山ざとは殘る紅葉も散りはてゝ雪の花こそ今盛りなり

○ 下野 榮谷德子
埋川を君とそゞろに舟やれば花藻みだれぬ宵薄月夜

○ 水戸 小桃子
春の月うすくれなゐの貝ぬけてほのめく如き磯のさまかな



きよし

○ 鹿兒島 川﨑しま子
鈍色の瓶の紅梅玉學におちてさましぬ皇后のみ夢

○ 磐城 鈴木靜子
紅の彩雲わきて美しきさくら島國花咲きみてる

○ 下關 梅田糸子
渡舟まつ人岸に傘と見えて柳もつるゝ春雨の窓

○ 山口 田口たつ子
田のあぜにれぜり摘むてふ少女子が袖ふきかへす春のあさ風

○ 滋賀 梅子
風たちて白波さはぐまさご路をひとりたどれば雁なき渡る

○ 千葉 石渡ゆき子
見渡せば四方の山々春めきて木々の梢もみどり染めけり

○ 埼玉 室田まさ子
君が彈ず十三弦の音にゆれて寂なる菊のそと亂れ散る

○ 長野 犀波子
うき草の香をしたひてか花にきて蛙なくなり雨もよひどき

○ 下毛 桔梗女
彩霞うすうこめたるすみれ野につゝまれて行く年若き繪師

○ 土佐 深瀨ます子
櫻貝眞珠とならむ後までも我が戀さむることなかれかし

○ 京都 山本修子
いと悲しされどわらひてまぎらしぬわれを思ひて君泣く夜々な

○ 京都 武田とし子
うす暗き机に凭りて物思ふ逝きにし母の面影 ひて

○　神戸　井口留子
何となく誰あるらし、嫁く人の袖に亂るゝ紅梅の花

○　長門　田中はな子
吐息してまた吐息して絶望とさけすみの眼に君われを見る

○　下野　野中とみ子
千里の白帆に赤き夕日あび流れを下る木曾の川船

○　佐渡　本間みづほ
栗つけし蹄の跡をわづかにも埋む深山の初春の雪

○　岩手縣　熊谷文子
綻ろびし梅の小枝に鶯の初音もらせる朝ぼらけ哉

○　和歌山　木下操子
春の日に鳳蝶の背にのりて花野めぐりし夢を見しかな

○　千葉縣　朝倉さん子
春の船帆走るさまに連山を連翹色の雲行く日かな

○　福岡縣　建部白露子
しと〱とおやみもやらぬ五月雨に濡し濡衣はいつか干すべき

○　石見　松浦信子
やよ來なけ春つけ鳥や我宿に軒端の梅は開き初たり

○　佐渡　橋田山子
笠の端を縮むる薫の餅實に淡う霰降る竹垣の外

○　周防　谷満緒子
花を見て母と語りし古窓にいま又われは花と語りて

○　茨城縣　木村啓子
田の畦に殘りて咲ける蓮花草暮れ行く春はいと淋しきに

○　茨城縣　木村嘉與子
咲き誇る櫻堤に日は落ちて川沿ひ小家うすれて暮れぬ

○　大阪市　辻　康子
秋立ちぬ疾く歸れとの母の文そも吾が病いつかいゆべき

○　肥後　山本爲子
小院の櫻は散りて姫君の後れ毛ゆらぐ朝あけの窓

○　北海道　秋雲庄
月すみて心もすみて秋の夜は虫の音さへも夢ときゝつゝ

○　北海道　小田はなの
春のあめ小窓の玻璃に息かけてものをばかきてゑむふたりかな

○　石狩　小田たみ子
白壁に薔薇かゝれる君がやどゆふひにほひてはれつるべなる

○　大坂　今西こゆき
山門の小高き処に廻廊の欄のみ見えて春雨のふる

○　信濃　秀子
うき草のうき根ふるべもにごり江に宿めるこゝろのゆめもつべしや

○　常陸　中山道江
懐しき君が寫し給見るごとに故郷の空のしのばるゝ哉

○　八王子　芳村秋水女
鼓うつ音もきこえてもるゝ灯に雨美くしき櫻のおばしま

○　下野　草方華子
愛馬失せ淋しき秋の夕暮を廐のあたりこほろぎのなく

○　神奈川　鈴木りの子
櫻花野も瀬の里に匂ふかなゆめにも似たる朧ろ夜の月

○　伊勢　佐々木らく子
春日路や行きずれ人をなつかしみそと呼びて見ぬそゞろ心に

○　上總　桂美女
復活はかたし再生はた知らず神は病をわれに與へき

○　横濱　大島花子
吹く風にゆられ〱て旅人の笠にもかゝる青柳の糸

○　上毛　阿部せい子
わが心たとはゞ春の花の如喜びに居ぬ君見てしより

○　大隅　富永みふれ
うらゝかな春の景色にいざなはれ霞の野邊に今日もくらしつ

○　佐渡　本間貴代子
笹の端を枝に結びて藤下る淵に鮎釣る宵月夜哉

○　靜岡縣　吉川敏子
わが窓にふと入り見ればかなるなり誰がいけにけんしら梅のはな

○　沼津　笑村

草かりの童二人はゆきすぎぬ朝つゆしげき川添ひのみち
○　信濃　翠波女

京の雨二條の橋に友醉の袂も法衣も傘さして來ぬ
○　神戸　竹叟文子

信天翁何の夢見る無人島海に音なし春の夜の月
○　下總　三森ゆき

月明り卯の花垣は白うして君にまたるゝ宵とはなりぬ
○　芝　矢城すゑ子

雨細うくれ行く春を軒かげに老いをわび居る鶯の聲
○　長野縣　千村ちゑ子

眼とづれば幼き頃のおもかげの胸にうかびぬなつかしき日よ
○　大阪　寺部君子

亡き人のめでにし梅は末がれてくち木の枝にすみれ花咲く
○　長野縣　今牧伊智子

青じろき尾長くひきて星ひとつ君逝く宵にたつみにとびし
○　岩代　笠岡つれ子

露おびて月にはぢらふ夜姿になる手たゆたふ白萩の花
○　伊豫　美油路子

人の道若き血潮のもえなんを冷やかにしぬあゝ我れ死なん
○　靜岡　辻村かと

流れ行く水にも春の色見へてうつるもうれし岸の若草
○　芝　ゆみゑ

大堰川十里の里に散る花をひとつに乘せて下る舟かな
○　奈良縣　北村芳江

たづねきし君はゐまさず早蕨の月に唄へる草笛かすか
○　佐賀縣　島津留

たれ人も春やまつらん櫻花眺めせし暇に散りはつるとは
○　尾張　鈴木詠子

森影は門田の面に広ごりて霞に沈む日輪の色
○　越後　五十嵐富美

鉢の器に戯るゝ雛も愛らしや風暖き紅梅の庭
○　石川縣　竹内登起子

我れいとど惱み悶えき叫ぶ聲の來よとぞ顯す戀を實知て行く
○　名古屋　古橋京子

かた糸のたえぬ許りの契かな逢夜まれなる心おもひに
○　伊豫　藤井白百合

亡き父母を偲びて袖を濡しけり友なく踊る夜半の庭がれ
○　信濃　新木みれ子

春風に袂ふかせて若菜つむ少女の髮に花散りかゝる
○　山梨縣　井上滿壽治

檜扇の紅なつかしむ春の縁遊ひしましろき君を思ほゆ
○　大和　我澤素枝

彼の君と別れてよりはまゝならぬ吾れは浮世をうしとおもひぬ
○　大阪　百田ふみ子

ほゝゑみて山ともなせる歌反古をさと流しみぬ我が春の水
○　茨城縣　小泉濱子

君を思ひ美き日をしのび我胸は風にゆらるゝ菩提樹の葉よ
○　横濱　孤松

君とほくおもむきませる其日より花ちる頃をかなしと思ひぬ
○　土佐　大和田靜子

朝霞あらたに迷ちし川添の街みえかくれ木の香りする
○　愛知　岡本舞子

咲く梅の匂ひや空に滿ちにけん朧に見ゆる春の夜の月
○　神戸　大濱秋子

思ひ出を語り出しては涙する姉と住むなり春の夜の宿
○　大阪　坂靜子

とび魚のそれよりひくく海鳥の夕月あてに見へずになりゆく
○　大阪　森田友子

並み立てる根上り松に風見へて潮の香迫る春の夕波
○　芝　岡崎靜子

春の風たわゝに吹きて花の莢を皆くちつけぬ培ひつゝも

○　大阪　諏訪一子
古沼の底に琴ありよき音して昔しの夢を語るぞあはれ
○　神戸　松永苑枝
み髪梳く化粧の窓に白梅の夢の行方と音なう散りぬ
○　信濃　節子
栞のほそき緒にぬく銀鈴のたまゆらとしも春雨きゝぬ
○　横濱　小野笑都子
熱涙せし日の大神は紅の衣つけて玉座を出てぬまばゆき
○　上総　小笠女
我戀はむかしの大井川のやう身をつくせども渡る由なし
○　宇都宮　平賀靜江
ゆく雲のたえま〳〵の月光にうみにうつれる白塔のかげ
○　静岡縣　大木みよ
山里は氷も雪もとけ初めて霞のなかを通ふ梅が香
○　京都　大井廣子
うらぶれの思ひのみだれ夏の夜を月淡うして啼く時鳥
○　奈良縣　[illegible]西田鶴子
早鮎釣る里の童の竿竹にをり〳〵かゝる岸の青柳
○　攝津　金振清子
今日もまたすみれ咲く野に暮しけり都の友の道しるべして
○　下総　越川つれ子
用もなく桃咲く庭をさまよへる女ありけり春の夜の月
○　豊後　江藤ゆき
待つ人の來ぬと思ひつ戸を押せば更け行く澤に水鷄啼くなる
○　茨城縣　佐藤靜子
桃の花ちりて流るゝ河水のはや〳〵春はくれんとすなり
○　駿河　松永しげ子
若草に駒乗り捨てゝ若武者の遠山仰ぐ野の霞かな
○　熊本　加納音薇子
牛小屋の藁の香りのほの温し青麥萌ゆる春風の村
○　熊本縣　久野いと子

青桐の落葉をかけばひともとのすみれ咲きたり霜白きあさ
○　大阪　鹿島あや子
つゝゐづゝ井筒にかけし君は逝きてゐだし人にとわれは嫁ぎぬ
○　大分縣　操子
紅梅は何夢むらん去年の冬とぢたるまなこ今日も開かで
○　熊本縣　田山つや子
月われをのぞくがことく照したりあはれ帯びゆく[illegible]かげの道
○　筑前　たくしま靜枝
君去りぬ悔ゆる日ありと氣強くも言ひたる我の心なくまて
○　大阪　油井富士子
操みば正しく守る松穀心も清くかゝる初雪
○　北海道　櫻井不二子
師に病むわが背子いまだ癒へざるに今年の春も暮るゝぞかなし
○　岐阜　篠田とみ子
花と蝶もつれほぐるゝそよ風に伽羅の香もするよき聲もする
○　瀧野川　菊堀田鶴子
遠山のかすみのひまに消えゆくは春の名殘の入相のかね
○　上毛　大沼その子
あわ雪の傘に積らぬよき朝を小笹の鳴りに耳かたむけぬ
○　常陸　源女
春の山笑めるが如き姿して朝なよ風に語り合ふかな
○　甲斐　野村もりよ
なきおばが手植柳の芽は萌えぬわすれがたみの朧夜月に
○　名古屋　清水登代子
いかなればかくも冷えぬる胸ぞとも知らで老いゆく幸なき身かな
○　大阪　登喜子
見るたびに恥らひ宿る鏡かな心の曇り夏になけれど
○　伊勢　山路くに子
君が影消えなんまてと見送れば遠方山に朝の霧ふる
○　備後　小林佳子
更けし夜を秋の窓戸に蟲鳴きて胸に戀の歌思はする



「地」

鹿の子百合

三重縣　北村みつ子

いまはむかし、ずつと遠い昔の事、此の天地は四ッの色に別れて居りました。第一は紅い色、第二は青い色、第三黄色、第四は白い色、とかう、四ッの色にはそれぞれ一人の姫様が、その色〳〵の衣をつけて、世の中を治めて居りました。

紅い國には紅い花が咲いて、姫様の名は春姫と申しました。青い國には青い草やら若葉やらが一ぱい、姫様の名は夏姫と申しました。黄色の國には黄色い草やら木の葉やら、總てが黄ばむだ國て、姫様の名は秋姫と申しました。白い國には白い雪、姫様の名は冬姫と申しました。

紅い國の春姫様と、青い國の夏姫様とのお噺をいたします、お二人は隣り同志の仲のいゝ間がらてございます。けれども、此の四ッの國の姫様方は一人ぎりしか起きて居りません。春姫様がお寢つて居りますと夏姫様、夏姫様がお寢つて居りますと秋姫様、と云ふ調子に、一人ぎりしか起きて居りません、きつと他の姫様三人はお寢つて居ります。

其のおやすみになる床は紫の雲の宮て、おやすみになる時が來ますと、遠い空から紫の雲、ふうわり地にさがつて、姫様を遠い宮へ、おつれ申すのがきまりてございました。

今は春姫様の起きて居る時期てございます。地には紅い花が一ぱい、美くしう咲き亂れて、さくらの、桃の、とり〳〵色くらべの艶やかさ、其の美くしい花の中て、春姫様はやさしい歌を歌つて居ります。

お伽噺

ある日の事。
春姫樣は薔薇の根方で、ほがらかな春の曲を歌つて居りました處へ、何うした事やらさくらの花が、一ひら、ひら／＼と春姫樣の肩へ散りかゝると、何處となく歌が聞えてきます。

　おやすみなさいよ春姫樣。
　夏姫樣が待つて居る。

かう云ふ唄をくり返して歌ふのでした。春姫さまは不思議に思つて、

『さくら、さくら。』とお呼びになつて『もう夏姫樣が來るの？』

とかう、お聞になりました。

すると、

　夏姫樣の目がさめる。
　おやすみなさいよ春姫さん。



　さくらもお先へ參ります。

かう歌つたかと思ふと、さくらの影は見へなくなりました。此れを初めとして、今迄一ぱい咲き亂れて居た花が、不思議や見る間にちら／＼と散るのでした。春姫樣の身は花でつゝまれて終ひました。

すると、あら、あら、遠い空から、ふうわりと紫の雲が降りて、其れが段々地に近づいてまゐりますと、靑い衣をつけた夏姫樣は、地にお降りなさいました。此の時はもう、春姫樣の足元の薔薇も、さくらの花も、總て紅い花が散つて終つて、見る／＼内に木々には靑い若葉、足元には靑い草、天地はすつきり靑い國になつて終ひました。

一年ぶりて、なつかしい春姫

様に進ふのてすから、夏姫様はひたとすがりつきました。
すると、紫の雲は春姫様をつゝんて、遠い空へ昇つてゆきます。夏姫様は悲しくなつて、春姫様の紅い衣の、其の袖におすがりなさいました。
紅い袖が、ふつッりと切れます。さうして春姫様を乗せた雲、紫の雲はずん／＼昇つて終ひました。
夏姫様の手には、紅い袖が殘りました。
せめての形見となつた袖、泣きながら夏姫様は青い草をかき別けて、そつと土に埋めますと、見る／＼美くしい眞つ赤な花が咲きました。
みなさん、其の花は一體何てせう。
初夏の青い天地に、紅一點の花は鹿の子百合、此れが春姫様の形見なのてございます。めでたし／＼。

此想像は詩歌の領分から來て居る全體草花などには皆一つ／＼面白い話があつて宜いので、日本には花物語は多少あるやうだが、人事趣味が加はりすぎて、無邪氣なのは少い、此篇は西洋の物語めいて斬新である（評）

『人』

お伽噺

散らぬ梅

水戸　重子

雪ちやんは大きい下駄をはいて。霜解のした廣いお庭をぐちやぐちやふみながらやうやくお池の近くまで來ました、大きな鯉を眺めて居ましたが、下駄が重いのて、二三輪咲きかけた寒紅梅の根へばたりばたり土を落し始めました、雪ちやん、雪子さん、何所かて聲がします、雪ちやんはまるい目をくりくりさせて居ますと、今まで咲ていた梅が莞爾と立て居ましたので、驚いて雪ちやんは、お前寒紅梅じやないの、と聞ますと梅は、はい梅てご座いますが今貴孃お呼びになりましたらう、雪、誰も呼ばないわ、梅、そうでございますか私がよい所へお連れ申しますからさあ居らつしやいと梅の木の小さい穴をとんと一ッ突いたらずーと開いて内へ入いりますと、正面には梅の門が立てあります、雪、いつたい此所は何所なの、梅、こゝは梅の御殿と申ます、其門を入いつてずーと奥へ行くと、まあ美麗な事、周りは梅花て飾られて、天女の様な人が紅梅の衣服を着てお迎へして居ます、中にも一段と美しい姫様が、よく居らつしやいましたね、さ、こゝへ居つしやい梅形のいすへ腰をおろしました、侍女等梅の舞を、と云ふと一同揃つて好い聲て妙なる音樂につれて舞始めました、其見事さ、動く度に何とも云ひ様のな

い香が、室にみちるのです、雪ちやんは何も彼も忘れて手を打つて喜んてをりますと、姫、今度は雪ちやんお歌ひなさい、姫様がヴアイオリンを調き始めると、可愛聲て鶯の歌をうたひますと、侍女が舞ます、其賑かさ、お家の雲雀も目白の事も忘れて日が暮るのも知りませんてした、すると遠くて母様のお聲が聞えましたので、急に歸りたくなつて來ました、さて姫様は、此れを上ますからお持ちなさい、と云て其れは美麗な鉢に紅梅が咲き初めたのを呉れました、雪ちやんは嬉しくつて大切に抱へて侍女に送られてお家へ歸りました、お母様は雪ちやんが見事な花を持て居ますので、たづねますと、雪ちやんは莞爾して落なく語ました、母様は大層喜てお床の間へ飾りました、その梅は永久も永久も散らずに、雪ちやんのお座敷に香が消えません。

話も一筋、筆も一筋、これを書いた人がお伽噺のなかの人のやうな氣がする(評)

『秀逸』 二人のねがひ

長野 太田喜志女

啄木鳥と雀とは元は極く閑靜な山邊の小村に生れた靑年と少女とてございました。よく人の申します如に自然の風景に富んだ土地には多く詩人が出來る物であると矢張りこの小村はわずかな平地てありまして三方は山に包まれ北の方一方は廣い廣い野原て町まで出るには一里半もあるところてす家のかずがわづか五十軒足ず、小鳥の聲か馬の嘶きより外には別に心を亂すやうな物音は絶てございません、て此の二人の若人もいつか四邊の風物に感化されまして罪のない美しい水晶のやうな心には淸い物の影ばつかり宿して高い尊い物の面影をのみ慕つて居りました、決してけがれた心などは毛ほども持つては居りませんてした。

尤もこの二人は幼さい時から互に識り合てはなかつたのてす分けて男女の事てすから人々がそれをゆるしませんてした、て、男の方は農夫て毎日野良に出ては鋤を持つて働いて居、少女の方は此の地の名物なる黃色撫子、しかも香氣の高いので知られたそれを持ては遠い町に賣りに行くのてす、しかし花の無い時分には花莚や、はた織を、などして從順に家業の手傳をして安らかに暮して居りました。或る年の事、夏もそろ〳〵末て、名物の花も殘り少なになりましたので、少女は優しい心に、一入感じ多く、何となく物悲しい思て、

有り丈の花を集めて籠に入れ、あみ笠まぶかに、朝の涼しい間にと急ぎ町へ出ました。道は平らな畑中なので、左右からこぼれる程に名も知れぬ、小草の花が咲いて居ます。少女はこれでも何の情もない人や馬のために荒されるよりも、同じ採られるならば愛され大事にされた方が幸であらうと、通る度毎に切りとつては籠の花と共に幸福な運命を與へてやつて居りました、今日も其れを摘みながら「しつとり」とした露の中を小聲に唄ひながら行きますと、どこかなつかしい胸の底まで泌み渡るやうな聲で、唄をうたうのがかすかに聞えますハテな、誰であらう?、遂に聞た事のない譜だが、と、耳を澄しますとどうも直き向うの森の方からなので、よく見つめますと穢ない姿をした、男が鋤をかついて、畑を過ぎりながらなほ唄ひつゞけて居ります、あゝ彼の人が‖あんな優しい事を唄うのかと、後ろ姿を見ながら、何となくゆかしくてたまらず、下を向いたりまた見上げたりして一本道を五六十歩後れて感心しながら尾いていきました、少

(賞外)　清子



女はもう横道へ行かなければなりません、何だか殘り惜しい心地で暫らく立つて居ますと、先の若者はふつと振り向き、また向きなほして立つたまゝ不思議さうに見つめます、少女は矢たら恥かしく下を向いたまゝ目もくらむ思で急ぎ、そば畑の畦まで來て無意識に背ろを見ますと、彼の若者は、まだ立つてぢつと、桑の葉の上に顔ばかりが白く見えます少女は妙に胸が踊つて頬ばかり熱く、無宙で町に出て例のやうに賣り歩きましたが、只だもう家へ歸りたくて歸り度くて、何も見ずにしほれかゝつた二三把の花をさほど苦にもせず、足早にひる少し過ぎ頃家につきました、彼の畑の畦を通る時は振り向きがちに見てゆきますと、丁度櫟の木がこんもりとして居る其の蔭に、今朝の若者は鋤を投げて眠て居る樣子、少女は再び以前よりは一層はげしく軀が戰くので、思はず自分でも呆れるほどの太息を吐きました。はつと思ひましたが、とりかへしはつきません、若者は驚いた風に、ふつと身を起し、また穴のあくほど、

見つめます。少女は氣味惡く、進んでいゝやら退いていゝやら、生憎に物かげが無ので、困つて仕舞ました、すると若者はもし花屋さん、一寸、貴女は今朝この道を通りましたでせう。貴女は毎日あの花を賣りに出ますか、と問ひます、少女は火炎の前にても、立つたやうな心持で、熱苦しくまぶしく、何の事はなしに只、ハイと云ひました、實は毎日ではなかつたのです。お家はどこですと、また聞きます、妙な事を尋ねるとは思ひましたが、何だか此の人が心安い以前から知つて居る人のやうな、不思議な思が急にしましたので、皆樂しく有のまゝを話しました。其の若者の住居は玄蕃塚と云つて狐の化けると云ふ、名高い、松並木の巾下にある孤家の者であつたのです。

初めて識り合つた二人は初めて會心の友である事を知り互に信じ合つて好な道とて忘られず一層美しい多くの詩を創作ては天にても住まう心地に互の胸の中で樂しみを分けて居りました。こんな事があつてから後三月ばかりは至極平和でありました、が、ある日少女は頑固な兩親に彼の者と親しくして居る事を知られ生れて初めて覺える位口ぎたなく罵られ叱られ終に家に置かねとまでに、外に追ひ出されました、若き二人の交情は決して人の想うやうな卑しい間ではありませんでしたが、彼の若者は遠い／＼山から來た素性も知れぬ渡り者しかも乞食の子であるからと云うのでございました、少女は涙もろい質でしたから口惜さと悲しさとに小さな心を取り亂して思ひつめたあまり、其の日の夕方背後の山に行き高い／＼崖から身を投げて果てました、丁度紅葉が美しう散る時でした。また其と聞きました若者は自分故にそんな無慘い事になつたのだ返す返すも惡い事を仕たと三日ばかりは、ふさぎこんで居りましたが、これも氣が狂つて同じ場所で同じく身を投げて死んで仕舞ひました、これも何かの因縁でしたらう、やがて神樣は二人を再び現世に生れ返らせて小鳥として下さいました、けれども異性の悲しさ二人は生れかはつても同じ塒の友ともなれず住所異なつた山と里とにそもいく萬年恨みをくり返して居ます事やら、さても可愛想なるは赤まへ垂れの木啄鳥と茶色衣の雀とが縁ではありませんか。で雀はどうか木啄鳥と一所に住み度いと思つては朝早くからさがしまはり、木啄鳥は神樣に御願をかけて一生の内に百萬の虫を食べますから戀しい雀と一所に住して下されと、あの悲しい切るやうな聲で、あちこちと木のみきを啄き打つ

ては、虫を探しまはるのださうでございます。あはれあはれ。

中年以上のものに聞かすお伽噺とも言ふべく、子供に聞かすお伽噺てはない、最も斯う云ふ架空物語も一種の文學として存在すべき地はあらうと思ふ（評）

鸚鵡の歌

神戸　竹叟文子

あるところに、愛ちやんと云つて、それは〳〵名の通りの可愛らしい少女て、今年はまだ八つにしかならぬのに、大變賢い子て、また同情心も深く、殊に聲の好いことは、鈴のやうなと云ひましようか、玉のやうなと云ひましようか、愛ちやんがその好い聲て、野に出て歌をうたふときは、鳥までが感心して皆鳴く音を止めて靜まるさうてす、花までがいかにも感じたやうにみなうなだれて終うそうてす、て、愛ちやんの住んて居る村ては、愛ちやんを神のお子様だと云つて、誰一人心から賞めないものはありませんてした。

愛ちやんの住んて居る村と云ふのは、小さな村て家の數さへ二三十もあるかないかなのてすが、村の人達はみな心の清いものばかりて、村が出來て五百年この方罪人と云ふものを、一人はおろか、半人も出した事はないのてす。またこの村の前後は、それこそ繪に見た天國のやうな美くしい野て、柔かな草は青々と、いつまでも枯れることはなく、眼もあやなる麗はしい花は、そこゝにかたまつて咲いて居ますが、いつまでも散る氣はありません。ところが、この美くしい野にも、眞に惜しい事には、蝶々が一匹も居りません、その上にまだ、愛ちやんの一番好きな菫の花が咲いて居りませんので、愛ちやんは、何とかして菫の花が欲しい、蝶々が欲しいと、明けても暮れても、その事ばつかり思つて、晝は山と云ひ野と云ひ、森と云ひ林と云ひ、菫のありさうなところは、茨の中ても、崖の上ても頓着なく探し歩きましたが、無いと云へばほんとうに一本も無いので、終ひには愛ちやんも疲れ切つて、日々悲しんで居ました。夜はまた夜て、しば〳〵菫や蝶の夢を見て、あゝ嬉しいと思へば眼がさめて、いく度悔んだ事があるかも知れません。

ある日のこと、愛ちやんがいつもの通り、自分の子のやうに、妹のやうに可愛いがつて居る鸚鵡に餌を與へて居ますと、鸚鵡は何を思つたか、嬉しさうに羽ばたきして、

（お祖父さん、お祖父さん）と二度叫びました。あんまり假かなので愛ちやんも初めは吃驚しましたが、根が

賢い子ですから、何か私に報らして呉れたのではないのか知ら、と、あれかこれかと亡くなられたお祖父さんの事を考へて見ましたが、ふと稚い時の寐物語を思ひ出しまして、物語のうちにお祖父さんが口癖のやうに云はれた、魔の森を思ひ付きました。

（あつ忘れて居た、きつとこの魔の森に、蝶も菫もあるんだわ。花ちやん（鸚鵡の名）有難う）とお禮を云つて、

（愛ちやん、愛ちやん）と鸚鵡がけたゝましく呼ぶのにも氣付かず、お辨當をこつそりと拵へて、お父さんにもお母さんにも告げず、ひとり家を出ました。

魔の森と云ふのは、村を五里許りも離れた山中で、緑の葉はこんもりと、晝も暗い程に茂つて、なか〳〵恐ろしくて足踏も出來ないのですが、愛ちやんは蝶と菫とが欲しい心一つで、恐いのも忘れて、寐物語に聞いた路筋を辿り辿つて、氣があせつて居る所爲か思つたよりは早く、やがて魔の森へと着きました。成程、談に聞いた通り、何百年、何千年の昔からあつたとも分らぬ程の、老樹古樹斗りて、梢は雲にとゞくかと思はれ、中を透かして見れど、奥は何處まであるやら、眞暗で瀧でも落ちて居るのか、風の鳴るやうな物凄い音が轟々と鳴りひゞいて居ます。

愛ちやんとこの物凄い音には、いさゝか逡巡して這入り兼ねましたが、折角こゝまで來て、あの夢に見た優しい蝶々、美くしい菫の花も見ずに歸つては、と强ひて心を勵まして終々森の暗い中へと進み入つて、あちこちと菫の花を求めて、だん〳〵奥の方へと行きましたが、殆ど夢我夢中の有樣で、直ぐその前に魔が現はれましたのも、それとは氣付きませんのでした。

（これ、これ、盗人の子よ）終々魔物の方から聲をかけました。愛ちやんは飛び立つばかりに吃驚して、ヘと見仰げまするど、二三歩前に恐い顏の婆が立つて居ましたが、斯うなると誰でも度胸の座るもので、愛ちやんも極く落ち着いて、盗人の子と云はれたのは悔しくてなりませんが、逆らつては損だと思ひまして、

（わたしをお呼びになつたのは、お婆さんなの）とやさしく問ひましたが、

（あゝわたしだよ。お前は何處の子だ、誰に斷はつてこの森へ這入つたのだ）

（わたしはね、この下の村の愛ちやんと云ふのよ、お願ひてすから、蝶々一匹と菫の花一本頂戴な）

（愛ちやんと云ふのはお前なのか、お前は鸚鵡を持つ

て居るさうだが、その鸚鵡をわしに呉れたら、蝶でも菫でもいくらも進げよう）

（さう、けれどね、あの鸚鵡を上げるの、わたし厭だわ）欲しくて堪らない蝶や菫でも、あの可愛らしい花ちやんをやつては、何んな非道い目に逢はされるか分らないと思つて、すぐに斷りました、すると婆は恐い顔をして、

（それなら、もうお前に用はない）とずん／＼奥へと這入つて行きますので、愛ちやんはもう一生懸命追ひましたが、足の速いことは矢のやうです。が不思議にもその足跡に、パッと菫が咲いて蝶が飛ぶかと思ふと幻のやうに消え去つて終ひます。

愛ちやんはもうぢれつたくて其處に泣き伏しましたが、日が暮れるので仕方なく家に歸りました。

それからと云ふものは、毎日悔しい／＼と云つては泣き、終々病氣になりました、が別に重いと云ふのでもありませんので、皆安心して居ましたが、不思議も不思議、今まで散つた事のない野の花が散り初めましたので、凶事がなければ好いがと、村の人は心配して居ましたが、可憐いさうに愛ちやんは死んで終ひました。愛ちやんが魔の森へ行きました事は、後で鸚鵡が話しましたので、お父さんもお母さんも魔に魅られたのだと云つて大變悲しまれましたが、泣く／＼愛ちやんの遺言通り、近所の森の中に死骸を埋めて、鸚鵡もこの森に離たれました。

それから毎朝この森に歌をうたつて居るものがあります。

野は美くしい春なれど
菫が咲かぬ、蝶が居ぬ
さみしい春をいかにせむ、



（賞外）　いは子

神様や、神様や
あの美くしい花すみれ
あのしほらしい揚羽蝶
あはれ慕へるしもべ等に
めぐみたまはれ神様や。

それはあの鸚鵡がうたつて居るので、愛ちやんが毎朝祈禱の時うたつた歌で、聲までが愛ちやんに能く似て居るそうですとさ。めでたし／＼。

詩的に出來て居て面白い話だが、殊更愛ちやんを死なさずとも、此美くしい物語は出來たであらう、子供の死など云ふ事はお伽噺にどんなものか(評)

松茸姫

伊豫　福井白百合

ある、淋しい山里に至つて信心な一人のお老媼さんがありました、毎日山に入つては落葉を拾ふてそれを、町へ持つて出て、その賣つたお錢で米や副食を買ふては歸りして、淋しい日送りをして居りました。そうして毎日山へ行く途傍に、一ッの神社がありましたが、お老媼さんは、毎朝山へ行く時と山から晩に歸る時には屹度、此神社へ立寄つて禮拜み、又山へ行かぬ時も必ず一度は此神社へお參りをせぬと云ふ日はありませんてした。

此お老媼さんには、子もなく孫もありませんので、どうか一人の子供を授けて下さる樣にと、お參りをする度に祈つて居ました。

或る朝の事、例の通に山へ行きがけに、此神社へ寄つてどうか子を授けて下さいと一心に祈つて居りましたが、いつの間にか、うつら／＼と居眠りをして居ますと髣茫々とした一人のお爺さんが出て來まして、何か白紙に包んだ物を吳れました、何て有らうかと開て見ますと、奇麗な奇麗な人形がありました、と思ふ内ふと氣が附いて見ますと全く夢で有りました、はて妙な夢を見たワイと思ひ乍ら、山へ參りまして精出して、落葉を搔いて居りますと、大きな松の根方から松茸が一ッころりと轉げ出ました、之れは珍らしい大きな松茸だ晩の副食にしませうと、畚の中に入れて置きました、歸りにも例の神社へ立寄つて禮拜をして家に戻りまして、今日の松茸を茶棚の引出へ仕舞つて置いて、町へ行き米と薪とをかつて來てお夕食の仕度をしました、松茸をおかずにしようと思つて入れて置いた引出を明けて見ますと、之れは又不思議にも松茸はなくて、中から美しい／＼娘の子が出て來ました、老媼さんは吃驚して何が何やら薩張り分りません、之れは狐

の悪戯では有るまいかと思ふて居りますと、娘は可愛らしい聲て「お老媼さん〳〵」と申しますので、お老媼さんも氣を取り直して、

「お前さんは何處からどうして來たのかへ」

と聞ますと、

「私はお老媼さんの内へ來ました、髯のはへたお爺さんから行けつて云はれましたから」と答へますと、お老媼さんは始めて今日見た夢が、神樣のお知らせて有つたのを知りまして、

「それてはお前は今日から私の子になつて呉れたのかえ」と歡び勇んて早速大明神へ御禮に參りました、そこて此の娘を松茸姫と命名まして、毎日々々可愛がつて育てゝ居りますと、だん〳〵成長くなりまして今は獨りて何處へても遊びに行く樣になりました、或る日の朝松茸姫は老媼さんに、

「お老媼さん此の先に美れいな花が澤山咲て居りますから取つて來ませう」

と云ふて家を出ました、晝頃が來ましたので、もう歸つて來るて有らうとお老媼さんはちやんとお膳の拵へをして待つて居ましたが、どうしたのか一向歸つて來ません、さあお老媼さんは心配て堪りません、何處かの川へても落ちて流れたのては有るまいか、谷の中へ轉げ込んて怪我てもしたのては有るまいかと、非常く心配して居ました、さうこうする内日は西へ〳〵と傾いて、早暮近くなりました、けれ共松茸姫は矢張歸つて參りません、お老媼さんはもう狂氣の樣になつてぢつとして居る事が出來ません、何ても之れは尋ねて行かねばならぬと、その行つた方向から神社の有るあたりを、松茸姫ようい、と大聲を揚げて呼び乍ら尋ねましたが影も形も見へません、老媼さんは、何かに喰はれたのては有まいかと心配をしながら、だん〳〵山の奥へ〳〵と探して行きますうち、日はとつぷりと暮れて仕舞ました、丁度十五夜の事て東の方から皎々と大きなお月樣が出ましたので、また晝の樣に明るくなりましたが松茸姫の姿はまだ見附かりません、お老媼さんは恐いのも淋しいのも忘れて、一生懸命探して居りましたが、もう足は疲れて一歩も歩行けぬ樣になりましたので、或る大きな廣い岩の上へ腰を掛けて、お月さんの方を眺めて休んて居ました、すると耳元て、お老媼さん〳〵と云ふ聲がします、それが松茸姫なのでお老媼さんは驚ろいてふり返つて見ましたが誰も居ません、これは氣のせいて有らうと思ふて居りますとま

たお老媼さん〳〵と云ます、けれ共矢張誰も居ません、不思議な事があるワイと、お月さんの方を見詰めて居ますと、お月さんがだん〳〵自分の方へ寄つて來ますさうして今迄有つた周圍の木や草や森やが見へぬ樣になつたので、どうしたので有らうかと考へて居ると、いつの間にかお老媼さんは岩へ乘つたまゝ、だん〳〵空へ高く〳〵上つて居たのでお月さんが近寄つて來るのではなく、自分がお月さんの世界へ上つて行くので有りました、お老媼さんはどうしたのか眠たくなつて仕方が有りません、知らず〳〵とろ〳〵として目が覺ますと、つい見た事のない大きな〳〵お城の前へ立つて居ました、此處は何んと云ふ處でどうして來たので有らうかと、茫然立つて居ると、ギーとお城の門が開まして中から一人の侍が、「お老媼さん〳〵どうぞ此方へ御出下さい」と案内しますから、其後に跟て行きますと廣い〳〵御殿の內へ連れて行きました、お老媼さんは、たゞ夢の樣な心地がして其處に坐つて居りますと、松茸姫が一人のお爺さんに連れられて出て來ました、其お爺さんが前に神社で夢に見たお爺さんと寸分變りません、そして云ますには、

「此處は月の世界じや、松茸姫は儂の孫じやがお前の願によつて預けて置たのじや、けれ共もう下界に居る年限が濟んだので月界へ連れて歸つた、それでお前も長らく松茸姫を可愛がつて大切に育てゝ呉れた、ばかりでない、平常信心をするから其德で、此世界へ引取つたのじや、お前はどうか松茸姫の守り役をして呉れ、その代りお前が何でも望ものが有れば叶へて遣るから遠慮なしに言ふがよい」

と云ひますと、お老媼さんは始めて事の仔細を聞きまして、月の世界へ來て居ると云ふ事も知りました。

「いゝえ、もう私は松茸姫のお守をさして頂く事が出來ますれば何にも望いものは有りません」と申ますと

「それでは是れをやる」と一服の藥を呉れました。

お老媼さんは此の不老不死の藥をもらつていつ迄もいつ迄も長命をして月の世界で松茸姫の守をしながら、たのしい月日を送りましたとさ。めでたし〳〵。

竹取物語を換骨奪胎したやうなもので、別に奇警な創意はないけれど、お伽噺として文章が適當してゐる、之れ亦一種の技倆である（評）

針供養

横濱　清水千秋子

今年十一になる富子さんは大さう裁縫が好きてした、毎日學校から歸ると直に針箱を出して澤山の色糸や針

さしを幷べてお手玉や人形の着物なんか縫ふ事を何よりの樂みとして居ました、が困つた事には大そう針を粗末にしますので、お母樣に危い〳〵と叱られて居ました。或日富子さんは學校から歸つて針箱を出しますと、どうしたのか昨日迄あつた針が一本もありませんから、其事をお母樣に話しますと、それは乾度お前があんまり粗末にするから針の方で逃げたてせうと仰言いました、富子さんも仕方がありませんから其日はそれぎり寢てしまひました、すると夜半に大そう指が痛みますから眼を開けますと枕下に一人の少女が居て富子の指を頻とつゝいて居ました、富子さんは痛さを耐へて一體あなたは何ですと聞きますと、少女は私は針の神ですが、あなたがあまり粗末になさるから、指を痛めて明日から裁縫の出來ないやうにさせようと思つたんですと云ひました。富子さんも、あゝ私が惡かつたから、どうぞ免して下さいと頼みました。針の神は「では免すから針供養をなさい、若し此後今迄のやうに粗末にすると針の山に連れて行きますよ」と云つて少女の姿は失せました。富子さんは翌朝すぐに針供養をして決して針を粗末に致しませんからどうぞ裁縫が上手になるやうにとお祈を致しました、富子さんは其後お仕事が大そう手が上がりましたから、自分は猶更家中で喜びましたとさ。めでたしめでたし。

いは子（賞外）



此話を讀んで、針のさきでチクリとさゝれるやうに感ずる少女方はありませんか（評）

お伽噺

黄金の斧

[illegible] 笠原のぶ子

或る處に一人の正直な樵夫がございまして毎日々々お

山へ、木を伐りに參つて居りましたが、ある日のことそのお山の谷川へ、大切のだいじの斧を、ドブウンと落してしまひましたので、さあ大變、只ッた今からもう山稼ぎも出來なくなると、血眼になつてそこゝと捜しましたが更に見當りません。

樵「コイツはハア、トンデもねえことをしただア、あの斧サねえこんぢや、たんだ今から稼ぎも出來ねえ」と、泣ぬばかりになつて、河の淵の方を拜みながら、

樵「川のぬし神さまに、お願ひがございます、どうかハアわしがあの斧さ、深みへおとしましたから、波瀬の方へ流し出して、いたゞきたう存じます、あの斧さなくなりましては、稼もハア致し難う存じますだ、どうか神さまお助け下さりませ」としみ〲祈つてをりますると、こは不思議、今まてまつさをに澄んで居た淵の水が少しづゝ波だつてまゐりまして、その波がやうやく大きくなつた頃、水底から金色の光がさし、やがて綠の衣に白いうすぎぬを頭からかむつた水の神樣が丈餘の鯉の背にのつて浮び出られました。

樵夫はもう一生懸命に、頭を地に伏して居りまするると、玲瓏玉をころがす樣なお聲て、神樣が仰せられまするには、

神「きこり、そちの落したと申す斧はこれか、」と、お出しになりましたのを恐る〲見まするに、似もやらぬ結構な黃金作りの斧でございます、樵夫はすぐさま

樵「どうしてハア、こねえな結構なんぢやありましねえ、すると神樣はずうつと深底の方へお沈みになり、やゝしばらくして、再び金色の御光まばゆくお浮びになりました。

神「それでは樵夫、この斧てあらう、」

仰られまするから、樵夫は再び恐る〲頭をもたげて見まするると、此度は一切銀出來の、最前のにも劣らぬ結構な斧でございます、そこで樵夫は、

樵「いえどうして、其れでも御座りましねえ、大體わしがのさ、そねえな結構なものでは御座りませぬ、鐵てござりまして、木の柄のこぎたねえんて御座りまするわ、」

すると神樣は、また水底へお沈みになつてこの度は左の手に黃金の斧と、銀の斧とを携へ、右の手に鐵のまことに汚い斧とをもつてお浮びになりました、見るから樵夫はよろこび色に現はれまして、幾つもお辭儀をしながら、

樵「これて御座りますだ、それて御座りますだ、やれやれまことにこれて助かります、」
と手をうちて申しました、すると神様は、
神「これ樵夫、そちはまことに正直なものぢや、身は貧しくとも、心には曇りはない、人はすべてさうなけりやならぬ、そちの直なる心に愛てゝこの金銀の斧はそちにとらせるぞよ、」
と仰せられ、斧は樵夫に與へて言をつゞけ、
神「そちは村に歸つても決してむだに費すなよ此節は、家の有福なのが第一ぢや金のなきに家の外を立派にしたり、うはべばかり飾りても金がないとそちが何事をしても他の者から家も何もかも取られてしまうぞよ、其の時になつてそちの伐り取つた木を前の錢の倍にしてもな町の人は高くなつたら誰も買物はなくなり、そちはうえ死をするぞよ國にしても其通りだ」と仰せられて、お沈みになりました。
樵夫は感激身にあまり、早々かへつて事のよしを人々につげますと、これをきゝ傳えて隣村の强慾獵師が
獵「樵夫の野良め、うめえことをしやがつた、聞きすてにはならねえ、おいらも一番うけてくれべえ、」
と明日ともいはず、その日早速まちへいつて鐵の斧をかつたは〳〵、背負る丈しよい、さげられる丈さげた數は、五十と六挺。
エツチラオツチラと、それを例の谷川まで運びましてドブン〳〵〳〵〳〵と悉く深みへ投げこみ、さてしらじらしくも、岸へひざまづいていのりまするに、
獵「川の神樣にお願ひ申しあげまする、私共只今過失て、斧をおとしました、お慈悲に、その斧をとりあげおたすけなされてくださりませ、」
するとやはり以前の樵夫の時のやうに、波だつてまゐりまして、金色の光をはなちながら、神樣はおうかびになりました。
神「そちの落した斧は、このやうなのであらう、」
獵師はおそる〳〵見ますると、神樣は黃金づくりの斧を三挺ばかりお携へになつて居りまする、よくふかの獵師は締たと思ひながらペコ〳〵頭をさげて、
獵「それてござります、その斧でござります、やれ〳〵これて助かりまして」
いはせもはてず神樣は、火の樣にお怒りになりまして、見るからおそろしき形に變り給ひ、大地も破れるやうな凄じい聲で、
神「ヤイこの强慾愚昧の不正直者め、神を僞はらうとは

おろか千萬、その方自から捨てた斧が、何て自分にかへるものか、この大馬鹿め」

とお睨になつて、そのまゝ水底へお沈みになりました、さすが強慾な獵師もびつくり仰天、命もなくなる事かと思ひましたがまず叱られた丈で神樣はおはいりになりました、後で獵師はしばらく何やら考へてをりましたが急に己の不正直て有つた事を耻ぢててつぽを以て死なうとしました、すると再び神樣が浮んてお出てになつて、其の手をおさえ善心になりたる事をお賞になつて前に樵夫に云つた通りを申しまして金の斧をおやりになつて又お沈になりました。

獵師は其から一目散に村へ歸り己の家に其の斧を大切に神棚に置き朝夕拜して居りましたが、段々日がたつて來と前に神樣がおつしやつた事をわすれてしまひ、其の金の斧を賣て立派な衣服や時計を買ひ毎日朝から晩まて美味の物ばかり食して、其の金を皆つかつてしまひました、すると又前の通り慾の深い獵師となつて山て取つて來た鳥や獸を高く町にて賣りましたから人々はしまひに立寄らぬ樣になり自分は乞食になりました。

前の樵夫はよく神樣の事をまもりましたから立派な金持になりましたとさ、それてすから正直は第一てす。

話が複雜すぎる嫌ひはあるが、首尾應じて一つのお伽噺にはなつてゐる、話のあらはし方は確に上手な方てある（下）

鶯姫

下總　大崎凌宵花子

春の花の中にも、紅梅はすらりとして、山吹は俯いて、海棠はそは〳〵して、白菫はかしこまつて、をる、花てもいろ〳〵美しい姿をしてをるが、春の小鳥、それも亦鳥によつて聲もちがへば、翅もちがふ、その中にわけて美しい鶯姫といふ、それは〳〵玉のやうな聲てさへづるときは、傍にあるものが皆よい音にひとくといふ鳥がある。同じ鳥仲間ても大そう之に思ひをかけて、鳥と生れた上は鶯姫をめとらねばやまぬと、皆それ〴〵決心して居る、折々は仲間同士の競爭もあつた。そこで或る晨鳥仲間のものは、ほろ〳〵風なきに散る櫻の木のもとで會議をひらいて、鶯姫の聲老ぬまに、こゝて誰かのものにしたらよからうと、恨みつこのない方法を講じ合はせた、すると、いゝ、めじろはよくさゝなくものがよいといひ、燕は巣を巧に作るものにしやうといひ、ひばりは雲の宮居まで驅けつこて勝たものにせうといひ、山雀は宙のりを演じたものにせう

といふ。意見はまち〳〵でとてもまとまらなかつた。そこで小鳥仲間の家柄のあるこまどりは起つて演説をして曰ふのにこれではどうもまとまりかねるから、これは一つ鶯姫に願つて鶯姫がお氣に入りのものに歌をやることにしてはといふ。中には不平をならすものもあつたが、つまりはその説に從がつた。

そこでいよ〳〵鶯姫に短冊を奉つてことの由を告るとことの外のお喜びでそれではとさら〳〵と筆はしらせて、恥かしさうに袖を面に掩ひながら、よい聲で

秋くれば洋行すてふつばくらの
フロック姿おもほゆ
われは

と歌ひすました。でとう〳〵鶯姫は燕の許にゆくこと〻なつた。

其の夜鶯姫は燕伯と華燭の典を擧ぐべく、いそいそとしてその準備にか〻つたのである。丁度髮をと〻

（賞外）　節　子



のへてお庭の池に水鏡をして居るとき、足元の紅梅の枝がゆる〻よと見るまに身は巳に棒房の籠にま〻ならぬ境遇となつたのである。

これをきいた燕伯はどの位悲しむだか、すぐ鶯姫を追ひかけてその籠のさがつてをる近くに巣をいとなんで、今も尙その軒に朝夕住んで居るといふ。

評者の「玉蟲」の中にある「玉むし草紙」から思ひ着いたらしいが、能く此作者のものとして消化してゐる、模倣でもこれなら好い(評)

なまけ杢兵衛

下谷　政子

むかし或村に杢兵衛と云ふ大の怠者がありました、毎日只煙草をのんでねるのが仕事の樣にして居りましたから、村の者は一人もあひてにする者がありませんでした、杢兵衛或日思ひますに「どうかして一生涯毎日仕事もせずにねておいしいものを食て暮したいものだ」と思ひまして鎮守樣にお願をかけました、丁度百日目に寢て居りますと、いと嚴な聲で「杢

兵衛、李兵衛」と呼びますから目を覺しますと、室内中金色の光を以つてみたされて、まばゆい中に白衣白髪のいかにも神々しい一人の翁が立て居りました、李兵衛は思はずひれ伏ますと、神様は「汝が百ヶ日も願をかけたがいかにもそれは聞とゞけて遣す、されば明朝早く仕度をして山三つをこへ、森をすぎて行けば其所に黄金のわらじがある、それをはいて行くと其緒がきれたところが汝の望の所であるぞ」とおつしやつて其まゝかき消す樣に失せました、李兵衛は、翌朝早く家を出て山をこへ森をすぎてゆきますとお告げの通りに黄金のわらじが落ちて居りましたから、それをはいてゆきますとある立派な家の前でわらじの緒がきれましたから、内へはいりますと床からちやんと盥にお湯がはいつて手ぬぐひまでもありましたから、足を洗つて上りますと又そこにお茶菓子にお茶が出て居りましたからそれを食べて次の間にゆきますと食卓の上に、山海の珍味がのせてありましたから、大喜てそれを食して又次の室にゆきますと立派な寢臺の上には暖さうな布團迄しいてありましたから、早速ねました、さうして、毎日李兵衛の望通りにして居りました、ある日入口の方でおたのみ申しますと云ふ聲が聞へましたから、出てみますと、一人の修行者が立つて居りまして、どうぞ一晩とめて下さい、と申しますから、李兵衛はよろしうございます、どうぞおとまり下さいましと、云ふて修行者を内へ案内いたしました、さア其晩に、二人でねました夜中に修行者がふと目をさましますと、恐ろしい三つ目の口の耳迄さけた女が髮をふりみだして片手に刀をもち片手にまないたを持つてをりましたから恐ろしさにからだをちゞめて夜具を、かぶつてふるへながら見てゐますと、女は李兵衛の傍にゆきもゝの肉を三寸ばかり切つてスウーと床のしたへはいつてゆきました、修行者は夜のあけるのをまつてゐますと、やう／＼のことで夜があけましたので李兵衛も起きましたが、昨夜のことは、少しも知らぬ樣でした、さて修行者は恐ろしい此家に長居は、けんのんと、思ひまして、李兵衛のとめるのも聞かずに又來年に來ますと云ふて、歸つて、しまひました、それから一年立つて修行者が來てみますと、李兵衛は床の中に只骨になつて死んで居りましたと云ふことです、これは神樣があまりの怠けをてたるのをいましめて毎晩肉を一切づゝとらして殺ろしたのでございますとさ。

我國の古いお伽草紙にでもありさうな話、多分何かから出たのでは

ありませんか(評)

魚のお禮

[illegible]とみ子

太郎は生れつき氣性が優しく村の人々からも可愛がられますが、家は大層貧しくて毎日一生懸命に働いて居りますけれど少しもお金が出來ません、斯うして居ては何時迄でも同じ事だから、一つ諸國を回つて好い運を探さうと、或日太郎はお父樣に此の事を相談致しました。お父樣も成程と思ひ快くお暇を下さいましたので、サア太郎は大喜び、すぐにもう其日から着のみ着の儘て住み馴れた家を後にし、何所といふ目的も無く旅立ちました。恰ど三日目の日に或る國境迄參りますと、其邊の河岸に白い髭の有る一人の小人が立ち止つた儘、水の面を眺めては悲しさうに泣いて居ります。太郎は不思議に思ひまして其の側へ行き「モシ／＼お前樣は何を其樣に泣いて居るのです。」と聞きますと、小人は漸う力を得たやうに「オヽよく聞いて下さいました、何をお隠し申しませう私は此の河に住む魚の王て御座いますが、此の川上に大層毒のある花が有りまして、毎年其の花の咲く頃には露が河へ流れ落ち、其の毒で私共の一族が大方失くなつて終ひます。今年ももう花の咲く時分てすから又もや大勢の者と別れなければならぬかと、夫が悲しくて斯うして毎日泣いて居るので御座います、」と涙と共に話しますので、根が優しい太郎ですから是を聞いて可哀さうに成り「夫は氣の毒だ。」ぢやア私が是から行つて其の花を摘むで上げやう。」と云ひますと、小人は急に元氣づきまして、直に太郎を川上の花のある所へ案内を致しました。見ると水に沿ふた高い木の枝に美しい花の蕾が鈴なりについて居りますので「オヽ此樣に高い木ではお前樣には屆くまい。」と云ひながらスル／＼とよぢ登り、澤山の蕾を一つ／＼鋏み取つて終ひました。すると小人は手をうつて喜びまして「命の親の太郎樣、お禮には此の品を差上げますから何時でもお頭の上にお翳しなさいませ、何事も思し召し通りに成ります。」と云ひながら一つの黄金色の玉を太郎に渡した儘、姿はフッと見えなくなつて終ひました、太郎は大層喜びまして倘行先を急ぎましたが、道々も黄金の玉のお蔭て何事にも不自由無く次の國へと着きました。ところが此の國の人民は一人として樂しさうにして居る者はなく、皆心配さうな顔をして居りますので、太郎は人々に其の譯を問ひますと、此の國王の姫君は夫は／＼淸らかな美

しい方で、一寸外へお出ましになる時でも人民は殘らず外へ出てその神々しいお姿を拜む程でしたが、隣の國王から是非お嫁にと望まれたのを斷りましたのが初めで、隣の國王は或る魔法使ひの女に賴むで花のやうな姫君のお顏を眞黑にして終つたのです、夫で父上や母上は大層お嘆きになり、誰でも姫君のお顏を元の通りにした者には此の國王の位を讓るといふお命令をお出しに成りました。夫からといふものはあらゆるお醫者樣方が御殿へ上りましたが如何しても直す事は出來ず、もう迚も彼の元のお姿は拜めぬのかと、夫で皆斯うして悲しんで居るのだとの事なので、太郎は何か心に頷きながら直に例の玉に依つて魔法使ひの家へと參りました。見ると大きな森の奧で締りも中々嚴重てすのに、太郎は玉の力で難なく家の中へ入り四邊を見ますと、傍に一つの手箱がありまして大きな錠が下して御座います。何が入つて居るのかと手に取る時歸つて來たのは魔法使ひの女でした。此體を見て恐ろしい顏をしながら取返さうと致しますから、太郎は徐に彼の玉を頭の上に高く翳しますと、不思議にも女は身體に痺れを覺えまして其儘其所へ倒れました。太郎は笑ひながら「いくらお前の力が强くても正しい玉の光には勝てまい。夫よりも此の箱の中の品は何か、直に云ひ開いて終ふが好い。」と申しますと、女は散々身をもがきましたが終ひには迚も叶はぬ事と諦めまして「では悉皆お話し致しますから何うぞお助け下さいませ。實は其の箱の中にある玉こそ眞昧の玉と申しまして、左の手に持ち玉の名を三度よぶ時には、如何なる醜い顏も忽ち美しくなるといふ寶で御座います。」と皆迄きかず太郎は踊り上つて喜びまして「ぢやア是は私が貰つて行くよ。命は助けて上げるから。」と云ひながら玉を頭から下しますと、女は這々の體で傍にある上着を取り自分の身を隱すと同時に形は消えて終ひました。

＊　＊　＊　＊

三日程後の事です。此の國に新しい王樣が出來ました。そして人民は彼の姫君の前のやうに美しく淸いお姿を朝夕お城の高い窓に拜む事が出來るやうになつたと申します。めでたし〳〵。

深い寓意のあるわけでもないが、想像の自由に働くのは感服です、書きぶりも熟練してゐる（評）

幸ちゃんと君ちゃん

兵庫縣　田中春子

丁度今日の樣な好いお天氣の日でした。私が上野公園

の腰掛に休んでゐると、彼方から十一二の可愛らしい女生徒が二人、段々私の方に近づいてきて、遂に同腰掛に腰を下しました。而して這麼對話を始めました。
「妾何だか幸ちやんと歩くのいやだわ、」「どうしてなの？」「どうしてゞも、」「どうしてゞもつて、どうしてなのよ？ね、君ちやんてーば、」「幸ちやんは、いつも那様奇麗な着物着てゐらつしやるのに、妾は、いつも這麼汚い着物着てゐるから、」「まア！おやア君ちやんは、妾の様な着物が欲しいこと？えゝ……」「妾は又、君ちやんの様な眞實のお母樣が欲しいことよ、」「いくら眞實のお母樣があつたつて、妾の様に好い着物が着られなくちやつまらないわ、」「妾ら君ちやんの様に眞實のお母樣があつたら何にもいらないけどねー、」「妾らそんなのいやだ、妾一日でもいゝから、幸ちやんの様になつてみたいことよ、あんな立派なお家に住んで、澤山の人からお孃樣々々つていはれたら什麼に嬉しいでせう、」「でもねー君ちやん、肝心のお母樣が……もう這麼お話止しませうよ、」「えゝ、もう止しませうね、それよりか先程買つたお伽噺讀みませうか、」「然うさう、それが好いわ、どれ、月の世界、ちよいと面白さうねー、」「まあ繪をみませうよ、」「お月樣が笑つてゐらつしやるわ、」「太郎さんか、次郎さんかしらないけど、一生懸命にお月樣を眺めてゐるわねー、此次は、オヤ〳〵今の小供が這麼に小さくなつて、而して山が下にあるわ、」「きつとね、お月樣とこへ行くところなんでせうよ、此度は……岩の前で泣いてるのね、どうしたんでせう、」「もうお終……ぢやなかつた、まだあつた、まア血を吐いて倒れてる！可愛想にねー……此度こそ、もうお終、」「早く讀みませうよ、妾、讀んでもいゝこと？」「えゝ、妾も後からね、」「ぢやア半分だけ讀んでよ、」といつて幸ちやんは讀み始めました。
或ところに太郎さんといふ可愛らしいお子さんがありました。太郎さんは大變お月樣が好きで、いつも廣いお庭に出て、お月樣ゑらいなア、お日樣と兄弟で、と、大きな聲で唱ひながら首のだるくなるまでお月樣を眺めて居ります、或夜いつもの様にじツとお月樣眺めながら、「まア奇麗だこと、本統に奇麗だなア、僕もお月樣とこへ行きたいなア、あん中には、きつと、立派な御殿があつて、其中には、美麗なお姫樣や、而して、あの、カードにある様な可愛い羽根の生えた子供なんかも澤山遊んでゐるだらうし、僕の好きな兎も澤山居るにちがひないや、而して、

此度出來た東宮御所よりも、もつと立派かもしれやしない、本統に什麽に綺麗だらう、あゝ行きたいな〳〵、」といつて思ひ出した樣に「オ、首がいたー」と暫く伏向いて居ましたが、又上向いて「僕の好きな〳〵お月樣やーい、僕はね、非常に汝が好きなのよー、だからねー、何卒僕を汝の世界につれて行つて下さいな、ねー、僕の好きな〳〵お月樣やーい、」と大きな聲でどなつて居りますと、何時の間にやら太郎さんの身體がフワリ〳〵浮き出して、みる〳〵風船の樣に高く上りましたので太郎さんは驚いて早くお母樣のお側へ歸りたいと思つても如何路を如何いつてよいのか分りませんから暫時は恍惚として立つて居ましたが、不思彼方見ると何だか黒い物が見えるので少し元氣づきまして、急いでその方に進みました、すると意外にもそれは大きな岩でした。太郎さんの失望一方でありませんその内に何だか息が迫つてきまして咽が乾いて堪りません、水が飲みたいと思つても一滴もありません太郎さんは今にも泣き出しさうな顔して無暗に歩み出しましたが、此度は大きな山の前にきました、今はもう絶體絶命、大きな聲でウワー〳〵泣き乍彼方へウロ〳〵此方へウロ〳〵走り廻つて、とう〳〵血を吐いて倒れて了ひました。」

「まア可愛想にねー、」「もう死んぢやつたんてせうか、」

「此度は妾の番よ……」

「暫くすると、太郎さんの耳元で、「太郎や、私はお前の好きな〳〵お月樣だよ、而してお前は先程から私の顔の上を走り廻つて居たんだよ、お前がね餘り私の世界にきたがるから、ちよいとつれてきたんだけど、ごらんなーね！直ぐ倒れて了つたてせう此所には空氣とか水とかいふ物が無いからお前の樣な人間は迚も住むこと出來ないのよ、だから早くお家へお歸り、これでお前も得心したでせう、」といふ聲が消えたかと思ふと太郎さんの身體はズドンと地上に落ちないで、暖いお寢間の内にお母樣と二人り寢て居りましたとさ、めでたし〳〵。」

「あゝ面白かつたこと！ズドンと落されたのかと思つて吃驚したら夢だつたのね、」「然うね、あんなに奇麗に見えてるお月樣でも側へ行つてみたら這麽もんだから、妾もう〳〵幸ちやんの事なんか羨まないことよ、」「妾もお母樣大切にしてよ、さアもう歸りませう、」といつて樂しさうに二人は公園を去りました。

『地』

羽子蒲團の禮

信濃　胡蝶

拙き筆もて、祖母上樣の代筆、相つとめ申し候。雪深き信濃の里も何と無う、春めきし今日此頃、叔母上樣をはじめ皆々樣にはいとも御機嫌よう、御消光遊ばされ候由、深く／＼御よろこび申し上げまゐらせ候。新年早々より何くれと深き御心配相かけ申し候、祖母上樣も此五六日、際立ちて御快く、たま／＼庭下駄など御はきなされ候間、何とぞ／＼御心安う思召し下され度、願ひ上げ候。

昨日は祖母上樣へ、いとも珍らしき御品、御送り下されまゐらせ候。皆々にかはりて、厚く／＼御禮申し上げまゐらせ候。祖母上樣が「何？羽子蒲團？珍らしい物だね、私は勿體無くてこんな上へ寐られないよ」と仰せらるゝを、やう／＼御寐ませ申し候。今朝程はいと早くより御機嫌よく、「私はほんとに勿體無くて涙が出たよ、それはそれはいゝ氣持でね、極樂へ行つた樣でした。靜子やよう／＼叔母樣に御禮を申し上げて御呉れよ」と繰返し繰返し申され候に、いか許り御喜びの程かは、御察し申され候。

まこと都に遠き此山里にては、羽子蒲團などいともいとも珍らしく候て、靜子なども「母ちやん、妾今夜から御祖母ちやんとねんねしたいわ」と、朝から申し續けて母を困らし居り候。先づは取急ぎ御禮まで。可祝。

禮狀も斯う云ふやうに書くと趣きがあつて、贈つた方でも滿足する、何事でも眞實さへ籠つてゐれば人を動かす、通り一遍の挨拶より、心から出た言葉でさへあれば文句は下手でも關はないのである。此文は文句も上手である（評）

『人』

私は七番

岩代　大河原春子

父母上樣、姉上樣、よろこんで下さい。試驗が滿足てはいられました。

福島へ來てから何だか氣にかゝつて仕方がないので廿六日の朝などは五時頃から起きて、うろたへさわいだものですから、伯母さんに叱られて今一度ねなさいと言はれましたが、眠られませんから起きて机で本など見て居りましたけれど、何時のまにか試驗てどんなにするだらうなど〻そは〳〵ばかりして居ました。其日九時から伯母さんと學校へ行きますと、私より大きい人が澤山居るので大層驚きました。姉さんにきいた通り長沼のより大きい學校でした。體格檢査で滿足にいつて、廿七日から本當の試驗が二日ありましたが、伯母さんに一人で行きなさいと言はれて一人で行きました。耻かしうございました。初の日は國語と作文で次の日は習字と算術でありましたが、私は習字が下手に出來ましたから大層心ぱいして居ました所が、今日になつて分りました。はいつた人が百二十二人で私は七番でありました。私は夢の樣によろこびました。伯母さんにもほめられました、安心して下さい。伯母さんに、うちへ歸つて試驗のありさまをくはしく皆んなに話してきかせたいと言ひましたら、笑はれました。

今度は來月の七日に入學式があるさうですが、高等二年位てはいつた人は少なく皆大きい人の樣ですから私は何だか耻かしいやうて困ります。そして私はうちへかへつて皆んなに話をしてきかせたいと思つたり、又高等女學校つて何んな事をするだらう速く行つて見たいと思つたりして、嬉しいやら何やらて仕方がありません。さやうなら。

嬉しさが文章の上にあらはれてゐる、手紙らしい好い手紙である。（評）

『秀逸』
熊野だより

櫻瀬靜江

この間はお手紙ありがたう存じます。

あけましておめでたう、これからカルタ會があるのですつておつしやつてゐましたね。こちらへは今はじめておめでたうが來たのですよ。しかしカルタ會なんぞする相手は一人もないの……。

八重こゝの重の三千六百峰には、烏もとまらぬ神ながらの林が茂つてゐて、吹きすさむ北風におそろしい響をたて、山が根こぎり崩れさう……。氷の雨、吹雪の風が雨戸をたゝき家を圍んで、日の光を見ないのが今日で五十日。熊野は暖國どころてはありません。けれども、かやうな中を平氣て、二三里の山に鉈を杖して、つま木こる賤の女を見ると、熊野の猿を思ひ出さずにはゐられません。熊野の猿、眞實によくいひ表はした言葉てすね、しかし狡猾くないのが、この猿の特長てせう。

「エヽ吾々の先祖は、これて一寸も不自由がなかつたんてす、そして何といふてもお月樣を見てりやあわか

りますからのう。今のは十五日に三日月が出たり、朔日が満月になつたりする、又新の方は正月してから寒が來るんですが、この方は正月すんだらボツ〳〵暖うなります。

といつて今朝から顔を眞赤に、あちこちと祝つてゐます。村の若い人は旗や幟を飾りたて、笛や太皷の囃て獅子舞を舞うて、惡魔を拂ひ年中の幸運を氏神様に祈るとか。三里の奥の大塔ヶ峰では、今朝の元旦に金の鷄が東天紅を歌うし、宮様のお乗馬が驅け初めをする轡の聲が聞こえるとて村人はお供へ物して遙に拜んでゐます。

妾も拜みました、これから獅子舞を見に行くつもりです。さよなら。

これも美文式に堕する手紙だが、筆が輕く動いて、如何にも即興風にすらすらと書いてある、おもしろい手紙である（評）

（賞外）　宮原みどり



晝は書生夜は通學

長野縣　今牧伊智子

姉さん、私がわるかつたですよ平におわび申します、お父さんの戰死なされたこともお母さんの亡くなつたことも決して忘れは致しません、去年の春お母さんがお亡くなりになつた時に姉さんとちかつた「もう世の中に身うちと云へば姉さんと私ばかりだからこれから一生懸命に勉强してきつと立派なものになつて見せます姉さんも病氣なんかにかゝらない樣にしてお互に助け合ませう」と云つたことも未だよく覺えて居ります。誠に姉さんすみません、私が一人の姉さんにもお話しせず厚いお世話になつた御主人の家を無斷でぬけ出すなぞとは、決して姉さんを困らすなんて云ふつもりではなかつたんです、一寸した氣の逸りからつひ東京へでも行つたら立派な人になれるだらうと云ふ樣な淺はかな考えからです、どふか許して下さい。

幸ひ此頃では山田様と云ふ辯護士の方があはれんで下さり、晝は書生を、夜は私の望んで居た商業學校へ通はして下さるのです、私は此御親切なる御夫婦をかげながら拜んで居るのです、姉さんもどうかこの惠み深い山田様へ厚く御禮申し上て下さい、唯今では斯様なわけでありますから別に御心配

下さいますな。

姉さん、私が歸つてそのお傍で一所に働くとよいのですが、私にも少しの目的が御座いますから、此度だけは見のがして茲二三年の間ですから御無事で待つて居て下さい御願です。

若しお墓へお參りの節はお父さんやお母さんへもよくおわびして下さい。

沈著で、穩當で、思ふ事の要領は述べてゐる、元來此手紙にあるやうな複雜な事實を國許などへ知らす場合は、激して亂れがちになるものだが、此邊りに書けたらえらいものである(評)

女だてらの冒險

大阪市　登　喜　子

父樣母樣御安心下さいませ、只今午後五時京都へ着きました、今日は大變な日にあひました、今朝出立の際、父樣が途中停車せなければいゝがと仰いましたが、果して向日町で汽車不通となりまして、引返すより仕方がございませんでしたが、兄樣が冒險的に行て見ようぢやないかといはれますので、私も妹も女だてら面白半分に徒歩で參りました。三人は濁流滔々と流るゝ桂川の、見るも危い橋を渡り、屋根ばかり見える水上を渡舟にのり、やつとの事で京都へ着きましたが、二里許りもございましたでせう、私も妹も足ずれが出來て、痛ふございますけれども、少しも身體は疲れません、誠に此度の旅行は意外の經驗を得ました、先は取急ぎ御報知まで。

初めに無事の着京を報じ安心させて置いて、それから冒險を語る、短いうちに用意があつて嬉しい(評)

おたふくも少々は

伊勢　山路くに子

こまぐ\と御文繰り返し拜し上げ候、やさしき御言葉、さては何くれと御誡め言、身に泌みて嬉しく存じ私事是より貴き物何かあるべきと押し頂き申し候、其後少しも障りこれなく、小供も日に増し肥え太りて風一つ引きたることもこれなく候。此頃は少々笑ふ樣になりて舅御樣の御いつくしみ一方ならず一寸泣き出しても、それ抱き樣がふつゝかなりと私共に御小言仰せられ候、子をもちて親の恩を知るといふ言葉の味もわかりて今更ながら不孝致したる昔口惜しく存じ候、今少しあたゝかに相成り候はゞ御仰に從ひて同道いたし御目もじ致すべく、やうやう出來上りたる寫眞御目にかけ候日數は七十日計り體重は一貫三百目これあり候、御心遣しになりたる產着のいとよう引き立ちて、おたふくも少々は、と嬉しく存じ候、衣類の洗濯物は私事昨年秋頃少し勵みてとりつくろひ置き候ひし故、これといふ物もなく候、いつもながら御心添えの程有難く存じ上げ候、時分柄一入御體御大切に遊ばされ候やう祈り入り候、先は右御返り言聞え上げかたぐ\あらあらかしこ。

[illegible]一貫三百目は行きとゞいて居る(評)

せめて三日の御介抱

大阪市　中島貴美子

世は花の香に喜び浮かるゝさへさぞや心悪う思し召すて御座いませう、私は只今御知らせを頂きまして夢かとばかり、あの御はがきを繰り返しく〵拜見仕りました、幻の様、叔子様と朝な夕なに通ひました學校時代の親しかつた事などが、其から其へと胸へ浮んで急に涙も出ませんでした。驚きの餘り氣が轉倒致したので御座いませうか、伯母様、私は御いたはしさが胸一ぱいて御慰めの言葉さへ出ないので御座います、學園の花天晴れ淑女の君と讃へられ遊ばした方の事ですもの、是がどうして親御の御心に御なげき遊ばさないですみませう、御察し申すも涙の種で御座います、然し伯母様人間の命數には限りある者御逝き成された方は天命と御あきらめ遊ばすより致し方が御座いませぬ、餘り御なげきが過ぎまして御弱い御體に障りますような事でも御有りてしたら、御家内中の御心配は常事では御座いませんてしよう、御後には御賢いお妹子様が居ます事御成長遊ばしたら屹度御二人分の御孝養を御盡し遊ばすて御座いませう、それを御樂しみにどうか御心丈夫に遊ばせよ、私も御在世中にせめて三日の御介抱でも致したう御座いました、それも海山へだてし戀しさに今更詮ん術もなう、只恨み多き浮き世をかこつばかりて御座います、只今別に小包差し送りました其れは實に御恥づかしい品て御座いますが、私がいばかりの手向草、御佛前に御供へ下さいましたなら本望の至りて御座います。

悔みの文と云ふと、得てかたに入り易いものだが、此れは型に入らないて、却つて眞摯の氣愛すべきもの(評)

繪のこと

岡山縣　岡崎雅子

御尋ねに相成候事、何分畫才に乏しき妾共、充分なる解答は致兼候へ共、教へられしまゝ習ひしまゝを左に。

一、「フイキサチーフ」之は木炭畫チヨーク畫及びパステル畫等の止めに用ゆるものにて、セルラックを酒精中に溶解し去りし液にて、別名を溶解ラックとも申候。

一、「スケツチ判の大さ」之は巾八寸長さ一尺一寸程の大さのものを申すとの事にて候。

一、「沒骨法」之はつけたてとも申して重に花鳥畫に用ゆる法にて候、其描き方は輪廓を施さずして繪具又は墨にて花卉或は葉等を畫く事にて候、故に其畫輕くして甚だ面白きものにて候、此法は宋の徐崇嗣と申す人の初めて畫き出せるものとか申事を耳に致居候。

次に名數畫題の御尋ね中々に面白く覺候、妾が記臆に存せるまゝを御報申上候。

一、「歳寒三友」椿、水仙、蠟梅。

一、「四清」梅、菊、桂花、水仙。

一、「六妍」芍藥、海棠、梨花、木槿、木芙蓉、長春。

一、「七香」梅、百合、菊、桂、水仙、茉莉、梔子。
右あら〳〵書記し申置候、猶説明不充分に付き、御不審の點は御遠慮なく御尋ね下され度く、さらば妾が研究の一助とも相成候べく、先づは文して御返しまで。
これも一體(評)

在營の兄へ

麹町　横田愛子

今日は雨に候、庭の櫻もしとゞ濡れてなんとなう思ふ事多く本も讀まず窓より麥三寸の畑を眺め居候。母上は納戸にて縫ひ物を被遊、正三は其傍に玩具を出して遊び居候。爺やは新家へ參りいつものおどけたる聲も聽えず誠に淋しく雨滴の音のみ高く覺え申候、父上御死去後はこのように物寂しき時多く兄上樣の滿期を一日千秋の思にて待居候。母上は御歸郷の際にどの樣な着物をこしらへようかと何日も〳〵私に相談なされ候正三は兄樣の御歸の時には喇叭をお土産に買つて來て頂くと常々申し居候。

父上樣の石碑もよう〳〵出來致し、あの墓地の石段を四段程登ると赤松の間に未だ桔梗の紋所が金色に輝く、白き御影石の墓標が見え初め候てお詣りに行く毎涙新らしく感じ申候。

本年の春蠶は人手なき爲半分に致さんと存じ居候處、新家のおとみ樣と本家の與助樣と、兄上樣が兵に出ておられるから必ず手傳に行く〳〵と申され候間御親切に甘へいつもだけ播く考に候、兄上樣には家事上の事を決して御心配なされ間敷候。

おとみ樣は誠に好き人にて裁縫の御上手な事は迚も私などは及び申さず候。

尚申上度き事有之候へ共最早夕餉の仕度に取掛らねばならず候間惜しき筆止め參らせ候。

雨はいまだ降り續き鎭守の森あたりより村は暮色に包まれ初め申候

時候柄御身御大切に被遊度祈上候。かしこ。

お好きのバナナ

下谷　角谷春子

叔母樣先日は御邪魔いたしました、彼の葛饅頭大へんおいしう御座いましたわ、家へ歸て皆に其話を致しましたら御母樣は「そんなに御馳走があつて羨しい事母樣も行かうかしら」なんて仰てよ、アそれから此バナナはね、今朝米國の兄樣から屆きましたの、私ァ明後日丁度土曜で行く日ですから其時持つて行かうと思ひましたら、御母樣は叔母樣はお好きだから一日も早く上げる方がよいと申されます故、使に持たせて上げます、でも未だ少し靑くつてよ、それから明後日は小兄樣も行くかも知れませんきつと何か御馳走にならうと思て居るのでせうよ、つまらない事ばかり書きました、後は御目にかゝつてからに致します、さよなら。

味方が一人

千葉縣　關　芳枝

御姉上樣、妾は嬉しさにたへず候。昨日午前十一時半頃、母上御産致し候。赤ちやんは女にて候。田中先生用事ありて、御出校なく、午後休業となりし故、急ぎ歸りしに、近隣の人々あまた來り居るにさてはと思ひ家に這入れば、誰もかれも皆な「御目出度う御座ります」と云ふ次第、女の子と聞き思はず微笑み申し候。若し姉上樣の御らんになれば、御前に似て居ると申さるゝやも知れず候らへど、まことにあなたに似て居り候。

都に御出でなされてよりは、男ばかりにて、只だ淋しゆう感ぜられ候ひしが、今は又、味方の一人增したる事なれば、限りなう喜ばしう、尙ほ三年の後には、姉さんと呼ばれる事と思へば、心もいとゞをどり申し候。

又、春雄の生れしをり「女は泣いて許り居ていけぬ、男の子が可愛い」と云ひ居りし御婆さんの、「男の子はあらくて致方がない、女の方が優しうてよい」と大喜びにて着物を切りとこしらへ居るも可笑しう候。姉上樣もあらんかぎり御喜び被下度候。末筆ながら、近頃都にては甚だ、天然痘の流行する模樣なれば、ゆめ〳〵御注意をこたりなき樣願ひ上候。先はあら〳〵かしく。

（賞外）　清　子



奥樣のおかげ

田　舍　娘

姉樣だいぶお暖になりましたのね、皆樣お變りなくて、良坊は大きくなつて片言まじりにお乳一ばい頂戴なんて云ふてせうね、祖父樣は、相かはらず植木道樂で、はなばさみを御手より、おはなしに成つた事ないでせう、それはさうと此の間は、お栗を澤山有難うね、孃ちやまも坊ちやまも大よろこびて大きなお栗〳〵と仰有るのよ、奥樣も旦那樣も珍らしい大きな栗だ、里の村の名物、小布施栗は味がよくつて、大きなものだと云ふ事は、話てきいて居るが見るのは今がはじめてだと大そうおほめに成つたので私の樣な鼻のひくい者ても、姉樣高く成つた樣な氣がしてよ、それからね七つのお孃樣と、二つの良坊と同歲の坊ち

やまと、お子様はそれだけよ、一寸も無理な事仰有らないのよ、里や里やつておなづきになるのよ、お可愛らしいのよ、おかしい事あるのよ、私ねお嬢様の飯事の御相手よ、ほんとうに面白いのよ、姉様それから又盃梨子も出るでせうから賂つて頂だいねえ、今から御願ひ申しておきますよ、それからね奥様はほんとうによいお方よやさしい、上つた其晩なんかはそれは〳〵よくなぐさめて下すつて、私うれしくて唯涙が出てたまらなかつたわ、私ねこの間はそんなになれたからつらくないけれど、上つた當座は人より朝寢な私、奥様に二三度おこされたわ、もう今は様子がよくわかつてなれこの雀よ、奥様のおかげで羽織もぬへるし、綿入も、其上字もこんなにかける様に成つて、お臺所の日記もつけること出來るわ、これもみんな奥様のおかげ、かげて私おがんで居るわ有難くて、ですから皆様安心して下さいまし、祖母様が御手紙によれば、なれない仕事でつらからうと心配してお出の様子、姉様只今申上た様なわけてすから祖母様のおむねに落る様によろしく申上て下さいな、申上たい事は山々有りますけれど、お目にかゝつてくはしくねえ、では御機嫌よう、皆様によろしく、良坊にもよ、ほゝゝゝゝ。

此上なき道づれ

米澤市　加藤はる子

停車場にて惜しき袂を別ち候てよりは、母上様には別に御變りもあらせられず候や、父上様には定めし御健かにて業務にはげみ居らるゝ事と、陰ながら察し居り申し候、花子義雄もさぞや都のにぎはしさによろこび居る事と存じ候、御出立の際は妾も御供仕る筈に候ひしが、御承知の通り學校を換ふるが心苦しさに今一月の間なればとて、そのまゝ思を殘して立ち別れ候が、ふつゝかなる妾も此の三月にはいよ〳〵卒業の榮を擔ふ事と相成り、其の曉には弟と共に戀しき母君の御そばに參り得る身と相成り候、母上にもさぞや馴れ給はぬ都の住居に候へば、御心にまかせ給はぬ事も多かるべく、殊に父君も御留守がちに候へば御心細さも一しほならんと思ひやられ申候、されど妾等も近々中に上京する事に候へば、それを樂しみに御待ち下されたく、決して〳〵御心など痛め給はぬ様くれ〳〵も願ひ上げ候、幸ひ千坂の玉子様も此度卒業後は直ちに千住の兄君の許に趣かれ候由にて、其の折は是非伴ひ給ひてとの玉子様の母君よりの御言葉に候、妾も此の上なき道づれとよろこび居り申候、東をさして馳せ行く汽車の窓より、彼方の山は何山、此の野邊は何など語り合ひつゝ眺め行かんには如何に樂しかるべく、生涯忘るべからざる紀念と相成り申すべく候、御地の停車場にて一目御兩親の御顏拜しまゐらする時、如何に此の胸をどり候にや、花子などは眞先に姉君とすがりつきて離れ候まじ、かゝる事を日々思ひ浮べては嬉しうて嬉しうて早く其の日の來れかしと一日千秋の思ひにて待

ち居り申候、それ故にか、此の頃は何となう心も浮き立ちて學びの業にも張り合ひ出來たる樣に覺え申候、母上樣にも折角御自愛遊ばされて病になどおかされ給はぬ樣、くれ〳〵も願ひ上げ候、殊に東京は只今天然痘流行する由に候へば、小供等にもよろしく御注意下されたく候、なほ出京の事は妹弟にも御傳へ下されたく、二人のよろこぶ有樣は妾の結ぶ夜半の夢に現れ出づべきに候、かしこ。

今一度眞人間に

落　葉

申上樣と筆取さへ涙でございます、兄樣、小しやくな者と思召てせうが一生の御願でございますから何卒お聞下さいまし。昨年十月頃から御身の上に付、樣々の事耳に致して居りましたけれど、兄樣に限つてと母樣初め妾まで心にもとめずに居りましたが、昨日不計高島樣からの御手紙に接し餘の意外に夢でないかとのみ思はれます。三年前の事でした、隣の茂男樣が不心得な事をして妻君を追出した時、妾は其女を罪深いと云つたら兄樣は恐いお顏して、女はか弱い者だ其に堂々たる男子が涙流して迫つて行くのが非常に惡い、其位の罪は何處にあると有仰たではありませんか、其時妾は口にこそ云はね、何麽に嬉しかつたてせう、寢ても覺ても此お言葉を繰返しては立派な學士になられた兄樣を一日も早く見たくなり、風吹く夜など怺えかねて語つては母樣を泣かせた事も一二度ではなかつたのです、去るを三年前の兄樣が何故今の樣な淺ましい御身になられたのかと思ふと……あゝ情なうございます。兄樣、母樣は昨夜から一口の御飯も召上らず泣て計り被在います、兄樣は何の報に母樣にかく迄御心配おかけ申すのですか、妾は元より兄樣が三つの時とやらに生落された母樣に逝かれ、五年前には又父樣に別れ今の母樣がお優しい御心に愛も悲しさも打忘れ何一つ不自由なく過して居るのではありませんか、高松の伯母樣から初めて此事をきいて悲しさと嬉しさと取まぜた二人は胸一ぱいになり六疊の間で語合つて居るのを母樣は早くもお聞になつて、誰が其麽事を知らせて與た、情ないつて泣かれましたてせう、彼時二人の心には必ず母樣の大恩に報ゐるとちかつたてはありませんか、兄樣は最早お忘れでございますか、あゝ妾は此上何も云ふ事が出來ません、兄樣も一度眞人間にかへつて下さる事が出來ませんか、も一度三年前の兄樣にかへつて下さる事が出來ませんか、母樣も妾も兄樣に捨てられてはすでに何の望もない身でございます、兄樣何卒々々一日も早く御改心遊ばされ母樣をよろこばして上て下さい、そして世間の人に學士の母、學士の妹と呼ばして下さい、妹が命に換へての御願ひでございます。

御噂で花が咲く

大阪市　辻　廣　子

御姉上樣、今日此頃の都の景色は、如何で御座りますか。片田舍でも、御情深い立田姫は、いつもの樣に、御見舞遊ばして紅葉の錦を、庭一面に飾つて下さいました、其の梢の下には、いつも御姉樣の御噂で、花が咲きますの。此手紙に一葉封じ込ましたのは、貞が御姉樣を思ふ赤き心との積りてすの。日曜あたりに瀧の川とやらへ御出て遊ばしたら、御本の栞りになる樣なのをねえ。

御父樣は御好の事とて、いつも御機嫌よく庭いぢり、御母樣は御姉樣の春着をと、機を織つて御出て遊ばしてよ、私も此頃ては自分の衣服位ゐ縫ひますの。作爺は相變らず可笑い事ばかりしますのよ。餘り笑つて御母樣に叱られます。でも、鍬を腰に付けて居ながらさがしたり、手に持つてゐる物を忘れたりするのですもの、で、御姉樣の事を「勉强サー仕なさつたら眼鏡サーかけて、學校の先生樣になんなさるべー」て、いやな爺ね。

來年は御卒業て嘸御忙しうございませう。妹のくせに生意氣な樣て御座いますが、御心配は御勉强の御邪魔だと聞いてゐますから、一寸申上ますの。さようなら。

谷底へ落た夢

大連市　林　櫻　子

敏樣は此度目出度優等にて及第なされし由、常々よりの御勉强の程と感し入申候、尙今後も怠らず一層勉强なされ度候、御兩親樣もさぞ御喜の事と存じ候、なつかしき櫻の一片御封じ込め下され誠に嬉しく、築山の櫻の下にむしろしきて隣の鶴ちやんと飯事して居る樣など思ひ浮べ獨りほゝ笑み申候、去年の春母上と敏樣と辨當持ちて天寧寺へお花見に行き歸り道に母樣待てと云ひて土筆菫蓮花など摘み／＼歸りし時の有樣など目の前に見るやう思ひ出し一しほ故鄕戀しく候、昨夜も敏樣と二人にて大洞山へわらび取りに行き敏樣が大きなのを取らんとして谷底へすべり落し夢を見、さめて後も胸は躍り何となく故鄕の空案じられもし怪我などせしにはあらずや心配致居候まゝ此手紙着次第安否御知らせ下され度候。

少女の唄も詩的

丹後　清水なお子

こま／＼と、京の春便り有難う御座いました。名のみ聞いて居ました京の名所、それを只今貴女の美くしい詩趣深い筆にてお知らせ下され、どんなに物めずらしく讀むとでしよう。妾ばかり讀むのも心ないと思ひ、母や妹にも讀み聞かせて、とも／＼に喜びました。嵐山や嵯峨の幽趣、加茂川の淸き流れにくらべてはとてもお話になりませんが、田舍の春も貴女にはお珍らしからうと思ひましたから、拙ない筆にて、一つ二つお話し申します。

御承知の通り、日本三景の一なる天の橋立も御座いま

すが、俗化して了つて面白くはありませんから申上ませぬ。
この頃は野に山に花の盛りですが、わけて美くしいのは、黄金の様な廣い菜の花畑で御座います。これを小高い丘の上から見て居ますと、白い手拭を姉さんかむりにした娘さんが、涼しい聲で鄙唄を唄つて居るのがちらほらと見へます。紅い給日傘さした子守の一群など、貴女で御座いましたら、お歌の十首位はおうけ合てす。
朝早う野良へ行く少女の唄も詩的で御座いましよう。日盛りを、青柳の下の芝生に腰を下し、詩集繙きながら、夢の様に雲雀の唄を聞くのも面白う御座います。薄靄こむる夕ぐれ、濱邊にさまよひ、沖あひはるかに見ゆる、舟の灯をかぞへ、時々かすかにきこゆる追分の一節にきゝとれるのも、愉快で御座いましよう。
申上ればまだ〳〵面白く可笑しいことが御座いますけれど、いづれ後便にてゆる〳〵申上ます。左様なら。

寄　書　文

（賞外）　加藤つたへ



天の橋立を見て

大阪市　松田しづ江

海は極く波が平かて案じた程の事もなく私等を乗せた宮津丸は晝少し前に宮津港に錨を下しました、前には名高い所の天の橋立が長く海に浮いてゐる様に横たはつてゐて、白い砂と青い松とが具合よく調和してゐるのは、丁度敷島の包紙の繪か、又は貴姉が今年のお正月に着て被入つた晴衣の裾模様によく似てゐます、私等は只珍しさうに早うそこへ行きて見たいと思ひながら甲板の上から眺めて居ますと、軈て艀船が來ましたので一同は早速それに乗り移りました、陸へ上ると何だか私等の身に翅でも生えた様にそはそはとしてきました、やがて一同は魚屋町の大黒屋といふ宿屋に着きました、何しろ餘り大きな宿屋ではありませぬので室と室との襖を皆はづして四ッの室を一ッに明けはなしてある所へ私等三十餘人は思ひ思ひに休みました、私と梶子さんと芳枝さんと一緒に座つて居ります、暫くするとそろ〳〵女中が御膳を運んで來て、やがて皆揃ひますと一同で晝の御飯を頂きました、時計が一時をなりますと一同は荷物を宿へ預

けて天の橋立へと出かけました、路は平坦て餘り遠くもありませぬ、右の方は三間程海を隔てゝ橋立が横たはり、松の木の間から橋立神社の鳥居と屋根が洩れて見えます、昔は其が陸と續いてゐたさうてすが今はその境を切りて切通しとなつてゐます、左の方は有名な文珠堂て境内は奇麗に掃除されて、彼方此方に八重櫻が綿の様に咲き匂ふてゐます、其から一同茶屋に憩ふて名物の文珠餅を食べて宿へ歸りましたのは日も西に傾いて居た頃てす、宿へ歸りますと誰から聞いたか知りませぬが、寫眞屋が當地の名所寫眞を買ふて吳れと色々以て來てゐます、私も十枚だけ買ひましたから何れ歸つてから差し上げます、今晩はこゝで一泊、明朝早々舞鶴へ出發する筈てす、何れ又其地より先はあらあら。

宿下り

大阪府　寺部君子

春とは申ながら吹く風さへも春めきやらず、庭の梅は未だ蕾もかたく花にまがひて降る雪の、いと冷めたく覺え候、御地は一入冷ゆると承り候を、如何御過し遊ばされ候や、御伺ひ申上候、私事今日歸て參り候、御姉様にも御歸り被成て居る事とのみ存じ居り候處、御姿見えず心おち申候へ共、御兩親様の御すこやかなる御顔拜しまゐらせてこよなう嬉しく存じ申候、就ては家内打ち揃ひて久し振りに樂しき團居致し度存じ候まま、私の歸り居り候あひだに、私は五日御暇を戴き居り候、何卒御姉様にも御暇戴かれて御歸り被下度待ち入候、私宿下りを指折りかぞへて待ち申し明日と言ふ一夜など嬉しさに眠れ申さず朝も常より早く起き出て皆々様に笑はれ申候、左に日記の一節御笑ひ草までに御目に掛け申候。

私が藪入の後で奥様が流しを御覧遊ばして、竹は不精者などお思召てはと其處等の方付物や何や彼と多忙しく仕て居ると、精をお出しだねと何日の間にか奥様が入らしつてほゝ笑まれるに、ハイ、イヽエとおかしな返事をすると、オホヽヽ、此頃は何だか嬉し想ねと仰有る、私は心の底を見られた様な氣がして思はず顏が赧く成つた。

之は歸る前日の事に御座候、御姉様も同じ御心に入らせられ候御事と御察し申候、都には色々珍らしき事もお在し候はん御話承り度、只御歸りの程を御待ち申居り候、先は其折りにと、あら／＼かしこ。

夢さめがちに

丹後　鹽見千代子

大雲川の下り帆霞みて、川邊の藪の鶯は鳴けども、病みてうらぶれて、哀しとゞむるにもよしなき、敗殘の子の夜々を夢さめがちに、腦の痛みや、ほの暗き殘燈の影のさゝゆらめけば、そゞろ詫びしさに泣かれ候ふかな、想はじとはおもへど、悲しきは、雲と浮び花と散る人の身の、儚き運命にこそ。

あさましとな思ひ玉ひぞ。
冬籠りせしもの、皆溫かき春の日に甦りて、草は萠え、鳥は歌ひ、人は燃ゆるが如き希望に醉ひて、前途の成功を夢みつゝ、その胸には喜びの外何物をも持たざるべし、わらははそを妬むにあらず、妬むにはあらざれども、あゝ病みては、人の幸多きが、嬉しからぬあさましき心の、起り來たるものにて候、さ候得ばわらはが胸には、寂しみに泣く子の多き秋よりも、同情者なき春の日に於て、ひとしほの悲哀を覺え申候。かゝる夜を美くしき優しき、會心の友ありて、胸裂くるまで、相擁して泣いて、泣き盡くさまほしうも、覺え申候。
淚!そはわらはの、慰めの友にて候。
梅の香こむる小緣先き、淡紅の花瓣の、ほろ〳〵と散るがわびしう候。

兄さん

伊勢　かはらよもぎ

兄さん。
お別れしてから、もう一週間になつたのね。
兄さんが居らつしやる時は、未だ蕾て居た櫻も開いたし、卵子て居た孔雀鳩も安う生れてよ。
御祖母樣は御快癒。
御注文の絹機を一昨日下して、一生懸命裁縫して居るとね、「國ちやんは兄さん思ひ」だつて御祖母樣がおからかひなさるんだもの、私、兄さんを大切に思ふのは當然だよ、と申上げてまた笑はれたのよ。
お弱いてすから御身體を大事にして下さいね、後世てすから。

隠れて書いた別封

千葉縣　松ケ枝　浪江子

昨日は繪葉書を有難う、それの着いた時に信夫が居て突然妾の手から引たくつて持つて行かうとしますから、其は私へ來たのと申しますと噓だいそれ此通り営井ノブヲとしてあるじやないかつて其儘外へ驅出してしまひましたの、本當に此頃は惡戯ばかりして手に乘りませんよ、そして半日計りは見せませんでしたが、夕方にお隣から信夫さんが御忘れになりましたと持つて來て下すつたものですから、故と信夫に繪葉書を何所へやりましたと尋ねますと、一寸考へてア、あれなら返したじやないかア、返した〳〵つて妾の呼ぶのもかまはず玄關の方へ逃げて行つたかと思ふと、モーエスに跨がつて走れ〳〵つて無闇に頭を打つてるんですもの……火鉢の側にいらしつた母樣がどうしてあんなてしやうと父樣に仰有たら仕樣のない奴だ今に新宅の壽も敗けるだらうつてにこ〳〵してみえました、それても富美さんの噂が出ると妙に眞面目になつて凝乎と談するものゝ顏を眺めて居ますが終にはきつと僕も十二に成つたら行くんだつて申します、別封は信夫が三疊へかくれて書いたのてす、何を書いたのかちつとも見せませんが必ず面白いてしやう、左樣なら。

俳句

奈良縣　中富よしみ

「天」

嫁入や落花に白きかづら橋

調子が高い、何となく其角の「明星や櫻さだめぬ山かつら」の句を聯想する、此句理想派に屬す（評）

越後　藤原法子

「地」

蠟涙の赤き流るゝ涅槃かな

此の「赤き」は最も涅槃の意に適ふ、此句自然派に屬す（評）

北海道　潜秋子

「人」

あをくと白露たもつ千草哉

或は平凡の誹があるかも知れないが、色彩の鮮明、能く爽快の感を動かす、此句印象派に屬す（評）

「秀逸」

伊賀　山村龍子

よき雛の今年も一つふえにけり

同　伊藤音子

青き踏むわりなき人にまぢりけり

白蛇へ新酒の壺に來りけり　天理　菅井女

北海の水の溫みや初鰊　富山市　小林芳枝

葉櫻に黛匂ふ美童かな　三河　房枝

小鳥さす大笹原や殘る雪　本所　稲山欣子

山門に大提灯や春の風　静岡市　加藤しづ子

氷柱おちて氷碎くる日和かな　長野縣　村上峰月

朝神樂輿がり跳ねる鹿の子かな　山口縣　空野花子

花の山押さるゝ美女の怒りかな　信濃　翠波女

春風や五十三驛汽車の窓　攝津　和久兼子

さし花の鏡にうつる化粧室　淺草　秋波靜枝

消えがての常燈明や春寒し　澁谷村　山崎露美子

川向ふテニスの庭の柳かな　長野縣　富島清子

行春を謎かけて問ふ翁かな　芝　長谷川靜枝

着替て若う見らるゝ女かな　大阪市　生田花桂女

釣り竿のたてかけてある柳蔭　福井縣　片山千里

本堂の奥ほのぐらき春日かな　麻布　小川みつ子

羅城の門に小さきいびき哉　京橋區　三好まさろ
若草や天女の衣拾ひける　愛知縣　永田舞鶴子
啼くや千鳥銀河の水の冷やかに　日本橋　森田しん子
春風や杭一本の橋渡る　紀伊　榎本千鳥
霞や干潟に貝の何夢む　駿河　清水ゆきえ
春の雨絹行燈のしめり哉　神戸市　大溪歌子
香爐すえて圖に待つなり時鳥　土佐　山中ふさみ
春姫が息づきおはす月おぼろ　福島　大原ふよ子
燈火消えて歌かく夜中の寒哉　鹿又　さだを
奈良の春猿澤の音迫りけり　奈良縣　花菖蒲
病む人の枕にちりぬ花ふゞき　神田　藤掛鹿登里
梅が香や洗ひまゐらす御硯　群馬縣　飯塚癸起子
五目飯白魚細く光りけり　大阪　菜月
春の月君王朝にましまさず　京都　宮原紫絵子
田を植て涼しき月に踊りけり　越後　根津癸卯子
門附の調子低さよ春の雨　大阪　荒川良子
公家衆の歌の會あり菊の花　攝津國　千足桂二
やぶれかご捨てられてけり穫の冬　靜岡縣　鮎澤きく子
母君がましまさばこの蕨かな　大和　花江
春寒むや繪踏の塔の晉図かな　北總　小澤てふ
床の梅活ける姿を眺めけり　信濃　鈴木靜江
深川に宿はありとや白魚賣　長生　關たか子
たんぽゝやれんげつむ子の道ついて　靜岡　秋山さわ子
下京や紅屋の屋根のおぼろ月　靜岡縣　増田糸子
思ふとち樓によりて月仰ぐ　下野　手塚たい子
菜の花のはてには畷の我家かな　大分縣　野田なるみ
はげ山に行秋の雲かゝりけり　美濃　加藤靜子
あら惜しゝこんな處につくづくし　肥前　松尾きみへ
初ゆひの頭苦にする女かな　芝　伊藤政子
佐保姫の夢やおぼろの花の月　品川　萬千田野里

測量の鐵塔に摺る春の霜　岡山　加藤波子
母の手に見はれねむりて春の雨　佐賀縣　植松きみよ
絆ぎぬに梅散る背やつぼれぐち　四谷　鴨澤ゆり子
物思ふ美人の袖に蝶かな　日本橋　吉田さく
小畫や孝女の墓に日の當る　大阪　生田みのり子
燕とぶふれに米とぐ女哉　越後　溪の月
もの買ひに島人來るや梅日和　本郷　小室靜子
雛の間やむし齒になやむ妹の顔　大阪　梅本龍子
物とへばにぐる娘や桃の花　伊豫　ふじはかま
麥畑に荻の古根や忘れ霜　熊本縣　富野かず夫
菜の花や村の寺借る猿芝居　磐城　遠藤きさ子
ゆく秋を羅馬の古都に惜みけり　伊勢　大原しづ子
月おぼろ磯七村の落花哉　上總　小川けふ子
業成りて歸る故郷の山笑ふ　和歌山　加藤重子
糸柳細雨斜に煙るかな　伊勢　原みぎわ
卯の花やすむ水白ろし乳母の家　大阪　山内溪子
小さき子の海苔干してゐる漁村かな　伊賀　關本きし
朧夜の眉すれ〳〵に女かな　岐阜縣　醉花子
蕨食て世々炭をやく山家哉　熊本　安藤政子
雨降らんとして蛙淋しくなく夜かな　長野縣　長野真子
美しう朝殺してけり青蛇　千葉縣　松ヶ枝富士枝
雲の瀬靜に入るや春の川　尾張　林美樹子
あさ黒き母の雛に興じけり　播磨　庵原みどり
群に入る支那商人や鶏合　福岡　宮野ちか女
病む人の日なたぼつこや春日和　備後　井上年子
桃咲て牛の子肥ゆる小村かな　埼玉縣　渡邊惠子
苔青き燈籠に萩のこぼれけり　兵庫縣　山本鈴子
ありたけのはれ衣をかへて花見哉　福島縣　遠宮いち子
落椿孔雀の虹にまかれけり　大分縣　工藤たまき
茶の花の軒端に咲いて夜白し　兵庫縣　桃の花
春の山都へ降たる一路かな　岐阜　かさゝぎ子

（一九五）

大船のゆらぎ出づるや春の月　大阪　濱田愛子
春雨や茶屋の亭主の長あくび　福岡縣　有吉ひふみ子
姉嫁きしらせ來りぬ花の宵　山城　廣江正枝
五月雨や鷄を炙る裏長屋　兩龍　椎の藤波
山吹や繪筆を洗ふ細ながれ　神田　よし子
山越えた五月の村にも麥秀出づ　丹波　勝山小せん
篠はらや風より走る雉子の聲　千葉縣　深山りゆう子
電車行く柳の街や春の雨　越後　堀川春子
長病の髮の亂れや絹布團　山里の女
破れ笠のくちめに萌えしすみれ哉　熊本　澄子
算盤の動かぬ珠や春寒し　相模　鍋田美代子
摘草や長者やしきのゆめのあと　沼津　筧水女
雨多き路のしげみや葵咲く　伊豫　曉子
白酒の醉をかくすや袖屛風　下野　大森うら子
垣一重桃と菫の談話かな　福岡縣　夕露
紅に庭をそめけり落椿　肥後　玉井君子
藤壺のとぼそたゝきしめのと哉　山口縣　氷室夏子
明け放つ窓をかすめて初燕　神戸　美枝女
雨ひとよ〱に春のぬくみかな　荏原　高山よし子
墓地下に電車通るや春の立つ　四谷　入重子
汽車のまど開けて見晴す田植かな　京都　田中文月
呼びかけて隱れし人や朧月　丹後　清水なを子
鐘をなう村靜かなり春の風　駿州　岡田まつ子
霞みたる山に木をきるこだま哉　相模　鍋田靜子
鶯の鳴くや椿の落ち初めぬ　筑前　島よろづ
大釜に蕎麥煮る湯氣に春日さす　靜岡　原田秋子
牛追ひの土手に眠れる眞晝かな　靜岡縣　青木靜山
草葺が瓦になつて桃の花　横濱　小野美都子
雨に濡れて接木を見舞ふ畑哉　熊本　加納薔薇子
白酒に醉ひたる顔や小さき人　岩代　泉白露
栗壺に五人　花の宴哉　奈良縣　春野蓮子

妹の帶も色よき梅の花　神保　おみな子
春の夜の机や榮華物語り　下谷　高田ふみ子
梅壺に琵琶召されけり朧月　芝　眞崎靜子
苔清水むすぶや小さき掌　兵庫縣　中島入重野
花すみれ摘みのせてあり乳母車　靜岡縣　辻村かと子
小雨して垣の山吹道に臥す　長野縣　西村屋ゆき子
春風に野を吹かれ行群羊　沼津　笑村
筒切の大根汁や夕時雨　若狹　澤田ひさ
失戀の今は畑打つ男かな　栃木縣　草方華子
吟聲の野末を過ぐるおぼろ哉　大阪　今西こゆき
のぼれ〱海見ゆるまで春のやま　石狩　小田たみ子
似た家の門に又似た柳かな　大阪　加納なでしこ
大寺や啄木が鳴る冬の風　大阪　辻廣子
お隣の琴なつかしき日長かな　丹後　鹽見千代子
春の月大洋のふれにかゝりけり　山城　箕浦梅子
煩惱の梯も咲きぬ東大寺　丹波　小泉靜子
春の宵わかれて歸る繪提灯　上毛　鈴木白蘭
湖を渡る舟より見たる春の月　京都　武田つぎ子
梅一輪かんざしにして登山かな　長崎　一瀨みどり
菜の花に一群通る生徒かな　大阪　松田しづ江
そこからもこゝからも雨後の胡蝶哉　神戸　井口園子
裾を取る紅溶く水のぬるみ哉　京都　山本修子
日を選みつくして雨の花見哉　埼玉縣　飯塚たい子
凧に吹き散らされし小島かな　埼玉　宮田政子
よき人の戀やつゝみてころもがへ　長野縣　内山けさよ
櫻の香ねむ氣をさそふお齋すぎ　徳島縣　西野ひさし
郭公病む母見舞ふ夜舟哉　下關　梅田糸子
わび住ひ杜芽をだす春の雨　鹿兒島　川崎しま子
琵琶を彈く若き女や夏の月　廣島縣　國信操子
花の雨京に歸りぬ茶筌賣　徳島縣　西野花びし
灯を消して月の櫻の宴哉　東京　小池花鳳女

短文

「天」上總の春

上總　ひさ子

龍の都から東風が吹いて九十九里の濱に浪音の和む時圓い上總の山々は皆翠の被衣に蔽はれます。鈴菜花さく野の三里、男は斧提て花の木立を分入り、女は鍬執て菫の露に下立ちます。晴れた日西と東の白帆かげ載せて來る玉手函には何んな幸が籠てあるてせう。

幾代の香やたゝむらむ

「地」春の忙しさ

德島縣　西野ひさし

さあそろ〳〵暖くなり出したので、私の身もせはしくなつた、先づ花見が梅桃櫻、汐干狩が少なくて七八度、摘草も五度や六度は行なけや、それから山へもワラビやイタドリ取に、それから舟遊び、あらまだ松林へ松露取にも…こう思ふ内も、只もう心がそわ〳〵して、居ても立ても堪らぬ。

洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家

『人』草取り

越後　五十嵐富美

姉さんと二人て、脊戸の畑に麥の草を取つて居ました所へ、突然大きな蛙が飛び出して來て、姉さんの手の甲へのりました。あらつといつて振り落すはづみに、鎌に指を切つて綠の麥を赤く染めましたから、妾は早速冠つた白い手拭を細長くさいて上げました。

宮城野、しのぶ



『秀逸』

玄關　はる

毎朝お琴の稽古に參りますとき、高原さんの御家の前を通りますといつもお玄關のところは重ね草履が三尺位はなれてぬぎすてゝあるのが格子越しに見えます、高原さんといふのは去年卒業なすつた太田さんの今度の御名です、御夫婦限で御氣樂には違ひありますまいが私は何だか御氣の毒の樣な氣がするので御座ます。

何う云ふ意味のお氣の毒？、

春の夜　鹿兒島　橋田なみ子

欄に凭れて向ひの窓の琴の音をきく、無心の雲は今し軸をてゝ流れた、濡れ紙に畫いたやうな月が夢のやうに庭の糸櫻にかゝつて風もないのに折々とヒラ〳〵散る、紅羽の蝶の子の生れるのも牧場の小羊が美しい夢を結ぶのもこんな夜であらう。

「大原や蝶も出て舞ふ朧月」の趣

死　土佐　大和田靜子

世の人々は死といふ事を非常に怖れますが、死はたゞ經歷のをはりでありまして、靈は之をきりに、淨いきよい天國へ歸つてしまひます、そして後に殘るは罪もない體ばかりでありますから、私は死は實に美しいものだと思ひます

信仰の力

衣がへ　青森市　村林矢須子

窓から見える向ふの山、先日薄紅色に模樣は花、裾は霞のお召を召ました、室毎は明けはなされ二階に種々の小袖が、干される頃にはあのお山は、緑色の薄絹を召ます、天長節の頃には、黄の落葉と紅の楓の模樣のを召ますし、お正月の頃には、眞白な一丈もある厚い厚いお召と着かへます。

東山は櫻の滿開

父樣の御身　天鹽　相原壽美子

父樣が海馬島へ航海なさつた翌日から海は荒れ出して今日で丁度二週間目です。父樣は御歸航なさる事が出來なくて島に入らつしやるのでせう。あゝ海の神樣もお情あつたなら、もうおしづまり遊ばしても宜しいでせうにと夕方になると岩に碎くる荒濤を見る。

恐ろしき海獸、流るゝ氷山

御嶽山　愛知　富　美子

私は毎朝早く起きては北の窓を明けます。其の時一番

眞先眼に付くのが信濃の御嶽山です。其の度毎に、私は如何して彼んな大きな山が出來たのだらうとおもひます。

若へろ人

鼠

岡山縣　田鶴子

過ぐる夜生捕にした大鼠殺すも何だか可愛さうと母さんと相談の上小さな鈴をつけて放してやりました、處がどうしたのかあれ程澤山にゐた鼠此頃では影も見えないやうになりました、然しあの鈴のついた一匹だけはどこへもいきません。

夜中、天井裏の鈴の音

寮舍の窓

澁谷　山崎幾美子

旭がうら〳〵と昇ると、白衣被いだ富士姫は、薄紫に掛いた裳裾を。澁谷の森に懸けながら、氣高く立つのです。夕月が朧ろに匂ふと、窓にもたれて居る頬を撫てゝ行つた風は、庭の櫻花をはら〳〵と散らします。而して此の寮は名を壽榮、所は常磐松と呼ぶのです。

實踐女學校のあたり

（賞外）　加藤つたへ



望の數々

岩代　波留子

妾しは兄様に妹に二人の弟が有ります。或夜お父様にお前達の目的は何であると聞かれました。其時兄様は醫學で、妾は教師、妹は實業家、弟は軍人、其次のは百姓が一番好いつて答へました。

其次が無邪氣

少女ごゝろ

神戸市　竹叟文子

雪が降ると思ひ出しますが、小學校へ通ふて居る時分、其日は大雪でした。友達の門に傘がひろげたまゝ置いてあつた、其紫の色が雪に寫つて居るのを見ましたが、偶と紫の傘が欲しくなつて、譯もなく厭になつて自分のはすぼめて終ひました。哀れな少女心です。

お伽噺になりさう

はなればなれ

函館 藤本鳥羽子

只今長の姉は下關に居ます、兄が肥前の大村に次の姉が山口に、私は此函館に妹はやはり下關に、弟は北海道通ひの汽船に乘て居ます、末の弟が一人兩親の傍に、兩親の居處は周防の岩國、あゝいつ親兄弟一つ處に集つて愉快な顏が見られるでせう？。

京童謠ふて曰く親は他國に子は島原に櫻花かやちりぢりに

雁風呂

靜岡市 大石貞子

昨夜妾が、暗い灯の下で針仕事をして居ると、雁が大變濱の方で啼きました、最早そろ〳〵暖かくなつて、寒い國に歸つたのでしよう。今朝妾は濱邊へ汐木を拾ひに行きます、其の汐木で風呂を焚いて、雁の供養をするのです。

秋雁の渡る時、小さき木をくはへ來る、是を海上に浮べ、其上にて羽の勞れを休む、其木を、南部外ケ濱邊に落し置き、又春其木をくはへ歸るに、殘れる木多くあるは、人に捕られ又は死せし雁のあればなり、故に其を拾ひ、供養の爲に風呂を焚て諸人に浴せしむと云ふ。

白菫

攝津 寺部君子

私の方に菫野と申て廣い草原一面に菫の花が咲くのです、お節句には皆々お辨當を携へ菫の花見に行き升、私も去年參りまして多くの中から只一本の白菫を見出でまして持て歸て鉢植に致しました、眞白で、すーと仕た處は紫のより一入懷しう思ひ升、今年も其が早く咲くのを待ち兼ます。

東京の郊外に菫野なきをかなしむ

『言海』

山口縣 深山鶯

私は言海の爲めに餘程益せられたと思ひます、第一に假名遣ひを知る事が出來、第二に漢字の分らないのを知る事が出來ました、それだから文を作る時は勿論、新體詩や小説の振假名を附ける時などには、最も必用であります、それで私は未だ言海を求めて居られぬお方に、飽くまでお勸めいたします。

一册使ひくづすと又一册

我村の休日

馬野ゆか子

私の村には澤山休日があるんてす、先づ一月は三日まて、三月廿四日が鎭火祭、四月十二日が氏神祭、同廿四日が鄉社祭、五月一日が靑芽休み、六月廿五六日とが五月休み、七月七日八日がすゞみ、八月十五六日がお盆休み、九月一日が八朔休み、とて其外夏良き雨

降れば雨悦びがあります。

働く者には休みあり

御來葉

沼津　敦野

同じ東京から戴くお手紙でも時子樣と從弟の節さんのは朝の配達で、花子樣のはお晝、政子樣のは夕方で春樣のは夜の最終、そして峯代樣のは何時も定なしと、コー定つて居るのです、私は思ひ升、此受取る時々の異のも御各々の御境遇の相異から來るものですと。

つまり出す時刻の一致

花簪

品川　風間晴子

恒子樣と兩人で、南馬場で電車を下りて、五六丁行くと妙華園に出る。牡丹滿開と、書いた看板を左へ庭に行くと硝子で製へた家が有る、此處が温室なので中へ入ると蒸とする、花簪を御揃に切つてもらつて室を出る、微温い風が熱つた頰に當る。

花も一品

古い本

京都　操子

ふと目についた本が大層氣に入つたので、古いが買つて歸りました、次又次ととりひろげる其トタン、ひらり、と落ちた薔薇の一輪、眞紅な花、あゝ誰の手にはさまれたのでせう、今は色も香も褪せて居りました。

誰が魂の籠みたる

郵券

本郷　平島すま

世界の郵券を集めると帝王君主、景色、紋章、動植物など中々面白い。紀念切手には戰爭、武器、行列、紀念像、等當時の歷史を想起さるゝので愉快だが、是等切手には滑込がある、英は冠、米は字、露は波線、印度は星、支那は蝸牛其内可笑のは亞然丁ので、目鼻口ある太陽がパアと云た樣に見える。

郵便博覽會に賞牌を受くべきもの

同情

周防　紫園女

裏の藪の梅が滿開だと聞いて、私は今日五月振に陰氣な病室を出て郊外の淸い空氣を吸うて氣が晴々しました、野も山も何となく春めいて 私 は今日程自然の美に心が動いたことは甞てありませなんだ、それから歸つて 弟 の飼つて居る目白鳥を放してやりました。

二つの命が甦る

文壇の花

麹町　高岡けん子

私は毎月々々新聞配達人が、女子文壇を山の様に持つて配達して居ると、取る手遅しと口繪を見ます。なぜ口繪を先に見るかと言へば、今より七年前に仲好の友と分れたきり、幼なくて、文の交換さへないのです、今では詰友の一人と成つていらつしやらないかとおもつて。

困るかも知れません

月暈

若代　松の根本

私の地方では、お月様の雨笠と曰ひまして、此笠召せば、乾度雨が降ると例へて居ります。彼の中に星が一ツあれば、一日經て降り、二ツあれば二日おきて雨が降ると申しまして、夏の日照などに欺ばるゝ事は一通りでありません。

破れた時はほろほろ雨

雀

攝津　森井小草子

妾が大切にして居る鉢植の梅の木、今年はつぼみが一ぱいつきましたので、嬉しくて〳〵、お天氣の好い日に裏へ出して置きましたら、いつの間にか雀が來て、つぼみを皆食べて仕舞ました。まあどんなにがつかりしたでしよう。あゝ、雀は可愛らしいものだと思つて。

吾切られなかつたが幸ひ

兄様へ

深川　はつき

入學試驗まで今から廿一日と三時間です、今年こそは前回の遺憾を雪ぎます、リボンも指輪も、少しも欲くはありません、只、合格の御報せを、上げたいと云ふのが、何よりの望でございます。

御飯食べる間も惜しく

霧

東京　不佐子

えらい霧だ。「野燒の煙がえらいな」と弟はいふ。沖の方から次第々々に縮んで來る。「風が怎うだ」父がいふ。眼がちら〳〵してこそばゆい樣な心地。「まあひどいなご」これは母だ。行手の松並木を、子守が小さな男の子を連れて見えつ隱れつゆく。

風か日和か

雨の日

信濃　山本　操

夜來の雨のしと〳〵と降りて糸の如く路行く人の傘の様々蝙蝠は官吏學生蛇の目は艶なる者大文字の番傘

は商店と見るべし母衣かけた車の中のぞき顏に飛ぶは當世の鳥燕なりけり。

一諧寫眞

苦學生

京橋　藤田操子

妾が起きた時にはいつも乳が配達してあるのですが、今朝はどうしたのだかまだ來てゐませんでした。洗面に行かうと戸を開けると丁度乳屋が來て、妾も禮子をとつてお辭儀をしたので、ふと帽子の裏を見ると忍耐と書てありました。此の人は夜學校に通つて居るさうです。

此朝、乳の甘さ

子育て鍋

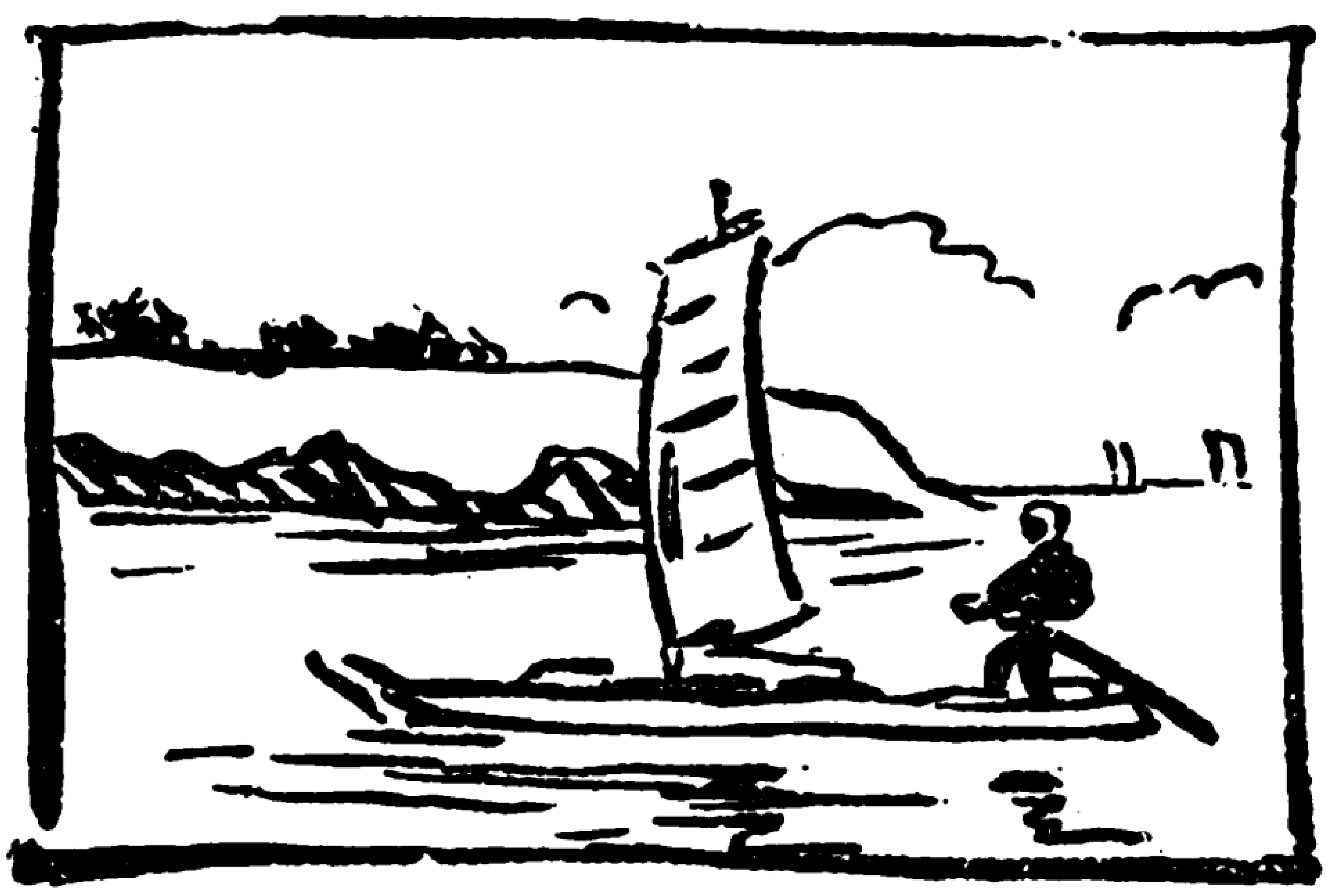
静岡　田もと

生れても生れても又生れても、どうしても育なかつた家の子でも、是さへ被せれば乾度育つと言ふ誠に不思議なお鍋が私の故郷にございます、其代り是を被せた以上は、鍋のなの字を取つて名を附けなければ不可ないのです、從姉のお直様お友達のお仲様お夏様お鍋様等皆之を被つて成長した人達です。

筑摩祭に似て非なり

然文

（賞外）　井上さわ



初戀

豊後　近藤瑠璃子

本誌の短文欄を見かけて、開いたまゝ机の上に置いてあつたら、今まで雜誌など見た事のない妹が學校から歸つて、一心に默讀するのです。暫くして「姉さん面白いね假名がついてるから私も讀める。」嬉しさうな顏。もう此頃は教科書は二番。熱心の愛讀者と成りました。

「初戀」とは好くつけ得たり

私の仕事

長野縣　矢口貞子

私は朝一番早く起きて御飯を焚きます、そして八時には學校へ行きます、夕方はお母様のおてつだいをいたします、夕飯をすませてからは妹をねせ付ます、妹が寝てしまうと私は起きておさらへをします、それがすむとお裁縫を少しして十時頃床にはいります。

それからそれと

今日

大阪 春子

前に並べられた澤山の衣裳を見て姉さんは、お嫁入がいやだと云つて泣き、私は種痘がいやだと云つて泣き、妹は弟に人形を潰されて泣き、弟は學校がいやだと泣き出す、只笑つて居るのは床の間の大黒樣ばかり。

大洪水の如くなり

好きなもの

千葉縣 關 たか子

半開の薔薇、採集帖の菫、佛蘭西から御土産の繪葉書、御友達の寫眞、雪の降つた日の大福餅、暑い時の氷、すじのついた御袴、みがきたての靴、鷄の雛子と内の畑のいちご。

佛蘭西繪葉書と大福餅とは何うしても調和しさうにない

家路

埼玉縣 萩原 耕子

眞圓な月が、黄色く東の空にのぼつた。黄昏の迫つたのも知らずに、遊んで居た子守らは、此時家路に就いた。その唄は淸う淸う、白梅の樹の間に殘つてゐた。

可愛い坊ちやんが、水飲みに來たら、銀の茶碗に水晶の水を……………

[illegible]はつくりすぎた

花と理想

丹波 白梅女

妾のお友達は三人ですの。花枝さんは菫、千代子樣は櫻、芳子樣は白薔薇がお好き。それで花枝樣は歌人の許へ、千代子樣は海軍士官の家へ、芳子樣は若い詩人の妻に嫁きたいと、常々云つていらつしやいます。

菫、櫻、白薔薇、花はお好みのまゝ

卯年生れ

野の花

大好な御祖母樣も、やさしい御母樣も、私も可愛い妹の美いちやんも皆卯年生れですの、而も私は、畏れ多いことですが、富美の宮樣と同じに二十四年八月七日に生れました、そして私は未來はやさしい敎育家になりたいと思つてます。

生れた日が辱しめないやうに

私のしくじり

澁谷 鎭子

今日は兄樣のお友達が大勢ゐらつしやつて大さはぎ、私はそつとのぞいて居りますとどうしたはずみか、からかみがどんと向ふへたふれました。ばかッと兄樣のお聲、皆樣はどつと笑はれました、私はまつかになつて自分の室へ逃げ込んでしまひました。

[illegible]が[illegible]るまで[illegible]匿れ

此時計　　和歌山　清　子

此間、故郷の父樣から小さい懷中時計を送つて下さいましたの、皆樣が持つて居るであらうからつて、併し私はまだ其様なハイカラでありませんから、恥しくてよう掛けてゆきません、ですから長く机上に友として、もし勉强に倦いて怠る心の出た時には、これを見て、戒としやうと、思つてます。

今昔　　下野　草方華子

お江戸見物が一週間。
伊勢參宮が六十五日。
とお婆さんの話。
今は東京へ、一日二度の往復をする！。

歌がるた　　丹波　夕ぐれ

學校では、小倉百人首を禁じられてをりますから、私は今年から、女子文壇和歌入賞の方のを當てかるたを作つて居りますがもう六つばかり出來ました、皆樣もお作りになつてはいかゞ？

妾の客間　　信濃　翠波子

東の窓を開けば下水溝の惡臭が鼻をつく、其前はお寺の庭で石碑が累々と立つてゐる。南の障子を押せば土蔵の板壁、西と北とは長屋続きで、而もたつた四疊敷の破壁、鉢窓した角火鉢の右には歯の欠つた古机が一つ。上には？『寬風戀風』……。

その瞬間　　伊勢　野菊

先頭二階の教室にて教授中突然ひどい音がして地震がいつて來ました。すると二十六人の生徒は、一齊に先生!!!と叫んで、私の身體へ、縋り付きました。あゝ、私は、此時こそ、眞個に此の生徒と共に死なうと覺悟をしました。

新學期　　加賀　中山つゆ子

[illegible]

今日は、各學校の新學期が始まりました。喜ぶ頬、悄然として居る學生、莞爾した子、不機嫌な顔した生徒、一々私の眼に映じましたが、此一日に寫つた學生の顔は、其人々の勤怠の鏡でした。

淋しみ　　豊後　加納豊子

幼少い時から大勢の家内の中で、幸福に育つて來た私。此春始めて父母と、身にも變へられぬ程愛して居た小弟とに離れまして、生れて十九年いまだ嘗て味ふた事のない淋しさを感じました。

初午　　紀伊　田中麗月

毎年舊二月の初午此の日は我家に程近き觀音樣詣でに近在から人が澤山出ます、隨分着かざつた人もありますが、年に一度の今日をたのしみに小供には木綿ながらも新らしき着物をきせて、夫は背負ひ妻は後に從ふて來る人々の心が一ばん美しいだらうと思ひます。

わが女子文壇　　兵庫縣　田中恭子

日に月に品質こそ下れ、物價益々騰貴する今日、其品質ともみるべき記事は回一回毎に愈々進歩して、然も發行以來殆も價の上らないものは何でせう？私は世の中に是程安い、而して多くの人の大慰藉或は親友となるものは他になからうと思ひます。

同情　　下總　松崎きち子

妾の學校の入學試驗も、明日限りとなつた。四時過ぎてした、書記が成績を張り出しますと、許多の諸娘は人波よせて眺める。あゝ妾、と頬赤らめて退く一人、復た小戻りして熟視したらしいが、俯向いて萎れた姿。恥しいが妾もこんな經驗があつたの。

夜爪　　上總　古山香花

明日は鎭守樣の御祭りなので、ランプの側でパチリパチリと爪を剪んでゐると、スルリと障子をあけて、お母樣が這入て來たかと思ふと「なんだれ背爪剪んで」と、だし抜けにいはれたので拇指を半分剪みかけたが

迯ぐ止める、隣りの間でお祖母様が夜爪切ると狐に迷されると、昔の人おいふよ。

初奉公

神戸　櫻井時子

私の地方では年頃に成ると鹽踏と云ふて下女奉公に行く例です。私も十八の春初て水仕に行きました、冬は愁う御座います、水道の水は手を切る様に冷く、霜の多い朝等は手が凍えて思はず過ちをします其毎に主人に叱られました。唯他人の飯を食な駄目だと云はれた母様の言葉が身に浸みました。

貯金の使用

相模　鍋田美代子

私の村は家が五百戸ばかりあります。そして毎日一錢づゝ貯金し年末には千八百二十五圓ばかりになります。之を集めて村費とし學校や道路などの事に使ひ、餘つたものは水難や火難などに困る者に惠み與へるのです。

衣裳の模様

伊豫　曉子

私の着物や帶を買ふ時は必つと母様と二人で柄を擇りますが、否だ〳〵と思ひ乍らも母様のお見立て仕方なしに買つておきますと、終ひには好きになります。けれども實にいゝ柄だ好きな柄だと思つて買つて夜れないて縫つたりした物でも一時好きな計りで暫くすると嫌ひになつて終ひます。

箱

熊本　澄子

私は、大きさが、反物の入る位の箱を以てゐます。この箱には、學校の卒業證書や、無缺席、優等の證、教員の免許狀など、證書を皆入れてゐます。それで、此の箱の中を見たら、私の履歴や、性格や、職業など調べて、知れるので、私にとつては、大切な箱です。

子がやし

周防　熊野縫子

時色めりんすを様がはて日和ぼつこがてら妹の袖にと縫つて居りましたらこつ〳〵と屋根の中で親雀が、子おやしをして玉をめいて居ります（おゝ愛らしの雀よ汝も永へに今日をわするゝな）と其夜私も後日の思出にと、認めました。

我家の前通り

淺草　靜女

私の家の前は年中車の音が絶えた事がないと云つてもよいのでしよう、夜になりますと吉原行の車が夜中しきつて居ります、故に田舍の御客様がお止りになると騷しくて寢られぬと申します、私等は馴れたせいか車の音など少しも氣がつかないくらゐです。

つらゝ

越後　志賀みよ子

座敷の外の軒に幅二尺丈五尺位のつらゝが下りました私が、朝椽に出て深呼吸する時など、大陽がキラ〳〵と其つらゝに輝いて、宛然水晶の屏風を立てたやう、其美しさ神々しさ、到底暖國の御方は夢にも想像が出來ますまいと思ひます。

春の雨

靜岡縣　國持幾美子

細い糸の様なしつとりとした春雨が、音もなう、しと〳〵濺いで居る、さんざ待たせて待焦れた、庭の海棠が笑ひ出した、下の家でトン〳〵するは義ちやんの箱細工する音、家の平吉は軒下で薪を割つて居る、御母様はまあいやな事、齒を武器に、染めて居ります。

鶯と妹

富山縣　安田綺子

今年五歳の妹鶯籠に向つて鶯鳴いて御覧チイ儀と……鶯知らん顔して彼處此處へととび居る妹立腹して大きな聲にて鶯の馬鹿……とドナル折柄ホーホケキヨと一聲……私は思はず聲出して笑ふと妹顔に紅葉をちらしてアラ……姉さんイヤヨきいて居たの……。

嫦娥

兵庫縣　桃の花子

東の空がうつすらと黄ばむだ。と思ふとだん〳〵濃くなつて、やがて薄紅に彩らるゝよと見ると、丸まるい盆の月が、おゝ嫦娥が出るのだ。悠然と昇つて行くにつれて、近くの山から――谷――野ホーと霞んだ樣が夢の國の樂園の繪卷物を展げる樣、アラ嬉くて嘗の音。

乞食

鳥取市 上山千重子

軒端々々に物乞ひて今日の收人五錢と六厘、手かごの中には母がしるしの野の石に捧げるおにぎも殘つて居る。私は今日も野の石のそばに一夜をあかします、そして五拾錢の貯金が出來たら辻占でも賣つて、乞食ばかりはいたしませぬ。

雀の巣

愛知 紫雲女

掃いても〳〵汚れるのでなぜかと思ひつゝふと仰いで見ると、あら軒裏に雀が巢を作て居る、一筋づゝ藁やごみを咬へて來る、まあ根氣のよい事、其のまゝ許して取るのをやめました、何日か可愛い子が育つてからにしようと思つて。

お庭

根岸 角谷春子

私の宅に百坪程の庭がありますの、秋になりますとコスモスや千鳥草やつくばね草等が一杯に咲いてそれはそれは美いよもう近々種を蒔かなければなりませむから御父樣は種をまくつて一生懸命肥料をやつて下さいますのよ、でも之が御父樣の役目よ……。

私の覺悟

長門 原田春子

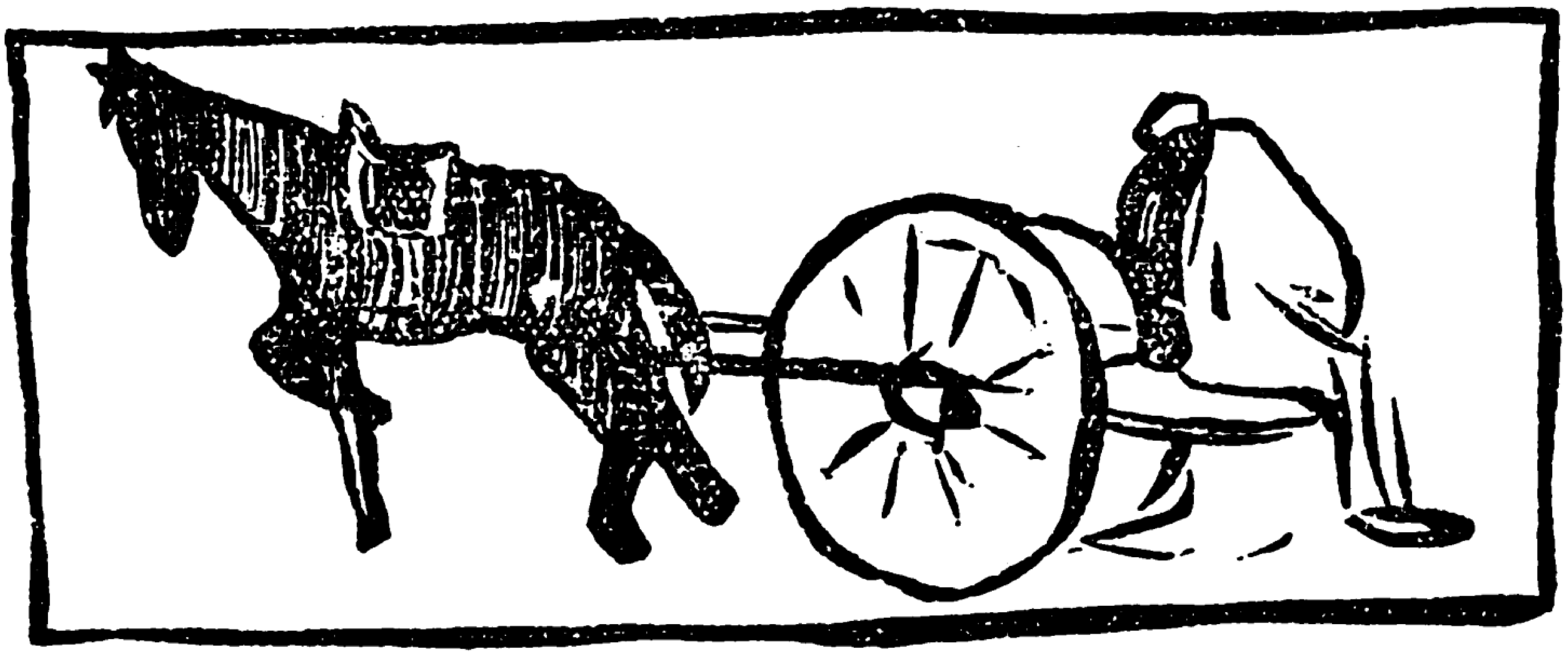
お味噌や漬物の監督を能くする婦人は乾度家政が上手でお臺所や便所を清潔にする婦人ならば萬事に拔目なく子女の躾もよい、また、衣を綺麗にすればよい子を持ち先祖を大切にすれば子孫が榮えると、母樣がいはれました、私はどれも〳〵守らうと思ひます。

海苔採り

新潟縣 稻葉媛子

十二月の末から、二月の始めといひますと、寒さの盛り、殊に、北國海岸は、非常なもの、強風で、身は切られる樣な朝、岩の上を見ますと、赤いたすきに、ほうかむり、節面白い歌に、聲の競爭、斯うして、一寸出ましても、五十錢位の收入は、わけないそうです。

（賞外）　渡邊春子



叩頭

本郷 朝井千とせ

どうせ沒書だとは思ひ乍も若しやと目指すページの終の方から一枚二枚三枚繰つて「アラ」と一聲、それは自分の名が受賞の内に在つたからで有る、て浪打つ胸を押へ乍ら一番先に評を見てそれから自分の文を一通り讀だ其の時の嬉しさ、思はず知らず撰者のお寫眞に叩頭を任ました。

野の父

大阪市 山内溪子

あゝ最うお父樣は野にお仕事に行れた、さあ、私もお父樣にお辨當を造らへて、持つて行きませう、とそれから、澤庵、三年づけのお香物を切り、そうして、煤黒いどびんを持つて、畑に行きました。

櫻湯

麹町 横田愛子

無惨！咲いた盛の花瓣を摘み取られし庭の八重櫻は、四斗樽の漬物桶に花の山、涙の花をペラ〳〵と振り掛けられて重い石の下に恨みを呑みぬ。軈て青葉の夕虫の啼音の傍に色も床しく香も高く、湯呑の中の白湯に浮いた其姿、一つ召食つて春の行衛を偲び給へ。

樂しみ

東金町 田波貞子

片田舍なる私の里も、日に月に進む世につれて、此頃では大層賑しゆうなりました、殊に今年からは縣立の高女も建ちますし、眞實に嬉しうございます、あゝやがて私が白髮になります迄には此の里も如何に變るでせう。

寂寥

丹後 鹽見千代子

しと〱と雨の降る日です、ほころびかけの梅の、しめり香が、重々しう漂ふてゐる椽先きに、しよんぼりと立つて、何處ともなく街を眺めてゐますと、病んで未だ十日にもならぬ、今日の心に、深い〱寂寞と、煩悶とが、心から起つたのであります。

曉色　　信濃　松ケ枝

東の空が青白く、白み初める！と見る間に山際が橙色と變り、其の上が黄色、紫、紫紺と成て、後は一面青く〱西の端迄、其の中を縫ふて明方の鴉が二羽！。

日記の中より　　愛知　岡本舞子

病の床に呻吟しゐる友への見舞状、過ぎし日曜の起居を問はれし返事等認め終り、いざ縫さしのお單衣でもと日當りのよい南向きの椽端に持ち出て靜に針運びつゝ耳を澄ますと、風の吹き廻しか波の音が手に取るやう、續いて地曳網の眠さうな掛聲まで間近に聞えた。

雛御殿　　麻布　志津江

引きめぐらす小屏風に灯ゆれて、華やかなる雛の御殿は、今し賑しきうたげの最中。白き御酒には、緋桃浮べり。樂しう響く鼓の音に、一さし舞はむ舞もがな。冴う澄みたる笛の音に、高く歌はむ歌もがな。紺の房長き檜扇に、恥らひませる后の君を、興がり給ふ若殿の、小さき冠も傾けり。

山吹と卯の花　　信濃　堤幸衛

山吹の花は輝く日の光の如く、卯の花は澄める月のかげに似たり、山吹は水清き小川の邊などに枝もたわゝにさきたるがをかしう、卯の花は山里の破垣などに匂ひこぼれたる、あはれなり。

往來　　尾張　杉江さく子

暖かい入日を障子越にうけて、其穴から道通る人を眺て居ますと、始めは與作さん、つゞいて此頃から隠居して居なさる村長さんところの秋枝様、呉服屋の番頭さん、隣の白犬、子守、ほーかい屋、其後から時計屋の子僧が時計をせおつて肩の上でチン〱させて行きます。

ポストの中　　靜岡縣　青木靜山

今しもポストの中では大話で眞中に座を、しめた女子文壇は隣の少女界に貴女は何處まで、私上海へ參り升の、まあ遠方ね、等と話をして居る内にガタンと音がして、まもなくハイカラ繪葉書が下りて來た「ヤー御機嫌よう」文壇は大きな聲に驚いて見ると交換としてあつた。

金山の欅　　上毛　大沼そめ子

私の里で一番大きな木と言つたならば、金山の欅でしよう、その昔、新田義貞公が御城を築いた時、御手植ゑになつたのだとか云ひまして、今は當時注連が張つてあります。廻りは二十五尺ばかりで、苔の生いた枝には、夏になると蟬が絶えた事はありません。

寫らぬ化粧　　盛岡市　米澤白桃子

顏や姿など鏡に寫るお化粧も女には大切なれど寫らぬお化粧をするのがもつと大事と何時も母が斯う申します私は其意味を解する事が出來ませんでしたがふと心の化粧!!!といふ事が思ひ當りましたのでそれからは毎朝寫らぬお化粧をして居るのでございます。

賤の女　　福島縣　原しづ子

今朝も隣の夏様が稽古に行く、夏様の實家は極貧乏で裁縫等習へる身分でない、標緻の好い所から村一番富豪の總領の妻となつて歳が十八で十二三の子兒と共に雑布縫から針道を習ひ始めたのである妾は夏様と同じ境遇になれないのが切ない矢張貧乏女で薪拾ひをして居る。

炭燒女　　芝　長谷川靜枝

煙りの登る所を目的に、雪深い山奥を、明日を知らぬ運命の綱に引かれながら、彷徨ひ歩く炭燒女のすがたを見て、世にはこんな不遇な人もあるかと思ひました。

秋　　麹町　中谷文子

今日は臼搗りてあります、朝早くから起きて六人の雇人に朝飯を食べさせますと一ぷくして六人の男女が歌に拍子を合せて搗り始めました、其側で母さんは笑顔ていらつしやる。

好天氣

南品川　萬千田野里子

床についてから今日て三日、箪笥の上に積んてあるまだ袖だゝみの儘の梅見に行た時の着物と張た物とが氣になる、何故早く仕立なかつたらう遊んて居たらう、あゝこうしてれて居るのが實に惜しい、今日も好天氣障子の中程に日がさして庭には鶯の聲がする。

訓練要目

信濃　白井須賀子

私の學校では生徒の訓練要目として運動、勤勉、柔順、友愛、清潔、恭敬の六個條に分かたれてあります。て毎月初の日の朝生徒は各室に集ひてこの六個條を守る樣にとのお話をうけたまはりますがやはり己に克つ事なき弱者て實行こんなんてす。

京の威上

京橋　三好まさる

香水の匂も知らずに黒木綿の筒袖きて、國の女學校に通つてた私が上京して靈たのは、學生の華美に流れて居る事て私は藤原氏時代の事どもが思ひ合はされて悲しくなりました、吁我が敬する在京の諸友よ、學課を他に化粧に浮身をやつす妙な人となり給はぬ樣に御祈り申上ます。

鶯

下谷　細谷琴子

佃　文



（笛外）　杉浦豐子

母樣は針仕事の手を休めて、ほゝ笑みながら、耳をかたむけなさる、私は不思議に思つて、何？母樣、と伺がへば、靜かに、と手で私をおさへなさつた、此時何處からか鶯の聲が、ほうほけきよう。

幼き弟

名古屋市　鵜飼瑾子

姉ちやん！と突然抱きつかれて、驚いてふり返つて見ますと、まあ秀ちやんが？妹の室から持つて來たのてせう、繪話の本を片手にさも得意さう……お蔭て折角浮んだ現象も滅茶滅茶になつて仕舞ひました。

貯金函

靜岡縣　鹽澤さく

私の袴を買ふつもりて毎日三錢づゝ貯金して居たの、末の弟が貯金函へおまんぢうの皮をつけていたものだから鼠がかぢつて折角ためた、錢をみんなおとしてしまひました、それから殘念てすからねずみとりをかけましたが命がほしいと見えてかゝりませんてした。

嫁が君

廣島縣　國信操子

私のお土藏の中には昔の糸車があります、毎夜十二時頃になると、ぴーんぴーんと鳴すものがあるので妹等は何だらう、と恐がつてよく眠る事が出來ませぬ、それでお父樣は昨日の夕飯の後に一個の鼠落に鏡餅をつけて糸車の元へ据えて置きますとそれつきり音がしません今朝行つて見るとそれは／＼大きな鼠てした。

氣質の變化

福岡縣　細川村雨

昨年の暮お嫁に成られた、友達の久野さんが正月に里あるきにお出になつた、一寸遊びに行つて色々話して見るともう奥様じみて澄まして居らつしやる、ハイカラ姿でテニスの選手やなにかに行つて居られたあの活潑な氣質は何處へやら、誰もあんなに變るでしようか。

嬉しい便り
大阪市 松田しづ江

妾は未だ東京を知りませぬから是非共今年の春は東京へ行きたいと小石川のお父さまにお願ひしました、そんなら四月頃は氣候がよいから櫻が咲く時分になれば知らすから來いといふ御手紙がまゐりましたので、妾は思はず手を叩いて喜びました。

妾の日課
長門 新田ひし花

毎朝だと六時頃起きます。臺所のお手傳をして朝飯を濟ますと、弟妹等を學校へ送つてやります。それから自家の手傳やら縫物やらて、日は暮れて了ふのです。暇の時は大好きなお本を出して讀み、また風琴など奏てゝ樂しみます。夜は缺かさず日記をつけます。

春の室
京都 濱部風窓女

用が濟いたので休む暇も無く筆を走らして居た私はホツとして筆を擱きました、麗らかな暖い春の日光が机の前の障子に映つて傍の桐火鉢には佐倉炭が紫の焔を吐いて居ります、銀瓶からはシン／＼と白雲の様な湯氣を天上に吐き出して居ります。

悲しき曲
大阪 楠ともゑ

「さらば、擊つも擊たるゝも、戰のならひと覺召して……」東に西に幾星霜、鍛へに鍛へし我腸も、九寸の刄の重きを感ずる。心亂しと眼を開けば花ならぬ紅の花、薄るゝ芳香に硝煙暴し、打つべきか、打たざるべきか、情に迷ふ熊谷が心の裡。

三日月
山城 箕浦梅子

私の地方では、三日月様が横向だと、お米が安く、たて向だとお米がたかいと申します。私は永久までも、永久までも、よこむきに成つて居て下さいと、母さんのために、祈ります。

女文字
上總 桂美女

神様のお降りなさる夜であらう薄紫の霞がたなびいて居る黃昏、遠くから東風輕く吹いて來るたんびに根本を流れる淺い清水に花片が浮んで星と光る身に迫る様な幽かしい香りに思はず近づくと「この梅の枝折りたまふな」と優しい女文字。

織衣
小石川 唐崎秀子

姉が繭を煮れば妹は傍にありて一心に絲を引く此絲もて織りし衣たれの肩にかゝりて此村の祭に花をかざるならん母はいまだ語らず姉は友よびかはしつゝ庭の破れ垣を出てぬ。

私の煩悶
名古屋 古橋京子

南隣で踊りの稽古をやる、北隣の家では赤兒が入り替り泣く、向では淨瑠璃を語る、鐵工場の槌の響き、ドスン／＼、ギヤー／＼、チン／＼ブー／＼、カン／＼、それは／＼お話にならぬ。机を持つて、彼方へ此方へと、家中ぐる／＼舞ひ。

老翁
越後 ひろし

村の甚七爺は八十八歳に餅をつくと直に死ぬと云ふので祝ひをしなかつたが八十九歳で昨年の花の三月に遂あの世の人と成つて仕舞つた昔の田舍者とて親が甚七のあゆむやうになつてから漸く出產屆をしたとか實際は九十歳のだらうと人のうわさだ。

雨
羽前 白鳥子

春雨を佐保姫が甘き戀に醉へる忍びの涙とすれば、五月雨は希望に滿てる業守の神の嬉びの涙、夕立を夏の男神の怒りの涙とすれば、秋の雨は失戀に泣ける立田姫が悲愴の涙、かくて夕べ悄々と時雨るゝ冬の雨は、零落をかこつ白衣の神が幽靈の暗涙と見む。

附録

名家新作

官吏の死

瀬沼夏葉

或る靜な夜のこと、會計官のイワン、デミトリチ、チエルウヤコフは芝居に出掛て「コルチウィリの鐘」と言ふ狂言を、前から第二列の椅子に座を占めて、雙眼鏡を揭げて見物してゐる、彼は見ながら自分を今此上ない幸福者と思ひなしてゐる、然るに俄に……小說にはよく此の然るに俄にと云ふことが書いてある、が、作者のさう書くのは無理もないので、人生は總て是れ皆不時の出來事に充たされてゐるのではあるまいか！

……さて然るに俄に、彼の顔は顰められて、兩眼は釣り上り、呼吸は止つた……彼は眼から雙眼鏡を取りのめるが早い、前へ俯と屈んだ、而して……ハアクショ!!!彼は嚏をしたのである。嚏をする、これは何所にても禁じられてゐぬ。百姓もすれば、警部もする、時としては、樞密顧問官でさへも亦嚏をする。誰でも皆是はする、で、チエルウヤコフは別に何とも思はなかつた、手巾で顔を一寸拭いたが、さすがに禮儀を知つてゐる人間として、自分の身の周圍を一寸見た。自分の嚏で、誰かに迷惑をかけはせぬかと思ふたから。と其處に、これは又思ひも寄らず極り惡く思はなければ

ならぬ出來事が生じてゐた、見れば自分の前の第一列の椅子にゐる一人の老人が、切りに其禿頭と、頸とを手袋でふきながら、何やらぶつ〱と云つてゐる。此の老人は遞信省に奉職してゐる勅任官で名をブリズジヤロフと云ふのであるのを彼は認めた。

「ヤア、俺は吃度、彼人に唾をかけたのだッ!」と、チエルウヤコフは屹驚する。「自分の長官ではないが、然し他の長官であると云つても、左に右、都合が惡い、こりや一つ詫びなければならん」チエルウヤコフは咳拂をする。體を少し前へ屈める、而して勅任官の耳の側で小聲に云ひ出した。

「閣下、どうも相濟みませんでした、私はつひ。其の唾を飛しましたが……いや、全くつひ、其の……」

『何でもないです、何でもないです……』

『何うぞお許し下さい、實は……全く、つひ、其の思はず!……』

『いやもう腰を下して下さい、さうして私に芝居を聞かせて下さい』

チエルウヤコフは更に極り惡くなつた、馬鹿らしい微笑を、ニッとする、舞臺の方を見てゐたが、もう氣がのらぬ、前のやうな、ゆつとりした、幸福な、心持は無くなつた。心配になつて來て、心が落着かぬ。幕合に彼はブリズジヤロフに近寄つて、彼の側を附いて歩きながら一生懸命に又云ひ出した。

『何とも濟みませんでした、唾など飛ばしまして、何うぞお許し下さい……私は實は……那樣意では……』

『まだ那樣事を……もう可ろしいです……私はもう忘れて了ひました、』ブリズジヤロフは云ふた、而して焦燥さうに下脣を動かした。

『忘れて了つた、と云つたな、まだそれに變な眼色をしてゐる。』

と、チエルウヤコフは頗る氣になる眼で、勅任官を見ながら、心でさう思ふた、而して何だか話をするのも厭になつた。

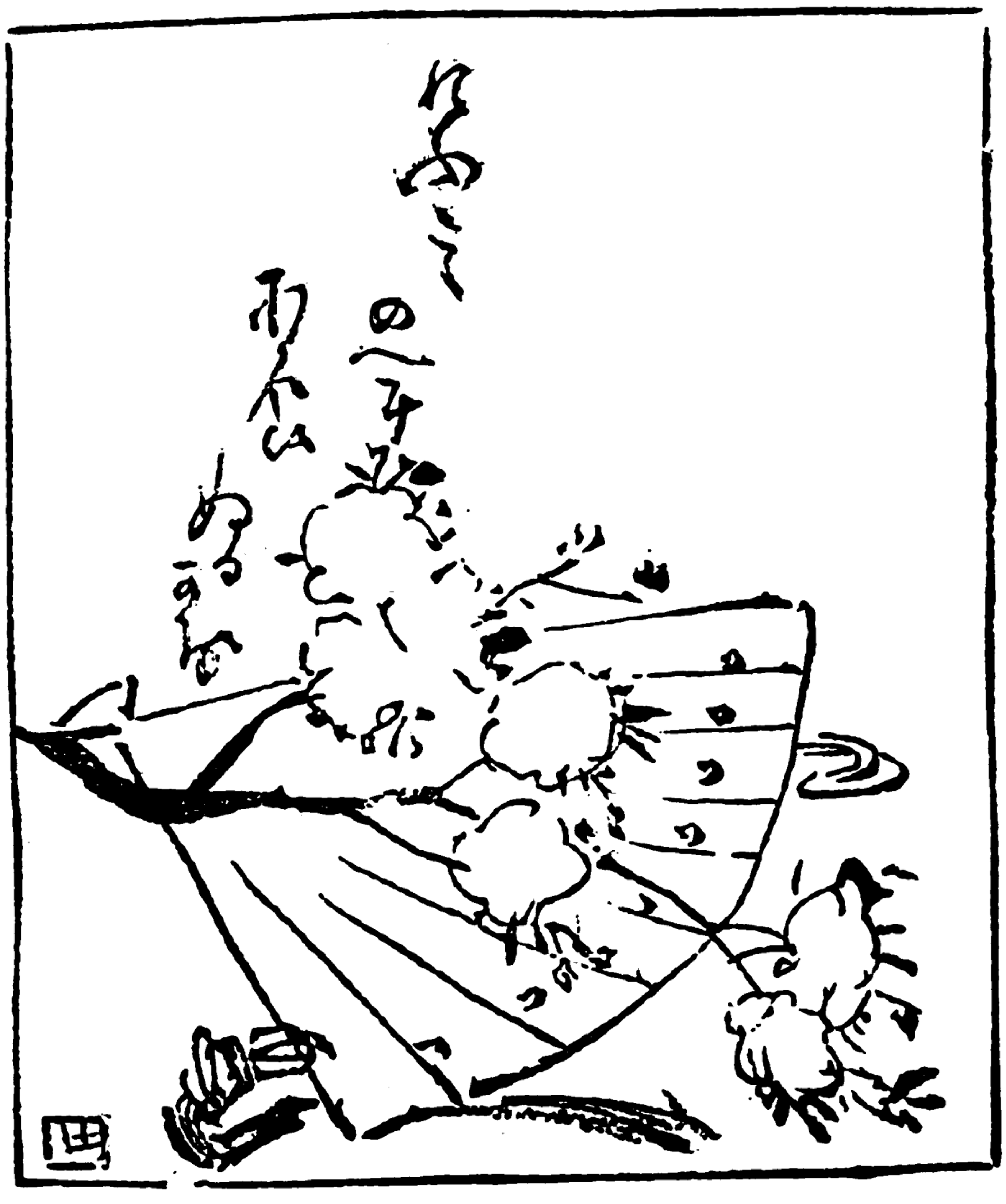
『自分が故意にしたのではない……そして又是は最も自然な事なのであると、奈何うしても、云譯をしなけ

りやならん、さうしなければ、故意に唾を吐き掛けたものと思はれる、今さら考へないても、後に乾度さう考へるだらう！……』

チエルウヤコフは家に歸つて來て、此の自分の無作法の事を直ぐ妻に話をしたが、妻は格別何とも思はぬやうに、彼には見えた。彼女は唯だ一寸吃驚したのてあつたが、ブリズジヤロフが他の長官てあると聞いて安心した

『それても左に右、貴方は行つてお詫したら可いてせう、』彼女は云ふた『さうてないと貴方がね人様の前て作法を知らないものてやうに考へられますから……』

『さうとも、それなのだ！俺は詫びたのだが、然し何だか變にな、一言も明瞭した挨拶はして呉れないのさ、それにいろ〱話をする間もなかつたから。』



翌日にチエルウヤコフは新らしい制服を着て、髪まて刈込んて、ブリズジヤロフの所へ申譯に出掛けた。……彼は旋て勅任官の應接間に入つて、其所に多くの請願人を見ると其中にブリズジヤロフもゐた、もう各の請願を聞き始めた所で、數人の請願人の申立を聞いた後、勅任官はチエルウヤコフに眼を轉じた。

『や、閣下、御記憶てお出てせうか、昨日アルカチヤ(芝居の名)て……』と、會計官は云ひ出した『其

の私は嚏をしました、そして……つひ其の唾を飛ばしまして……何とも申……」

「何のつまらんことを、分が解らん！貴方は何の御用です？」と、勅任官は次の請願人に向つた。

「困つたものだ、口を開くのも厭やがつてゐる！」チエルウヤコフは顔色を變へて考へる「よく〳〵腹を立つてゐるのと見える……いや、打棄て置く譯には行かん……もう一應申譯をしやう……」

勅任官が次の請願人と話を終つて、奥の間に向つて行つた時、チエルウヤコフは、彼に附いて歩き出しながら、又怖々と云ひ出した。

「閣下、私が閣下を敢て煩はさうと致しますのは、唯だお詫の其の事です！……故意に出たのではないと云ふことは、貴方も御存じだらうと思ひます！」

勅任官は顔を顰めて、片手を振つた。

「貴方は調戯をなさつてゐるのでせう」と戸の隠に身を入れながらプリズジヤロフは云つた。

「調戯所な騒ぎぢやない！」と、チエルウヤコフは

思つた。「全く此の場合に何の調戯か！勅任官だなんと云つても譯が解らぬものと見える！若しさうなら、俺はもう恁麼高慢ちきの前に謝したりなんぞするものか！馬鹿！手紙を書いて言つて寄越す、もう態々來るものか、決して來やせんぞ！」

チエルウヤコフは途々もその事を繰返して、家に歸つたが、手紙も書かなかつた、畢竟、何と書いて可いか文句を並べるに窮したのである。て、止むを得ず、翌日自身で、もう一度、申譯に出ることになつた。

「私は昨日閣下を煩はしに出ましたが」彼は勅任官が質問の眼を彼に向けた時に云ひ出した。「貴方が有仰るやうな、なか〳〵以て調戯なんぞではないのです、嚏をした時に、唾を飛ばした……其れてお詫に出たのです、決して私は調戯などを致す意じやないのですから、又何で私が其の調戯を敢へて……若し私共が互に其の調戯を為合ふやうになつたとしたなら、其時はもう尊敬も、人格に對して……無い譯です……

……」

『イ、可加減になさるが可い!!』と勅任官は俄に顔色を變へて、顫へて怒鳴る。

『何です!』チエルウヤコフは驚ろいて固くなつて云ふた。

『お歸りなさい!!』勅任官は足を踏み鳴らして云ふた。

其の時チエルウヤコフの腹の中でプツリと何やら切れたやうであつた。眼に何も見ず、耳に何も聞かず、彼は戸口に逡巡した、而して道に出たが、其儘、すたすたと家に歸つた……機械的に家に歸つて來た彼は、制服も脱がずに、其儘長椅子に倒れて了ふ而して……

死んだのである。

梅津の里

ころは二月十日餘のことなれば、梅津の里の春風に、よその匂もなつかしく、大堰川の月影も、霞にこめて朧なり、一方ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけめ、わうしやう院とは聞きつれども、さたかにいづれ坊とも知らざれば、こゝに休らひ、かしこにたゝずみ、尋れかねるぞむざんなる。

（平家物語）

笛

田山花袋

松江市の大橋の埠頭から、美保ケ關行の汽船は今出やうとして居た。十月の晴れた日の午前、日本海から簸川平原を渡つて來る風は、凄じく宍道湖の波を躍らせて、大橋の上を往來する人は皆々帽子を手で押へて低頭き勝に僅かに歩を進めた。境から美保ケ關に行く間は、廣く明放した大洋である。此風にさぞ此の小さい汽船は搖れることであらうと思ひながら、私は狹い甲板の、薦包、箱包、毛布包の山積した荷物の間に挾まつて小さくなつて居た。

細い烟突からは既に煤烟が黒く漲つて、埠頭に集る旅客の喧噪は一通でない。埠頭と汽船とを連絡した踏板を我勝に先を爭つて、危く手荷物を水中に落さうとした田舍婆などもあつた。ボーイは黒く煤けた顔をして、懸聲て、一生懸命に荷物を船の甲板へと積んで居る。私は少しても風が凪ぎれば好いがと思ひながら、

前に連り渡る低い山脈の上に羊毛のやうな白い雲の矢のごとく早く走るのを見た。

乘客は大分乘つた。もう汽船の出るのも間も無い――と思つて居ると、突然切符賣場からドヤ〳〵と急いて此方に走つて來た一群がある。二十一二の若い女、栗梅の派手な縮緬の羽織を着て、髮は庇髮に結つた姿が先づ眼に附いた。色の白い美しい顏をして居た。ぞろぞろと跟いて來たのは見送人らしく、五十位の品の好い中老婦、雇人らしい二三の若者、親戚の娘と覺しき十八九の丸顏、其他弟らしい中學の制帽を冠つた少年も居た。今、汽船が出やうとして居るのを見て、栗梅の羽織を着た女は、慌てゝ見送に來た人々に挨拶して、急いで踏板を渡つて、汽船に乘移つた。其後から雇人らしい男が荷物を運んだ。此男は女の一人旅を保護して行くらしかつた。私は一目見て、尋常の別離ではないことが解つた。何處か此近所の豪家の娘か何かで、浦潮あたりに居る夫の許に行くのだなと思つた。見送の人は、いづれも悲哀に堪へぬ樣子で、中老婦、丸顏の娘などは、ハンケチで頻りに泣腫した眼を押へて居た。甲板では、其美しい女が、見送人と相對して立つて、これも別離の悲哀に堪へぬといふ表情を顏に表して居た。

私はじつと見て居た。

やがて汽笛が鳴つた。踏板は取外された。機關の響が徐かに聞え出した。烟筒からは凄じい煤烟が風に吹れて横に漲つた。今や出帆の時期――

『御機嫌よう……』

『彼方に着いたらすぐ手紙を……』

『宜しく言つてお呉れ』

と言ふ聲が埠頭から浴せ懸けられるやうに聞えた。

汽船は動き出した。

と、今迄甲板に立つて居た女は、最早其の別離の悲哀に堪へぬと言つたやうに、人の前も何も構つては居られぬといふ風で、ハンケチで眼を押へたまゝ、低頭いて、聲を出して泣いた。

其泣聲！　それは女の優しい分明とした冴えた聲て、同情を以て見れば、なつかしい親に別れて、さぞ悲しいてあらう、とは思はぬてはないが、しかも其泣聲がいかにも分明して、其調子が一種のメロディを持つて居た故てもあらうが私は何だか笛ても聞いて居るやうな氣が爲た。

笛を吹けば、好い音がする。風が渡れば、木の葉が鳴る。要するに、人間の泣くといふことは、ある空氣の壓迫作用て、丁度今此の大空を風が吹いて居るやうなものだ。人間が泣いたッて何だッて、要するにそれッ切てある。いかに悲くとも、五分――いや三分と聲を立てゝ續けて泣いて居ることは恐



らくは出來まい。聲を立てずに腹の中て泣くやうになるといふことは、既に其悲哀がいくらかまぎれて行く一歩てある。ツルゲチーフは「ルージン」の中て言つた。失戀の何のと言つても、要するに翌日は飯を食ふてはないかと、實際さうだ！と思つて、私は一種言ふに言はれぬ感に撲れた。

笛に似た泣聲は猶少時續いた。

今咲く花

面白いぞや今咲く花は後の散りばは知られども

一に當麻の糸かけ櫻奈良の都は八重ざくら
山にさく花あらしが毒よ、わしは君さま見ろがどく

木の花

與謝野晶子

あやめ咲くわがいそのかみ古りし世のうすら衣の夕姿さく

櫻人よし野の路の山駕籠の少女の君にさかづきまゐる

山寺の一重のさくらちるに似てさびし朝の星きゆる空

わがねたみ七とせあまりさかのぼりある秋の日の悲しきを見る

おしなべて思へるつらとややことにし給ひしかなわれとその子と

ねたしと云ひ一とせありぬわびしと云ひ二とせありぬさびし今日死ぬ

繪にかきぬ地主の權現法輪寺さくらの山をあかず戀ふれば

淺みどり比叡に靄ふりしめじめと春の雨ふる三本木かな

山の鐘初瀬のまちの中川におぼろ月うく夕となりぬ

病める人角の柱にいざりいて髮をふかせぬ花ちる風に

われ忘れず竹林院のあけがたの御僧の經とうぐひすの聲

もの思ふ逆心いだくうすら醒む全くさめぬ夜を四つ寢し日

文藝の材料とその扱ひ方

片上天弦

生田葵山氏の「文藝倶樂部」二月號に掲げた小說「都會」が、當局者の忌諱に觸れて、法律上の審判を受けるに至つた事は、世間の小說を讀む人の心に、多少の刺激を與へたことゝ思ふ。吾人は當局者が社會公益の上から打算して、この一篇の小說に法律の制裁を加へんと企てた、その方面の處置に對しては、こゝには何ごとをも言ふ必要を認めぬ。『都會』が不義を描いた描かぬといふのが難點なりとすれば、それだけで已に非難者の文藝上の批判眼鑑識力の程度はほゞわかる、當局者には當局者獨自の文藝を批判する見地と鑑識眼とがあることゝ思ふから、それに就いては必ずしも言を須ひる必要はない。たゞ、法庭審問の際の事情を、新聞紙によつて聞くと、作者たる葵山氏は、あからさまに、作中の人物が不義を行なはなかつたと言つて、當局者の言を非定せんと努めてゐる。こゝに於いて、吾人は判官諸氏乃至警視廳諸氏の文藝觀に於いてよりも、寧ろ一個の小說家を以て任ずる葵山氏その人の文藝觀に於いて、多少の不信用を挾さまずにはゐられぬ、葵山氏は、當局者が非難の根據とした不義の有無を以て、あの作否むしろ文藝の是非を批判すべき十分の又正當の標準とでも考へたのであらうか、但しはまた、不義を行はなかつたといふことが、あの作を文藝品として保證する據りどころとでも考へたのであらうか、不義を行つたか行はぬかはこの場合文藝上の問題とならぬではないか、文藝上の問題として爭ふべき點は、その小說の材料たる不義といふ事實が、如何ほどまでに藝術化せられてゐるか、即ち、この作ではその藝術化が不足て、随つて實感を惹き、随つて社會公衆の道德に惡影響を及ぼすか否かの點にあるのではないか。當局者のそこに考へ至らざるが如きは已むを得ぬとして、葵山氏は何故あの作が不義を描いたものと明言して、その描くべき理由、描いて差し支へなき理由を說き試みなかつたか。『都會』は明らかに不義を

描いてゐるてはないか。不義を行つたが故に作中の人物の苦悶も生ずるのではないか。作者は不義といふ事實を描いても可なる所以を知らぬのであらうか、法庭に罪科を免れんとして、自己の藝術品の辨護を十分に試み得なかつた葵山氏の態度には藝術家として、吾人の信用を假しがたきものが多い。眞に新代の藝術家たらんものは、今少しく自信と勇氣と犧牲の覺悟とを有たねばならぬ。

小說の材料として、不義といふ如き普通道德上非難すべき事實を描く塲合に、これは不義である、道德上不快の事實であるから、文藝の作品にその不快の事實を描いてはならぬといふことは出來ぬ。文藝の提示するところ、即ち人生の味ひを現はすためには、人生の全部全圖が、一つ一つの作品の背景にならねばならぬ。詳しくいへば、ある塲處のある時日に於ける一部分の出來事を描いても、それがそればかりを截り離したものてなく、その一些事の背後に若しくはその前後左右には、廣漠無限の人生がある、つまりその一些事は生きた人生、渾然たる有機的の人生の一部面であるといふ感じを讀むものに與へねばならぬ。即ち不義といふ例て考へて見ると、不義といふ事實はいふまでもなく人生の一部面の事實たるに過ぎぬ。而してこの事實を全人生と照らし合して考へると、人間の弱點、社會の缺欲の全く滅びうせぬ限り、これも亦已むをえぬ人間の罪科であると同時に、人間の淺ましさ、弱さ、悲しさ、憐れさが、自のづから思はれる。咎むべき事であると同時に憐れみ悲しむべき事實である。この心を以て不義といふ事實を見れば、それが道德上に於いても、却つてその事を厭い憐れむ心をこそ誘ひはすれ、それによつて誘惑せられ惡影響を蒙るが如きことはありうべきてない、隨つて上に述べた厭忌哀憐の心で描いた不義といふ事實が、文藝上乃至道德上の非難を受くべき所以がない。たゞその厭忌哀憐の心が不十分であるか又それは十分であつても、その心もちを現はすとが不十分であつたために非難せらるゝことは、往々にして

あるであらう。それはつまり作者の未熟といふ非難である。文藝上材料そのものに非難があるのではなく、材料の取り扱ひ方、即ち事實を藝術に現はす、謂はゆる藝術化の不充分といふところに缺點があることゝなるのである。今日に於いてすら、尚且つ文藝上の材料とその取り扱ひ方とが、往々にして混同せられるのは遺憾である。

草の露

十三日手越を立て、野邊をはる〴〵と過ぎ、梢を見ればあさみどりの夏のはじめなりといへども、草むらをのぞめば、白露まだきに秋の夕に似たり、北に遠ざかりて雪しろき山あり、問へば甲斐の白峰といふ、年來聞きしところ、命あれば見つ、凡そ此あひだ、數日の心ざしをやしなひて、百歳の齡を延べつ、又上仙のくすりは、下界のためによしなき物をや。

おしからぬ命なれどもけふはあれば
いきたるかひのしらねをも見つ

（鴨長明）

蛤五句

高濱虚子

蛤を逃せば舌を出しにけり

旅人や燒蛤の小松原

蛤の籠提げて入る松の莊

蛤の大きさよ手の小さゝよ

汀なる蛤殼や和歌の浦

暖爐

三谷蘆華

あな現そ身の夢の跡、さは懐かしき
薫香の嗟嘆の匂ひ、みどり透く
生絹の彩に浮織の文字こそ殘れ
朧ろげに畳れる夢の身にぞ泌む。

その日のさまよ眼に浮ぶ、白腕の
縛しめに、はた明眸の矢表に
なほ唇の火の琴の歌のしらべぞ
古びたれ艶によそほふ君が影。

薄れし文字の消えがてに、幽かに綴る
愛の歌、危くたどり聽て我が
誦せば時めく胸底に泌み入る意味の
その匂ひ酔ひたはれたる夢のあと。

いま、よみがへる暫くを、あゝ我が思ひ
満ちたらふ冬の一室のあたゝかさ。
いづこか、玻璃の窓のもと、幻にきく
たゞひとり　暖爐の火のしのび言。

朝發き

朝びらき　港はふかき
眠りより目ざめぬ、靜に
見よ今し地平のかなた
日はのぼる、波はさゞめく。

白き雲ほのかに消えて
霧晴れし眼路のかぎり
青のそら、光れる海の
なか空を風はながるゝ。

穏やかに靜かに晴れし
黎明の浪につれびく
大船の眞帆のはためき
白鳥の翼のしらべ。

たゞ遠く渚をはなれ
青の空、光れる海の
色に酔ふ夢路のうへに
鐘のこゑかすかにかよふ。

家出

水野葉舟

一

今日は思ひ切つて暖かい春めいた日だ。靑空がすつかり出て、何處の果の果まで、心持よく日が照つて居るらしい。風も吹かない。斯うして座つて居ると家の中もまるで人が居ないのかと思はれる程靜かだ。

自分は朝から、日當りのいゝ書齋の窓に倚つ掛つて、何をし樣てもなしにぢつとして居ると、何時かぼんやりして來る。この暖かい日の光で心が溶けて行つてしまふ樣て、何もかも、自分の目に見えるものも、思つて居る事も、自分の斯うして座つて居るのまでも、茫となつて、凡ての考へが消えて行つてしまふ樣、其心持のよさ！……。



種々の事が胸に浮んで來ては消えて行く。靜かなうつら〳〵した心持の中に、昔あつた事を、も一度夢で繰り返して見る樣て、其追想を追つて行くと、一種ほのかな香が顏に當る樣な悲しみが、胸に湧いて來る。

其時、突然臺所の方で何かものゝ墜ちた音がした。金屬性の響が家の中に響き渡る。今迄の空想がばつたり消えて行つてしまつた。日に蒸された樣な疲勞が感じられる。……其について自分は突然、緣

もなく彼の顔を思ひ浮べた。

彼の顔――目の小さい、色の黒い、鉛の様な唇の色をした、まだ年もゆかないのに、華やかな光つた處が、全く消え去つて居る顔……それと一所に山田一郎と言ふ、久しく忘れて居た名も、ふと思ひ浮べられる。

「山田はまだ生きてるだらうか？」

自分は斯う思つた。

二

自分は今、この追想の人について書いて見やうと思ひ立つた。それは、もうずつと以前の事で、自分がまだやつと十五の時であつた。親父が門司の税關に務めて居た時分、其處から七八里隔つて居る豊津と言ふ處の中學の寄宿舍にやられて居た時だ。

學校に入つて三年目だ、自分は同じ級の生徒達の中で一番の年少者であつたし、身體も一番小さかつた。其を大きい連中は、一口に子供子供と、子供あつかひする。處で同じ級にこの子供扱ひされるのが、自分の外に三人居た。小林と言ふ初め年を聞いて驚いた、自分よりは五つもとつて居る、骨のごり／＼した男に、一人は森本と言ふ、始終目をぱちぱちさせる避のある男で、皆でウィンクル、ウィンクル、と言つてからかつて居た。其と山田と、この四人は、皆寄宿舍に居たが其子供扱ひされる不平で、何時となしに、四人組が出來上つて居た。

この四人の中で、自分は初め小林と仲が良かつたが小林は我の強い、何かにつけて、ひねくれて居るので何時となしに、其感情が山田に移つてしまつた。二人は、よく自分のベンチに並んで腰を掛けたり、運動場の芝原に寢轉んだりして、とりとまりの無い話をした。

すると或る時、（如何いふ時であつたか、今ははつきり覺えて居らぬが、）山田が突然斯う言つた。

「僕はね親が無いんだよ。」

自分は其を聞くと驚いて、彼の顔を見た。山田は顔を見られると、急にきまりが惡さうに、赤くなつて俯し

目になる。「本當かい。僕今迄そんな事ちつとも知らなかつたよ。」

自分は彼を慰める氣で斯う言つた。

「でも、言ふときまりが惡いもの、」

「お父さんも、兩方とも?」

「いゝゑ、……(彼は强く首を振つた。)親父は僕の三つの時に死んださうだが、お母さんはまだ居るよ。…居るけれどね、親父が死ぬと里に歸つて再縁してしまつた。」

「ぢや、今家には誰れが居るんだい?」

自分は斯ふ言ふ話を聞くとすぐ、薄暗い敗宅が想像さ



れる。山田は其敗宅に捨てられて居る孤兒の樣に思はれるので、根掘り葉掘り聞き立てると、山田は自分の言葉に引き込まれて、其家の話を、あらまし話して聞かせた。それは斯うてある。山田の父が死ぬと、母はすぐ離縁になつて里に歸つた。跡は叔父さん(父の弟)が嗣ぐ事になつて、間も無く叔母さんが來た。初めの間、山田が小學に通ふ頃は、家の中は極く平穩であつたが山田が小學の三年の時に叔母さんが子を產んだ。すると、山田をそろ〳〵虐め始める。その間に立つて終始山田をかばふのは、一人の祖母さんだけで、この祖母さんには叔父さんも叔母さんも、餘程憚つて

居るらしい。……話すに連れて、山田は次第に熱して來る。叔母に對する怨恨、家產に對する不平、……

　平生の山田とは思へない程、烈しい調子だ。見ると顏が赤くなつて、目には涙を一杯ためて居る。

　自分と顏を見合せると、

「僕の家は叔父に橫領されたのだよ。……親父が死んでしまいさへしなければね。」

と言ふ。聞いて居ると、自分も一所に激してその叔父叔母を憎くつてたまらなく思はれる。けれど、何と言つて山田の調子に應じていゝかわから無いので、默つて居ると、山田は何時となしに、其の上氣せた顏の色がさめて來て、妙におどおどした目付をして、

「だけれどね、この事は誰れにも言はないでくれたまへ。いゝかい。」

と言ひ出して、幾度となく念を押す。自分は、

「そんな事を人になんか言ふもんか。……だがね、君だつて、そんなに虐められてばかり居ないで、如何かすればいゝぢや無いか。」

と言ふと、山田は氣のぬけた樣な聲で

「だつて、僕には如何していゝか分らないから……まあ中學校でも卒業したら如何かする積りだ。」

と言ふ。

　この事があつてから山田は自分と話すと必ず、叔母に對する不平を言ふ。それで何時でも激して來るかと思ふと、急に勢の無い、情ない顏をして。

「僕なんぞは如何なるんだらう？」

と臆病らしく言ふ。自分は其に頻りと同情して居た。

　やはり丁度其頃の事だが、東京に居る從兄の處から自分に宛てゝ「めきしこ探險實記」と言ふ書を送つてくれた。其思ひがけない贈りものを持つて大喜びしながら、讀み初めると、めきしこの富源の話、砂糖を採る黍の畑が幾里も幾里も續いて居て、其間を馬に乘つて驅け廻ると言ふ事や、昔漂流した日本人の遺跡のある話や、めきしこ人と日本人との人種の接近して居る話などを讀むと、自分は急にめきしこと言ふ國がなつ

かしくなつた。めきしこ探險と言ふ言葉が烈しく頭に刻み付けられる。

「世界は我家なり」とか「海國の民の運命」とか、其書の著者が論じて居る言葉が一々胸に響く。

學校がすんだら、自分は如何かしてめきしこに行つて、砂糖畑の地主にならうと其を夢想し始めた。

斯う言ふ事は、今はもう跡も殘らず、自分の胸から消えて行つてしまつたが、その時には二言目にはめきしこ探險を口にして居たものだ。それて、山田はこの話の第一の聞き手て、自分は幾度となしに繰り返して話した。自分は其話をして居ると、何時も自分の聲て醉まされて、我れ知らず熱して來る。よく運動場の隅に行つては、氣乘りのせぬ顏をして居る山田をつかまへて、其書の口繪を見せながら繰り返して說明をした。

其年の暮れ、十一月の或る日曜の午後の事だつた。——丁度自分が十五の年の暮れだ。(山田は十六か十七てあつた。)日曜だと言ふのに珍らしく外出もせずに。山田と、小林と三人て外の運動場に寮の(自分達の寄宿舍の事を寮と言つて居た。)フートボールを持ち出して、芝原の上て遊んて居た。

學校の中はひつそりして居る。運動場は、學校の門の正面て、周圍が七八町もある位の芝生だ。秋の日が半分枯れかゝつて黃色になつて居る芝草の上を照らして、かすかに陽炎が立つて居る。運動場の先きの小松原て折々頰白が淋しい聲をして鳴く。一人がフートボールを蹴ると、其音がしんとした中に反響して、淋しく聞える。……松原の中の赤土道は通る人も無く、寂として居る。

自分達は暫く蹴つて居ると疲れて、身體が汗ばんだので、ボールを投り出したまゝて、一つ所に集まつて居ると、門から爺の小使が馳けて出て來て、運動場の端に立つて、

「山田さん、山田さん。……山田さんは其處に居ませんか?」

とどなつた。すると小林が

「山田！」
と注意する。
「何だらう？」
と山田はもうおど〳〵して返事も出來ないで居る。
「居るよ――」
自分が山田に代つて返事をすると、爺は又七八間馳けて來て、
「電報、電報、電報です。」
と急しなく言ふ。それを聞くと
「電報!?」
と言つて、山田は飛び上つて馳け出した。
兩方から馳けよつて、山田は電報を受取つたが、其を讀みながら引き返して來る。小林と自分とは驚いて其を見て居ると、山田は次第に近づいて來て、二三間の處で顏を上げると、其顏は土氣色になつて居る。
「何だつた？」
小林が急き込んで聞くと、山田は默つて茫然とした樣な顏をしてまた一間ばかり近づいて來たが、其處てがつくり膝をついてしまつた。
自分達は急いて馳け寄つた。
「如何した？」
「如何した？」
二人は同音に言ふ。山田は
「祖母さんが死んだ。」
と僅かに言つて、如何にもがつかりした樣に、ぐつたりなつてしまつた。
自分達は何にも言ふ事が出來ないで、立つたまゝ山田を見守つて居る。……暫くすると、山田は
「おれはこれから如何したら好んだらうなあ。」
と勢一杯、心細さうに言つて、衣服の袖て涙をふき始めた。ふいても、後から後から涙が出て來ると見えて頻りに目をこすつて居たが、遂々終に聲をあげて泣き出した。
小林は其を見ると、苦々しさうに、
「山田、幾ら言つたつて仕方が無いぢやないか、それよりか早く家に歸り給へ。その方がいゝよ」

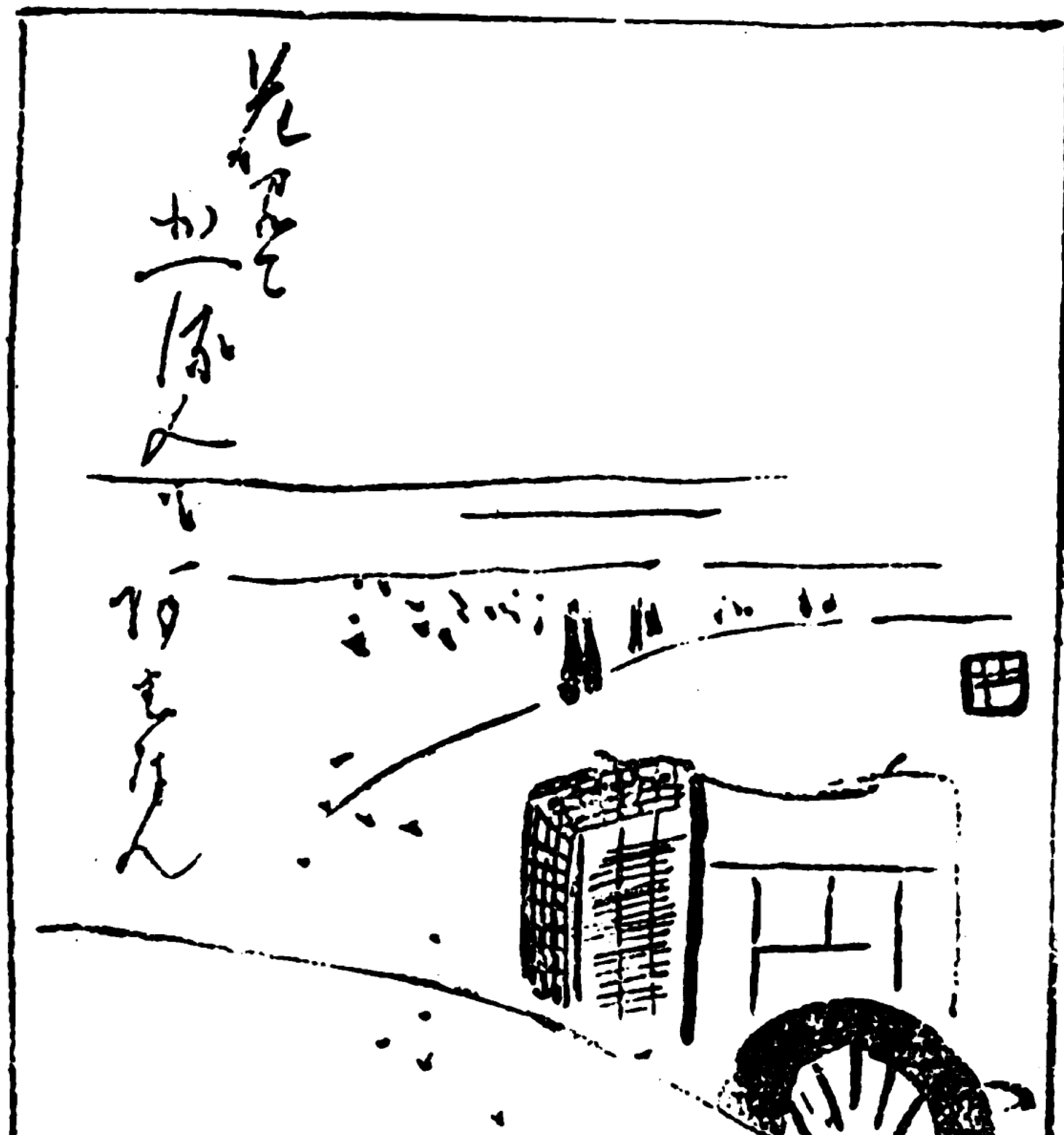
と言ふ。山田はうん〳〵頷いて居たが、なかなか泣き止まうとしない。

其を二人て頻りにはげまして、やつと寄宿舍に連れて歸つた。

三

山田は家に歸つて、一週間ばかり經つたが、何とも言つて來ないので、如何したのだらうと思つて居ると、丁度十日目にふらつと歸つて來た。

前とそんなに變つた樣子も見えないが、何處となしに氣の張りが屈けてしまつた樣て、ぼんやりして居る。人が樣子を聞いても普通の挨拶をして、ひどく恥じるらしくも見えない。……すると或る晩、



自分が代數の宿題をやつて居ると、そろつと、其傍にもつて來て見て居たが、

「君、何か話しないか?」

と言ふ。自分は「うむ」と振り返ると、接ぎ穗の無ささうな顏をして居る。寂しく曇つた顏色だ。

「何だか寂しいなあ。……昨晩も夢で祖母さんに逢つたよ。」

「……」

「僕、如何したら好いんだらうね、叔父さんがお前にやる財産はこれだけだと言つて、こんな覺え書きの樣なものを呉れたつけ。」

と言つて、彼は懷から財布を出して、其中から、卷

紙の端に書いたものを出して見せた。

其には一寸見ても見當の付かない樣な事が七八行書いてある。山田は其を見せて置いて自分にすがる樣な聲で、

「僕はもう叔父さんにも捨てられちやつたんだね。」

と言ふ。

自分は堪らなくなつて、

「なあに君、男子ぢやないか。男子は何をしてだつて世の中にえらくなれらあね。君は何故そんなに弱虫なんだらう？」……

と言つて色々と慰めたが、終には

「僕だつて、今にめきしこ探險にゆくのだ。」

と言ひ切つた。……山田は始終うなだれて吐息ばかりをついて居た。

それから二週間ばかりして、もう冬の休暇のすぐ前になつた時だつた。土曜日だ。學校がすんで歸つて來ると、山田と二人で何と言ふ譯もなく散歩に出かけた。

運動場を越して、小松原の中の道を歩るきながら、二人で試験の話をして居たが、其が何時となしに互の目的の話に移つた。山田は目的について頻りに迷つて居るらしい。――自分達は其頃丁度三年級から四年級になる頃で、誰れしも、頭に目的を立てると言ふ、重大な問題が蟠り初める時だ。――山田は中學を卒業した後に、何處か修學の期限の短かい、そして社會に出て割のいゝ方向をと、色々に考へて居たらしかつた。其樣な事を聞くと、其頃の自分はすぐ例のめきしこ探險と言ふ武器を持ち出して其を一も二もなく、論破せねばやまれなかつたのだ。

二人は話しながらだん／＼小松原を通り越して、丘から降りる急な坂を降りた。目の前に大きな河が流れて居る、其堤、白楊が兩側に叢生して居て。河は水が減つて、石がごろ／＼して居る。自分達はその河原に降りて行つて大きな石に腰を掛けた。

背に一杯冬の日を浴びて居る。山田の曇つた顏も其時は日に照らされて、晴々した色に見えた。

「僕は如何してもめきしこ探險だ。四年級になつたら親父にさう言つて許して貰ふつもりにして居る。」

自分は勢こんで言ふ。

「そりや、君はいゝけれど、僕にはとてもだめだよ。」

山田が言ふ。

「だめな事は無いさ。僕は此間ね、此度東京の從兄から送つてくれた書を讀んで居るとね。「自由なき人は生命なき人なり」つて書いてあつたぞ。僕は本當にさうだと思つたよ。自由を得なければ生きてる甲斐が無いや、僕だつて、親父がもし許さなければ脱走すらあ。」

「脱走?」……山田は驚いた聲をたてる。

「脱走するさ。僕はそれ位な事は何でも無いよ。自分の目的の爲めには人は如何事だつてしていゝよ。……それにめきしこは良い處だぜ。廣い砂糖畑の持ち主になるつたつて、何でも無いんだとさ。其の中を馬に乘つて、馳けて歩るくなんて、愉快ぢや無いか。……僕が始終君に話すんだけれど、君は本氣になつて聞いた事が無いんだもの。」

「そりや聞いてるさ。けれど僕には如何も出來ないもの。」

「出來るさ。君なんぞこそ、自由ぢやないか。僕はさう思つてるんだ。そんな叔父さん達なんかに虐められて居ないで、自分で脱走でもして、自由になつて働らいた方がいゝよ。」

「脱走なんて、そんな事をしたら、叔父さんにどんな目に逢はされるか知れやしないもの。」

「脱走してから、家なんぞに歸つて來る奴があるもんか。……君、めきしこに行かないか。脱走して、その叔父さん達を驚かしてやり給へ。」

「…………」

「男子到る處、青山あり。」

「…………」

山田は自分が輿に乘つて居るのを、何と思つたか默つて聞いて居た。

冷めたい河風が吹いて來る。二人は其儘立ち上つて歸つて來た。自分は輿に乘じて、頻りに脱走脱走と、

家出の事を話した。山田は始終默然として聞いて居るが、平常の樣でなく、腹で思ひこんで居る處があるらしい。顏に强味がある。

次の年の春、自分の家は、東京に移る事になつた。自分は半分は名殘惜しく、半分は得意で豐津の丘に別れを告げた。友達とは何れ再會の折があると言つて、極くかりそめに種々の事を言ひやつて別れた。

四

東京に來てから、夏は過ぎてしまつた。自分は都會の氣にふれるともう、感情も目的も、不思議に變化してしまつて、めざして探險などは跡もなく消えて居た。豐津に居た間の事が一つの古い夢の樣になつて自分に感じられる。——其秋の初め、麴町に用があつて行つた歸りに、(その頃自分の家は芝にあつた。)九段の坂を降りて來ると、下から上つて來る山田にばつたり出逢つた。

「や！」

自分は驚いて聲をかけると、山田は元氣よささうに、笑ひ掛けたが、さも得意氣な口吻で

「君に逢ひ度いと思つて居たけれども。」

と言ふ。

「うむ、だが一體何時來たい？」

自分は心の底に一種の不安を感じた。

「一月ばかり前に、」

「さうか、何故知らせてくれなかつたんだ。何處に居る？」

「神田に居る。……君には逢ひ度い樣な氣もしたが、恥かしい樣な氣もしたから。」

「何故？……だが叔父さんがよく許したね。」

「許さないさ……」

「ぢや……(脫走と胸にひゞく)」

「うむ、」

暫くの間、二人は道に立つた儘、話して居たが、山田はもと來た方に引き返して、並んで話しながら歩き

出した。
「君の學校は？」
「音樂學校に入らうと思つて、」
「どうして・・・・」
「僕は音樂がすきだもの・・・・」

其から山田の下宿に來て(汚ない小さな下宿・・・・)目的の事や、學校の事を話した。

山田は折々得意さうに微笑して見せる。脫走、脫走と自分は腹の中で思ふと、自分がわけもない興に乘じて山田をそゝのかした樣にも思はれる。何かその責任が恐ろしい樣なので、その日は遂にその事を話さなかつた。



それから二月程自分は山田に逢はずに居たので、思ひ付いて下宿に行くと、獨りで淋しさうな顏をして居る。自分を見ると、
「君はちつとも來てくれなかつたね。」
と恨めしさうに言ふ。
「少し用があつて、・・・・・・君勉强したかい」
「いや、僕は學校を換へるつもりだ。」
「何故？」
「音樂學校はだめだよ、高等師範にする。」
「何故だい」
「金が足りないもの・・・・・・僕は叔父に默つて逃げて來たんだもの」
「さうか！（自分は愈々だよと思つてと胸をついた）」

「だからね、金が足りなくなりさうだ。」

其から、種々と打明け話をして其日はすんだ。

それでまた一月許りすると、山田は又學校を換ると言ひ出した。此度は水產講習所、……それからは學校を換へる事ばかりに、いゝ、くつたくし初めた。

其中、自分は遠ざかつてしまつた。……

其から七年ばかりたつた。自分は大久保に住む事になつた。すると或る朝、新聞の配達が、新聞を置き忘れて行つた て、其れを取りに淀橋の町に行つた事がある。

新聞屋の店は、半分荒物が置いてある小さな店で、入ると、入口に人の惡さうな婆が居た。入口に立つて譯を言つて居ながら、ふと奥を見ると、青黒い顏をした、丈のひよろりと高い男が坐つて居て、此方を見て居る、自分と顏を見合せると、二人は暫く見つめやつたが、自分は思はず

「山田！」

と口から出やうとして、身體が心持前にのり出すと、その男はふつとわきを向いて知らぬ顏をした。

自分は茫然とした。

次の朝、配達の男をつかまへて、

「お前の家に山田つて言ふ男が居るか？」

ときくと

「え、居ります……」

と答へて不思議さうに自分の顏を見た。

その事があつてから、もう今日は四年たつた。

（完）

西行の花

吉野山こずゑの花を見し日より心は身にも添はずなりにき
花にそむ心のいかで殘りけん捨てはてにきと思ふわが身に
佛には櫻の花をたてまつれ我が後の世を人とふらはゞ
吉野山谷へたなびく白雲は嶺のさくらの散るにやあるらん
春風の花の吹雪にうづもれて行きもやられぬ志賀のやまみち
春風の花を散らすと見る夢は覺ても胸の騷ぐなりけり

（西行法師）

暮れゆく光

他一篇

三木露風

はて遠く沈む落日よ、
密やかにうちしめらへる
忍び音の光の吐息
野の上に消えもてこそゆけ。

やはらかに暮れゆく光、
その中に愁ひのいとを
彈きなやむ樂のひとすぢ
ほのに今、消ゆかにひゞく。

かくてたゞ地平のかなた
落日、いま他國の海の
いやはてに、燃ゆる夢路を
斷崖を、沈みも行くや。
あなさびし、さびし落日よ、
暗き樂、いたみ泣けども。

眠りたまふや

『眠りたまふや。』
『否。』といふ。

皐月
花さく
日なかごろ。

湖べの
草に、
日の下に。

『眼閉ぢ死なむ。』と
君こたふ。

卒業して故郷に歸れる敎へ子におくる文

文學士　武島羽衣

走りがきして申しあげ候ふ。先日精養軒にての御卒業祝賀會のかへさ、玄關さきにて皆様とお別をいたしし時は、これにてしばらくは御面會いたさむこともおぼつかなくやと、なごりをしさに言の葉も出でこず、車にうちのりて離れまゐらするにも、うしろのみ顧みられて、おつる涙を闇にまぎらし候ひしめゝしさ、御笑ひ下さるまじく候ふ。

せめてはなほ數時間なりとも、別をゝしみまゐらせたく考へ候ひしをりから、當春期の休業は京阪地方に用事これあり、幸ひ御歸郷の時日も同じとうけたまはり候ふにつき、汽車にて米原まで御同行いたさむと存ぜしを、あやにくなるものかな、かの夜より風邪のこゝちにて、熱さへ加はり、つひに御同車いたすこともかなはざるにいたりし事、かへす〲口をしく、いとど御うへのみなつかしく思ひいでられ申し候ふ。

汽車中は御無事にてめでたく御歸省あそばされしか。御兩親様をはじめ皆々様、久々にて御對面なされさぞかし御喜びなされしならむと察しまゐらせ候ふ。

げに〲年月のたち候ふは早きものにて候ふよ、今ははや三年のむかし、貴孃の、はじめて、この學校に御入學なされ、はじめて敎をうけさせられしは、たゞきのふのこゝちするに、一學期とすぎ、一學年とたちはや數月にて卒業といふまもあらばこそ、はやくも送別會祝賀會となりて、今はふたゝび御目にかゝることも出來ずなりぬること、年の矢と故人のたとへしも、げにいはれあることにこそ候へ。

貴孃が御入學の當時直してよとて出したまへる御歌、いづれも〲ふるさとの父君母君をしたひたまはざる心をよみたまはぬはなく、故山の空のみながめたまひて、夜ふくるまでもたらちねの御玉章のみながめたまひしよしなど歌ひたまひしが、それも今より考ふればげに夢にて候ひしよ。そのころ、いつの御詠藻に

てかありけむ。うち直めたるおくつかたに、

荒き風われふせぎてむ學びやに
　三とせはしのべやまとなてしこ

とかきてまゐらせたりしも、ほのかに心にしるし候ふよ。

おのれこれまであまたの卒業生と別れ候ひしかど、このたびばかり、お別れすることの身にしみてかなしくおぼえしことはあらざりけり。御心をとりていふにはあらねど、貴級のかた〲はみなよく學びのわざにつとめたまひ、よくおのが言の葉をまもりたまひしかば、おのれもまた敎ふるかひありて、敎場に入りて貴級に臨むことをいと〲こゝちよくうれしう思ひ候ひしなり。もとよりかゝる故もありしならめど、貴孃たちのかくまで、心にふかく忘れがたきは、これや佛の敎のすくせといふものに候ふならむ。



貴孃はきのふまでは、うるはしき御友がきと學びの園にたのしくあそびたまひしに、けふよりは、ひとり別れて、つらねし袖も西東、はなれたまひし御心いかにわびしくおはすらむ。ましてや、これまでにひきかへて、左を見ても右を見てもみな知らぬ人のみなる中に立ちまじりたまひて、敎師といふ全く異りたる位置に身をおきたまひ、敎へられしにひきかへて、人々を敎へたまふ御こゝち、いかに心ぼそく思ひたまふらむよ。

されども一日二日となるゝにつれ、同僚の教師の心もわかり、生徒ともしたしくなりては、子をはぐくまむ親の心のたのしみは出でくべければ、それをたのしみに御たゆみなく、この道のため、學校のため十分御盡力あそばされむことをかへすがへすねがひあげ候ふ。

よろづに事足りし都をはなれたまひては、いかに朝夕不自由を感ぜらるゝ事の多からむ。教授せさせたまふにつけてわかりかねさせたまふ事、あるは參考となるべき書物、そのほか何なりとも問ひたまひたきこと、得たまひたき物などあらせたまはゞ、御遠慮なくおほせこし下されたく候ふ、おのれの力の及ばむかぎりは御答へもし、おとゝのへもいたすべく候ふ。

御別を告げまゐらせし後は、御たよりをこそ、御こわねとも御面かげともいたすべきにつき、御いとまのひまもあらせたまはゞ、よし、そじかの角の短くとも時々御筆はしらせたまひてよ。おのれも花のまへ、月のもと、思ひ出づること多きをりをりは、かならず寸楮をそめまゐらすべくなむ。

御赴任地はとりたてゝこれといふ風土病などはなき地に候へども、東京とくらべては、氣候いとゞ不順のところに候へば、何とぞ御身御大切になし下さるべく、くれぐれも御願ひ申しあげ候ふ。

卒業式後、種々のこりをる校用のため心もおちゐず、たゞたゞ御なごりをしさにたへてかくのみ申しあげまゐらせ候ふ。かしこ。

いさ子の日記

文學士　中村枯林

九日、木曜。

始業式あり。校長始め教員の方々威ありて親しむべくかゝる方に親しく御敎へ受くるうれしさをおもふ。同じ級の友たるべき人々、皆さかしげにおよすげたまひ、新しく入れるわらはを、何くれとなく隅の隅までいたはり導きたまふやさしさ。さすがは交際しげき都の方々よと、わが身の人狎れぬかたくなゝるふしぐ

そゞろに恥ち入りにき。

夕暮れ格子あきたるに、兄上と思ひて玄關に立ちいでしに、知らぬ方なれば、挨拶も忘れて直に奧にかけこみたり。母上文さん(兄の文一)ぢやないの、とき〻たまふに、はいと答ふれば、そんならどなたとたづねたまふに、身のはしたなさを氣づきて引かへし、恥づかしかりけれど、改めて挨拶して、御名聞きまゐらせば、かねて兄上に親しみたまふと聞く永井樣なり。やがて母上もいで來たまひて、文も程なく歸るべければ、しばしとしきりに云ひたまふに、さらばと座敷に通りたまふ。新居以來始めての客なり。戸棚より茶道具とりいだして、湯をつぎ茶をいだすことなにとはなけれど、馴れぬ事とて、過ちもやと胸とゞろくもうたてし。

待たる〻事二十分、兄上歸りたまはねば、またと契りて客人かへりたまふ、すなはち、母上けふの取次あまりに子供らし、後氣つけてよと誡めたまひ、合せて急須に湯つぎ入る〻に、あまり多く入れ過ぎて茶碗につぎ入れてなほ急須に餘らしおく時は、茶のびて、一度にて香うするものぞと注意したまふ。

けふの事ども、まことに恥ち入る事のみ。か〻る事心得ざる身にてなきをと、心細くなりぬ。田舍に居りし時は、いさ〻かなる分際なれど、母の里は大盡といはる〻家とて、召使の多くあれば、今迄取次茶入などの事する機會も少かりし也。

母上の都へゆくを急ぎたまひしも、わらはのため考へられしにはあらぬか。下女一人使ひたまへとの兄上の詞を、直に郤けられたるは、深き思召ありてにこそと、今更ながら母上の御いつくしみの深さ心にしみわたりぬ。

十日　金曜。

學校は定員百五十名なれば、從つて校舍もさして廣からねど、建築に念入りて。講堂の裝飾美しく、こ〻に入るすなはち心あらたまる心地す。破れし窓ガラスの隙間より、ふき入る風に身をすぼめつ〻、無趣味なる白壁にとりかこまれたる部屋よりも、聖賢の肖像と

美しき自然の風物と、とりまぜられかざられたる裏にきく倫理の、一しほ身にしむ心地す。テニス、體操遊戲の外、果樹園に草花の園と温室とあり、今温室には美しき花さきそろひて、休憩の時此處に至れば目をなぐさめ心をなぐさむる事限りなし。

温室に咲ける天竺牡丹のうつくしきに、心ひかれしが、けふ科外の園藝の講話に出席せしに友どちの、皆學校より種持て自らそれ〳〵の草木を栽培したまへるを知り、こゝにもわが知識の足らぬを思ひぬ。かくてわらははダーリヤカクタスの球根を各五つと、コスモス金蓮花の種子いたゞきて歸りぬ。これら我庭に咲かん時にゆかしさいかならん。

十五日　水曜。

おぼろよの月の影、何となく人なつかしき心地し、遠くきこゆる琴の音いひしらずゆかし。あはれ心ゆく春の夜や。

十七日　金曜。

朝早くいでてみれば、井戸端の一本櫻夜べの嵐になごりなくちりうせぬ。かたへにおきし桶の中に積りし花片の、泥になづまで薄紅に匂ひたる色のやさしさ、うつくしさ、何の詞を以て云ひあらはすべき。げに散りての後のいさぎよさこの花にしくものなかりけり。あはれかくて春はやがて過ぎんとすらん。

夜、遠く蛙の聲をきくいつになく趣味ふかく、わが心遠き昔しにさまよふ如し。

春季演奏會上野音樂學校にありとて、友いざなひたまふ。かねてより話にきゝしことゝてうれしく、母上の御許しうけてうちつれだちてゆく、二時開會といふに定刻前すでに聽衆堂にみち、われらは漸く後隅の席に案内せられぬ。

うち見わたすに、さすがに都の音樂會、こゝらうちつだふ人々の装ひのきら〳〵しさ、上野隅田の花にもましたり。髪の結ひ方、着衣の色の取合せのたくみなる、見ほるゝばかり、むねにかけたまふ金のくさり、手にしたまふ羽ショール、みなわが年ごろの方々の用ひたまふに、いかなる御身の上にかとかつは羨ましかり

けるに、右手の奥様らしきが英語にて友の人と語りあひたまへるを、又向ひの人の年十五六とみゆるが佛語なるべし流暢とたくみにあやつりつゝ、外國婦人と笑ひ興じたまふに、少からず驚かされて、みぬ世界にたどり來にけんとさへおもはれぬ。



演奏のそれ〳〵は、とりわけて云はずもがな、田舍の女學生の耳にはいづれも妙にして幅もあり奥ゆきもある歌ひ聲に、聲樂の味初めて思ひ知り、わけてピアノの球を盤上にころばす如き調には唯聽きほれにき。

かくて渇仰の世界憧憬の空想は、惜しい哉ながくつゞかざりき。右手の一女學生の席を離るゝとて立上り、一言の挨拶もなく、一男子友わらは三者の前を無理に通りぬけ、暫時後、また何の挨拶もなく皆々の膝をおしわけながら席に復したる荒々しさ。男の身にてもあまりとさへおもはるゝ行爲を、女の身として、と、いとあさましくて、その人をちらとみやれば、聲高に折しも演奏せんとたちいてし樂師の顏可笑しと笑ひぬ。

あはれ。

爰は玉しきの都の美しさとあさましさとを、あはせみたるにはあらぬか。

夕ぐれ家にかへりて何となく心さびしかりき。母上氣分すぐれずやと問ひたまふ

二十一日　火曜。

兄の友松井様來らる。初對面なり。先日の如き過はせざりしもの〻、唐饅頭の裏表をつい氣つかず出して、

母上に注意を受けぬ。紙の裏に文字なしるしそと、嘗て師の君より云はれ、すべてかゝる事他にもありといましめられし事などおもひいだしたり。

二十三日　木曜。

けふ學校にて學びし春夜懷舊の唱歌、さきの夜のわが心地にあまりによくかなひたれば、しるしおかむ。

春夜懷舊。

（一）

おぼろ夜の花かげ、さまよふは誰人
ふく風もかをりて　心地よき今宵や
すぎしことも定かに、忍ばるゝ今宵や
なつかしそのかみ　慕はしすぎし世

（二）

たのめたる契りの　ゆくりなく消えはて
はかなきは今の身　過ぎし世の事々
おもひてゝそゞろに　あこかるゝ今宵や
なつかしそのかみ　慕はし過ぎし世

二十六日　日曜。

本郷の伯父のところにゆく。従弟のあさ子けふは既に狎れてほゝゑみていろ〳〵の事どもかたる。今年五つ都育ちとてや、さかしきものいひぶりに、可愛さいよいよまさしぬ。日曜日にかしこにゆき、あさ子に逢ふとのうれしさや。

けふは伯父伯母とり〳〵に用事ありて家をあけたまふとて、幸に御相手たのむと云はるゝまゝに、あさ子とまゝ事して遊ぶ。南側の椽に毛布しきて共にうちたわむる。うち仰ぐ大空の瑠璃色、さながらにわが心はすみわたりぬ。

伯父上の土産とて榮太樓の甘納豆一袋、これ昔母上へとのたまふに、始めて母上の好物知りしもをかし。歸りて伯父上の辭くりかへして、甘納豆母上にまゐらすれば、母上ほゝゑみたまひて、何事ものたまはざりしが、昔の事ども思ひ出てたまひし樣なりき。

卅日　木曜。

四月も今日にて暮れんとす。夕食後兄上と巣鴨の方へ散步す。麥の葉もやう〳〵のびて雲雀の床も心やすうおもはれぬ。水のさゞめき雉子の聲をきくまゝに、田舍の事どもおもひやられて、波の音さへ耳にきこゆる心地すなどかたりあひつゝゆく。話の糸のとぎれがちなるも、つゆたるまぬは、親しき間柄なればなるべし。あはれ春はかくて逝かんとす。三春の行樂げにむなしとやいはん。

川の少女

巖谷小波

獨乙で川と云へば、誰もまづ指をラインに屈る。之は、只に其景色の好い計で無く、此川筋にある名所の何れも詩的の由來に富て居る故で、古來彼の國の詩人達が、幾度か吟じ謠ても、猶且飽かぬ位であらう。玆に川の少女と題したのは、そのライン河畔に、最も有名なローレライの奇岩に就て、その口碑の大略を語らうと云ふので。

葡萄酒の名所のリユーデスハイムから、塔で名高いキヨルンをさして、川船を下つて來ると、丁度その中程の所に、右手に高く見上げる大岩、——之に對して物を打てば、十五回の谺を聞くとさへ云ふ、——奇體な大岩が聳えて居る。

月の夜か、旭の登る時、偶々此岩上を見ると、此所に美しい少女が現れて、何とも云れぬ麗しい聲で、何事か謠ひ乍ら、船の人をさし招くが、其時の手に招かれて、其姿を見たものは、忽ち恍惚と我を忘て知ずく水中に沈み、其儘二度は歸て來ぬと云ふ。——之わ今でも語り傳て、川筋一の魔所としてある。

さてもこの不思議の少女！これわ一體何者であらう？岩の精か、淵の主か、抑も亦川の少女か？

今口碑の語る所によると、その由來は斯うである。

むかしこの岩の邊に、極めて貧しい漁師が住んで居つた、ある日件の漁師は、夕日の沈み果てるまで、川端に釣を垂れて居たが、その日は一向獲物が無いので口の中に呟きながら、道具を方付けて歸らうとすると思ひがけ無い一人の少女が、自分の前に立ち現われ、しづかに漁師の手を取つて川下の方へ連れて行き、

『こゝで漁をして御覽！』

と、云ふかと思ふと消えてしまつた。

漁師は不思議に思ひながら、敎へられた所へ網を打つて見たら、見る〳〵中にその網は大小の魚に滿ち滿ちて、今までに無い大漁をした、そこで其時から此漁師は、此所を自分の漁場と極て、毎日澤山の魚を取り

それに依て自分の家は、次第に豊に成たのである。

すると又、丁度其頃此近所に、アルブレヒトと云ふ大名が居たが、其若殿に、大の猟好の男が居て、これがこの川端の山の中を、毎日の様に狩暮らして居た。元より朝は日の出ぬ前から、夜は月の昇る頃まで！所が、ある日の夕方の事て、件んの猟好の若殿は、遙か川上の山間に、不圖馬を止めた時、このローレライの岩に當つて、如何にも美しい少女の居るのを、一ト目見るよりも〱う有頂天に成り、今は獸を追ふ事を忘れて、直ぐさま小舟を命じ、これに乗り組んて、彼の岩へと急がせた。

時に日は全く暮れて、水色に澄み渡る空には、月皓皓と冴え渡つて居るし、その天の一方、即ちローレライの岩の上には、神女か天女かと思はれる計りの、世にも美しい一人の少女が、悠然と身を凭らせて、頻りに此方をさし招いて居る。

身には雪と欺く白衣、丈に餘る金色の髪を彼の白い山百合の精が、暫らく人間の姿を借りて、月に嘯けば斯くもあらうかと、若殿は目も放さぬのであるが、それを初めて見つけた船頭等は、一齊に櫂を止めて、『南無三！ローレライが出くさつた！うつかり見惚れて引込まれな！返へせ〱！』と云ひながら、急いて舵を向け直さうとした。

けれども若殿は承知せず。『何でも彼の岩へ着けろ！着けねば其方等の手わ借らぬ。皆手討にして乃公が漕ぐ。』と、船頭共を罵り励し漸く其岩近くまで來たが、元より我を忘れた若殿、まだ間の二三間あるのを、只一ト飛に飛ばうとして、忽ち川へ落込むや否、さつと立た水煙と共に、彼の岩上の少女も消えれば、若殿の姿も二度と見えなく成つた。

家來の者共は打ち驚いて、急ぎ川を漕ぎ戻し、御殿へ歸つて此珍事を言上に及ぶと、父アルブレヒトの立腹一方ならず、『おのれ憎い魔女奴が！よくも乃公の大切の息子をたぶらかして命を取つたナ。いて其仇を取らいて置かうか！』と、直ぐさま家來共に支度をさせ、彼の岩上へと攻め登らせた。

家來共は氣味惡ながら、主人の嚴命否み難く、各自手に〳〵武器を取つて、彼の大岩に登り掛つたが、元より屛風の樣な險阻、容易に足も進む事で無い。

それを辛くも攀ぢて、漸く頂上まで登りつくと案の定昨日の少女は、今日も其所に立つて居たが、家來共を見ると涼しい聲で、

『お前方は此岩へ、全體何しに登つて來た。』と云ふ。

『さう云ふお前を捕へに來た。』

と云へば、又ニッコリ笑つて、

『其はわざ〳〵御苦勞千萬！さらざ見事に捕て見！』

と、云作ら、頸に掛て居た玉の輪を遙の川の中へ投げ

『父樣迎ひの白馬を！はやく迎ひの白馬を！』

と云と、不思議や川水逆捲いて、眞白に立た浪は、其儘馬の形に變じ、岩が頂上まで來るよと見る間に、少女はヒラリと其背に飛乘り『さらば〳〵！』と云ふ聲を、高く岩の巓に殘して、身わ川底へと沈でしまつた。

然るにまた不思議な事には、この少女が川へ沈んだ後で、アルブレヒトの家來共わ只呆氣に取られながらこの目前の不思議をば、此儘主人に言上すべく、再び元の城へ歸つて來ると、こわ如何に！その門前にわ、さながら狐の落ちた樣に、彼の若殿が茫然立つて居た。

今まで何所に居たと聞ても、一向夢に夢見た心地で定かに返事も出來ぬと云ふ。

が、兎も角も無事に歸れば、これほど目出度い事は無いと、父アルブレヒトは大喜びて、盛んな祝宴を開いたと云ふ。――これが口碑の大略である。

尚又一書に依ば、ローレと云は少女の名、ライは岩の名であるのを、一所にローレライと稱るのだと云ふ。

然るに別に一語があつて、その語る所に從へば、ローレライとは、十一世紀の頃此邊に住で居た、絕世の美人の名で、此美人が、其許嫁の男に別れ、悲哀の餘り此岩上に登つて、男の歸來を待ち焦れて居る所へ、恰も男は船に乘つて、此川筋を下つて來る。其時ローレライは、餘りの嬉しさに身を狂わせて、此岩上より川へ落ち込み、其儘水煙と消へてしまつたが、それと同時に夫の船も、浪も無いのに岩に碎けて、夫も同じ川底に沈み、二人共敢無く成てしまつたが、其亡魂が尚此岩に殘つて、時々旅人の目に觸れたのだとも云ふ。

前者の神秘的なるに對して、後者は大分戲曲的であるが、茲には單に口碑として、共に其概略を紹介するに止め、面倒な考證三昧は、何所かの博識先生に讓らう。

朧夜

佐々木信綱

朧夜を酔の足もとよろ／＼と賤の男かへる馬にひかれて

大鳥毛振るやふる／＼花の雨花のお江戸にゆく春の道

世は人はよしいれずとも手馴たる小琴よ汝に我世與へむ

天地の心せばくてしれ者のわが影一つ入れじとやする

我靈のゆくへの國のにびいろの雲のうちなる鳥がねきこゆ

怪鳥かも鳴きて過ぎぬる夕森の木立木葉は皆をのゝきぬ

青柳に雨けぶる川籠の内の鳥に餌をやる舟人の妻

玉川や二子のわたし春風は二人が袖に輕う吹きけり

星一つ光るやみ夜をおごそかに森の大木のたてりけるかな

さきの世の面かげ人と語らひし詞おぼゆる森の木かげや

森こゝにうき世は住みぬ枝競ふ高きがかげに枯るゝ生るゝ

二度は歸りこざらむ我をしもほゝゑみ送る古里の山

西の京ついぢくづれし大寺に古き友とふ春雨の朝

あたゝかに汐風こゆる海ぞひの菜の花畑のあけぼのゝ色

新らしき長屋つくると百年の齢斷たれぬ老木並木は

人の世の亡びむ後のしづけさをそゞろに思ふ森の下道

そのかみは鯨ほふりし荒き手に孫をいだきて舟うたうたふ

兒鯨に乳房あたふるおぼろ夜を大わたつみは靜にふけぬ

春の海親のあと追ふ兒鯨のわれもしほふく島かげにして

兩岸の山とほのきて菜の花の村に入りたる谷川の水

八千ひろの底つ谷川岩淵の音なき水に桃の花ちる

木曾少女うた聲滯し母馬に子馬そひゆく春風の道

世かたりもあかせ給ひて公達の小弓射給ふ姫桃の花

沖邊指して何をか語るはだか男の七八人にさす夕日かな

編輯餘言

▲短篇小說　『文壇の花』原稿として最も多く集つたのは短篇小說てした、選評の結果は本誌に表れたやうな次第てすが、載せ得なかつた數百篇の作、何れを見ても其んなに拙劣極ると云ふやうな作はなく、一わたり讀めるやうに出來て居る事は、諸孃の文才が或點まで進んで來た好い證據だらうと思ひました。文章は其通り人並に進んでゐますが、扨て眼の着け處とか、材料の採り方とかになると、皆一致が多く、類型が多く、此れこそ作者の頭腦から獨創されたと思ふやうなのは少かつたのです、未だ摸倣時代に居る方が多い爲てせう。

▲其他の諸作　小說以外の詩文も大多數の投稿が參りました、皆競ふて其手腕を振はれた跡が見えて居ました、平素から上手な方て矢張上手に出來た方もあり、初めての寄稿て上手の方もあり、各方面を通じて存外好い作がありました、且又入賞以外、即ち秀逸以下の分に傑作の多い事は本號の特色だらうと思ひます。御伽噺と書簡文に天位を缺いたのは殘念てした。

▲圖畫に就いて　本誌に挿入した圖畫は『文壇の花』原稿として募集したものてはありません、例號の分から傑作を拔いて應用したのてあります、一寸此處にお斷りして置きます。

▲入賞者の寫眞　入賞者の芳姿を乞ひ得て文壇の花を飾らうと存じましたから、早速蒐集しました處卷頭にある通り集りました、なほ此外洩れた分は或ひは持合せがなかつたり、御病氣てあつたり、寫しに行くには寫眞屋まで五里も六里もあるから困ると云はれる方やら、いろ／＼の差支えて遂に出すことが出來なかつたのてあります。

▲次の增刊　此の『文壇の花』と同じ體裁、同じ趣向て、本年の秋季に臨時增刊を出す計畫てございます其名前や投稿の詳しい方法は追て發表いたしますが出版の事だけを豫め吹聽いたして置きます。

▲賞品の發送　入賞者の住所は此處に發表いたしませんが、賞品は五月二十日に間違なく發送いたします。

懸賞脚本募集

▲今回更に新作の脚本を募ります。
▲選者は佐野天聲先生に願ひました。
▲脚本時代物、世話物何れにてもよろしい。
▲一幕物に限ります。
▲原稿は二十四字詰、總振假名つきのこと。
▲投稿締切は五月三十日です。
▲八月の定期増刊に發表いたします。
▲懸賞は一等金五圓、二等金三圓、正金にて呈す。

雜報

○定期増刊夏すがた　來る五月十五日には例の通り定期増刊を發刊いたします、例號に載せ得ない諸選の傑作を網羅し「夏姿」と題して例の原色版などを挿入した美しい雜誌を出しますから相變らず御評判ながひます。

○卒業生寫眞　各女學校の卒業生寫眞も次號から挿入します、例年の通り御愛讀を願ふ、猶ほ各地方の卒業生寫眞及び優等生寫眞等御送附下さいますれば本誌に刷出しいたします。

○三輪田氏の新婚　三輪田高等女學校學監三輪田元道氏は女子高等師範出身長澤秀子氏と結婚せられた。

○東京の花　彼岸櫻も綻び初めた昨日今日、東京の櫻は例年の通り中旬が見頃でせう、今年は春に入りて寒暖不同で雨が多かつたけれど、花は時を違へず咲き出づる、向島や上野は俗化してゐるけれど、花は少しも俗化して居ません、なほ少し遠方ですが熊谷堤へ行くと餅金の櫻や緋ハ櫻があつて、地も俗化して居ません、櫻草摘みがてらには好い遊び場所です。

懸賞呈品

（甲種）
▲壹等－金拾圓－貴金屬品
▲貳等－金參圓－呉服物
▲參等－金八拾錢－小間物
▲四等－金五拾錢－圖書刊符
▲五等－金四拾錢－圖書切符

（乙種）
▲壹等－金五圓－絹張洋傘
▲貳等－金壹圓－帶止半襟
▲參等－金六拾錢－文房具
▲四等－金三拾錢－圖書切符
▲五等－金貳拾錢－圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價

女子文壇　毎月一回一日發行　其外定期増刊（三、五、八、十二月十五日）貳回發行　臨時増刊（四月十月）例號二倍

一冊（定期 百頁）	前金拾錢	郵税共計金拾壹錢
九冊（増刊トモ 半ヶ年分）	前金九拾五錢	同 計金壹圓〇五錢
十八冊（増刊トモ 一ヶ年分）	前金壹圓八拾錢	同 計金貳圓
六冊（増刊ナシ 半ヶ年分）	前金五拾七錢	同 計金六拾三錢
十二冊（増刊ナシ 一ヶ年分）	前金壹圓〇八錢	同 計金壹圓貳拾錢

〔備考〕○定期及増刊は各拾錢郵税壹錢
○臨時増刊は貳拾錢郵税貳錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢増額
郵便切手代用壹割増、收入印紙謝絶

女子文壇社の郵便振替貯金口座は――第壹七貳九番

明治四十一年四月十二日印刷
明治四十一年四月十五日發行

文壇の花に限り　定價金貳拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　合資會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治四十一年四月十五日増刊（毎月一回一日發行）

女子文壇

（第四年第六號）

臨時増刊 花の文壇



【明治[illegible]第三種郵便物認可】

本號に限り　定價金貳拾錢　郵税貳錢

（東京秀英舍印刷）